

高松市埋蔵文化財調査報告 第30集

一般国道11号高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第七冊

ORI
居

ISI
石

遺 跡

1995.10

高松市教育委員会
建設省四国地方建設局



1 居石遺跡1、3区完掘状況（西から）



2 居石遺跡4区第1遺構面完掘状況（北から）



1 S R01出土仿製鏡



2 S R01 6~7層出土土器



1 SR03 5~7層出土土器



2 SD45 5~6層出土土器

はじめに

現在は、モータリゼーションの時代で、道路網の充実是人々の生活を変貌させ、一人一人の生活圏を拡大させているところでございます。

交通機関の発達、道路等の整備は、近年に至って飛躍的ともいえ、例えば、瀬戸大橋は、交流は海を越えて、という長い期間培ってきた常識を覆してしまいました。

高松市も新しい時代へと変貌いたしており、後世の人々が、私たちの時代をどのように評価するのかわかりませんが、大きな変革の時代として位置づけられるのは間違いないと存じます。

高松東道路も、こうした新しい時代の流れの中で造られた道路で、今その地に立ちますと、多くの自動車が行き交い、既に高松市内における大動脈としての役割を果たしております。このような、幹線道路の建設に伴う発掘調査は、本市の場合も増加の一途でございます。

そうしたことから、高松市教育委員会といたしましても、増加する一方の発掘調査に備えるため調査体制の充実とともに、担当者個々の能力の向上に努めてまいりたいと考えております。

なお、今回の東道路建設に伴う発掘調査事業は、高松市教育委員会にとって、初めて経験する大規模な調査でございました。調査作業に追われ、十分なことができなかったこともあるかもしれません。

また、この調査を進めるにあたって、四国地方建設局および同香川工事事務所には、大変ご配慮をいただきました。ご批判もごいまいしょうが、今後の文化財行政に生かし、なお、一層の努力をいたしたいと考えておりますので、ご理解を賜りたいと存じます。

最後に、一般国道高松東道路関係発掘調査事業の終了にあたり、高松市教育委員会を代表いたしまして、建設省をはじめとする関係機関、関係者の方々に厚くお礼申しあげたいと存じます。

平成7年10月

高松市教育委員会

委員長 山口 寮 弌

例 言

- 1 本書は、一般国道11号高松東道路建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書の第7冊で、高松市伏石町に所在する居石（おりいし）遺跡の調査報告を収録した。
- 2 本事業は、高松東道路 上天神-前田東間8kmのうち太田第2土地区画整理事業地に含まれる約1.7kmを対象とする。
- 3 本事業は、建設省四国地方建設局から高松市が受託し、高松市教育委員会が発掘調査を実施した。
- 4 事業費は、建設省四国地方建設局が全額を負担した。
- 5 調査にあたって下記の関係諸機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

建設省四国地方建設局 建設省四国地方建設局香川工事事務所
香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
高松市都市開発部太田第2土地区画整理事務所

赤司善彦 東 信男 石上英一 稲原昭嘉 牛嶋 茂 大久保徹也 小畑弘己 片桐孝浩
金田章裕 草原孝典 草野誠司 工楽善通 七田忠昭 高倉洋彰 高橋 学 丹羽佑一
橋口達也 平田定幸 本田光子 森田孝志 柳田純孝 米倉秀紀 (敬称略)

- 6 本書の特記遺物の検討および科学的な報告にあたっては、次の方々には分析を依頼し、玉稿をいただいた。所属は分析を依頼した当時のままである。

出土仿製鏡について	高倉洋彰(西南学院大学)
高松市居石遺跡出土木材の樹種	鈴木三男(金沢大学教養部生物学教室) 能城修一(農水省森林総合研究所)
居石遺跡の花粉化石	鈴木 茂(パレオ・ラボ)
居石遺跡におけるプラント・オパール分析	外山秀一(皇學館大学)

(敬称略)

- 7 調査全般を通じて、末光甲正氏、中西克也氏の協力を得た。

- 8 本遺跡の調査および整理作業は、文化財係長藤井指導のもと、山元が別記整理補助員の協力を得てあつた。本報告書の執筆は第5章を藤井雄三が行い、それ以外を山元が行った。全体の編集についても山元が行った。
- 9 写真は、遺構については調査担当者である山元が撮影し、遺物写真については写真 植華堂（植本真紀子）に委託した。
- 10 本遺跡の調査における各業務の委託先は次のとおりである。
- | | |
|---------------|-------------------|
| 遺跡写真測量業務 | 国際航業株式会社 (1,3,4区) |
| | アジア航測株式会社 (2,5区) |
| 埋蔵文化財発掘調査掘削工事 | 佐伯建設工業株式会社 |
- 11 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。
- | | | | | | | | | | |
|-----|--------|-----|----|-----|------|-----|----|-----|------|
| S B | 掘立柱建物 | S K | 土坑 | S D | 溝状遺構 | S P | 柱穴 | S R | 自然河川 |
| S X | 性格不明遺構 | | | | | | | | |
- 12 本文の挿图中で国土地理院発行の5万分の1地形図「高松」, 「高松南部」を一部改変して使用した。
- 13 発掘調査で得られた資料のすべては、高松市教育委員会で保管している。活用されたい。
- 14 居石遺跡については、これまでに下記の文献に遺跡の概要等を報告している。ただし、これらの報告については、調査の途中段階や整理作業の途中段階のものであるため、本報告書の見解との違いが生じている箇所が存在する。それらについては今回の報告書をもって、正式なものとする。
- ・ 山元敏裕 「居石遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』第2章第3節 周辺部の遺跡調査 高松市教育委員会 1992.3
 - ・ 山元敏裕 「居石遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度』香川県教育委員会 1993.3
 - ・ 「むかしの高松 第3号」 高松市教育委員会 1992.3
- 15 遺構、遺物の記載は、基本的には調査区毎に時代の古い遺構、遺物から順に記載してい

るが、自然河川のように長期間の遺物を含むものについては、時代に関係なく、中心となる時期を代表させて一括してまとめた為、総ての遺構、遺物を時代順に統一する事ができていない。

居石遺跡発掘調査報告書

はじめに

例 言

目 次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	8

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	13

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定	23
第2節 遺跡の概要と層序	24
第3節 縄文時代晩期の遺構と遺物	47
第4節 弥生時代後期の遺構と遺物	86
第5節 古墳時代前期の遺構と遺物	92
第6節 古代から中世の遺構と遺物	120
第7節 近世の遺構と遺物	127

第4章 調査のまとめ

第1節 遺構について	135
第2節 出土土器について	138

第5章 おわりに

付 編 出土遺物分析・自然科学分析

第1節 弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について	147
第2節 高松市居石遺跡出土木材の樹種	165
第3節 居石遺跡の花粉化石	173
第4節 居石遺跡におけるプラント・オパール分析	193

遺物観察表	211
-------	-----

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

<p>第1図 試掘トレンチ配置図…………… 2</p> <p>第2図 高松東道路路線内遺跡 調査位置図…………… 3～4</p> <p>第3図 調査位置図…………… 11</p> <p>第4図 遺跡分布図…………… 15～16</p> <p>第5図 調査区設定図…………… 23</p> <p>第6図 居石遺跡周辺微地形図… 25～26</p> <p>第7図 1区南壁土層図(1)… 29～30</p> <p>第8図 1区南壁土層図(2)… 31～32</p> <p>第9図 2区南壁土層図(1)… 33～34</p> <p>第10図 2区南壁土層図(2)… 35～36</p> <p>第11図 3区南壁土層図(1)… 37～38</p> <p>第12図 3区南壁土層図(2)… 39～40</p> <p>第13図 4区南壁土層図(1)… 41～42</p> <p>第14図 4区南壁土層図(2)… 43～44</p> <p>第15図 5区北壁土層図…………… 45～46</p> <p>第16図 SK 40 実測図…………… 47</p> <p>第17図 SK 40 出土遺物実測図…………… 48</p> <p>第18図 SX 02 出土遺物実測図…………… 49</p> <p>第19図 SR 02 土層図…………… 51～52</p> <p>第20図 SR 02 9層 出土遺物実測図…………… 50</p> <p>第21図 SR 03 5～7層 遺物出土状況図…………… 53～54</p> <p>第22図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(1)… 56</p> <p>第23図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(2)… 57</p> <p>第24図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(3)… 58</p>	<p>第25図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(4)… 59</p> <p>第26図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(5)… 60</p> <p>第27図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(6)… 61</p> <p>第28図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(7)… 62</p> <p>第29図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(8)… 64</p> <p>第30図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(9)… 65</p> <p>第31図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(10)… 66</p> <p>第32図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(11)… 67</p> <p>第33図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(12)… 68</p> <p>第34図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(13)… 69</p> <p>第35図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(14)… 70</p> <p>第36図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(15)… 71</p> <p>第37図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(16)… 72</p> <p>第38図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(17)… 73</p> <p>第39図 SR 03 5～7層 出土遺物実測図(18)… 74</p>
--	--

第40図	S R 03 5~7層 出土遺物実測図(19)……………75	第64図	S D 45 出土遺物実測図(3)…99
第41図	S R 03 5~7層 出土遺物実測図(20)……………76	第65図	S R 01 最下層 加工材出土状況図……………101
第42図	S R 03 5~7層 出土遺物実測図(21)……………77	第66図	S R 01 最下層加工材 加工部詳細図……………102
第43図	S R 03 5~7層 出土遺物実測図(22)……………79	第67図	S R 01 仿製鏡出土位置図…103
第44図	S R 03 5~7層 出土遺物実測図(23)…81~82	第68図	S R 01 出土仿製鏡実測図…104
第45図	S R 03 5~7層 出土遺物実測図(24)……………83	第69図	S R 01 6~7層 出土遺物実測図(1)……………105
第46図	S R 03 4層 出土遺物実測図……………84	第70図	S R 01 6~7層 出土遺物実測図(2)……………106
第47図	S D 02 土層図……………86	第71図	S R 01 6~7層 出土遺物実測図(3)……………107
第48図	S D 02 出土遺物実測図……………86	第72図	S R 01 6~7層 出土遺物実測図(4)……………108
第49図	S D 40 土層図……………87	第73図	S R 01 6~7層 出土遺物実測図(5)……………109
第50図	S D 40 出土遺物実測図……………88	第74図	S R 01 3~4層 遺物出土状況図……………110
第51図	S D 41 土層図……………88	第75図	S R 01 3~4層 出土遺物実測図(1)……………111
第52図	S D 42 土層図……………89	第76図	S R 01 3~4層 出土遺物実測図(2)……………112
第53図	S D 42 出土遺物実測図……………89	第77図	S R 01 3~4層 出土遺物実測図(3)……………113
第54図	S D 43 土層図……………90	第78図	S R 01 3~4層 出土遺物実測図(4)……………114
第55図	S D 51 土層図……………90	第79図	S R 01 3~4層 出土遺物実測図(5)…115~116
第56図	S D 51 出土遺物実測図……………90	第80図	S R 01 3~4層 出土遺物実測図(6)…117~118
第57図	S K 01 実測図……………92	第81図	S D 12 土層図……………120
第58図	S D 01 土層図……………92		
第59図	S D 03 土層図……………93		
第60図	S D 04 断面図……………93		
第61図	S D 45 3層 遺物出土状況図……………95~96		
第62図	S D 45 出土遺物実測図(1)…97		
第63図	S D 45 出土遺物実測図(2)…98		

第 82 図	S D 13 土層図	120
第 83 図	S D 16 土層図	120
第 84 図	S D 17 土層図	121
第 85 図	S D 18 土層図	121
第 86 図	S D 20 土層図	121
第 87 図	S D 21 土層図	121
第 88 図	S D 23 土層図	122
第 89 図	S D 28 土層図	122
第 90 図	2 区 S D 出土遺物実測図	122
第 91 図	S D 37 出土遺物実測図	123
第 92 図	S D 39 出土遺物実測図	123
第 93 図	S D 48 土層図	123
第 94 図	S R 02 2 層 出土遺物実測図 (1)	125
第 95 図	S R 02 2 層 出土遺物実測図 (2)	126
第 96 図	S B 01 実測図	127
第 97 図	S B 01 柱材検出状況図	128
第 98 図	S B 01 柱材実測図	128
第 99 図	近世土坑出土遺物実測図	130
第 100 図	S D 06 断面図	131
第 101 図	S D 06 出土遺物実測図	131
第 102 図	S D 07 土層図	131
第 103 図	S D 07 出土遺物実測図	132
第 104 図	S D 08 土層図	132
第 105 図	S D 08 出土遺物実測図	133
第 106 図	S D 11 土層図	134
第 107 図	S D 11 出土遺物実測図	134

挿 表 目 次

第1表	一般国道11号高松東道路埋藏 文化財調査事業調査遺跡一覧表	1
第2表	整理作業工程表	8
第3表	近世土坑一覧表	129

挿 写 真 目 次

写真1	S R 03 発掘作業風景	7
-----	---------------	---

付 図 目 次

付図1	居石遺跡1, 2区遺構配置図
付図2	居石遺跡3, 4, 5区遺構配置図
付図3	居石遺跡4区第1遺構面遺構配置図

卷頭図版目次

- 卷頭図版 1-1 居石遺跡 1, 3区完掘状況(西から)
 -2 居石遺跡 4区第1遺構面完掘状況(北から)
 卷頭図版 2-1 SR 01 出土仿製鏡
 -2 SR 01 6~7層出土土器
 卷頭図版 3-1 SR 01 5~7層出土土器
 -2 SD 45 5~6層出土土器

図版目次

- | | |
|--|---|
| <p> 図版 1-1 1区①, ②完掘状況(東から)
 -2 2区①, ②完掘状況(西から)
 図版 2-1 3区 完掘状況(北東から)
 -2 4区 第1遺構面
 完掘状況(西から)
 図版 3-1 4区 第2遺構面
 完掘状況(西から)
 -2 5区 完掘状況(北西から)
 図版 4-1 SK 40 完掘状況(東から)
 -2 同 土層堆積状況(東から)
 図版 5-1 SR 01 13層出土加工木
 -2 同 細部状況
 図版 6-1 SR 03 中央セクションベルト
 土層堆積状況
 -2 SR 03 南壁土層堆積状況
 図版 7-1 SR 03 完掘状況(北から)
 -2 SR 03 5~7層遺物出土状況
 図版 8 同 細部状況
 図版 9-1 1区 SD 01, 02
 完掘状況(北から)
 -2 1区 SD 01 完掘状況(東から) </p> | <p> 図版 10-1 1区 SD 01 土層堆積状況
 -2 1区 SD 02 土層堆積状況
 図版 11-1 4区 SD 40~42 完掘状況
 -2 同 完掘状況(西から)
 図版 12-1 SD 41 土層堆積状況
 -2 SD 42 土層堆積状況
 -3 SD 43 土層堆積状況
 図版 13-1 1区 SR 01 完掘状況
 -2 1区 SR 01 南壁土層堆積状況
 図版 14-1 1区 SR 01 北壁土層堆積状況
 -2 1区 SR 01 西岸小型 仿製鏡
 出土状況
 図版 15-1 1区 SR 01 6, 7層遺物出土状況
 -2 1区 SR 01 東厨 SK 01
 遺物出土状況
 図版 16 1区 SR 01 3, 4層
 遺物出土状況(1)
 図版 17 1区 SR 01 3, 4層
 遺物出土状況(2)
 図版 18-1 3区 SR 02 完掘状況(南西から)
 -2 3区 SR 02 土層堆積状況 </p> |
|--|---|

- 図版 19 - 1 5区SD 45 完掘状況(北から) - 3 SR 02 2層出土遺物
 - 2 5区SD 45 北壁土層堆積状況 図版 41 - 1 SD 07 出土瓦
 図版 20 - 1 5区SD 45 遺物出土状況 - 2 SD 08 出土土器
 - 2 同 細部 - 3 SD 37 出土土器
 図版 21 - 1 2区SD 20 付近完掘状況 - 4 SD 06 出土土器
 - 2 2区SD 23 付近完掘状況 - 5 SD 02 出土土器
 図版 22 - 1 2区SR 02 土層堆積状況 - 6 SD 51 出土土器
 - 2 2区南壁土層堆積状況
 図版 23 SR 03 5~7層出土土器(1)
 図版 24 SR 03 5~7層出土土器(2)
 図版 25 SR 03 5~7層出土土器(3)
 図版 26 SR 03 5~7層出土土器(4)
 図版 27 SR 03 5~7層出土土器(5)
 図版 28 SR 03 5~7層出土土器(6)
 図版 29 - 1 SR 03 5~7層出土土器(7)
 図版 29 - 2 SR 03 5~7層出土石器(1)
 図版 30 SR 03 5~7層出土石器(2)
 図版 31 SR 03 5~7層出土木器(1)
 図版 32 SR 03 5~7層出土木器(2)
 図版 33 - 1 SR 02 13層出土土器
 - 2 SR 01 5~7層出土土器
 - 3 SK 40 出土遺物
 図版 34 - 1 SD 42 出土石器
 - 2 SR 03 5~7層出土石器
 - 3 SD 45 7層出土石器
 図版 35 SD 45 5, 6層出土土器
 図版 36 SR 01 6, 7層出土土器(1)
 図版 37 SR 01 6, 7層出土土器(2)
 図版 38 SR 01 出土仿製鏡
 図版 39 SR 01 3, 4層出土木器
 図版 40 - 1 SR 01 6, 7層出土石器
 - 2 SR 01 3, 4層出土土器

第 1 章

調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

昭和53年の一般国道11号高松東道路の都市計画決定にともない、香川県都市計画審議会は、昭和62年2月2日、路線周辺の計画的な市街化および都市基盤整備をすすめるとともに、民間事業の活性化を目的として香川中央都市計画事業太田第2土地区画整理事業の施行を決定した。事業は太田、木太、林、多肥の4地区にまたがる約360haにおよび、この範囲に含まれる高松東道路約1.7km分の用地も区画整理事業の換地処理によって確保されることとなったため、この区間の東道路用地については、高松市教育委員会が発掘調査を実施することで、昭和62年12月15日に四国地方建設局、香川県教育委員会、高松市の三者間で覚書が取り交わされた。

現地調査は平成元年夏の区画整理事業仮換地指定を受けて着手し、浴・長池および浴・松ノ木部分の試掘調査を実施して遺跡の範囲ならびに性格を確定した。そして平成元年度に浴・長池遺跡の発掘調査を実施した。

そして平成2年度以降は、前年度の試掘調査で遺跡の所在と範囲が確定している発掘調査と、新たに用地が確保された部分の試掘調査を平行して実施し、蛙股遺跡の調査を最後に平成4年9月末日をもって東道路予定地すべての発掘調査を終了した。

整理作業は、現地での発掘調査が進行している平成3年度後半から分類基礎整理に着手し、発掘調査が終了した平成4年10月から本格的な作業にかかった。そして平成5年3月に第1冊目として浴・長池遺跡の報告書を刊行し、昨年度までに、浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡の報告書の刊行を終了している。今年度は整理作業の最終年度にあたり、居石遺跡（本報告書）、蛙股遺跡（印刷中）の報告書の刊行をもって全ての事業が完了する。

遺跡名	調査期間	調査面積	主な遺構・時期	報告書刊行
浴・長池	元. 8. 15～2. 3. 20	7,757	竪穴住居、掘立柱建物、水田（弥生時代） 水田（古代～中世）	H 5. 3（既刊）
浴・松ノ木	2. 6. 5～2. 10. 17	4,130	旧河道、溝、水田（弥生時代）	H 6. 3（既刊）
浴・長池Ⅱ	2. 11. 21～3. 3. 27 3. 7. 29～3. 9. 30	7,420 440	竪穴住居、掘立柱建物、溝、水田（弥生時代）	H 6. 3（既刊）
井手東Ⅰ	3. 4. 16～3. 9. 18	4,170	溝、掘立柱建物、土壇（近世） 溝（弥生時代）	H 7. 3（既刊）
井手東Ⅱ	3. 1. 9～3. 2. 26 3. 5. 2～3. 6. 5	2,202 200	溝（縄文～弥生時代） 土坑（近世）	H 7. 3（既刊）
居石	3. 6. 15～4. 2. 7 4. 7. 20～4. 9. 18	9,736 840	旧河道（縄文～古墳）溝（弥生時代） 土坑、溝（近世）	H 7. 10 （本報告書）
蛙股	3. 12. 12～4. 3. 27 4. 6. 15～4. 9. 30	1,459 4,316	旧河道、竪穴、溝（弥生時代） 畑、溝（古代）塚、溝（近世）	H 7. 10 （印刷中）
		42,670		

第1表 一般国道11号高松東道路埋蔵文化財調査事業調査遺跡一覧表

第2節 調査の経過



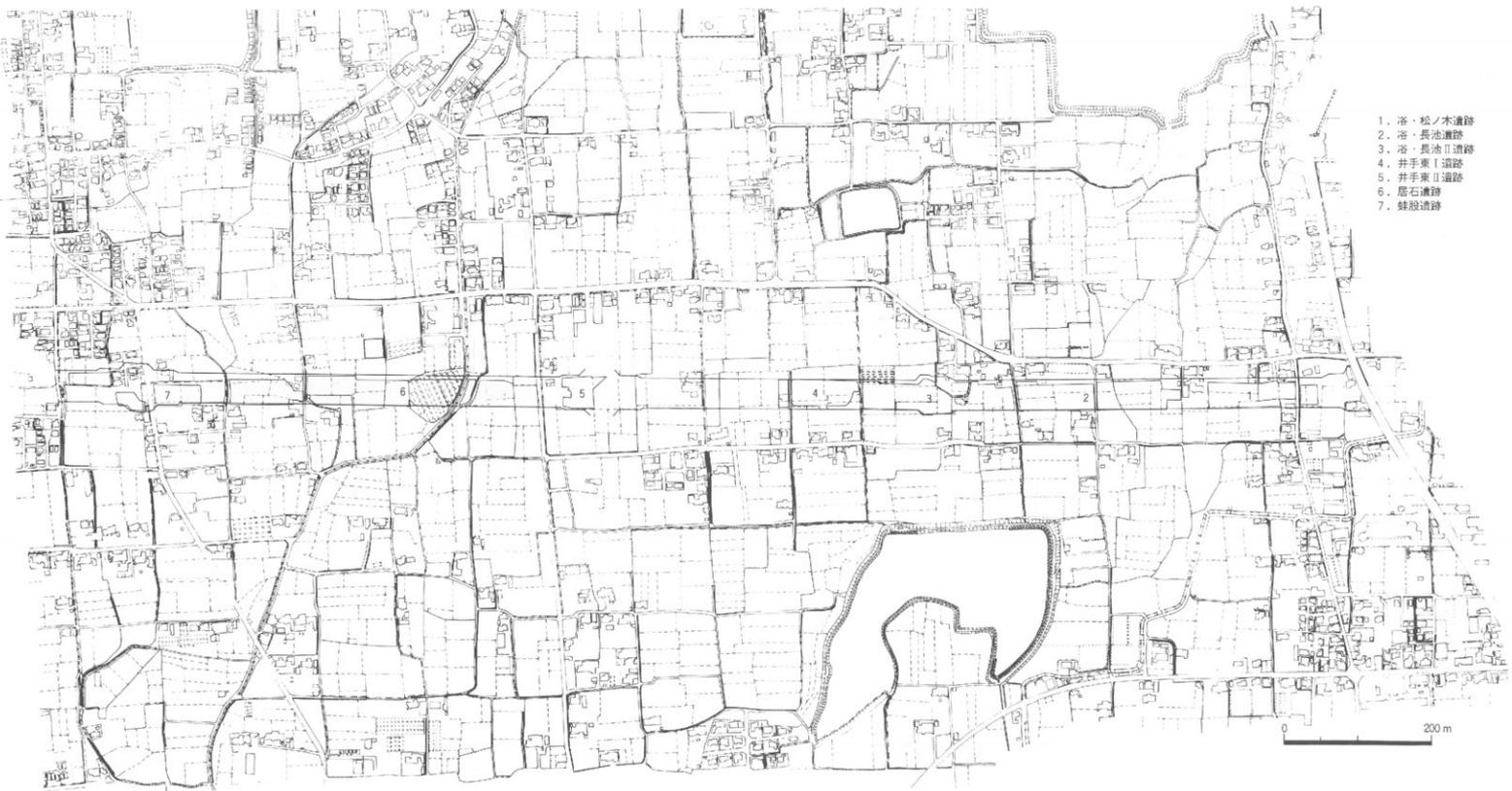
第1図 試掘トレンチ配置図

居石遺跡の試掘調査は、平成2年度の仮換地指定を受けて確保された約40,000㎡について7～8月にかけて試掘調査を実施した。調査方法は、従来どおり宅地等で調査不能な部分を除く対象地はほぼ全域に、道路予定地境界に沿ってバックホーによるトレンチ掘削を行い、土層の確認及び平面観察を行った。調査前に行った周辺の地形の特徴から、調査区の南側で旧河道が分流し、一方は調査区西側を、もう一方は調査区中央部を貫き、その間に微高地が存在することが想定できた。

試掘調査の結果、調査区を貫通する水路より東側に設定した19～21Trでは、航空写真、現況地表面等高線等から読みとれる旧河道の位置を確定するために設定したが、明確な旧河道は確認できず、黒色シルトを埋積する埋没谷状地形を確認し、東側の肩口付近で、人工掘削によると思われる溝を2条検出している。

一方、水路より西側に設定した15～18Trのうち、15Trでは南東から北西方向に向かうと思われる幅約15mの黒色シルト埋積の旧河道を確認した。旧河道の下層付近では、流木等の植物遺体が濃密に混入しており、上層部には溝もしくはピットの痕跡も想定された。

これらの結果により、試掘調査前に想定した旧河道のうち、西側の旧河道の存在は確認でき



- 1. 赤・松ノ木遺跡
- 2. 赤・長池遺跡
- 3. 赤・長池Ⅱ遺跡
- 4. 井手東Ⅰ遺跡
- 5. 井手東Ⅱ遺跡
- 6. 居石遺跡
- 7. 蜂段遺跡

第2図 高松東道路線内遺跡調査位置(高松市教育委員会調査分)

たが、東側の旧河道については、用水路西側のビニールハウスの跡地が試掘調査できなかったために、確認することができなかったが、その両側に設定したトレンチにおいては、旧河道を確認していないことより、ビニールハウス跡地の下に東側の旧河道が存在している可能性が高くなった。

以上のような試掘結果を受け、平成3年度に、一部を除き本調査を実施した(1～4区)。調査期間は平成3年6月15日から平成4年2月7日にかけて工事請負方式により実施した。調査面積は9,736㎡である。調査の結果、水に対する祭祀用と考えられる仿製鏡が3面河川から出土した他、縄文時代晩期前半の遺物群が多量に出土した等、当初の想定を上回る成果を上げることができた。そのうち、河川から出土した仿製鏡3面については平成3年11月16日に市政記者クラブにおいて記者発表を行い、翌日の新聞記事に大きく取り上げられた。

居石遺跡の調査は、平成3年度に調査の大半を終了していたが、調査予定地東端の5区については、翌年の平成4年度に調査を実施することとなり、平成4年7月20日～平成4年9月18日にかけて直営方式で実施した。調査面積は840㎡である。

発掘調査にかかる関係者は次のとおりであり、調査の詳細については、後の調査日誌抄を参照されたい。

発掘調査(平成3、4年度)

教育長	三木 義夫(～H4. 9)		
	山口 寮(H4. 10～)		
教育部長	多田 孜		
文化部長	増田 昌三(～H4. 9)	文化振興課(調査)	中西 克也
	上里 文磨(H4. 10～)	非常勤嘱託	岡田 信子
文化部次長	上里 文磨(～H4. 9)		玉田 和子(～H4. 2)
文化振興課長	多田 恒男		金森 澄子(～H4. 2)
文化振興課	亀井 俊(～H4. 3)		井口 敬三(～H4. 3)
課長補佐	藤田 容三		宮内 秀樹(～H4. 3)
文化財係長	藤井 雄三		松田 重治(～H4. 7)
文化財係主事	山本 英之		
	川畑 聰		
	山元 敏裕		
太田第2土地	小坂 信夫		
区画整理事務所	山端 均		
	為定 典生		

<調査日誌抄>

H.3. 7.15 機械掘削（地山）

- | | | | |
|------|--|-------|---|
| 24 | 第3区北側にトレンチ設定
旧河道の規模を確認する。 | | 第1区①SR01掘り下げ |
| 26 | 第2区機械掘削 | 12 | 第3区機械掘削開始 |
| 8. 1 | 第2区②上面精査 | 17 | 第3区機械掘削終了 上面精査 |
| 2 | 第2区②上面精査終了
遺構検出状況写真撮影 | 20 | 第1区①SR01掘り下げ中 |
| 6 | 第2区②遺構配置図作成 | 24 | 第3区上面精査終了
遺構検出状況写真撮影 |
| 7 | 第1区①機械掘削 | 25 | 第3区SR02褐色灰色粘質シルト
除去中 第1区①SR01黒色シル
ルト除去中 |
| 7 | 第2区②遺構掘り下げ | 27 | 台風襲来のため現場作業中止
(～30日まで) |
| 20 | 第2区②遺構掘り下げ終了 | 10. 3 | SR02褐色灰色粘性シルト除去中
(8～9世紀の須恵器を多く含
む) |
| 20 | 第2区①遺構掘り下げ | 7 | 第1区①SR01最下層加工木検
出中 |
| 21 | 現場状況不良のため作業を中止する | 8 | 第1区①SR01南壁土層分層終
了 |
| 27 | 第1区②上面精査 | 10 | 第1区①SR01北壁土層分層中 |
| 28 | 第2区①遺構掘り下げ終了 | 14 | 第1区①SR01最下層加工木検
出状況図作成 |
| 30 | 降雨のため作業中止 | 16 | 第1区①SR01北壁土層分層終
了 第3区SR02黒色シルト掘り
下げ中 |
| 31 | 第2区①遺構土層写真撮影 | 21 | 第1区①②航測準備 |
| 9. 2 | 第2区①②航測準備 | 23 | 第1区②航測準備中に最下層青
灰色砂礫中より仿製鏡1面出土 |
| 3 | 第2区①②航測完了
完掘状況写真撮影 | 24 | 第1区①②航空測量
完掘状況写真撮影 |
| | 第1区②SR01掘り下げ | 25 | 第1区②SR01最下層青灰色砂
礫層より新たに2面出土 |
| 4 | 第1区①機械掘削 第1区②SR
01黒色シルト中より弥生時代後
期末の土器多量に出土 | 26 | 第1区①②土層断面図土層注記 |
| 6 | 第2区①②埋戻し | | |
| 7 | 第1区②SR01黒色シルト～褐
灰色シルト掘り下げ中 製塩土器
出土 | | |
| 9 | 第1区②SR01褐色灰色シルト中
古墳時代前期の壺等数点出土 | | |
| 10 | 第1区②完掘 南壁土層分層 | | |

- 29 第1区②南壁土層サンプリング
- 第3区SR02北壁及び南壁土層
実測中
- 11. 5 第3区SR02土層図チェック
- 6 第4区遺構検出中
- 8 降雨のため現場作業中止
- 9 第4区遺構検出中
- 15 第4区SD40,41完掘
- 18 現場作業中止
- 19 第4区上層遺構航測準備
- 20 第4区上層遺構航測測量
完掘状況写真撮影
- 22 第4区SR03黒色泥炭層掘り下
げ中
- 25 第4区SR03黒色泥炭層除去中
縄文晩期前半の土器、石器、植物
遺体等多数出土



写真1 SR03発掘作業風景

- 26 第4区SR03黒色泥炭層中遺物
出土状況図作成中 (S=1/50)
- 29 第4区掘り下げ継続中
第1区①②区間用水路撤去中
- 12. 2 第1区①仮設道部分褐色シル
ト除去中 (斎串、瓦器等出土)
- 第4区SR03黒色泥炭層中遺物
出土状況写真撮影 同出土状況
図作成中
- 3 第1区①仮設道部分SR01褐色
シルト(木製品-呪具?)～
黒色泥炭層(木樋、板材)掘り
下げ
第4区SR03黒色泥炭層出土遺
物取り上げ終了
- 12. 5 第1区①仮設道部分SR01黒色
泥炭層除去 灰色砂層除去中
- 6 第1区①仮設道部分完掘②用水
路部分褐色粘性シルト除去中
- 9 第1区②用水路部分黒色泥炭層
除去中
- 12 第1区仮設道部分SD05,06完
掘 用水路部分完掘
第4区SR03中央セクション
断面図終了 写真撮影
- 16 第4区南北壁土層分層中
- 18 第1区仮設道部分、用水路部分
航測測量準備
- 19 第1区仮設道部分、用水路部分、
第4区下層航測測量
完掘状況写真撮影
- 20 第1区、第4区土層断面図作成
中
- 24 第4区北壁、南壁土層断面図注
記 南壁土層サンプル採集
- 25 第4区北壁土層注記終了 本日
にて発掘作業を終了する
- 4. 7. 20 第5区表土剥ぎ開始

- | | | |
|------|---------------------------|---|
| 8. 6 | 上面精査 | SD 46～51掘り下げ中 |
| 17 | 上面精査 SD 45トレンチによる
土層確認 | 3 SD 45第4層掘り下げ中 |
| 18 | 降雨による現場作業中止(～19) | 10 SD 45第4層掘り下げ終了 中
央セクションベルト土層実測終
了 第5区西壁土層分層中 |
| 20 | SD 45第1層掘り下げ | 14 降雨のため現場作業を中止する |
| 24 | SD 45第2層掘り下げ | 16 航空測量準備
調査区土層断面図注記 |
| 25 | 降雨による現場作業中止 | 18 航空測量 完掘状況写真撮影
本日にて5区の作業を終了する |
| 31 | SD 45第3層掘り下げ | |
| 9. 1 | 同掘り下げ終了
遺物出土状況写真撮影 | |
| 2 | SD 45遺物出土状況図作成 | |

第3節 整理作業の経過

居石遺跡の整理作業は平成6年度および7年度前整理作業は調査担当者を中心に整理作業を行い、下記の非常勤嘱託(整理補助員)の協力を得て行ったが、平成7年度は従来の整理補助員6名から1名増員し、計7名で整理作業を行い、作業の能率化を図った。整理作業の経過については第2表に示したとおりである。

1994	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1995	1	2	3
接合・復原						土器実測							
										遺構図面チェック			
										写真撮影			
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1996	1	2	3	
土器実測													
土器実測図・トレース													
石器実測・トレース													
実測図レイアウト													
遺構図トレース													
写真撮影													
編集作業													
発行													

第2表 整理作業工程表

なお、報告書作成時における整理作業の関係者は以下のとおりである。

(平成6、7年度)

教育長	山口 寮弐
文化部長	宮内 秀起
文化部次長	中村 榮治
(文化振興課長事務取扱い)	
文化振興課長補佐	藤田 容三
文化財係長	藤井 雄三
文化財係主任主事	山本 英之
主事	山元 敏裕
主事	国方 菜緒子
事務員	大嶋 和則 (H7.5～)
文化振興課	岡田 信子 (～H7.3)
非常勤嘱託	竹林 弘子
	井口 夫美子
	大川 玲子
	吉本 みどり
	出石 真理子
	山中 規子 (H6.5～)
	上原 洋子 (H7.5～)

第 2 章

地理的環境・歷史的環境

第1節 地理的環境



第3図 調査位置図

高松市は、四国の北東部、香川県のはほぼ中央部に位置する。中央省庁の出先や大手企業の支店が多く立地し、四国の中枢管理機能を担う都市として33万人余の人口が集中している。

瀬戸内海沿岸に東西に連なる香川県の平野部は、一般に讃岐平野として総称されるが、実際は東から長尾平野、高松平野、丸亀平野、三豊平野といった地域単位の小平野に細分でき、いずれも南部の阿讃山脈に源を発する中小河川によって形成された沖積地である。このうち高松平野は、北を瀬戸内海、東を立石山系、南を阿讃山脈、西を五色台山塊に限られた総面積約19km²、丸亀平野に続く規模をもち、大部分が高松市の行政区域に含まれる。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島、紫雲山等の島状の独立丘陵は、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成された、メサ、またはビュートと呼ばれるもので、讃岐のどかな田園風景の象徴のひとつとなっている。

高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流しているが、平野形成の大部分は塩江町に源を発する香東川に負っている。ただ春日

川以東の部分のみが春日川、新川といった小河川の影響下になるものの扇状地の発達は見られない。

現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は、17世紀はじめの河川改修によるもので、それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっている。そのほかにも、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が多く確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。

前述の大池等のため池は、年間1,000mm前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが、林、多肥地区周辺では扇状地末端部にあたることから、ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が古代から盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。これらの水源毎の受益範囲（水掛）は、近世以降の三条池、野田池等、微高地上に四周に堤防を巡らせ堤防の全部または一部が条里の阡陌に沿った皿池や、山麓部の三谷三郎池、神内池といった大規模なため池が整備されても大きな変化なく踏襲されてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、この一帯は三谷三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水確保の不安が払拭された反面、大池、長池等のため池が三谷三郎池の子池となり、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水もその役割を失いつつある。

今回、高松東道路の横断によって一連の調査を実施した太田、林地区は、地形的には扇状地の末端部にあたり、香東川の本流に接するとともにまさにこの“出水”に古くから農業と生活の多くを依存してきた地域であるといえる

現在、東道路建設（平成5年開通）をはじめとする区画整理事業、空港跡地開発等に伴う大規模発掘調査によって、弥生時代から井戸、出水の確認例が頻繁で、水田も弥生時代前期から大規模に開発されていたことが明らかになりつつある。

参考文献

『讃岐国弘福寺領の調査』 高松市教育委員会 1992

『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第一冊 浴・長池遺跡』
高松市教育委員会 1993

〔 同 上 第二冊 浴・松ノ木遺跡〕 高松市教育委員会 1994

〔 同 上 第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡〕 高松市教育委員会 1994

第2節 歴史的環境

居石遺跡が所在する太田、林地区周辺では、ここ10年足らずのうちに東道路建設他道路建設、旧高松空港跡地再開発、県立高松桜井高校建設等、開発ラッシュによって多くの遺跡が発掘されつつあり、その数は目を追って増加しているといえる状況にある。特に、国道11号高松東道路 上天神-前田東間の8kmにわたる調査によって高松平野中央部に東西のトレンチが入り、一方、南北方向は都市計画道路福岡-多肥上町線、都市計画道路朝日町仏生山線等の予定地内の調査により南北のトレンチが入った。すなわち高松平野に十字のトレンチが入ったことにより、従来不明であった高松平野の遺跡の状況がわかりつつある。また、旧空港跡地や県立高松桜井高校の周辺部についても調査が行われつつあり、従来の線や点的な調査から面的な調査が行われる状況となり、遺跡の広がりや継続時期についても確定できつつある。これらの発掘調査の成果については、いくつかの報告書が公にされているが、これらの調査された遺跡の多くは、現在正式報告の刊行に向けて作業が進行中であるため、ここでは現段階で明らかとなっている調査成果を中心として本遺跡周辺（太田、林地区）の遺跡の分布を概観する。

旧石器時代に属する遺跡は太田、林近辺では現在のところ確認されていない。周辺では、久米池南遺跡（東山崎町）⁽¹⁾、諏訪神社遺跡（東山崎町）⁽²⁾、三谷町雨山南遺跡（三谷町）⁽³⁾等でナイフ形石器が確認されている。これらの遺物は明確な遺構からの出土ではなく、前者2遺跡は、他の時期の遺構の混入遺物としての出土であり、後者は採集品である。

続く縄文時代では、大池遺跡（木太町）⁽⁴⁾で草創期の有舌尖頭器2点の採集が報告されている。また、地形環境の方面では井手東Ⅰ遺跡（伏石町）⁽⁵⁾、蛙股遺跡⁽⁶⁾で現地表下約40～70cmにアカホヤ火山灰の自然堆積層が確認されており、縄文中期の平野の形成課程をうかがうことができる。

縄文時代晩期では、林・坊城遺跡（六条町）⁽⁷⁾、浴・松ノ木遺跡（林町）⁽⁸⁾、浴・長池遺跡（林町）⁽⁹⁾、浴・長池Ⅱ遺跡（林町）⁽¹⁰⁾、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡（伏石町）⁽¹¹⁾、居石遺跡（伏石町）⁽¹²⁾、上天神遺跡（上天神町・三条町）⁽¹³⁾が確認されている。これらのうち、晩期でも前半に属する居石遺跡と井手東Ⅰ遺跡、上天神遺跡以外は、旧河道中に弥生前期初頃の土器と混在して出土し、両時期が密接に連携していることが改めてわかる。また、林・坊城遺跡では多量の土器とともに当時の農耕具が出土し、稲作導入期の当地域の状況の一端を知ることができた。

弥生時代前期になると、縄文晩期から連続する前述の遺跡に加えて中頃の天満・宮西遺跡（松縄町）⁽¹⁴⁾、前期末の空港跡地遺跡（林町）⁽¹⁵⁾、大池遺跡（木太町）、松縄下所遺跡（松縄町）⁽¹⁶⁾等が新たに出現する。中でも浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から自然

堤防上および後背湿地に、前期末以前と考えられる整った小区画の水田が営まれており、早い時期から稲作文化が受け入れられていたことが知られるほか、前述の天満・宮西遺跡では竪穴住居等の直接の検出はできていないが、数棟の円形住居を囲む直径約300mと推定される周溝が検出されている。

続く弥生中期前半では、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、新たに出現する井手東Ⅰ遺跡、凹原遺跡（多肥下町）⁽¹⁷⁾、多肥松林遺跡（多肥上町）⁽¹⁸⁾、日暮・松林遺跡（多肥上町）⁽¹⁹⁾がみられる。このうち、浴・長池遺跡では4棟の竪穴住居、6棟の掘立柱建物跡、2基の周溝墓状遺構に加えて大量の河川投棄土器群が出土し、凹原遺跡でも石器製作工房と推定できる竪穴住居1棟を確認する。竪穴住居等の検出はないが、井手東Ⅰ遺跡では遺跡内を通る溝から中期前半の土器とともに多量の木製品が出土した。これらの木製品は多種類の楸、白、堅杵等の農具の他、弓、容器、編物、琴や祭祀遺物と考えられる鳥形、舟形、男根状木製品が出土し、当時の木材利用の一端を確認することができた。最近の調査例によれば多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡において10数棟のまとまった住居跡と河川廃棄の遺物群を検出されている。このうち多肥松林遺跡では河川からは弥生時代中期の土器とともに剣形木製品や鳥形木製品の他、堅杵や楸等の農具も出土している。

中期後半も中期前半と変わらぬ遺跡数である。この時期新たに丘陵部の遺跡が多く確認されている。周辺丘陵部では前田東・中村遺跡（前田東町）⁽²⁰⁾、久米池南遺跡、中山出遺跡（池田町）⁽²¹⁾等があるが、平野部では浴・長池遺跡、上天神遺跡、空港跡地遺跡、多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡が確認されている。これらの遺跡における立地の違いが何に起因するものなのか、個々の遺跡の詳細な検討が必要であろう。

弥生時代後期においては、後期前半は前時期と同様、遺跡の状況に変わりはなく、ある程度の状況がわかる遺跡は、上天神遺跡、太田下・須川遺跡（太田下町）⁽²²⁾、のような10数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落が確認されている。資料が少ない現在の状況で高松平野において後期前半の集落は、上天神遺跡を中心とする地域と、大空遺跡（高松町）、小山・南谷遺跡（高松町）を中心とする高松平野東部山間部の地域に分かれるようである。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭になると、同時期の遺跡は各地に営まれ、そのほかにも平野部山間部を問わずに遺跡数が一気に増加する傾向である。前述の遺跡の他に、平野部では、蛇股遺跡（伏石町・太田下町）、居右遺跡、井手東Ⅰ遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、浴・松ノ木遺跡、林・坊城遺跡、六条上所遺跡（六条町）⁽²³⁾、松縄下所遺跡、キモンドー遺跡（伏石町）⁽²⁴⁾、一角遺跡⁽²⁵⁾、空港跡地遺跡、多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡等が知られている。このうち集落構造がある程度わかるのは空港跡地遺跡、凹原遺跡、天満宮西遺跡のみで、他の遺跡については不明な点が多い。



第4圖 遺跡分布圖

古墳時代の遺跡の状況は、弥生時代後期末から続く集落は古墳時代前期でも早い段階で消滅してしまい、それ以降継続するものは確認されていない。古墳時代中期末から後期初頭については、集落遺跡では太田・須川遺跡、空港跡地遺跡、水田では浴・松ノ木遺跡、居石遺跡が知られるのみである。その一方で古墳は、発牛期と考えられる諏訪神社本殿古墳（東山崎町）⁽²³⁾、鶴尾神社4号墳（西春日町）⁽²⁶⁾をはじめとして平野周辺の丘陵上に、古墳時代の全期間にわたって継続的に展開しており、今後これらに対応する集落の確認が課題となる。古墳の中で、平野部に独立して立地するものに木太町の白山神社古墳⁽²⁷⁾がある。竪穴式石室を主体部とする円墳で、5世紀前半頃の築造と推定されている。古墳の標高約2mを測り、これまで当時の海岸線と推定されている標高5mラインよりも低位にあるため、古墳時代の高松平野の地形環境に再考を促すという面でも注目される遺跡である。

古代では、条里遺構と古代寺院跡が注目される。

高松平野の条里分布は、平野南縁部を東西に貫く南海道とこれに直交する山田・香川両郡の直線郡界線を基準に敷設されたことが知られている。これらは、最近までは用水路、里道、水田区画によっても容易に復原できたが、今日急速にその姿を失いつつある。

その一方で条里遺構の確認例は増加し、浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、井手東I遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡等で条里坪界線にあたると思われる遺構を検出している。同様に浴・長池II遺跡では、山田・香川の郡界線にあたる部分に約6mの間隔を置いて平行する2本の溝状遺構を検出しているほか、松縄下所遺跡では南北200mにわたって貫通する道路状遺構と3ヶ所の交差点が条里区画に重なることが明らかになった。これらの成果には、弘福寺願讀岐岡山田郡田園をはじめ弘福寺関係文書等の文献方面からの研究に負うところが大きい⁽²⁸⁾、埋蔵文化財の立場でも条里に関する遺跡が調査の対象として定着してきた結果である。これら条里遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み、一般に条里の施工期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔りがあるが、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土をみた遺跡もあり、条里地割の施工時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。

古代寺院跡では宝寿寺跡（前田廃寺-前田東町）⁽²⁹⁾、山下廃寺（新田町）⁽³⁰⁾、下司廃寺（東植山町）⁽³¹⁾、高野廃寺（川島本町）⁽³²⁾、拝師廃寺（上林町）⁽³³⁾、坂山廃寺（西春日町）⁽³⁴⁾、多肥廃寺（多肥上町）⁽³⁵⁾、勝賀廃寺（香西西町）⁽³⁶⁾等が平野部を中心に知られている。正式の発掘調査を経たデータがないため、寺域、伽藍等の全容がわかるものはないが、現在でも礎石や遺物の散布が見られる。なかでも下司廃寺の川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦や三尊像埴片、坂山廃寺の金銅製釈迦誕生仏が注目され、山田郡弘福寺領の存在とも合わせて白鳳時代から奈良平安時代に中央政府と深い関係を持っていたことが想像できる。

中近世以降では、東道路関連の浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田園北地区比定地（木太町・林町）等で、旧河道の埋設後の凹地に中世の小規模な区画の水田層が出土しており、その後現代に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから、この時期に現在の地形環境がほぼ形造られていたことがうかがえる。また東山崎・水田遺跡（東山崎町）⁽³⁷⁾では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡や耕土層が発掘され豊富な木製品が発見されているほか、空港跡地遺跡では、中世前半と後半の2時期に分かれる屋敷地を区画する溝および掘立柱建物も確認されており、当該期の集落のあり方が次第に判明しつつある。また現高松市美術館の紺屋町遺跡（紺屋町）⁽³⁸⁾でも近世の陶磁器や木簡（荷札木片）が出土し、玉藻町香川県県民ホールの高松城東ノ丸跡（玉藻町）⁽³⁹⁾でも寛永年間の東ノ丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し、往時の城および城下町の一端をうかがうことができる。

遺跡分布図地名表

1 鶴尾神社4号墳	12 上天神遺跡	25 空港跡地遺跡
2 坂田廃寺	13 太田下・須川遺跡	26 一角遺跡
3 高松城東ノ丸跡	14 蛙股遺跡	27 禪師廃寺
4 紺屋町遺跡	15 居石遺跡	28 多肥廃寺
5 天満・宮西遺跡	16 井手東Ⅱ遺跡	29 高野廃寺
6 白山神社古墳	17 井手東Ⅰ遺跡	30 山下廃寺
7 松縄下所遺跡	18 浴・長池Ⅱ遺跡	31 諏訪神社本殿古墳
8 キモンドー遺跡	19 浴・長池遺跡	32 久米池南遺跡
9 大池遺跡	20 浴・松ノ木遺跡	33 宝寿寺跡（前田廃寺）
10 弘福寺領関係遺跡発掘地 点北地区	21 林・坊城遺跡	34 前田東・中村遺跡
	22 六条・上所遺跡	35 兩山南遺跡
11 弘福寺領関係遺跡発掘地 点南地区	23 東山崎・水田遺跡	
	24 門原遺跡	

参考文献

- (1) 『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会 1989
- (2) 『香川県埋蔵文化財調査年報』平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (3) 藤井雄三 「高松市兩山南遺跡発見の国府型ナイフ形石器」『香川考古』創刊号 香川考古刊行会 1983
- (4) 浜田重人 「高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器」『香川考古』第2号 香川考古刊行会 1994

- (5) 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第四冊 井手東Ⅰ遺跡』 高松市教育委員会 1995
- (6) 『香川県埋蔵文化財調査年報』平成4年度 香川県教育委員会 1993
- (7) 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 林・坊城遺跡』 香川県教育委員会他 1993
- (8) 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第二冊 浴・松ノ木遺跡』 高松市教育委員会 1994
- (9) 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第一冊 浴・長池遺跡』 高松市教育委員会 1993
- (10) 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡』 高松市教育委員会 1994
- (11) 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第五冊 井手東Ⅱ遺跡』 高松市教育委員会 1995
- (12) 本報告書
- (13) 『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度～昭和62年度 香川県教育委員会 1988
- (14) 『香川県埋蔵文化財調査年報』平成元年度 香川県教育委員会 1990
川畑聰 『讃岐国弘福寺領の調査』 第2章第3節 高松市教育委員会 1992
- (15) 『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成3年度 香川県教育委員会他 1992
『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成4年度 香川県教育委員会他 1993
『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成5年度 香川県教育委員会他 1994
『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成6年度 香川県教育委員会他 1995
- (16) 山本英之 『讃岐国弘福寺領の調査』 第2章第3節 高松市教育委員会 1992
- (17) 『香川県埋蔵文化財調査年報』平成2年度 香川県教育委員会 1991
川畑聰 『讃岐国弘福寺領の調査』 第2章第3節 高松市教育委員会 1992
- (18) 『多肥松林遺跡発掘調査概報』平成5年度 香川県教育委員会 1994
『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡 鹿伏・中所遺跡』平成6年度 香川県教育委員会 1995
『高松上木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』平成6年度 香川県教育委員会 1995
- (19) 『香川県埋蔵文化財調査年報』平成5年度 香川県教育委員会 1994
- (20) 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊 前山東・中村遺跡』 香川県教育委員会他 1995

- (21) 『新編香川叢書 考古編』 香川県教育委員会 昭和58年
- (22) 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 太田下・須川遺跡』
香川県教育委員会他 1995
- (23) 『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和63年度 香川県教育委員会 1988
- (24) 『香川県埋蔵文化財調査年報』平成5年度 香川県教育委員会 1994
- (25) 『香川県埋蔵文化財調査年報』平成5年度 香川県教育委員会 1994
- (26) 『鶴尾神社4号墳調査報告書』 高松市教育委員会 1983
- (27) 『三谷石船古墳測量調査報告書』 高松工芸高校郷土史研究会 1992
『高松の古代文化』 高松市立図書館 昭和63年
山本英之 『白山神社古墳』『香川考古』第3号 香川考古刊行会 1995
- (28) 『弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地域発掘調査概報』Ⅰ～Ⅳ 高松市教育委員会
1988～1990・1992
『讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書～』 高松市教育委員会 1992
- (29) 木田郡史編纂部『木田郡誌』 木田郡教育部会 1940
『高松の古代文化』 高松市立図書館 昭和63年
- (30) 『古高松郷土史』 古高松郷土誌編集委員会 1977
安藤文良『讃岐古瓦図録』『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 昭和42年
- (31) 『新編香川叢書 考古編』 香川県教育委員会 昭和58年
大平要『下司庵寺出土の埴仏片について』『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』創刊号 1975
- (32) 安藤文良『讃岐古瓦図録』『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 昭和42年
『高松の古代文化』 高松市立図書館 昭和63年
- (33) 『高松の古代文化』 高松市立図書館 昭和63年
- (34) 『復刻版史跡名勝天然記念物調査報告(上巻)』 香川県文化財保護協会 昭和50年
『新編香川叢書 考古編』 香川県教育委員会 昭和58年
- (35) 『多肥郷土史 後編』 多肥郷土史編集委員会 1981
『高松の古代文化』 高松市立図書館 昭和63年
- (36) 『高松の古代文化』 高松市立図書館 昭和63年
- (37) 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡』 香川

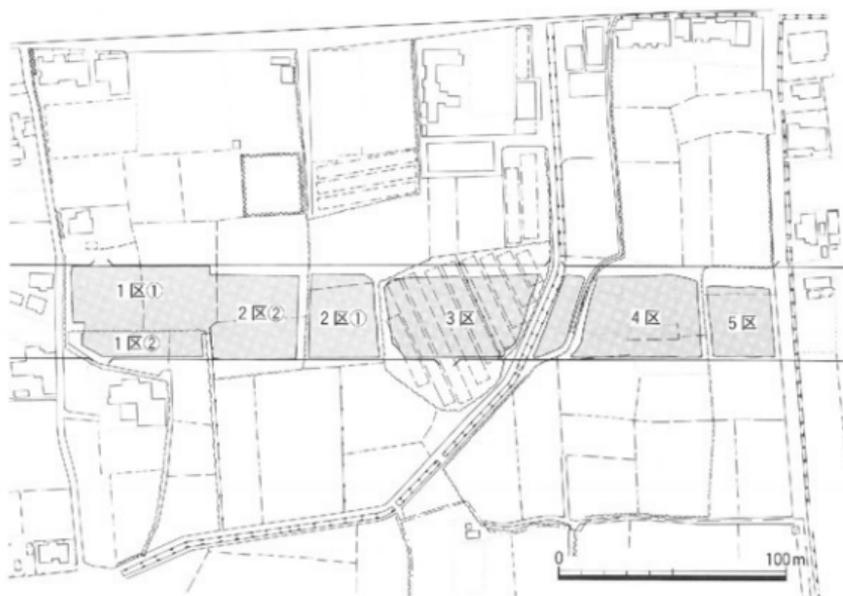
県教育委員会他 1992

- (38) 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会 1987
「1988年出土の木簡 香川・紺屋町遺跡」『木簡研究』第11号 木簡学会 1989
- (39) 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会 1987

第 3 章

発掘調査の成果

第1節 調査区の設定



第5図 調査区設定図

平成3年度の居石遺跡の調査区の設定にあたっては、平成2年7月30日から8月24日にかけて行った試掘調査において遺構の存在を確認したトレンチ状況をもとに東西310m、南北40mを調査範囲とした。調査の実施にあたっては、調査行程との関係から遺構の広がり等を考慮して、調査区内を分断する用水路を基準とし、一調査区2,000㎡程度とした。その結果、調査区内を第1～4区の小区に分け、第1、2区についてはさらに、①、②と細分し調査を行った（第5図）。調査が進行した段階で、設計土量と実掘土量に誤差が生じたため、第1区①、②を分断する用水路部分と、北側の仮設道部分についても調査を行った。

平成4年度は、前年度諸般の事情により、調査が行えなかった調査区東端の箇所を5区とし、調査を行った。調査を行う上で、仮設道の確保、用水路部分の未調査等を除く平成3、4年度において発掘した総調査面積は10,576㎡である。

調査を行う上で支障となったのが、第1区の調査が当初、用水を挟んで①、②に分断したことにより、一調査区が狭くなった上に掘削深度が深くなり十分な遺構確認が行えなかった。

第2節 遺跡の概要と層序

1 遺跡の概要（第6図、付図1、2、3）

本調査区は、蛙股遺跡の東、井手東Ⅱ遺跡の西に位置し、調査区の全長は東西310m、南北40mである。

調査前の地形は、大きく南西から北東に傾斜し、調査区中央部が大きく南に入り込む地形を呈する。西端と東端の標高が高く、西端は12m80cm前後、東端は13m前後をはかり、調査区中央部が低くなる。調査前の地形観察により、調査区中央部に旧河道が想定できる場所である。

検出した遺構は、調査前に地形観察から想定された状況と同様であり、調査区内を3本の旧河道が存在し、その間の微高地に溝、土坑が存在する状況である。検出した遺構は、掘立柱建物1、溝51、土坑40、性格不明遺構2、旧河道3であり、これらの遺構の時期は縄文時代晩期から近世にわたるものである。

以下、時期をおって検出した遺構の概要を述べる。

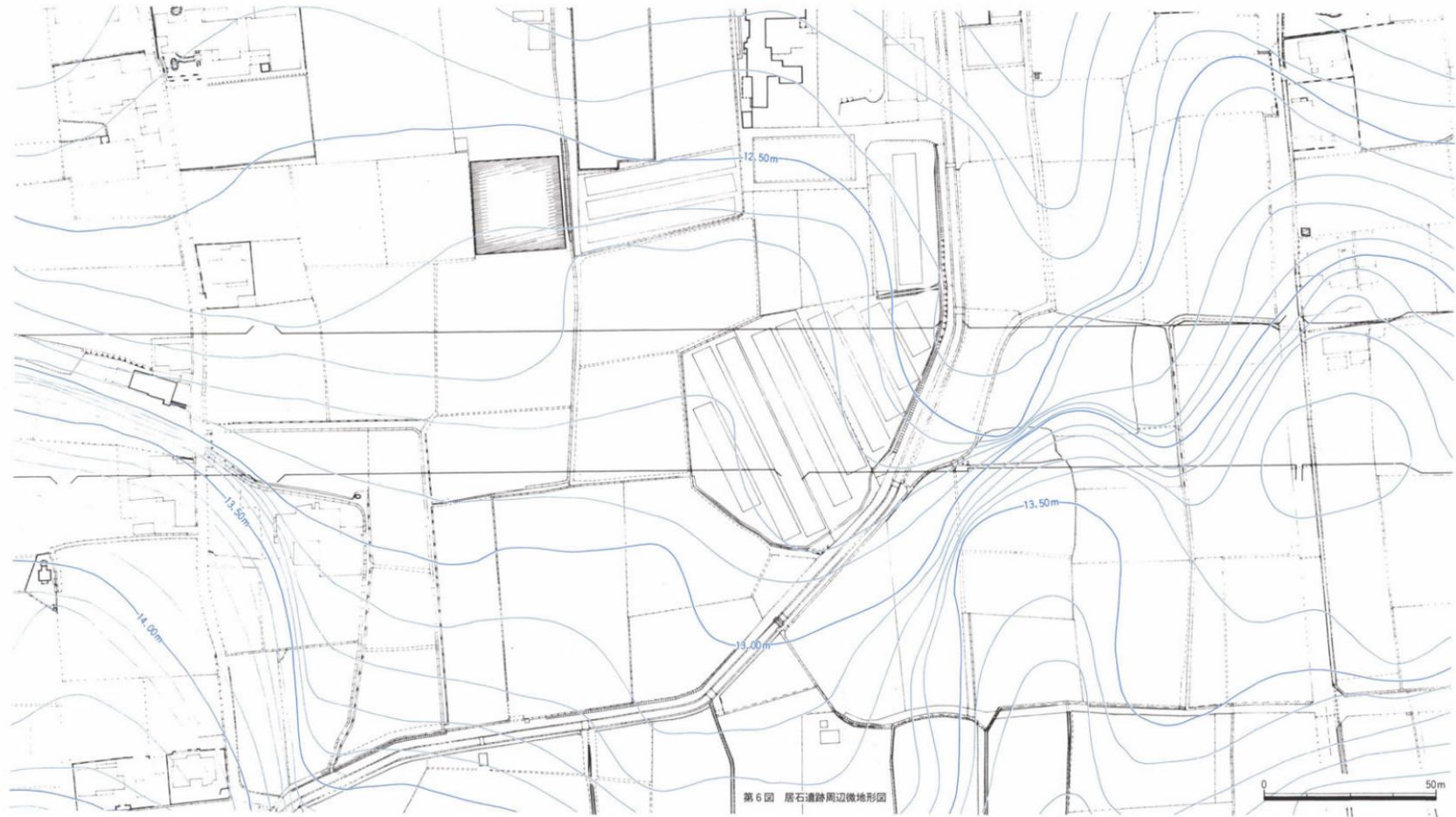
当調査区で最も古い時期の遺構は縄文時代晩期前半の時期のものである。旧河道であるSR01、02については微量であるがこの時期の土器が出土している。SR03では、東岸付近において縄文時代晩期の上器が多量に出土し、同時に石斧の柄の未製品、石器等も出土した。微高地上では、SD11の南側付近において黒色の包含層を確認し、東端の微高地上では縄文土器と砥石を出土したSK40が確認されているが、微高地上の遺構は希薄である。

弥生時代前期に属する遺構は、東端微高地のSD45の最下層で前期の壺底部と打製石斧が出土しているほか、SR01で古墳時代前期の土器と混在して微量出土しているのみである。

弥生時代後期に属する遺構は各微高地に見られる。SD51からは弥生時代後期中葉の甕が一甕体出土しているほか、後期末の遺構はSR03東岸のSD40～44がこの時期の遺構と考えられる。いずれの遺構も規模はしっかりしていることからこれらの溝は下流への用水路と考えられる。

古墳時代前期ではSR01および02の埋没が進行する時期であり、SR01では埋上中から布留の古段階並行期の広口壺が出土しており、同時期と考えられるSD01取水口において大きさの異なる仿製鏡3面が出土した。水の安定供給を願うため祭りの跡と考えられる。布留の中段階もしくは、それよりやや後出する可能性があるものにSD45第3層から出土した土器群がある。これらの土器群の内、高坏を除く甕については、一段階古い土器群とは製作技法が異なり、粗悪な胎土に加え、調整も粗い。土器の製作の変異のあり方を示す一例となろう。

土坑ではSR01東岸のSK01がこの時期の所産と考えられる。SK01からは遺物の出土はないが、土坑の底から腐朽した木材が残存し、SR01との位置関係から木材の貯蔵土坑の可



第6图 磨石遺跡周辺微地形図

能性が高い。

古墳時代後期の明確な遺構は確認できていないが、SR01、SD45第1層等の出土遺物に散見される。

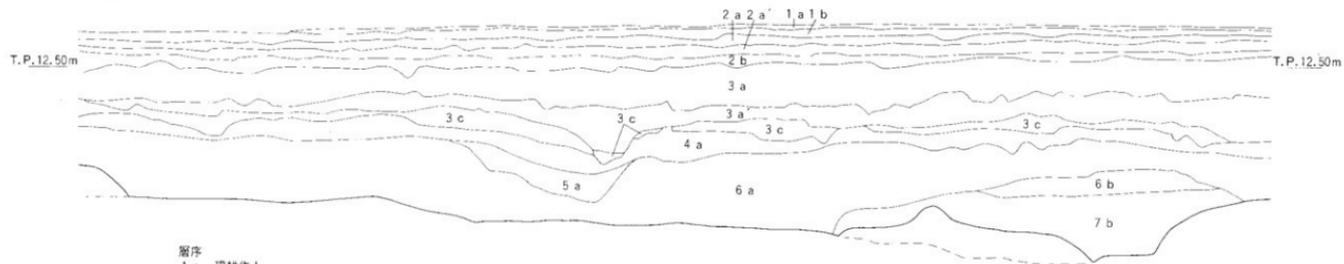
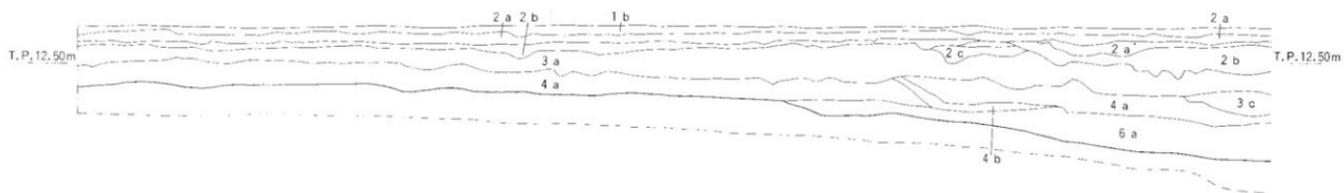
古代から中世にかけては、出土遺物から、旧河道である02、03の埋没がほぼ完了し、調査区がほぼ平坦化することより、水田として利用されているものと考えられるが、その内SR02に関しては断面観察、出土遺物から11c後半頃の流路を確認した。これ以降の時期では調査区内において大規模な流路を確認していない。平野中央部における最も新しい流路である。また、SR01では古代から中世の少量の土器とともに大形の木製品（船材を含む）を確認したほか、竈串、人形と考えられる祭祀遺物も確認していることから、SR02の新しい流路とともに、SR01においてもこの時期ある程度の水が流れていたものと考えられる。

近世の遺構は、第2微高地上において多く確認されている。検出した遺構は溝、土坑が大半で、掘立柱建物は一棟のみで、その内のピットの一つから柱材が確認された。溝は並行してならぶ東西溝SD07～10および南北溝SD19がある。SD07は比較的規模もしっかりしているが、調査区内で完結している上、西側の途切れた部分から北にのびるSD06が確認されていることから、SD07、特に06の多くは調査区外に逃げるが、屋敷等を囲う区画溝である可能性が考えられる。確認した土坑の多くは、出土遺物はないが、中には土器片が多く出土したものや、種子が出土したものもある。

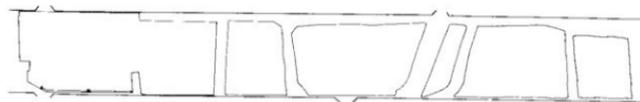
以上遺構の概要を述べたが、調査の結果、注目すべき遺構、遺物が多く確認することができた。

2 層 序 (第7～15図)

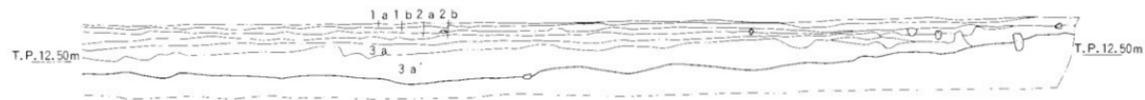
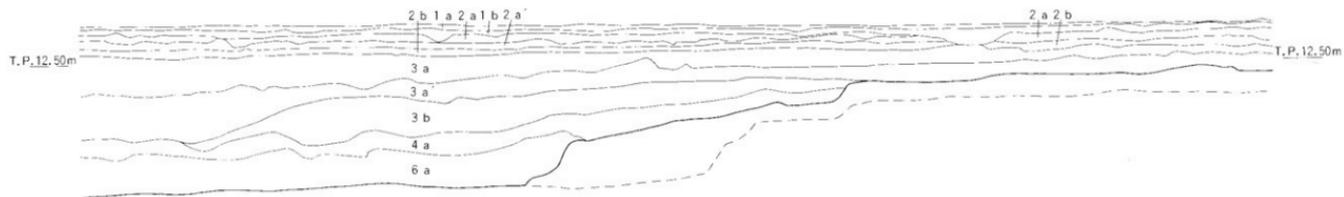
居石遺跡での層序については、1層である現耕作土、床土があり、中世頃の包含層である2層が調査区の低地部に堆積しており、a層 灰黄褐色シルト(10YR6/2)、b層 暗褐色シルト(10YR3/4)が存在している。2層は出土遺物から中世段階の水田土壌層であると考えられる。以下は自然河川、大規模な溝の埋土である。それらの層序については個々の遺構で詳しく述べている為ここでは述べない。



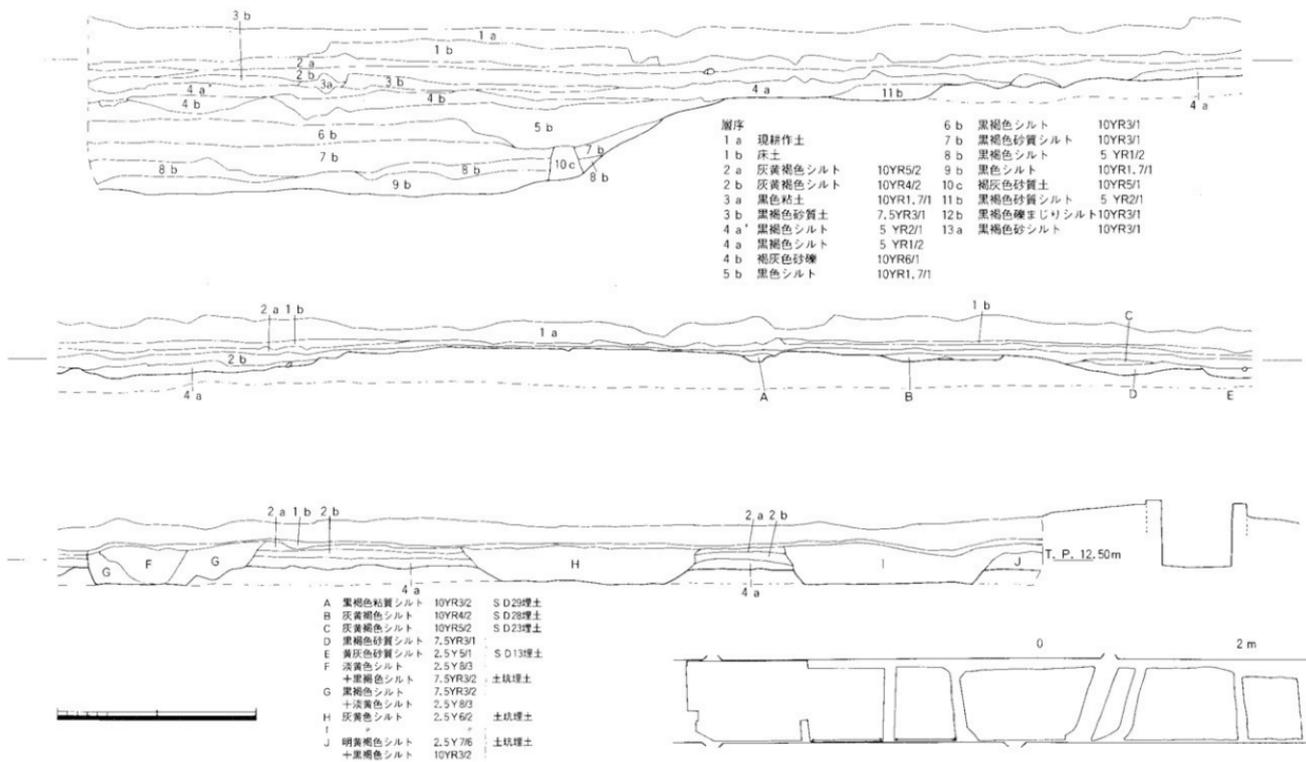
- 層序
- 1 a 現耕作土
 - 1 b 灰土
 - 2 a 灰黄褐色シルト (10YR 6 / 2)
 - 2 b 暗褐色シルト (10YR 3 / 4)
 - 2 c 灰黄色粗砂 (2.5Y 7 / 2)
 - 3 a 黒褐色粘性シルト (2.5Y 3 / 1)
 - 3 a' 黒褐色シルト質粘土 (10YR 2 / 3)
 - 3 b 黒褐色砂まじり粘土 (10YR 1.7 / 1)
 - 3 c 灰黄色粗砂 (2.5Y 7 / 2)
 - 4 a 黒色草木質泥炭 (10YR 1.7 / 1)
 - 5 a 黒褐色泥炭 (7.5YR 3 / 1)
 - 6 a 黒褐色草木質泥炭 (10YR 2 / 2)
 - 6 b 灰褐色泥炭 (7.5YR 4 / 2)
 - 7 b 黒褐色泥炭 (7.5YR 3 / 2)



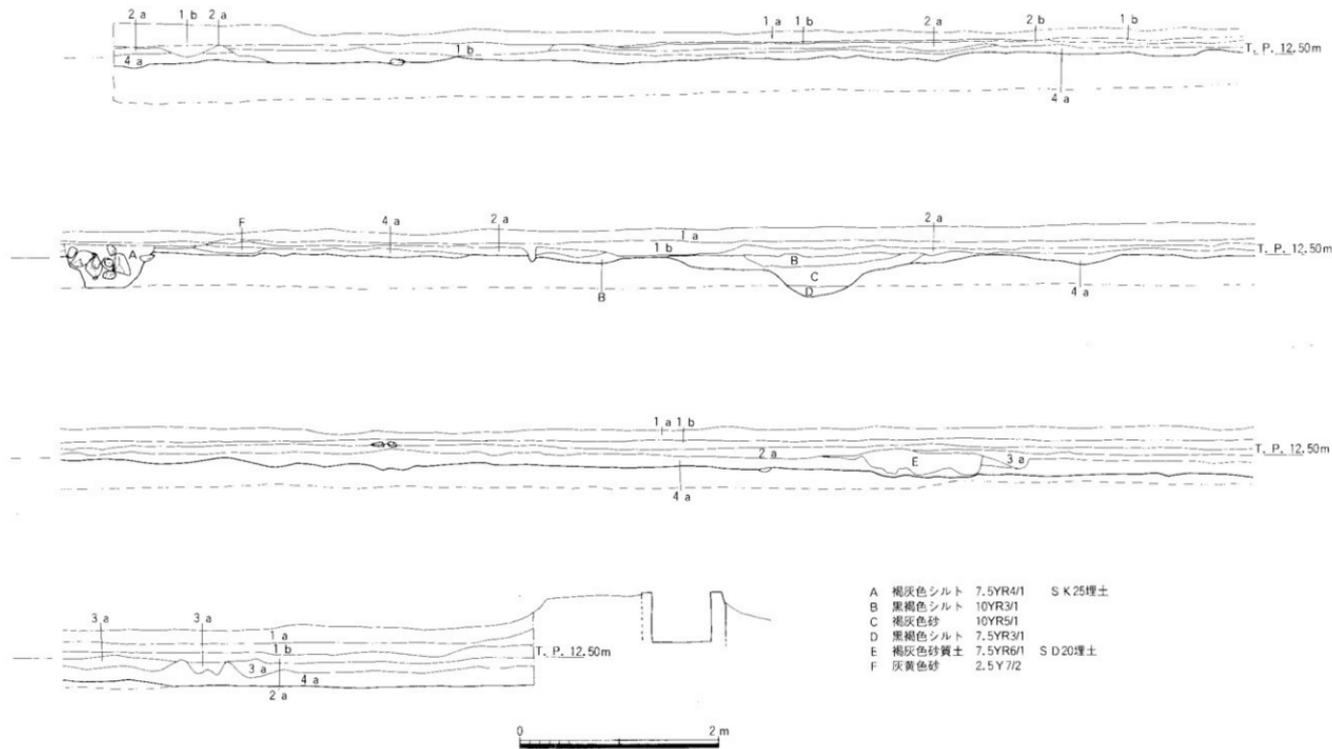
第7図 1区南壁土層図(1)



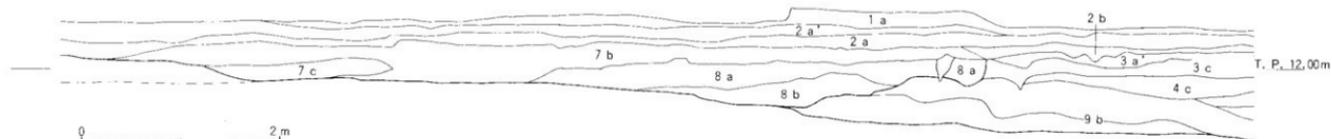
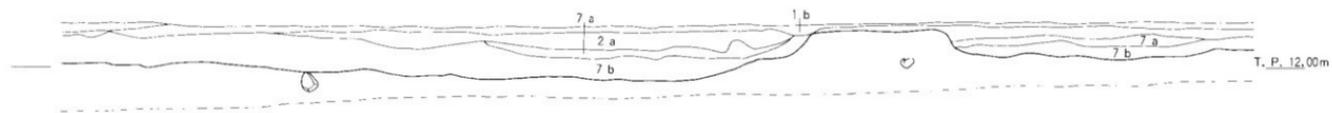
第 6 图 1 区南壁土層圖(2)



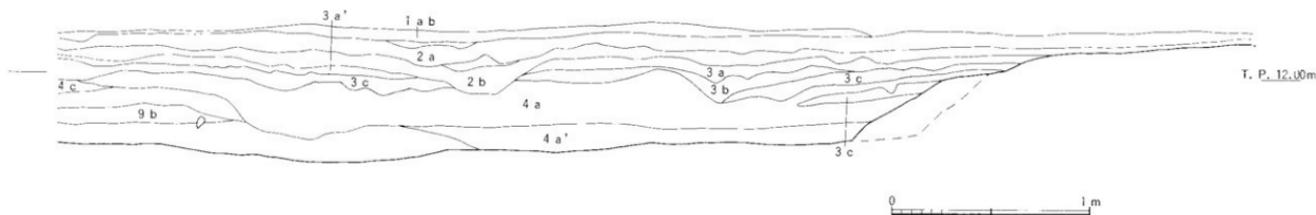
第9図 2区南壁土層図(1)



第10図 2区南壁土層図(2)

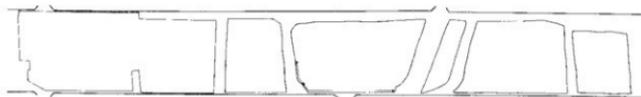


第11回 3区南壁土層図(1)

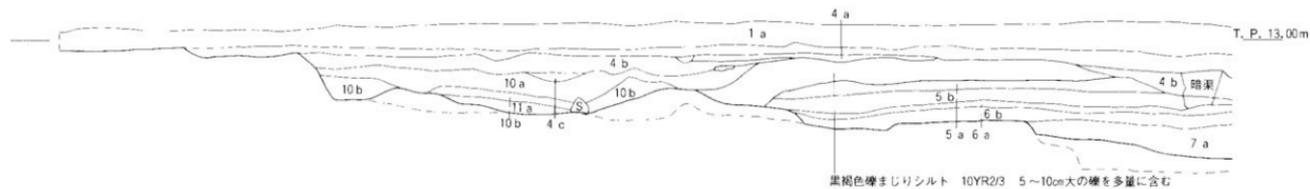


層序

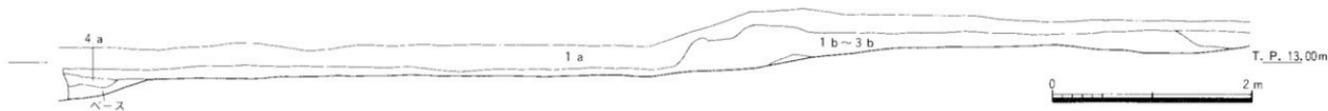
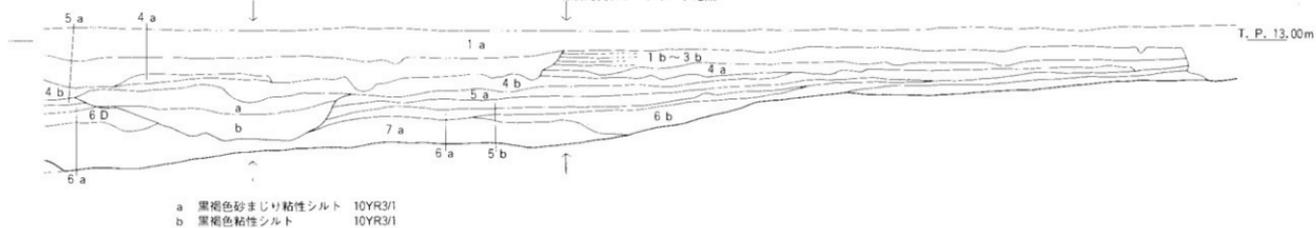
- | | | | |
|-------|--------------|------------|------------------------------------|
| 1 a b | 現耕作土、床土 | | |
| 2 a | 褐灰色粘性シルト | (10YR4/1) | |
| 2 b | 灰黄褐色砂質シルト | (10YR4/2) | |
| 3 a | 黒褐色粘性シルト | (7.5YR2/2) | |
| 3 a' | 黒色粘土 | (10YR2/1) | |
| 3 b | 黒褐色砂まじり粘性シルト | (10YR2/2) | |
| 3 c | にぶい黄褐色砂礫 | (10YR7/2) | S R 02 I 期 |
| 4 a | 黒褐色粘性シルト | (10YR2/2) | |
| 4 b | 黒褐色砂まじり粘性シルト | (10YR2/2) | |
| 4 c | にぶい黄褐色砂礫 | (10YR6/3) | |
| 5 b | 灰色シルト+黄褐色砂 | (5 Y 4/1) | ラミナ状堆積 |
| 6 a | 灰褐色粘性シルト | (7.5YR4/2) | |
| 7 b | 黒褐色砂質シルト | (10YR2/3) | |
| 8 a | 黒褐色シルト | (10YR2/2) | +黄灰色細砂(2.5Y6/1)のラミナ状堆積 S R 02 II 期 |
| 8 b | 黒褐色砂質シルト | (10YR2/3) | |



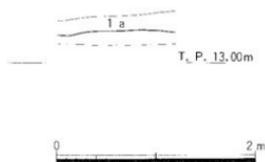
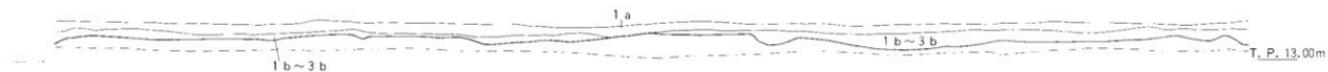
第12図 3区南壁土層図(2)



分析用資料サンプリング地点



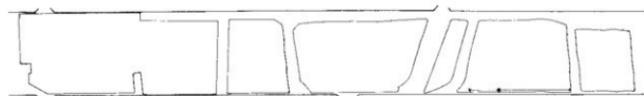
第13図 4区南壁土層図(1)



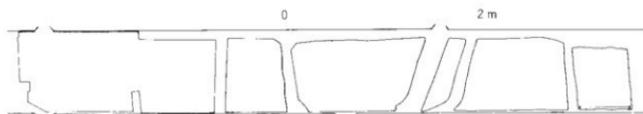
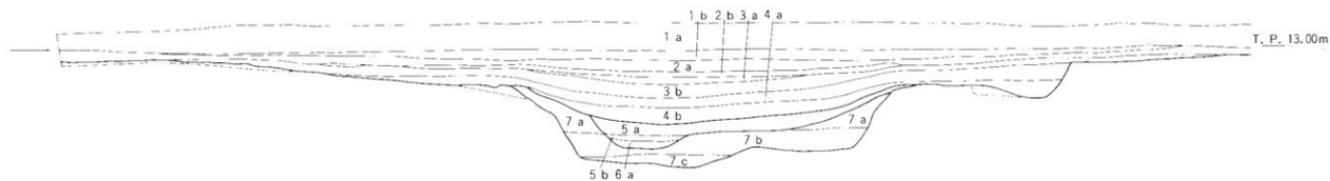
層序		
1 a	現耕作土	
1 b	灰白色シルト質極細砂	10YR7/1
2 a	にぶい黄褐色シルト質極細砂	10YR7/2
2 b	明黄褐色シルト質極細砂	10YR6/6
3 a	にぶい黄褐色シルト質極細砂	10YR7/2
3 b	明黄褐色シルト質極細砂	10YR6/6
4 a	灰黄褐色粘性シルト	10YR4/2
4 b	黒褐色粘性シルト	10YR3/2
5 a	黒褐色粘土	10YR3/1
5 b	褐灰色粘土	10YR4/1
6 a	黒色粘土	10YR1.7/1
6 b	黒褐色粘土	10YR2/2
7 a	黒褐色木本質泥炭層	10YR3/1
10 a	黒褐色粘性シルト	10YR3/1
10 b	褐灰色粘性シルト	10YR4/1
11 a	黒色粘性シルト	10YR2/1

S R 03埋土

S D 45埋土



第14図 4区南發土層図(2)



層序

- 1 a 現耕作土
- 1 b 床土
- 2 a にぶい黄褐色シルト (10YR7/2)
- 2 b にぶい黄褐色シルト (10YR7/4)
- 3 a 明褐色砂まじりシルト (7.5YR5/6)
- 3 b 褐色砂まじりシルト (7.5YR4/4)
- 4 a 褐色砂まじりシルト (7.5YR4/4)
- 4 b 黒褐色砂まじりシルト (10YR3/2)
- 5 a 褐色粘性シルト (10YR4/1)
- 5 b 灰黄褐色粗砂 (10YR6/2)
- 6 a 黒褐色粘性シルト (10YR3/1)
- 7 a 灰褐色砂まじりシルト (7.5YR4/2)
- 7 b 褐色粘性シルト (10YR5/1)
- 7 c 灰黄褐色粗砂 (10YR6/2)

黄灰色シルトのブロックを含む

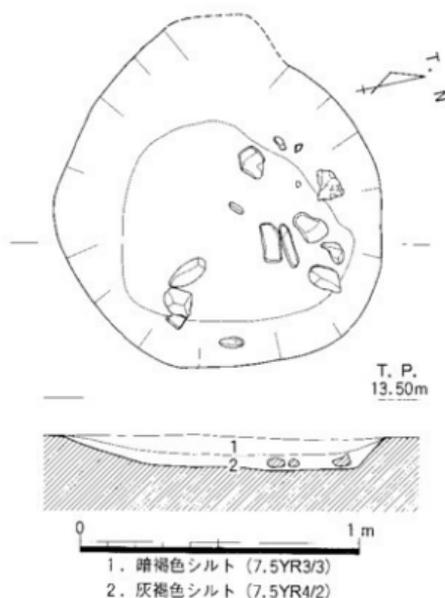


第15図 5区北壁土層図

第3節 縄文時代晩期の遺構と遺物

1 SK 40 (第16, 17図)

第4微高地において確認した円形の土坑であり、中世頃の溝と考えられるSD 48に切られる。土層埋土は2層に分層でき、1層 暗褐色シルト(7.5YR 3/3)、2層 灰褐色シルト(7.5YR 4/2)である。土坑の規模は、東西2.40m、南北2.35m、深さ0.22mを測る。土坑内の底には長軸20cm、短軸10cm前後の河原石が10個程度散在していたが、炉を構成するようなまとまりはみられなかった。これらの河原石の内1点は、砥石と考えられるものである(S 1)。また、土坑北寄り縄文土器の頸部から体部片および底部をそれぞれ1点確認した。土坑内から出土したこれらの河原石等に焼けた痕跡、埋土中に炭も含まないことから、焼土坑とは考えられず、土坑の性格は不明である。また周辺部にもこの時期の遺構はSR 03を除いて存在しない。

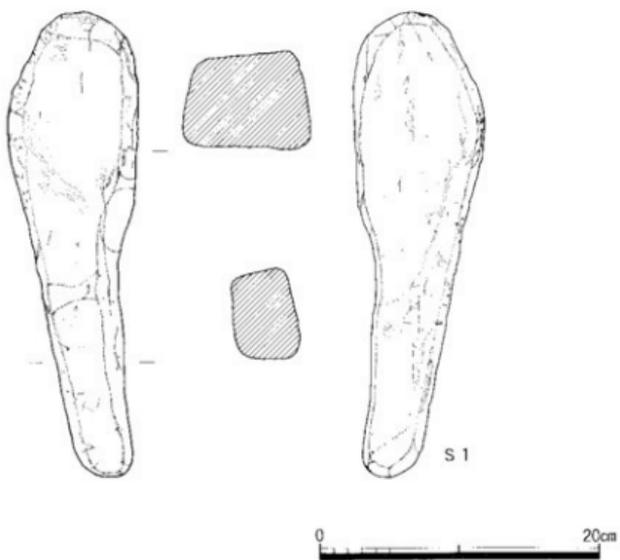
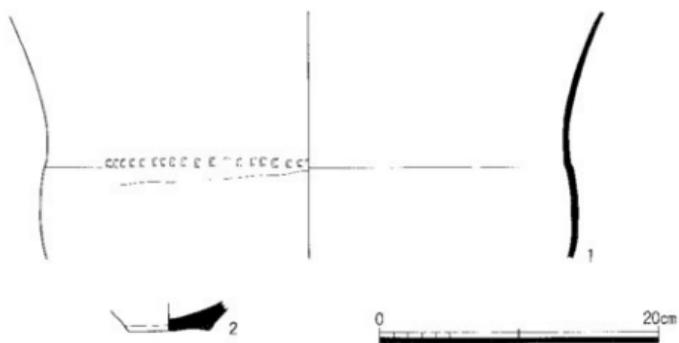


第16図 SK 40実測図

ただ、道路を挟んだ東側の井手東Ⅱ遺跡では縄文時代晩期後半の突帯文土器と弥生時代前期の土器が混在して出土している上、SD 45の最下層からも弥生時代前期の土器と石器が出土していることから、この土坑が単独で存在するのは不自然であることから、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構が周辺部に広がっている可能性が考えられる。

出土遺物

1は深鉢の頸部から体部にかけての破片である。頸部はあまり広がらずに外反する。頸部と体部の屈曲部は明瞭で、その屈曲部に押引文を巡らせる。2は深鉢の底部である。底はほとんど上がらない。1、2とも磨滅のため調整は不明である。S 1は砥石と考えられるものである。表と裏とも平坦面をもち、表と裏の2面に使用痕が認められる。



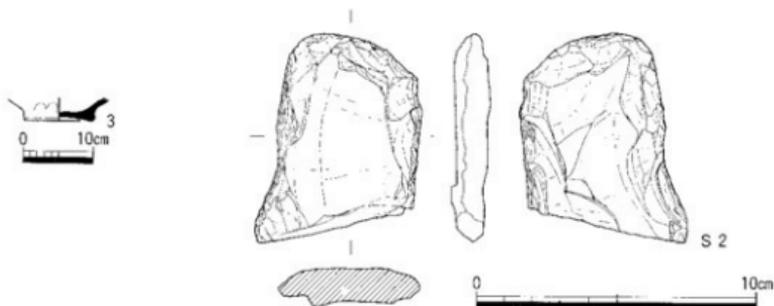
第17回 S K 40出土遺物実測図

2 S X 02 (第18図)

SD 11の南, SD 19の東側において確認した包含層である。検出した当初, 明確なプランが確認できなかったため, トレンチを設定し, 遺構の状況を確認したが, 包含層の残存状況が悪く, 断面観察においても確認できなかったことにより遺構の性格は不明である。包含層中から深鉢の底部が1点出土している。

出土遺物

3は縄文土器の深鉢の底部である。器壁は薄く, 作りはシャープである。底部は上げ底を呈するが, 調整は磨滅のため不明である。S1は打製石斧である。先端部は使用により欠損している。



第18図 S X 02出土遺物実測図

3 S R 02 (第19, 20図)

第3区, ほぼ全域において確認した南西から北東に流路をもつ自然河川である。規模は幅20~22m, 深さ1.20mであるが, 概して西岸の方が深く, 東岸は浅い。SD 21合流部付近に流木等がまとまって出土している。また, SR 02からは, SD 33, 34, 35および36, 37が分岐しているが, 出土遺物のあるSD 37を除けば全く出土していない。SR 02は, その堆積状況からSR 01と同じ流路であることは間違いないと考えられるが, 一部SR 01と異なる部分がある。SR 02は, 土層の埋土から大きく2期に分かれ, 古い時期のものをI期, 新しいものをII期として説明する。なお, SR 02が機能を失った後に堆積した2 a b層から出土した遺物については第6節 古代から中世の遺構と遺物の稿で述べる。

土層

2層 a b層が存在し, 層厚20~25cm程度の厚さをもち, SR 02全域に堆積し東岸寄りにやや厚く堆積する。a層は出土遺物からすれば中世頃の土壌層であり, 褐灰色粘性シルト(10 Y R 4 / 1)である。b層は灰黄褐色砂質シルト(10 Y R 4 / 1)であり, SR 02東岸お

よび、SD 34, 35 上面にも堆積する。SR 02 I・II 期の上層に堆積するのはこの層のみである。

I 期—縄文時代晩期から古墳時代前期頃までの堆積層をもつ流路であり、後の II 期に切られているため不明である。

3 層 a b 層存在し層厚 20 cm 程の厚さをもち、I 期の流路のほぼ全域に堆積する。a 層は黒褐色粘性シルト (7.5 Y R 2 / 2) である。

4 層 a b 層存在し、最も厚い部分で 50 cm の厚さをもつ。a 層は黒褐色粘性シルト (10 Y R 2 / 2)、b 層は黒褐色砂まじり粘性シルト (10 Y R 2 / 2)、c 層はにぶい黄橙色砂礫 (10 Y R 7 / 2) を部分的に含む。

9 層 I・II 期の切り合い部分の最下層に存在し、この層から縄文土器が出土している。黄灰色シルト質極細砂 (2.5 Y 4 / 1) が最も厚い部分で 40 cm 堆積している。

9 層出土遺物

4 はバケツ状を呈する縄文土器の深鉢である。口縁端部は平坦で端面に刻目を施す。口縁部から体部にかけて粘土紐の接合痕が顕著に残る。底部を欠損するが、口径の割に器高が低くなる器形のようなものである。

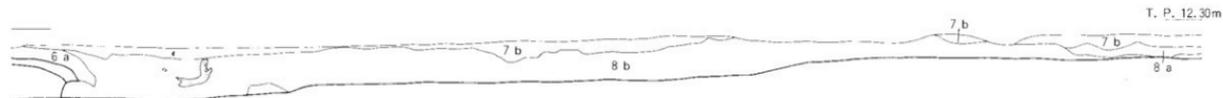
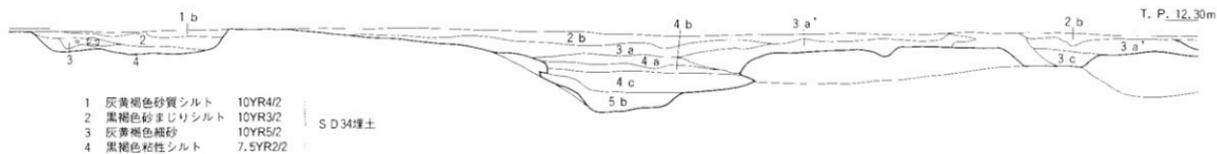


第 20 図 SR 02 9 層出土遺物実測図

II 期—遺物は少ないが、古代以降の流路と考えられる。

7 層 b 層黒褐色砂質シルトであり、層厚 10 cm 程度の厚さをもち、II 期の流路全域に広がる。

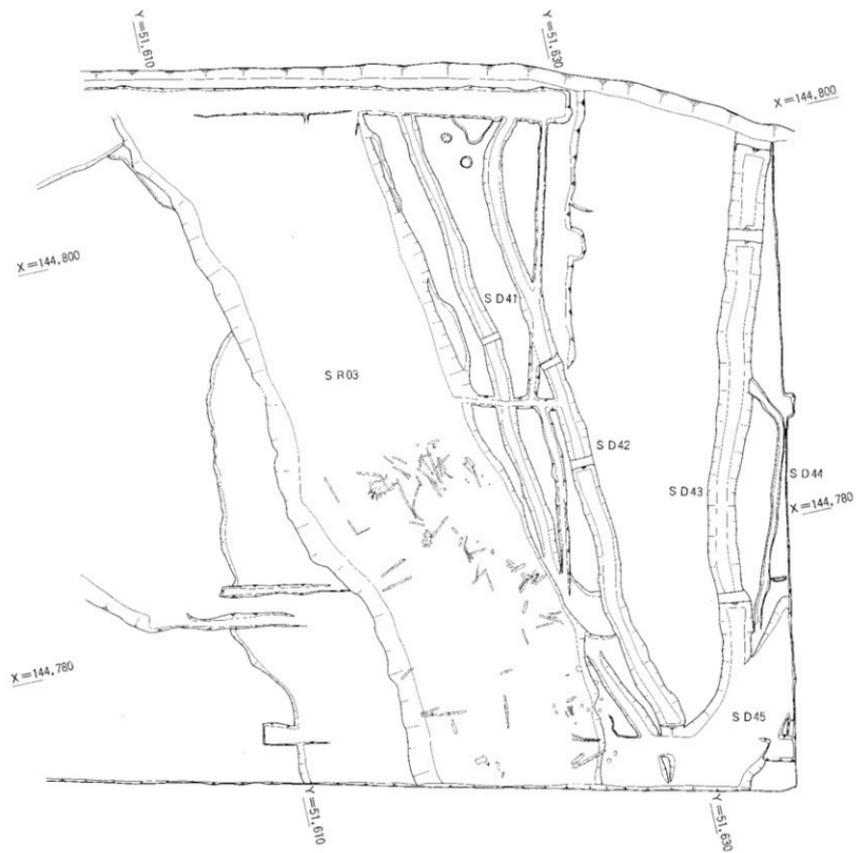
8 層 a b 層存在する。a 層は部分的に存在するのみで、黒褐色シルト (10 Y R 2 / 2) である。一方 b 層は黒褐色砂質シルト (10 Y R 2 / 3) と黄灰色細砂 (2.5 Y R 6 / 1) のラミナ状堆積である。b 層は最も厚い部分で 30 ~ 40 cm の厚さをもつ。部分的に層中に褐灰色砂礫をブロック状に含む。



層序

- 1 a 現耕作土
 - 1 b 床土
 - 2 a 褐灰色粘性シルト 10YR4/1
 - 2 b 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2
 - 3 a 黒褐色粘性シルト 7.5YR2/2
 - 3 a' 黒色粘土 10YR2/1
 - 3 c にぶい黄褐色粗砂 10YR6/3
 - 4 a 黒褐色粘性シルト 10YR2/2
 - 4 b 黒褐色砂まじり粘性シルト 10YR2/2
 - 4 c にぶい黄褐色砂礫 10YR6/3
 - 5 b 灰色シルト十黄褐色のラミナ状堆積 5 Y 4/1
 - 6 a 灰褐色粘性シルト 7.5YR4/2
 - 7 b 黒褐色砂質シルト 10YR2/3
 - 8 a 黒褐色シルト 10YR2/2
 - 8 b 黒褐色砂質シルト 10YR2/3
- 十黄灰色細砂 2.5 Y 6/1 ラミナ状堆積

第19図 S R02土層図



第21図 SR03 5~7層遺物出土状況図

4 SR03 (第21~46図)

調査区東部、4区において確認した南東から北西に流路をもつ自然河川であり、SD39、40、45に切られる。自然河川の規模は、幅10.0m、深さ1.00mの規模をもち、川底は一部深くなる部分が存在するがほぼ平坦である。土層埋土は大きく4層に分層できる。

4層 a層 灰黄褐色粘性シルト(10YR4/2)、b層 黒褐色粘性シルト(10YR3/2)のab層存在する。ab層で層厚15cm程度の厚さをもち、SR03の全域およびSD45の上部を覆う。SD45の最終埋没が6c末から7c初頭と考えられることから、それ以降の時期が考えられる。

5層 a層 黒褐色粘土(10YR3/1)、b層 褐灰色粘土(10YR4/1)のab層存在する。ab層で層厚20cm程度の厚さをもち、SR03の全域を覆う。

6層 a層 黒色粘土(10YR1.7/1)、b層 黒褐色粘土(10YR2/2)のab層存在する。ab層で層厚15cm程度の厚さをもつ。この層以下が確実な縄文時代晩期の包含層である。

7層 a層のみで、SR03の最下層であり、川底付近に堆積する黒褐色木本質泥炭層(10YR3/1)であり、土器、石器を多く包含するほか、木質、植物遺体を多量に包含する。層厚は最も厚い部分で50cmを測る。

ベースは褐灰色粘性シルト(10YR5/1)を基本とし、一部下部の礫層が露出している部分については灰白色礫まじりシルト(5Y7/2)〔5~10cm大のクサリ礫を多量に含む。〕である。

このうちSR03中央部において分析用試料を採集し、プラント・オパール分析、花粉分析を行った。(本文付卒、第3・4節参照)

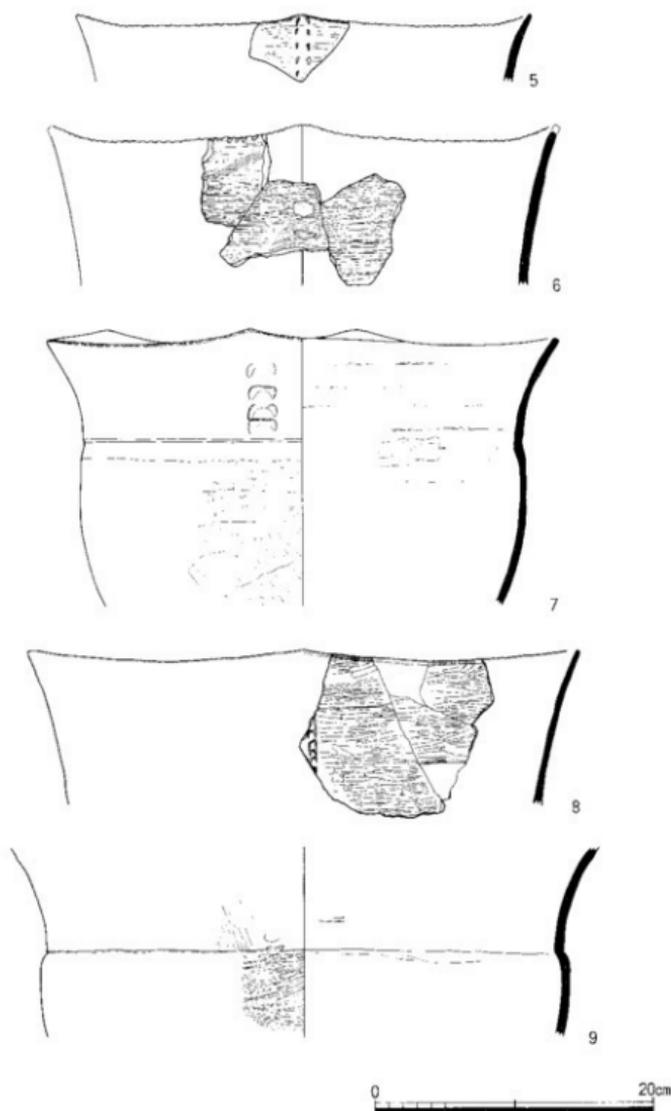
遺物はSR03東岸南寄りに多量の自然木、加工木に混じって縄文土器、石器(打製石斧が主流)が多く出土したが、自然木、加工木等にまともには認められず散在している上、大木の根等もみられたため、構築物とは認められなかった。個々の遺物については、後で詳細に述べるが、加工木については木材の分割方法が追える試料も確認されており、これらの木材は細かな加工に備えて水浸けされていた可能性が考えられる。遺物は東岸のこの箇所から集中して出土したのみで、他の箇所からはほとんど出土していない。出土した土器にはほとんど磨耗等が認められないことから、東岸の微高地から投棄されたものか、そう遠くないところから流れたものがこの場所で止まったものと考えられる。

6、7層出土土器

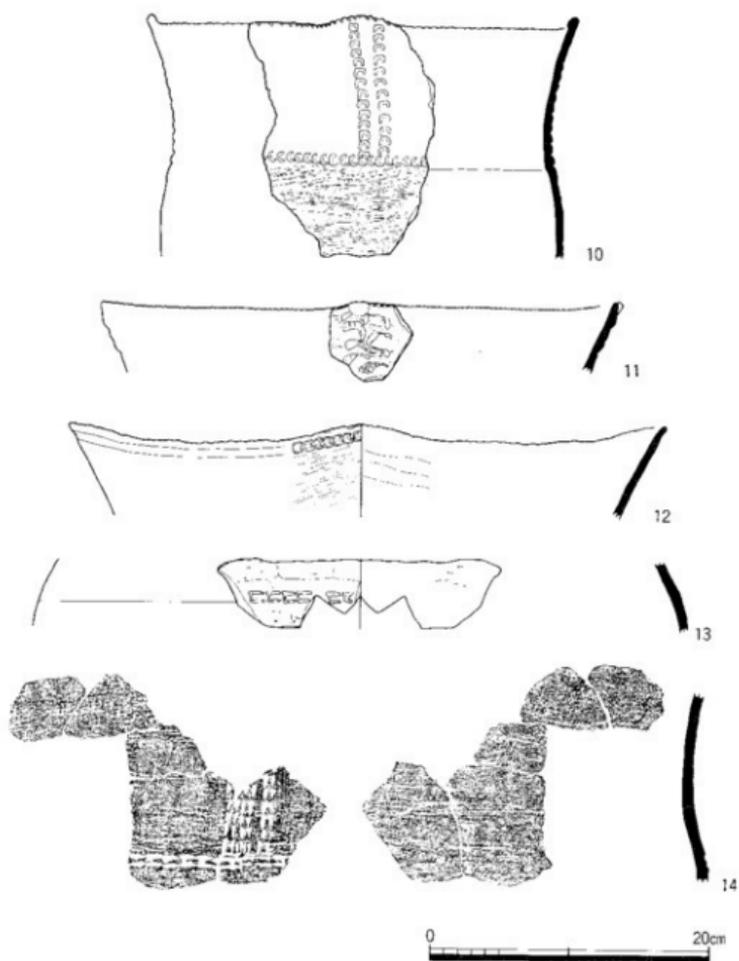
SR03 6、7層からは縄文時代晩期前半と考えられる土器が多量に出土している。これらの土器は出土状況から一括性が高く器形の種類も豊富である。ここでは深鉢形土器と浅鉢形土器に分け説明を加える。

深鉢形土器(5~75)

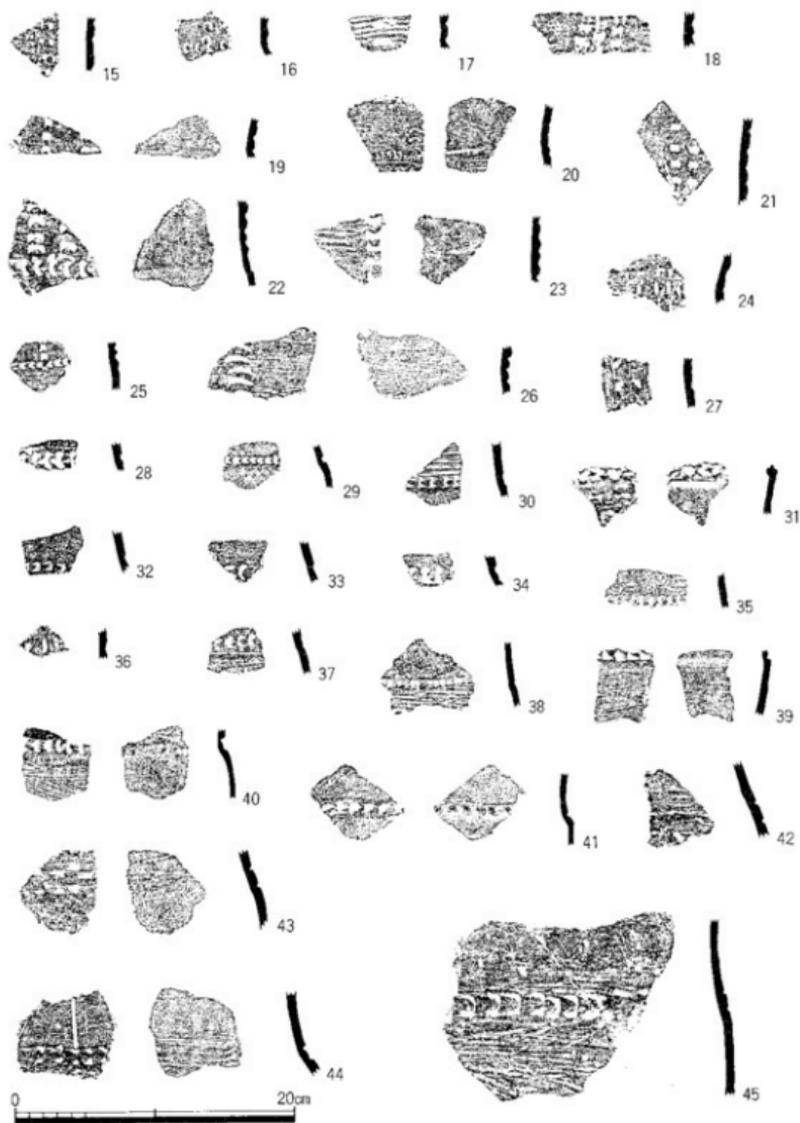
深鉢形土器A1- (5~45) 器形は低い山形の口縁をもち、頸部は緩やかにくびれ頸部と



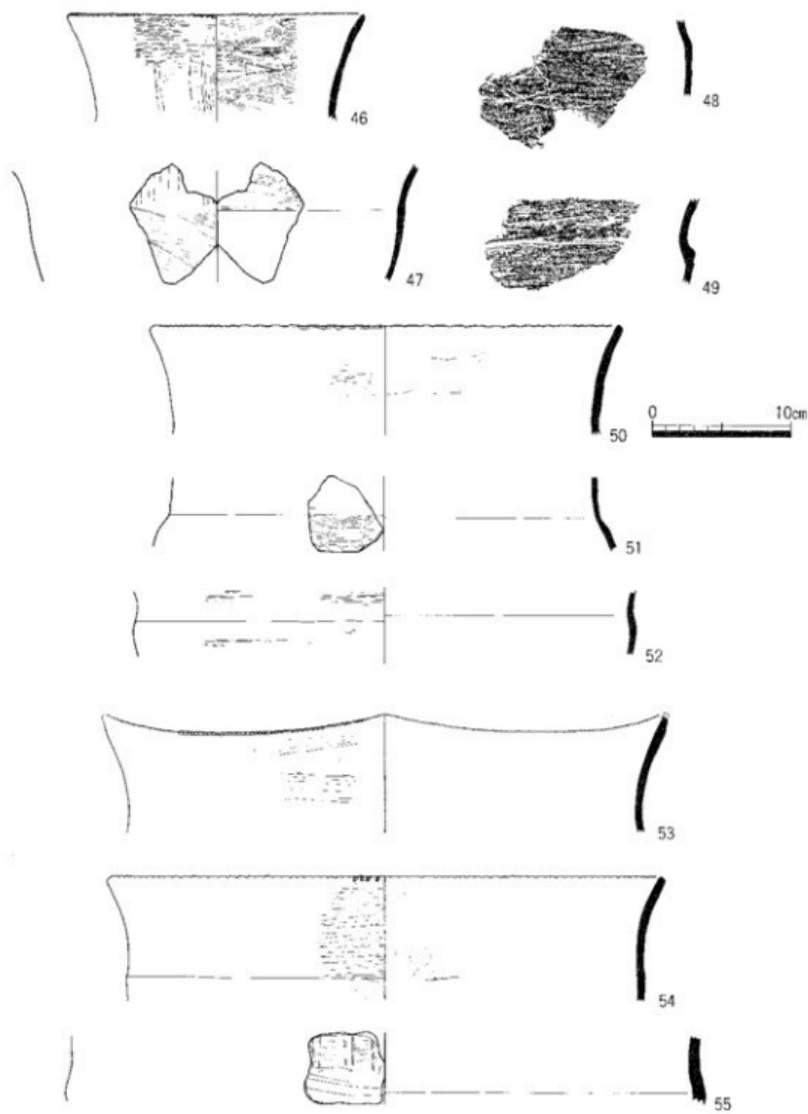
第22図 S R 03 5～7層出土遺物実測図(1)



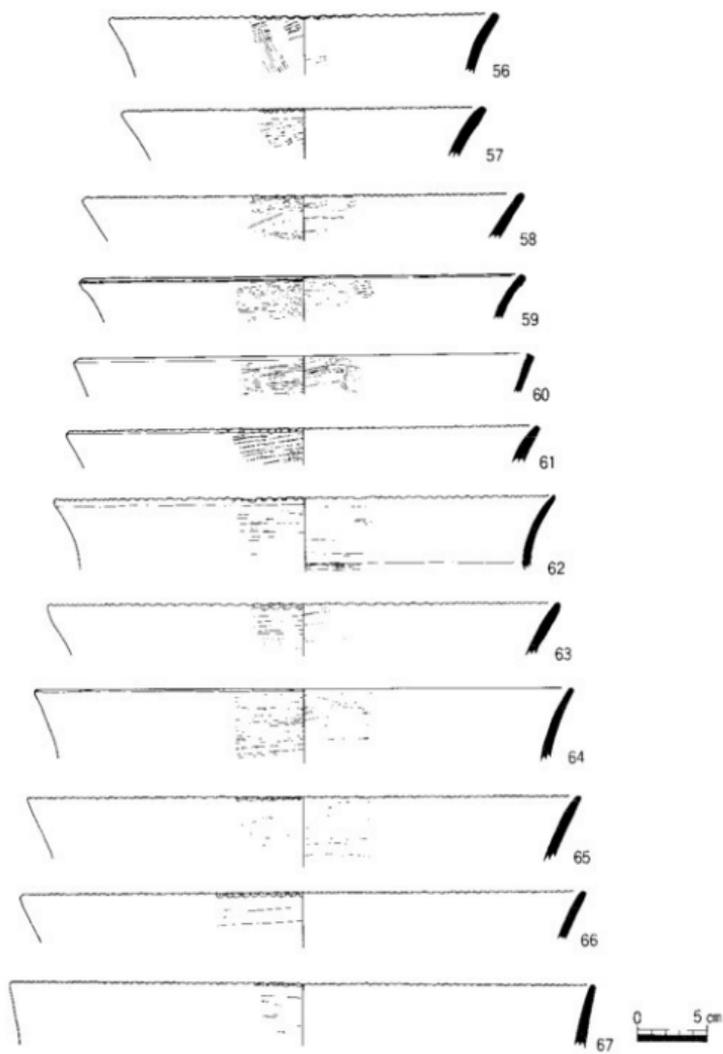
第23图 S R03 5~7层出土遗物实测图(2)



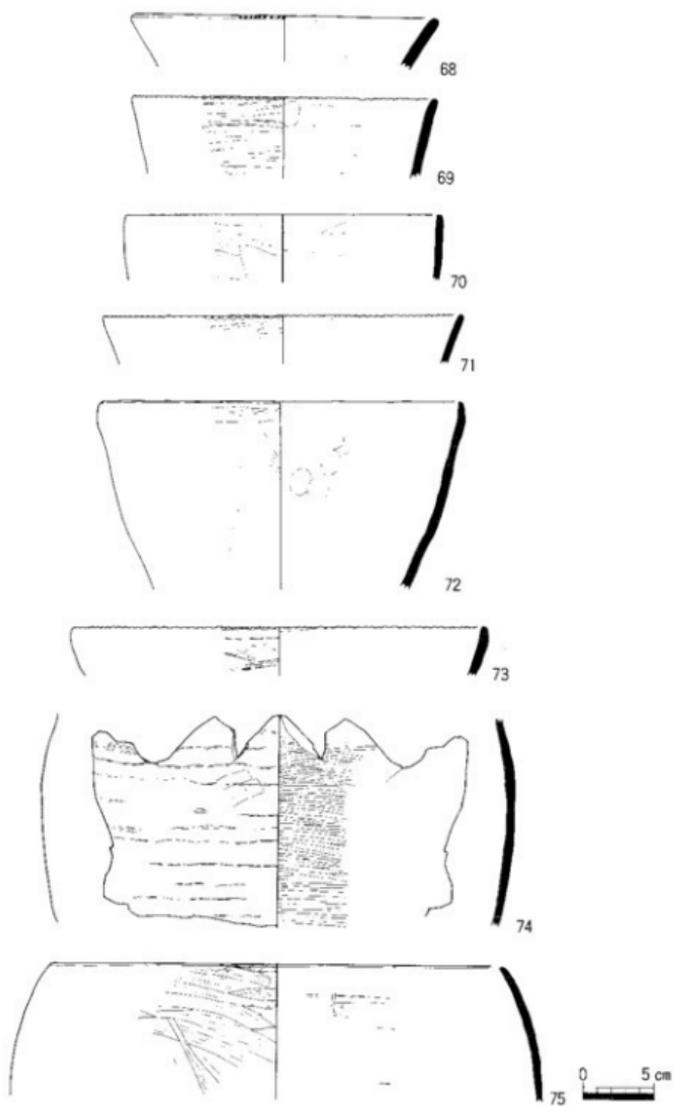
第24图 S R 03 5~7層出土遺物実測図(3)



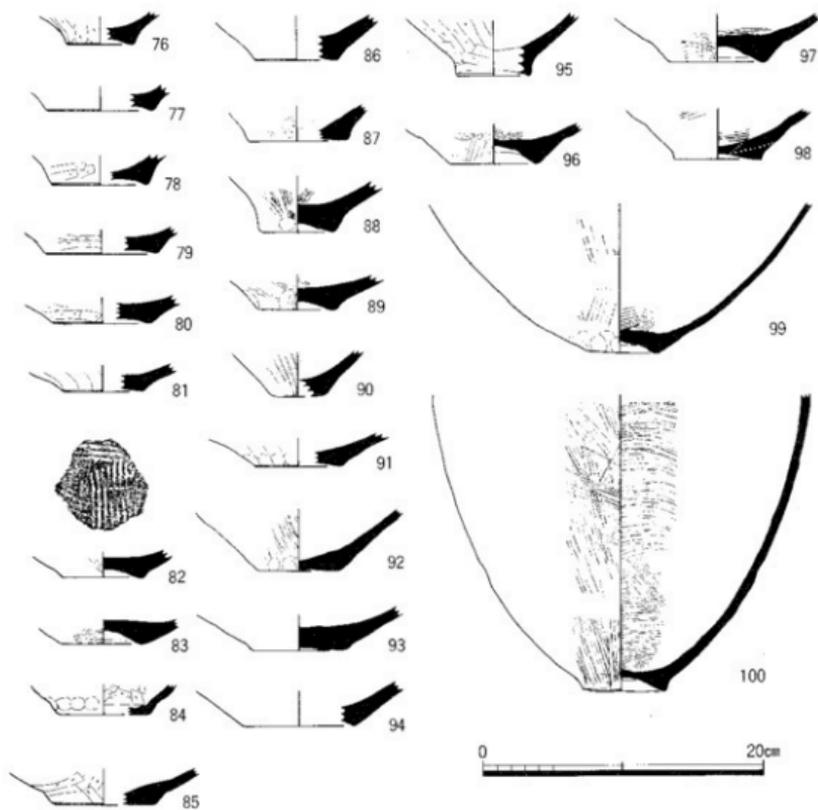
第25图 S R03 5~7层出土遗物实测图(4)



第26圖 S R03 5~7層出土遺物実測圖(5)



第27図 SR03 5～7層出土遺物実測図(6)



第28図 S R 03 5～7層出土遺物実測図(7)

胴部の境界下で口縁部径と同じかそれよりも下回る程度に膨らませ、胴部下半に向かってすぼまる形態をする。口縁端部は平坦に仕上げられているものが多い。文様は、口縁端部に刻目文を施すものが大半で、低い山形および突起から垂下する爪形文あるいは押引文が認められる。頸部と胴部の境界には爪形文あるいは押引文が巡るものがほとんどであるが、12のように口縁端部外面にC字形の爪形文を施すものも見られる他、24には寛楯の刺突文、44の頸部には篋措の沈線文が見られるがこれらはほんの一部である。調整は頸部外面を条痕、胴部外面は条痕もしくはヘラ削り、内面はナデを施すものが一般的である。頸部外面についても文様が見られるものは条痕を丁寧にナデ消すものが多いが、条痕の上から文様を施すものも認められる。

深鉢形土器AⅡー (46~67, 55を除く)

器形はAⅠと同様な形態をするが、文様は口縁端部の刻目文を施す以外、頸部および頸部と胴部の境界の文様は認められない。破片が多いため正確には欠けるが、ゆるい山形口縁になるものは53のみである。口縁端部はAⅠ同様、平坦に仕上げられるものが多いが、丸く仕上げられているものも認められる。調整は頸部外面を条痕、胴部外面についても条痕を施すものが多い。内面は条痕を残すものも多く見られるが、ナデ調整を施すものもみられ、その割合は同程度である。

深鉢形土器BⅠー (68~75)

前述のAⅠ、AⅡとは違い明確な頸部をもたず、外傾する口縁部(68~73)もしくはやや内傾する口縁部(74, 75)をもち、外傾する口縁部から徐々にすぼまる胴部から底部にいたるもの、やや内傾する口縁部から胴部上半が張り、徐々に下半がすぼまり底部にいたるものがある。文様は口縁端部に刻目文を施すのみで、他の部位には認められない。調整は外面条痕、内面ナデを基本とし、条痕を施すものもみられる。この形態のものは接合痕が明瞭に残るものが多い。

底部 (76~83, 86~100)

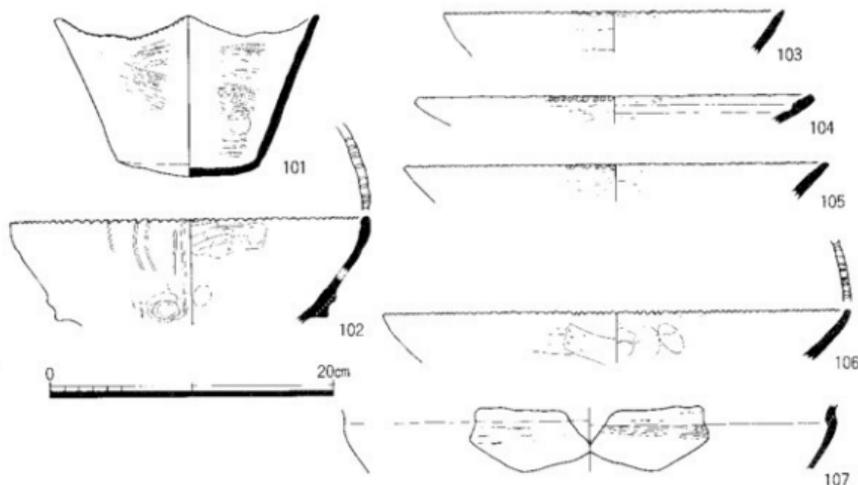
深鉢形土器の底部は凹み底が大半で、一部平底を呈する90, 92, 93がみられる。調整は外面条痕もしくはヘラ削り、内面はナデもしくは条痕を施す。

浅鉢形土器 (101~142)

浅鉢形土器には器面調整により大きく条痕、ヘラ削りを主体とする粗製土器とヘラミガキを主体とする精製土器に分かれるが、その割合は2:8であり、圧倒的に精製土器が多い。

浅鉢形土器A

いわゆる粗製の浅鉢である。波状口縁をもつ器形(101)、胴部から口頸部が屈曲しない器形(102~106)、胴部から頸部が屈曲する器形(109)の大きく3種類に分かれる。いずれも口縁端部に刻目文が認められる。口縁端部以外の文様は(102)のみに認められるもので、口縁部から胴部に沈線文、突起が認められる。調整は101が内外面条痕、103を除くその他は



第29図 S R 03 5～7層出土土物実測図(8)

外面ヘラ割り，内面粗いナデを施す。

浅鉢形土器B

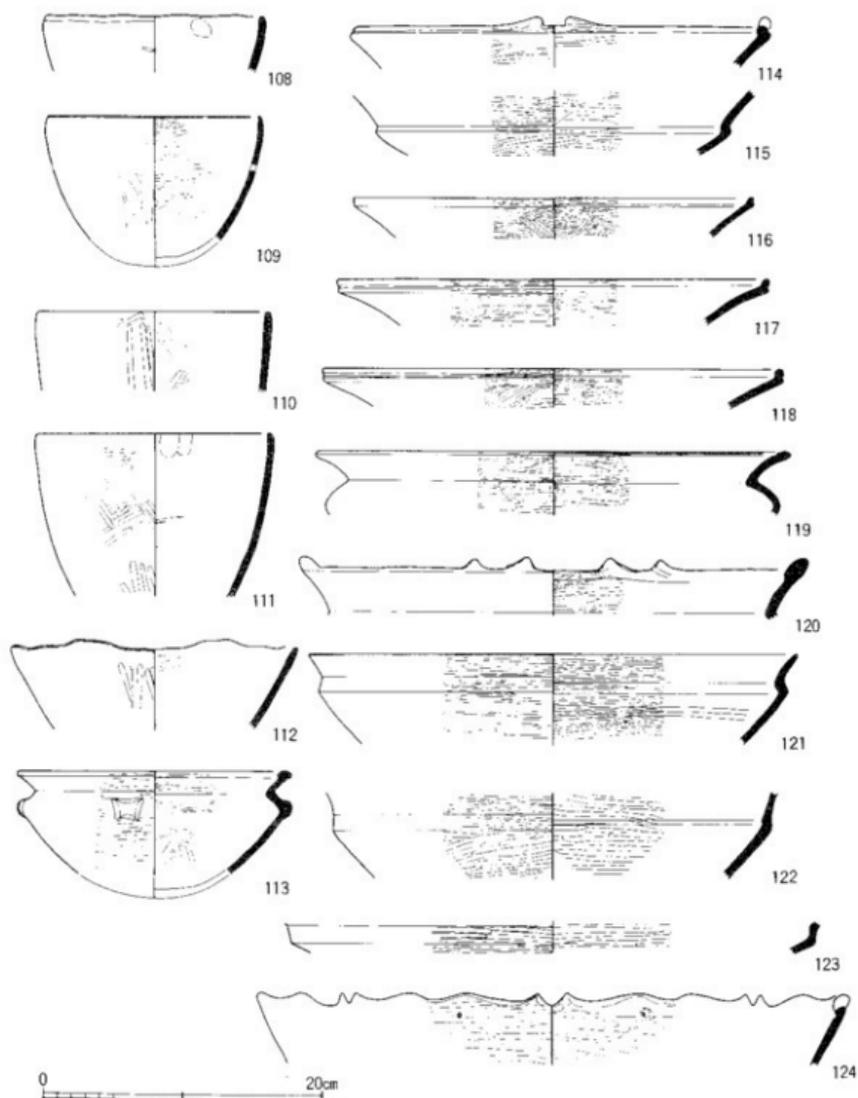
底部からあまり外反せずに上方に立ち上がる胴部および口縁部をもつもので椀形および長胴を呈する器形である(108～112)。一部低い山形を呈する(112)もみられる。口縁端部は平坦に仕上げるものが多く，調整は内外面ともヘラミガキを施す。

浅鉢形土器C I

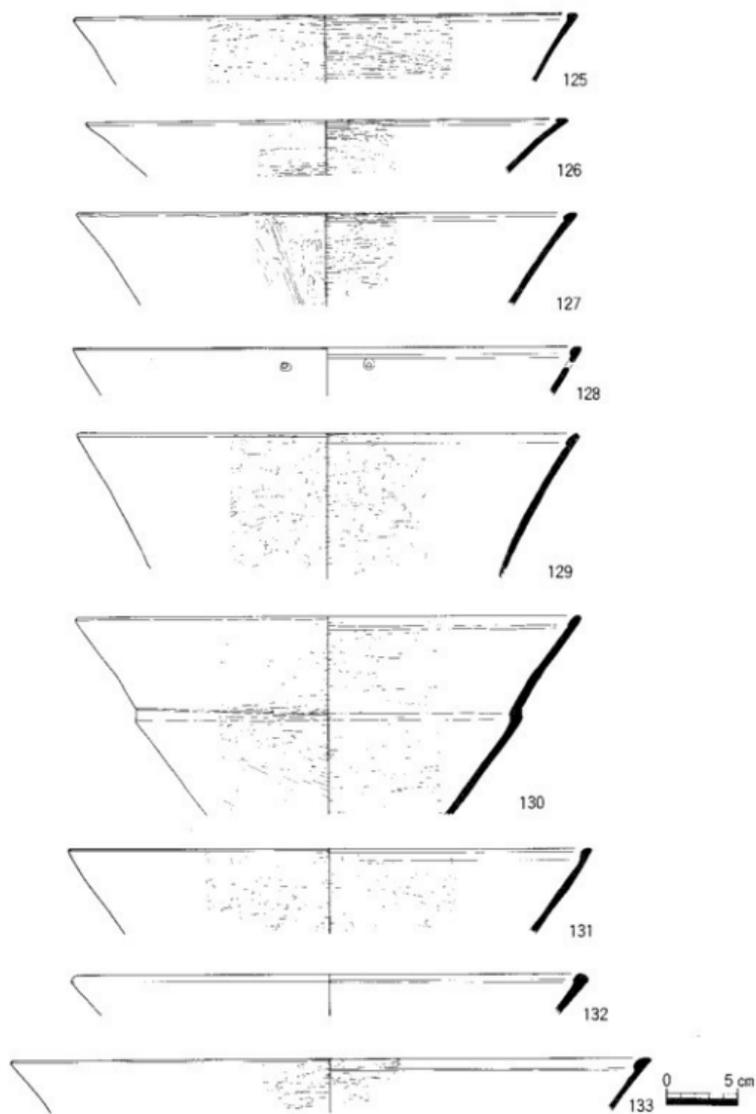
胴部から一旦内側に短く屈曲するが，口頸部の外反が短く口径と胴径の差が少ない器形である。口縁端部の違いにより，口縁端部に突起をもつ器形C I a類(114, 120, 124)，口縁端部を上方につまみ上げ端部外面に凹線を一条巡らせる器形C I b類(116～118)，口縁端部は外反したままでおわる器形C I c類(115?, 121, 122?, 123?, 134)，口縁端部内面を断面蒲鉾形に肥厚させる器形C I d類(113, 119)がある。いずれのものも数点のみの出土である。

浅鉢形土器C II

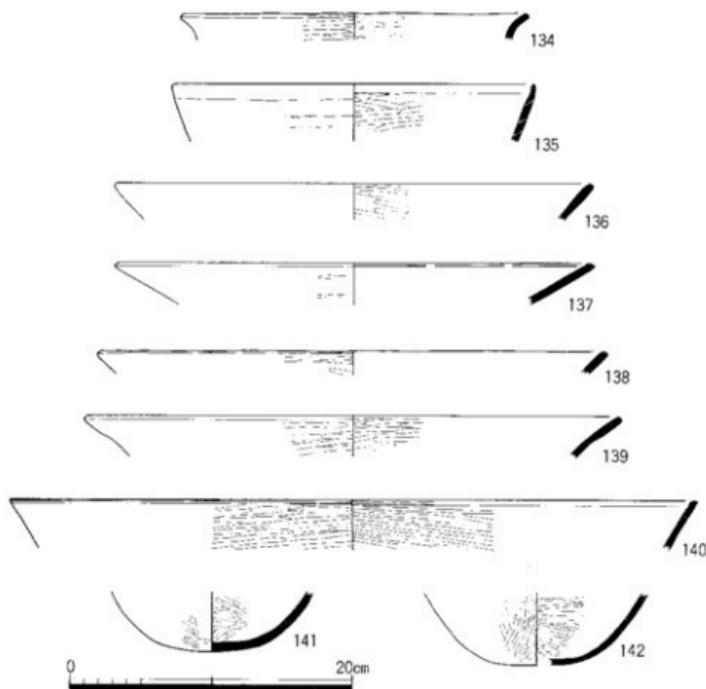
小さな胴部から一旦内側に短く屈曲し，さらに口頸部が直線的に強く外反した大きな口径を有し，口縁端部内面に断面蒲鉾形に肥厚するものが大半で，一部に台形およびほとんど肥厚させずに沈線のみを施す器形C II a類(125～133, 137, 140)と破片であるため詳細は不明であるが口縁端部内面が肥厚しない器形C II b類(136, 138, 139)がある。調整は内外面ともヘラミガキを基本とする。



第30图 S R 03 5~7 層出土遺物実測图(9)



第31図 S R03 5～7層遺物出土遺物実測図(10)



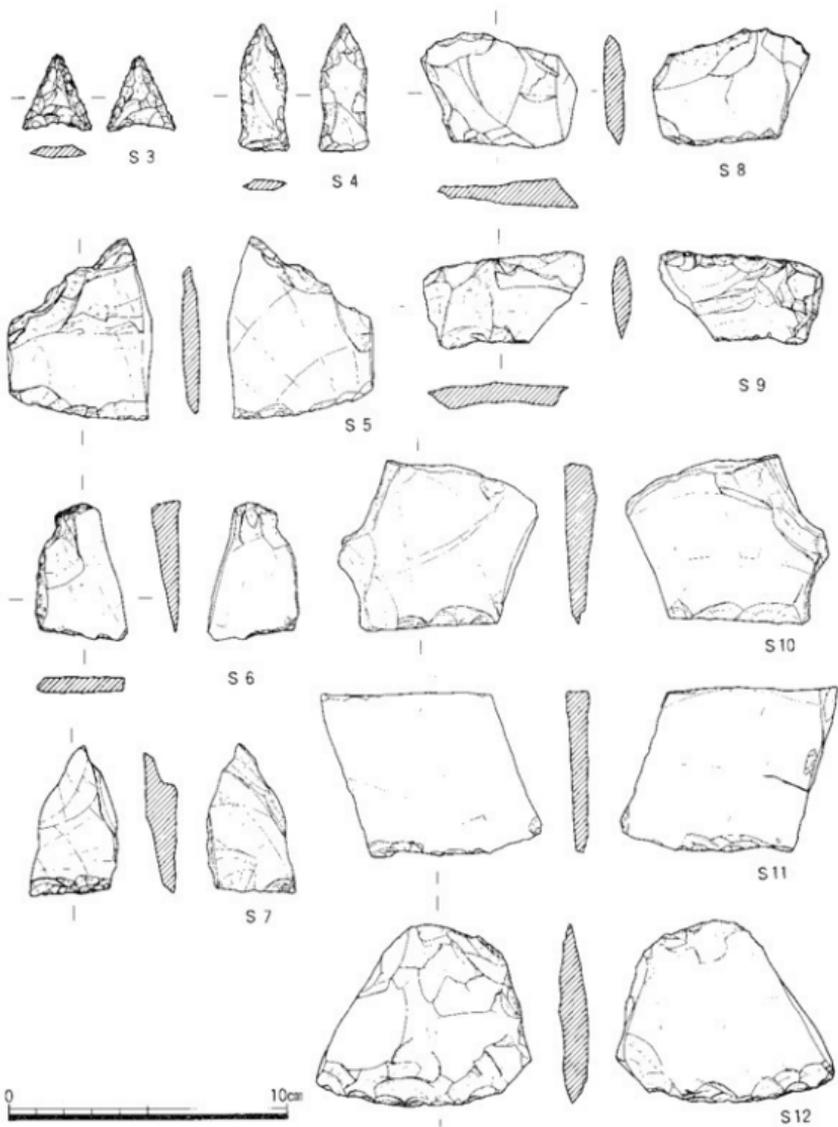
第32図 S R 03 5～7層出土遺物実測図(11)

底部

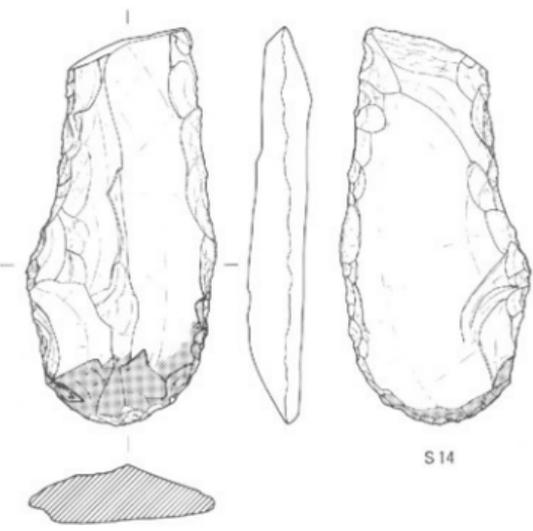
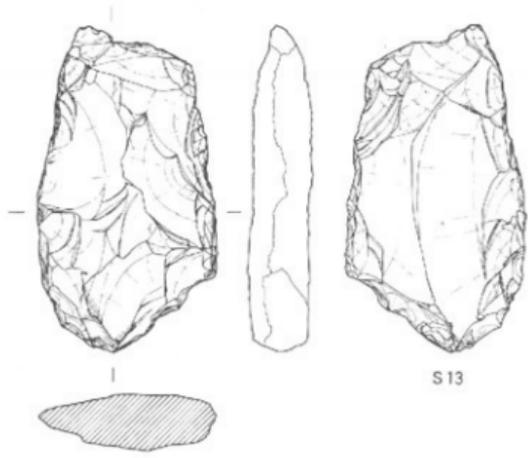
浅鉢形土器C類の底部と考えられる丸底の底部(141, 142), 浅鉢形土器A類の底部と考えられる(84, 85)がある。調整は141, 142が内外面ともヘラミガキ, 84は外面ナデ, 外面ヘラ割り, 85は外面ヘラ割り, 内面ナデ調整を行う。

石器(第33～42図)

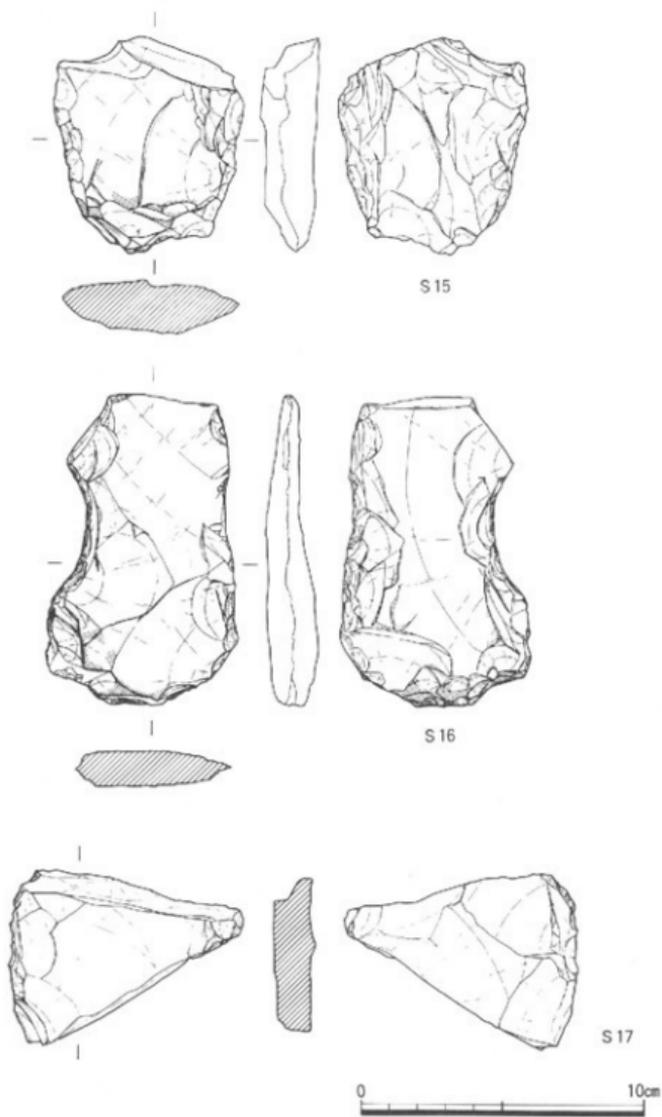
S 3, 4は石鏃である。両方とも平基式である。S 3は正三角形形状, S 4は基部の側縁部がやや挟れる二等辺三角形形状を呈する。断面はいずれも平坦面をもちS 3の調整は丁寧である。S 5～12はスクレイパーである。調整は下縁部だけに認められるものが多く, 概して粗いつくりのものが多い。S 13～56は打製石斧である。材質はS 55, 56が結晶片岩である以外はいずれもサヌカイト製である。打製石斧は使用による破片のため完全な状態であるのはS 13, 14, 16, 22の4点のみで, 他はいずれも刃部および基部の破片である。打製石斧の形状は刃



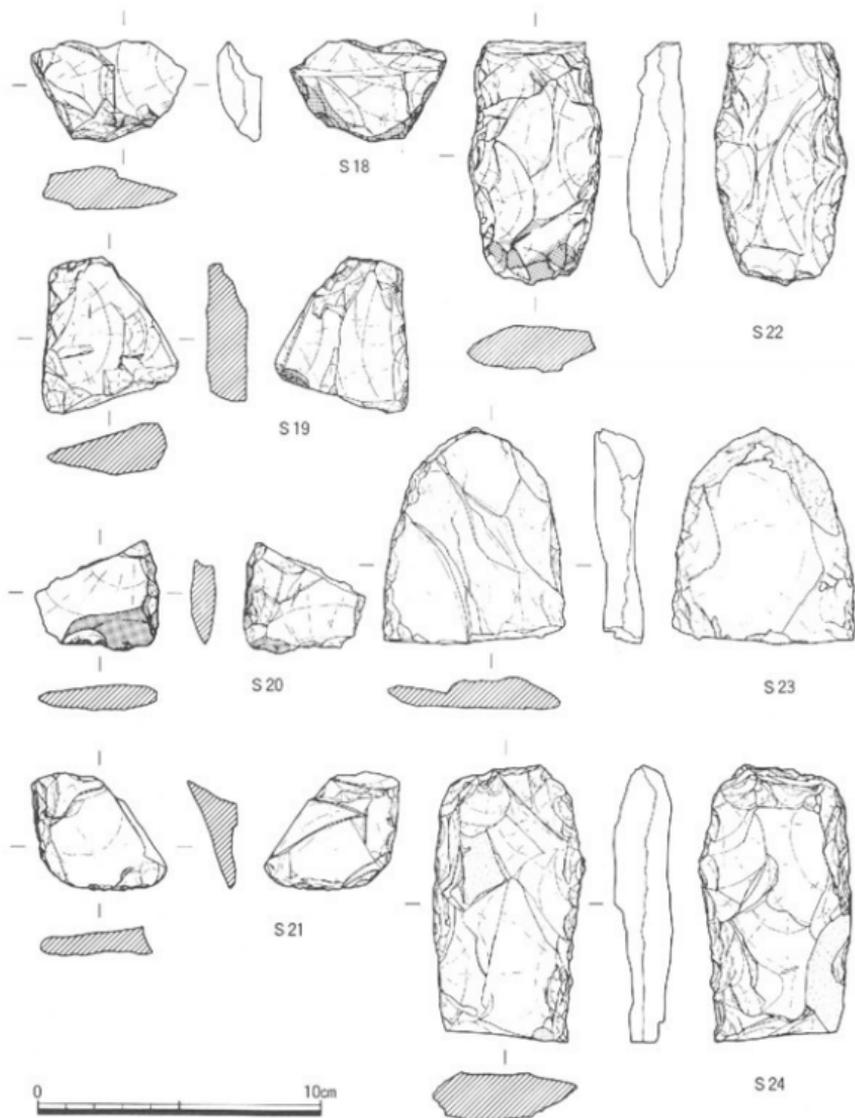
第33图 S R03 5~7层出土遺物実測図(12)



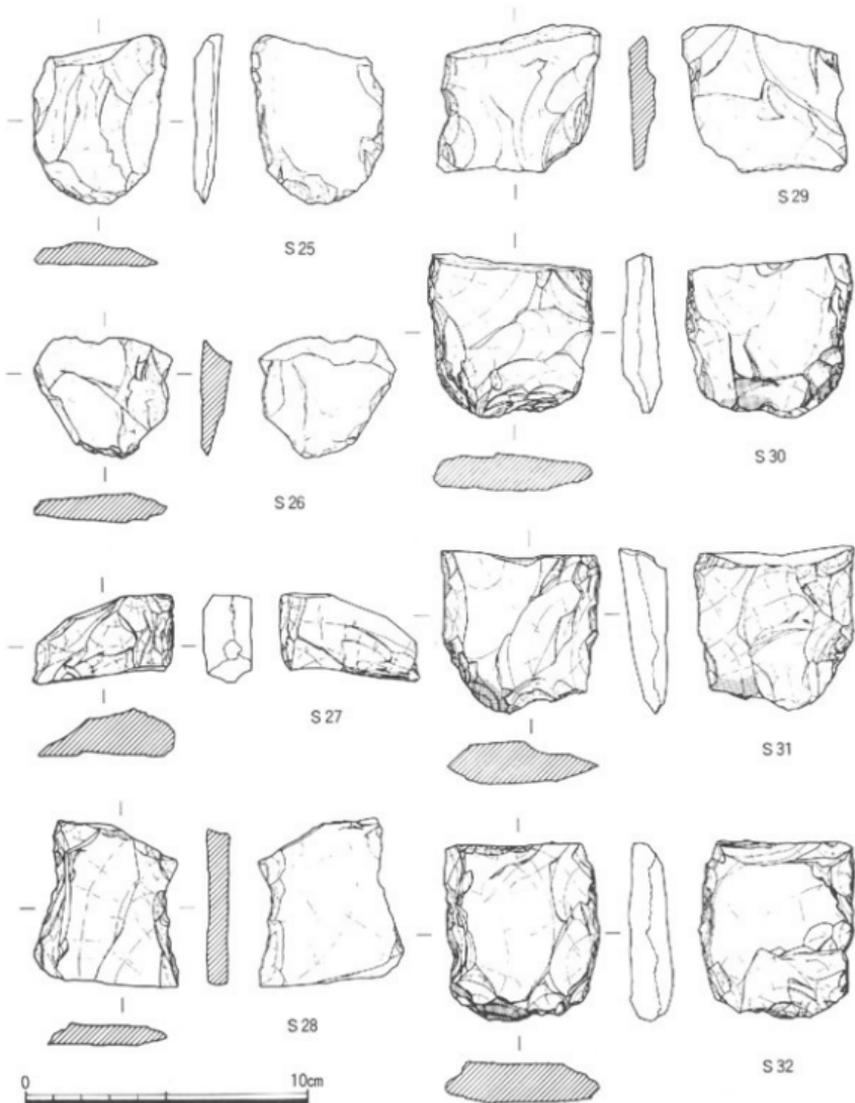
第34图 S R 03 5~7层出土遗物实测图(13)



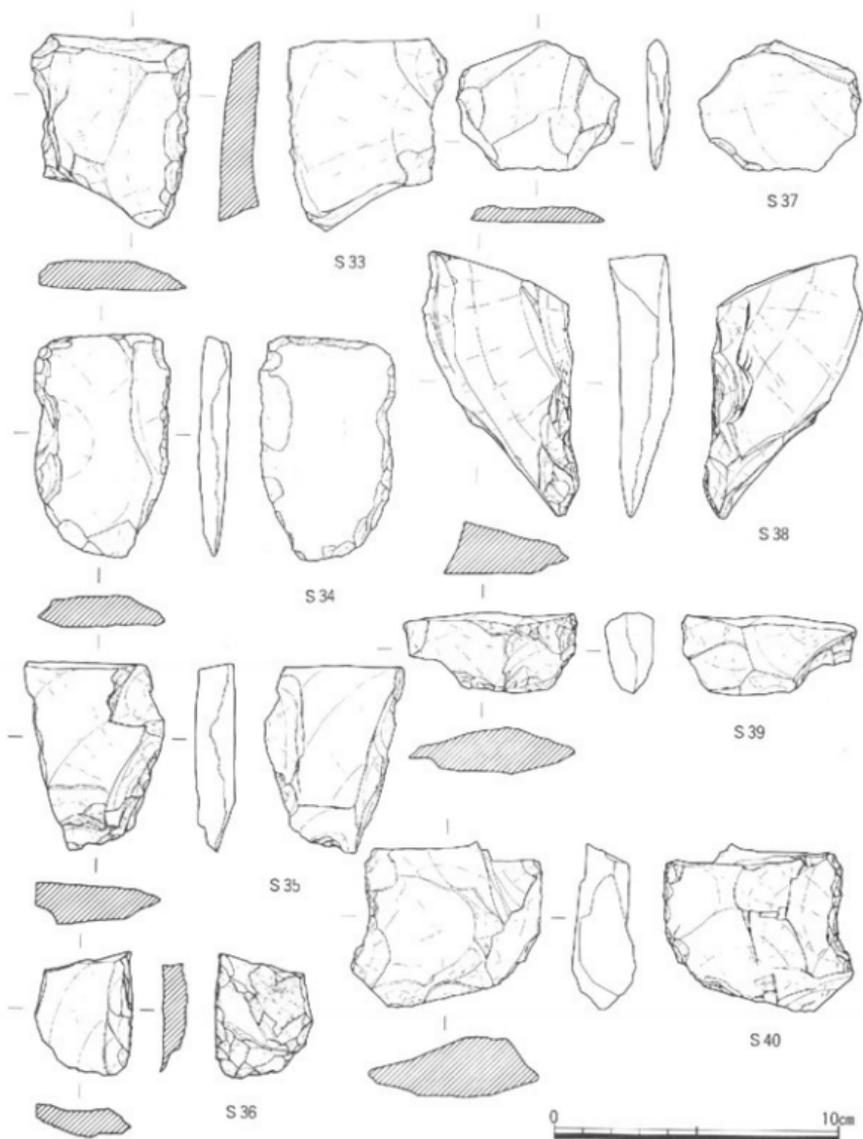
第35図 S R03 5～7層出土遺物実測図(14)



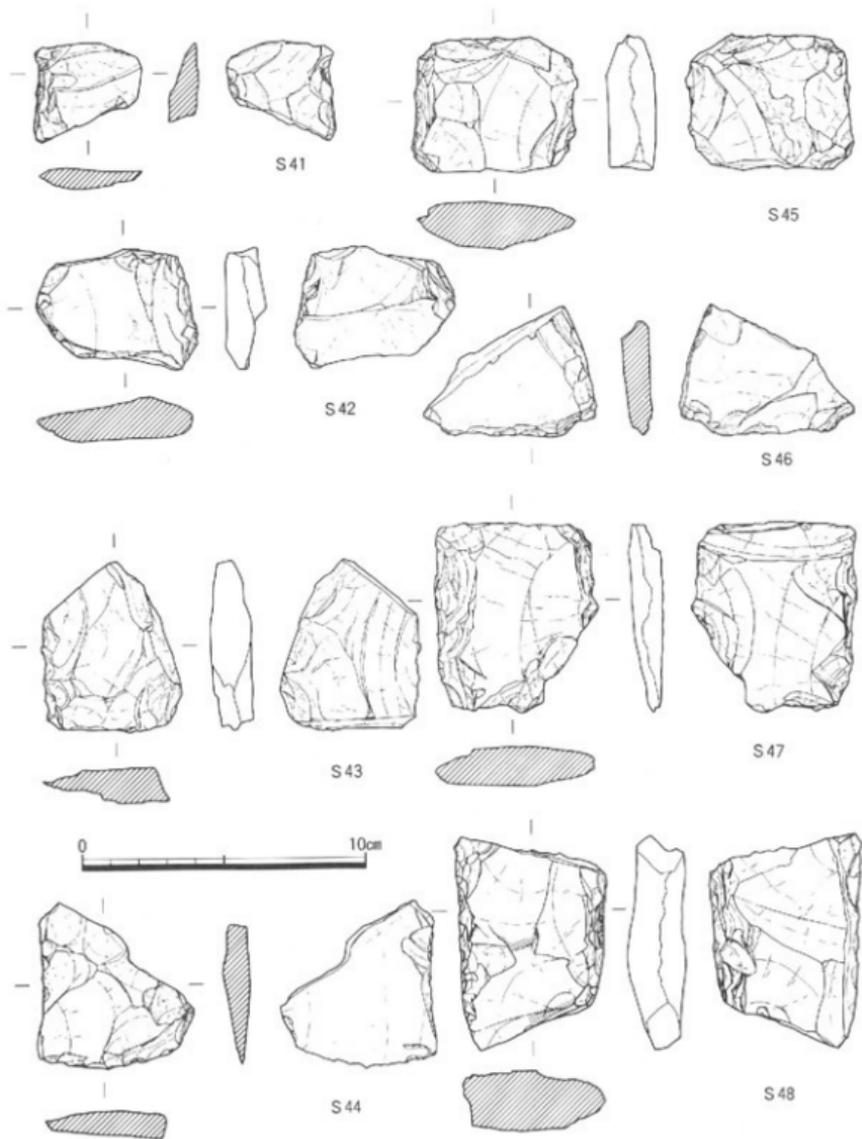
第36图 S R03 5~7层出土物实测图(15)



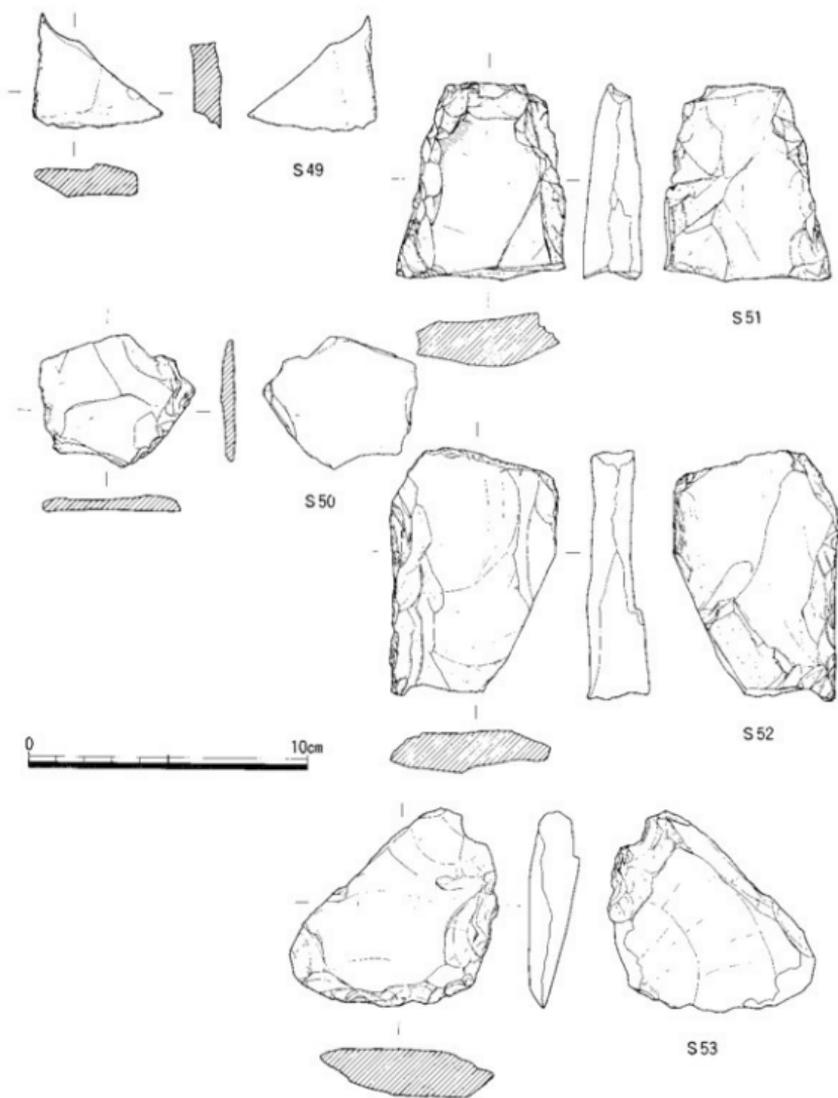
第37图 S R 03 5~7层出土遗物实测图(16)



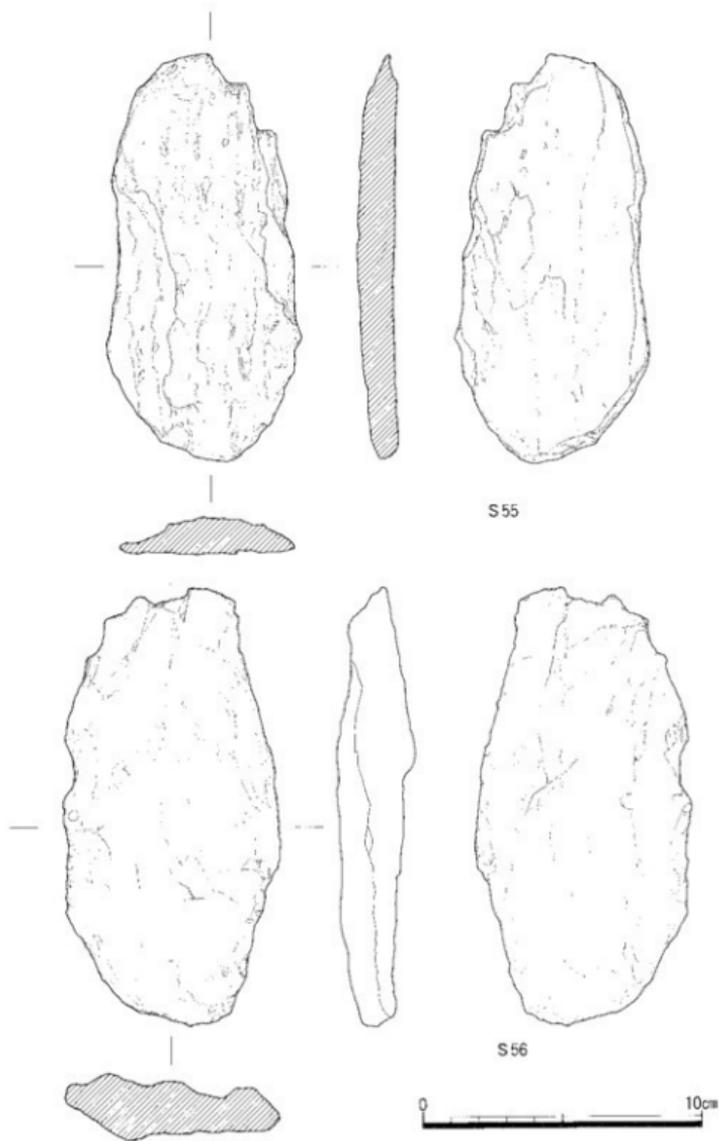
第38圖 S R03 5~7層出土遺物実測図(17)



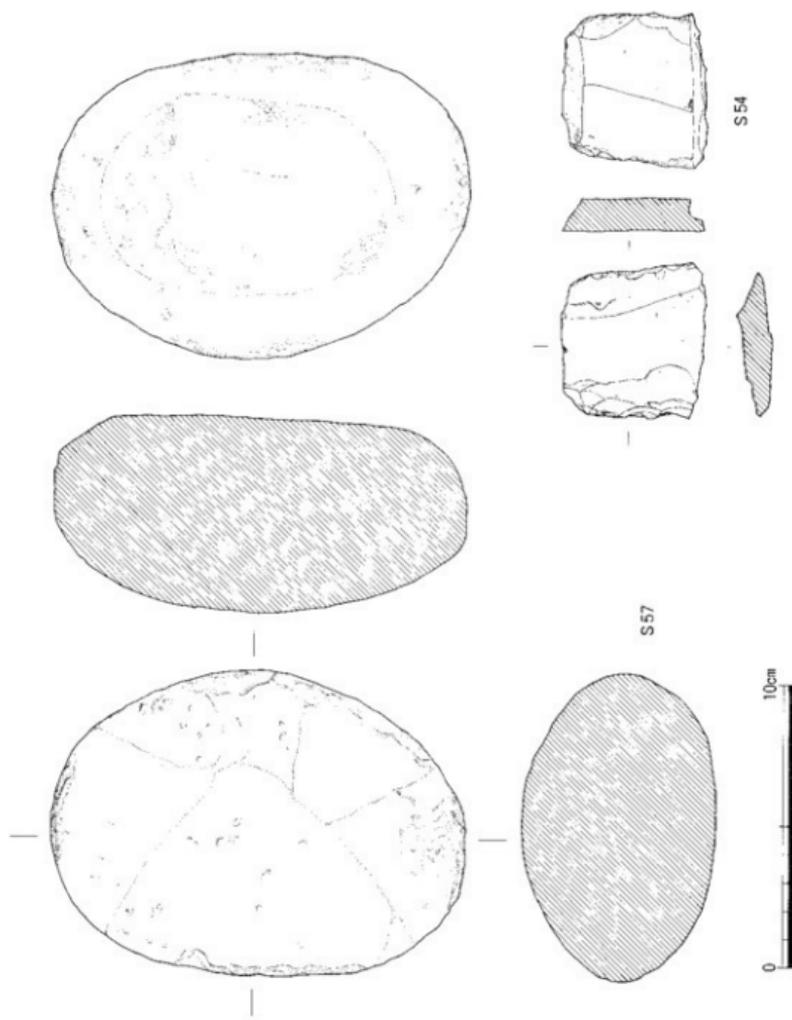
第39图 S R 03 5~7层出土遗物实测图(18)



第40図 S R 03 5～7層出土遺物実測図(19)



第41図 S R03 5～7層出土遺物実測図(20)



第42図 S R03 5~7層出土遺物実測図(21)

部が広く、基部が狭いバチ形を呈するものが多い。調整はいずれのものも粗く、側縁部は敲打による刃潰しが行われている。使用による磨滅は刃部の片面のみにもみられるものと、両面にもみられるものがあり、刃部片面にもみられるものS 13、15、22、32、刃部両面にもみられるものS 14、16、18、20、30、31があり、使用による磨滅は刃部に認められるものが大半であるが、一部片面中央部に磨滅が認められるS 48、51がある。これらの磨滅箇所の違いは使用形態の違いによるものと考えられる。S 57円礫を利用した敲石である。側面には敲打痕が顕著に残り、その他は磨滅により表面は滑らかである。

木製品（第43～45図）

S R 03 5～7層で出土した木製品は未製品でもある程度形に分かるW1を除けば、全て加工用に分割されただけの用材のようなものである。当時の木材の獲得がどのように行われたのは不明であるが、居石遺跡の分割材をみる限り、全長70cm以下、幅10～15cm程度を基本に分割していたようである。いずれの加工材も皮付の状態を確認されていることから、本格的な加工以前の状態であると考えられる。

W1は直柄縦斧の未製品である。頭部および握り部の加工はほぼ完成しており、装着孔を空け、細かな加工をすれば完成品となる。加工痕は全面に残り顕著である。全長54.5cm、頭部長14.0cm、握り部長40.5cm、頭部幅6.0cm、握り部幅5.0cmである。芯持ち材を利用する。（K T A K-263 クヌギ節）

W2は両端切断の皮付き丸木材である。両端部とも切断時および、その後の加工による加工痕が顕著である。全長68.0cm、直径14.5cmである。（K T A K-265 クヌギ節）

W3は両端切断の皮付き半割り材である。両端部とも加工痕は顕著である。全長64.0cm、幅14.0cmである。（K T A K-264 クヌギ節）

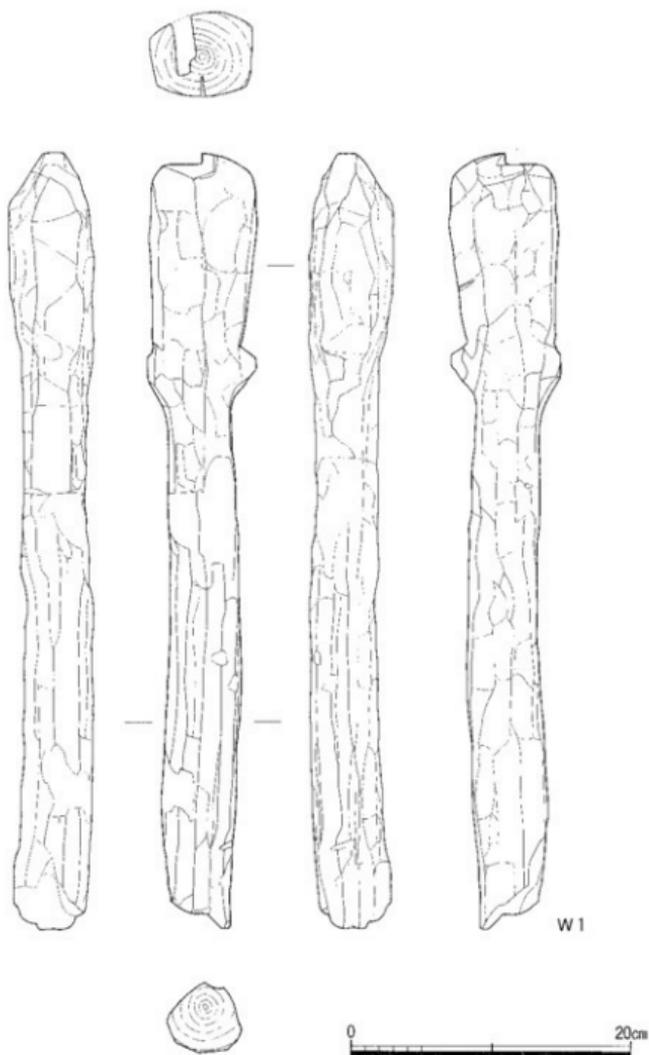
W4はW3同様、両端切断の皮付き半割り材である。両端部とも加工痕が顕著である。全長65.0cm、幅12.5cmである。（K T A K-266 クヌギ節）

W5は両端切断の半割り材である。両端部ともに加工痕は顕著である。他のものに比べ、保存状態が悪い。全長69.0cm、幅12.5cmである。（K T A K-289 クヌギ節）

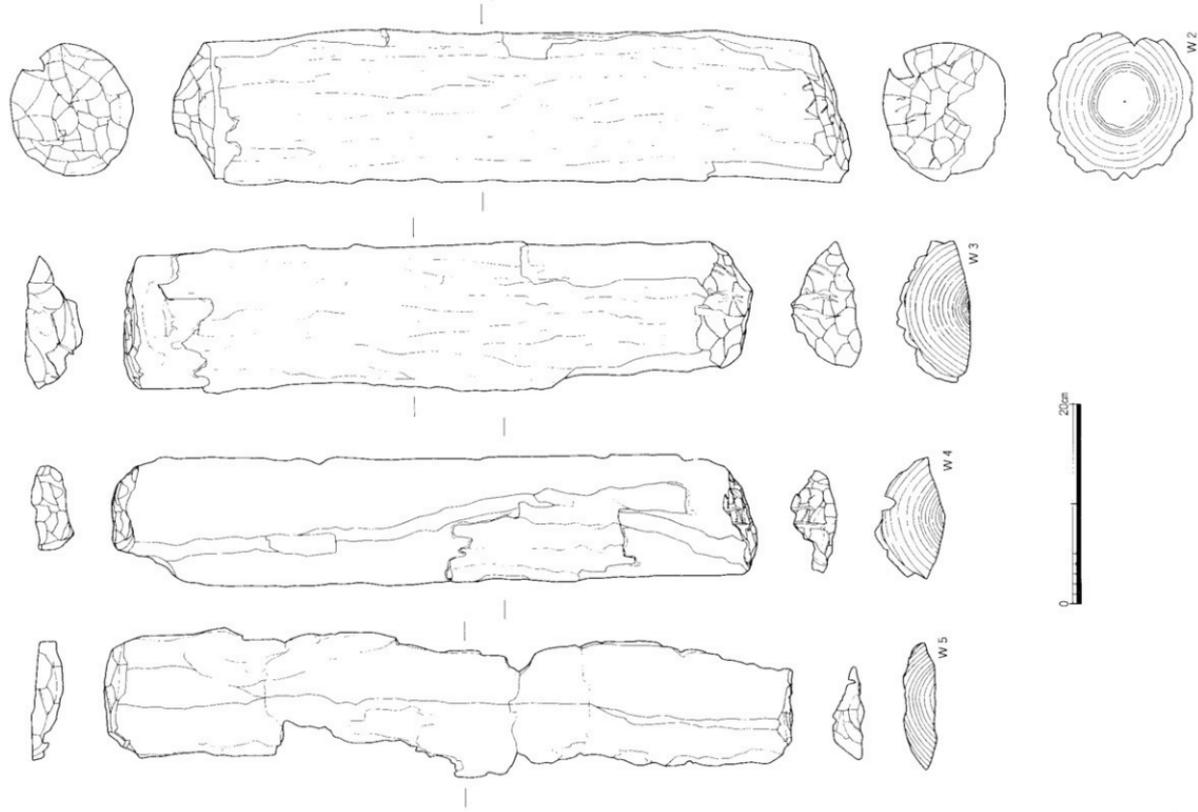
W6は片端切断の半割り材である。片面の加工は顕著であるが、もう片面は欠損して不明である。全長41.5cm以上、幅11.0cmである。

W7はミカン割材である。表面が全面に火を受けている。全長22.0cm、幅11.0cmである。

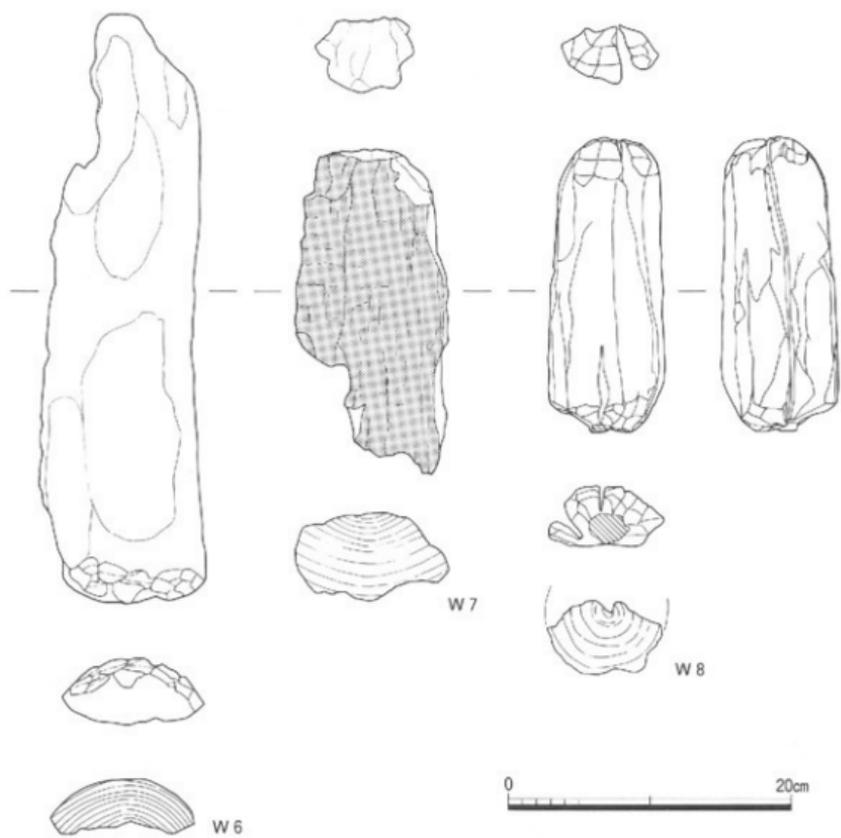
W8は両端切断の半割り材である。両端部とも加工痕は顕著である。全長20.5cm、幅8.0cmを測る。



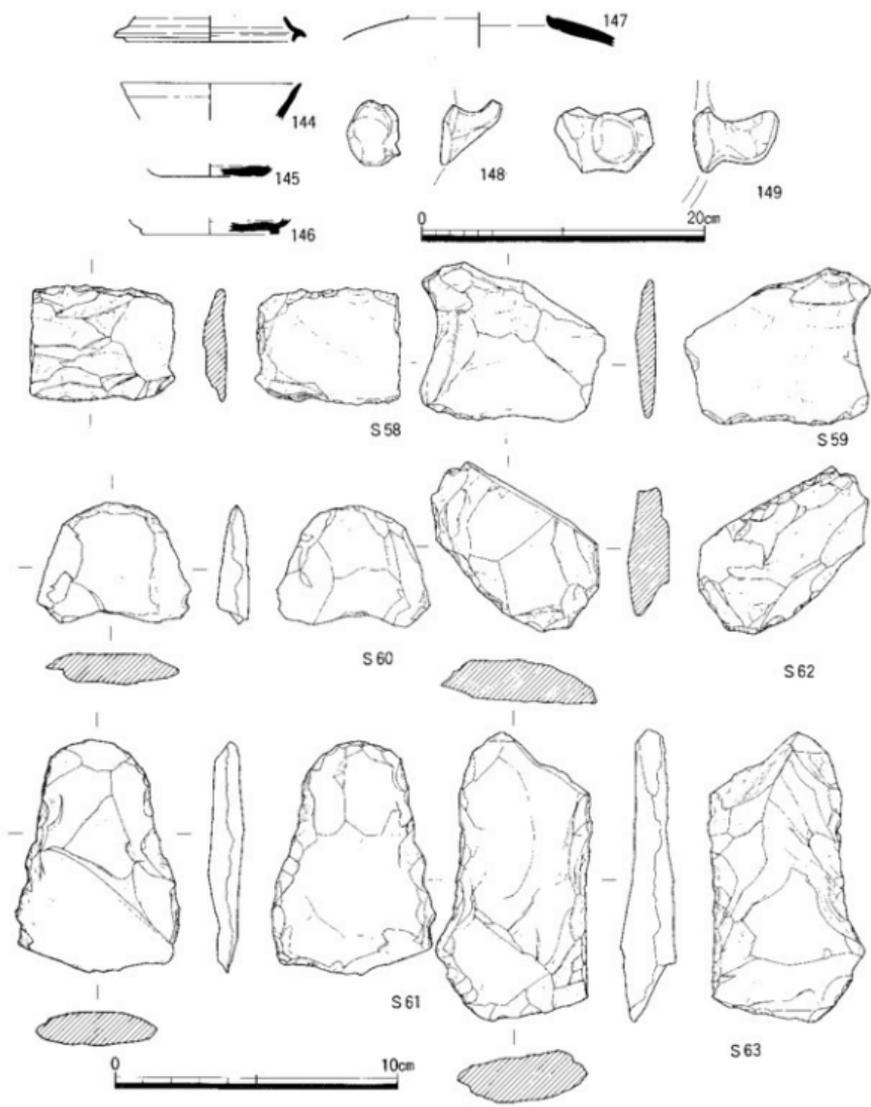
第43图 S R 03 5~7層出土遺物実測図(22)



第44圖 S R 03 5~7 層遺物出土遺物実測図(23)



第45図 S R03 5～7層出土遺物実測図(24)



第46图 S R03 4层出土遗物实测图

4層出土遺物（第46図）

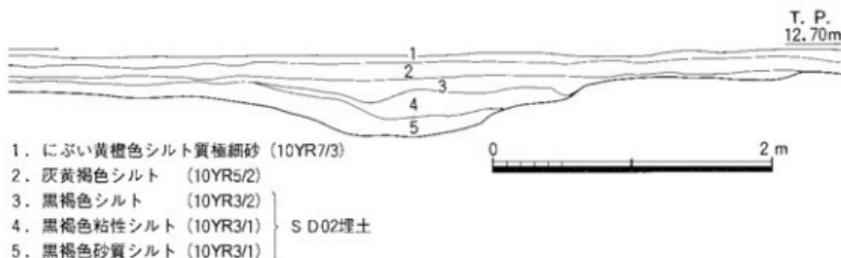
143は須恵器坏蓋である。破片であるが、口径の割に天井部が高くなる器形を呈するものと考えられ、口縁部にはかえりがつく。144は須恵器の坏身である。145は須恵器の坏身の底部であろうか。146は高台をもつ坏身の底部である。高台は断面四角のしっかりした高台がつく。147は壺の体部である。148、149は土師器の甕の把手である。S 58、59はスクレイパーである。S 58上縁部に敲打による背潰しを行う。S 59は下縁部のみの調整である。S 60～63は打裂石斧である。石斧の形状は基部が狭く刃部が広い形態をする。いずれのものも基部もしくは刃部を欠損しており、断面形状は両面とも平坦面をもつ。

第4節 弥生時代後期の遺構と遺物

1 S D 02 (第47, 48図)

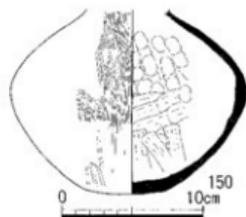
1区第1微高地上で確認した溝である。S D 02はS R 01から1区北側で分流し西にのび、現有道路が存在しているため未調査部分はあるが、西隣の蛙股遺跡4区S D 01につながると考えられる。溝の規模は、幅2.70m、深さ0.40mを測り、土層は3層に分層できる。1層 黒褐色シルト(10YR3/2)、2層 黒褐色粘性シルト(10YR3/1)、3層 黒褐色砂質シルト(10YR3/1)である。

出土遺物は壺体部片が1点出土しており、蛙股遺跡4区S D 01と同一遺構である可能性が、極めて高いことより、弥生時代後期末の時期が考えられる。



第47図 S D 02土層図

150は弥生土器長頸壺である。頸部以上を欠損するが、頸部径から長頸になるものと考えられる。底部は丸底に近く、体部は張るが丸みを帯びる。調整は体部外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリを施す。



第48図 S D 02出土遺物実測図

2 S D 33

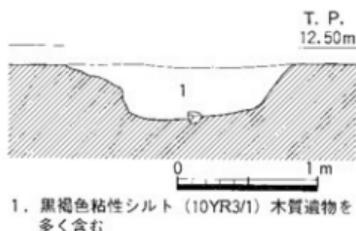
S R 02の西岸において確認した溝である。S R 02から分流し、北東方向にのび、調査区外ににげる。溝の規模は、幅3.00m、深さ0.30mの規模をもつ。出土遺物はないがS R 02の機能した時期等を考えれば、弥生時代後期頃の時期が考えられる。

3 SD 34 (第19図)

SR 02の西岸, SD 33の東側において確認した溝である。SD 33同様, SR 02から分流し, 北東方向へのび調査区外ににげる。土層埋土は4層に分層でき, 1層 灰黄褐色砂質シルト(10 YR 4/2), 2層 黒褐色砂まじりシルト(10 YR 3/2), 3層 灰黄褐色細砂(10 YR 5/2), 4層 黒褐色粘性シルト(7.5 YR 2/2)である。溝の規模は, 幅2.00m, 深さ0.24mを測る。出土遺物はないが, SD 33同様, この時期のものと考えられる。

4 SD 35 (第19図)

3区SR 02の西岸において確認した溝である。SR 02 I期と同様な埋土をもつことより同様な時期が考えられる。溝の上部層が薄く広く堆積するため溝の規模は幅7.00mと広くなっているが, 実質の幅は2.70m, 深さ0.80mを測る。遺物は出土していない。



第49図 SD 40土層図

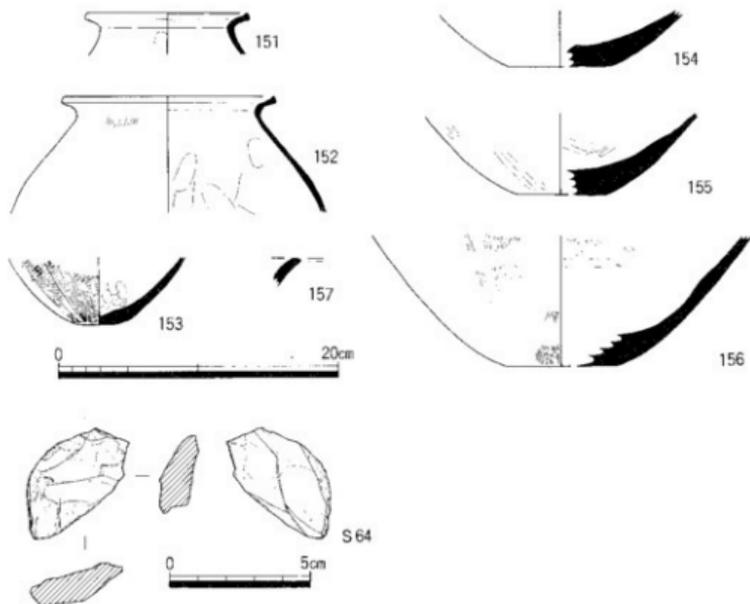
5 SD 40 (第49, 50図)

4区において確認した溝である。SR 03が機能を失い埋没した後に, 構築される溝であり, 北西方向にのびる。後述するSD 41, 42も同様な方向に流路をもち, 幅, 深さ等の規模も同様であることから同様の用途が考えられる。土層埋土は, 黒褐色粘性シルト(10 YR 3/1)の単一層である。溝の規模は, 幅1.65m, 深さ0.40mを測る。出土

遺物は溝の埋土中から弥生時代後期末頃の土器が出土したことから, はば, この時期に埋没したものと考えられる。

出土遺物

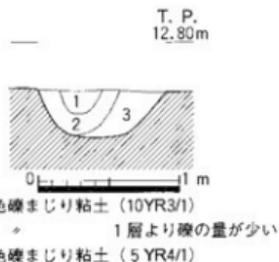
151, 152は甕である。なで肩の体部をもち頸部の屈曲はゆるい。体部は大きく張るようである。口縁部は若干肥厚させ上方につまみ上げる。152には体部外面ハケ, 体部内面にナデ調整が認められる。153~156は甕の底部である。いずれも丸底に近い底部をもつ。調整は153が外面タタキ後ハケ, 内面ナデ, 154は調整不明。155は内外面ヘラミガキ, 156は外面ヘラミガキ, 内面ナデを施す。157は高坏の坏部である。口縁端部は平坦に仕上げられている。S 64は打製石斧片である。基部の一部が残存するのみである。SD 40の深度が深いため, 下部のSR 03の遺物が混在したのと考えられる。



第50図 SD40出土遺物実測図

6 SD41 (第51図)

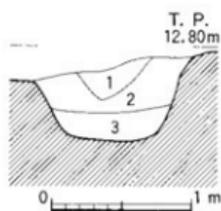
SD40同様、4区において確認した溝で、微高地の緩斜面部分を通り、SD40同様北西方向にのび、調査区外ににげる。土層埋土は3層に分層され、1層 黒褐色礫まじり粘土(10YR3/1)、2層 1層と同様で1層に比べクサリ礫の量が多い。3層 褐灰色礫まじり粘土(5YR4/1)である。溝の規模は、幅1.00m、深さ0.40mを測る。出土遺物はないが、SD40同様の方向にのびることから、SD40と同様の時期が考えられる。



第51図 SD41土層図

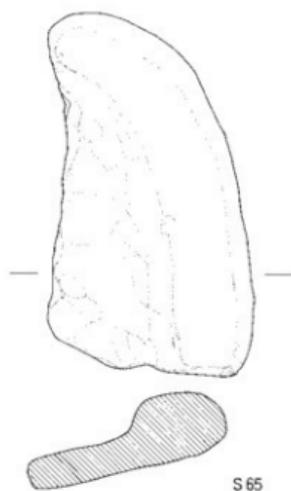
7 SD42 (第52, 53図)

SD40, 41同様、4区において確認した溝で、溝の方向もほぼ同様であるが、北端で東側にそれる。土層埋土は3層に分層され、1層 黒褐色礫まじり粘土(10YR3/1)、2層 黒褐色

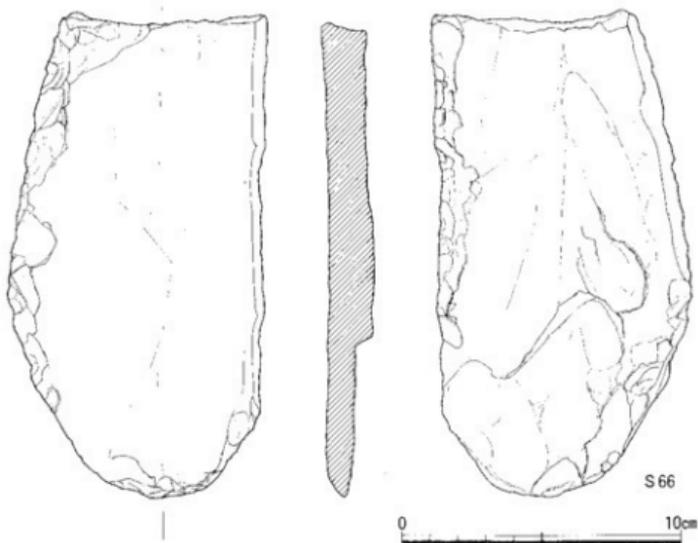


1. 黒褐色礫まじり粘土 (10YR3/1)
2. 1層より礫の量が少ない(10YR3/1)
3. 褐灰色礫まじり粘土 (5 YR4/1)

第52図 S D 42土層図



S65



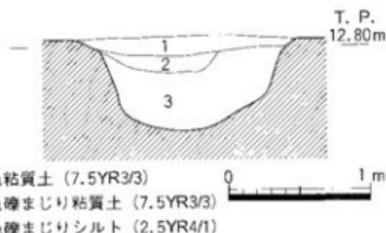
S66

第53図 S D 42 出土遺物実測図

礫まじり粘土(10YR3/1), 1, 2層の違いは, SD41同様礫の量の違いによる。3層 褐灰色礫まじり粘土(5YR4/1)である。溝の規模は, 幅1.20m, 深さ0.60mを測る。出土遺物はないが, SD41と同様の土層埋土をもち, 同様の方向をもつことから同様の時期が考えられる。

8 SD43 (第54図)

4区で確認した溝である。溝の方位は北北東を向く。溝の切り合い状況はSD44, SD45に切られる。溝の埋土は単一層であり, 黄灰色礫混じりシルト(2.5Y4/1)クサリ礫を含むである。溝の規模は幅1.75m, 深さ0.75mを測る。出土遺物はないが, 切り合い状況, 周辺状況からして弥生時代後期の遺構と考えられる。

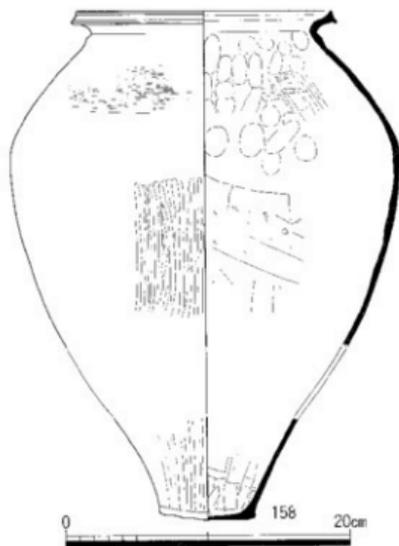


1. 黒褐色粘質土 (7.5YR3/3)
2. 黒褐色礫まじり粘質土 (7.5YR3/3)
3. 黄灰色礫まじりシルト (2.5YR4/1)

第54図 SD43土層図

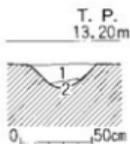
9 SD44

4区東端で確認した溝である。南端はSD45に切られて不明であり, 北端はSD43付近でプランが確認できていないが, SD43の北側の土層断面にSD43の土層とは異なる土層埋土が確認されていることより, 断面で確認する範囲では, SD43を切っていた可能性が考えられる。出土遺物が出土していないことより時期比定はできない。



第56図 SD45出土遺物実測図

10 SD51 (第55, 56図)



1. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
2. 褐灰色細砂 (10YR6/1)

第55図 SD51土層図

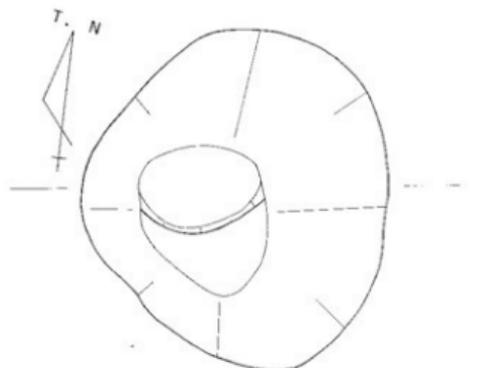
5区で確認した溝である。溝の方位は北東方向を向き、調査区外ににげる。溝の埋土は2層に分層でき、1層 灰黄褐色シルト(10 Y R 4 / 2)、2層 褐灰色細砂(10 Y R 6 / 1)である。溝の規模は、幅0.45 m、深さ0.20 mを測る。出土遺物は、弥生時代後期中頃の甕が1点出土していることから、遺構の時期についてもこの頃のものと考えられる。

158は弥生土器の甕である。安定の悪い平底をもち、体部は大きく張る。頸部は「く」の字状に鋭く屈曲し、口縁部は上下に拡張する。調整は体部外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリを施す。

第5節 古墳時代前期の遺構と遺物

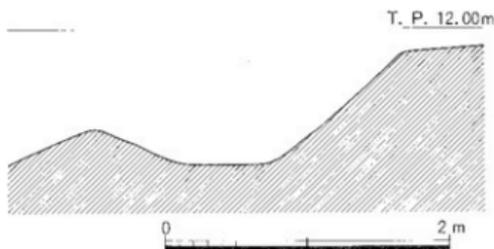
1 SK01 (第57図)

1区SR01東岸、傾斜部において確認した土坑である。平面形状は不整形を呈する。土坑の規模は長軸2.40m、短軸2.20m、深さ0.80mを測る。土坑底面からは、直径10cm大の自然木が出土したが腐朽が著しく取り上げることができなかった。出土遺物はないが、この頃の時期が考えられる。土坑の検出位置からすればSR01との関係が深いと考えられ、木材の貯蔵用土坑の用途が考えられる。



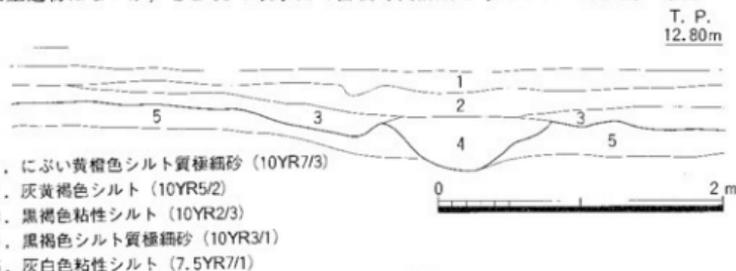
2 SD01 (第58図)

1区SR01西岸肩口付近で、SR01に平行して確認した溝である。北端は北西方向にそって調査区外へにげる。溝の規模は、幅1.20m、深さ0.35mを測る。土層埋土は黒褐色シルト(10YR3/2)の単層である。



第57図 SK01実測図

出土遺物はないが、SD01の取水口で古墳時代前期と考えられる仿製鏡が確認されている。



1. にぶい黄褐色シルト質極細砂 (10YR7/3)
2. 灰黄褐色シルト (10YR5/2)
3. 黒褐色粘性シルト (10YR2/3)
4. 黒褐色シルト質極細砂 (10YR3/1)
5. 灰白色粘性シルト (7.5YR7/1)

第58図 SD01土層図

ることから、この時期には機能していたものと考えられる。

T. P. 12.80m 3 SD 03 (第59図)

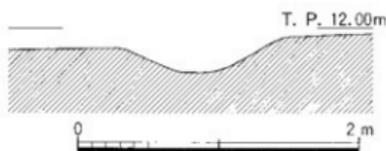


1. にぶい黄橙色シルト質極細砂 (10YR7/3)
2. 灰黄褐色シルト (10YR5/2)
3. 黒褐色粘性シルト (10YR2/3)
4. 黒褐色シルト質極細砂 (10YR3/1)
5. 灰白色粘性シルト (7.5Y7/1)

第59図 SD 03土層図

1区SR01西岸北端において確認した溝である。南端は残存状況が悪く、SD 01との切り合い関係は不明である。溝の規模は、幅0.50m、深さ0.15mを測る。土層埋土は黒褐色シルト(10YR3/2)の単一層である。出土遺物はないが、SD 01と同一層であることより同じ時期が考えられる。

4 SD 04 (第60図)



第60図 SD 04断面図

1区SR01東岸において確認した溝である。南北とも途中で消滅する為、他の遺構とのつながりは不明である。溝の規模は、幅1.20m、深さ0.25mを測る。出土遺物はないが、SD 01と対岸を挟んで同じような位置関係にあることから、同じ時期が考えられる。

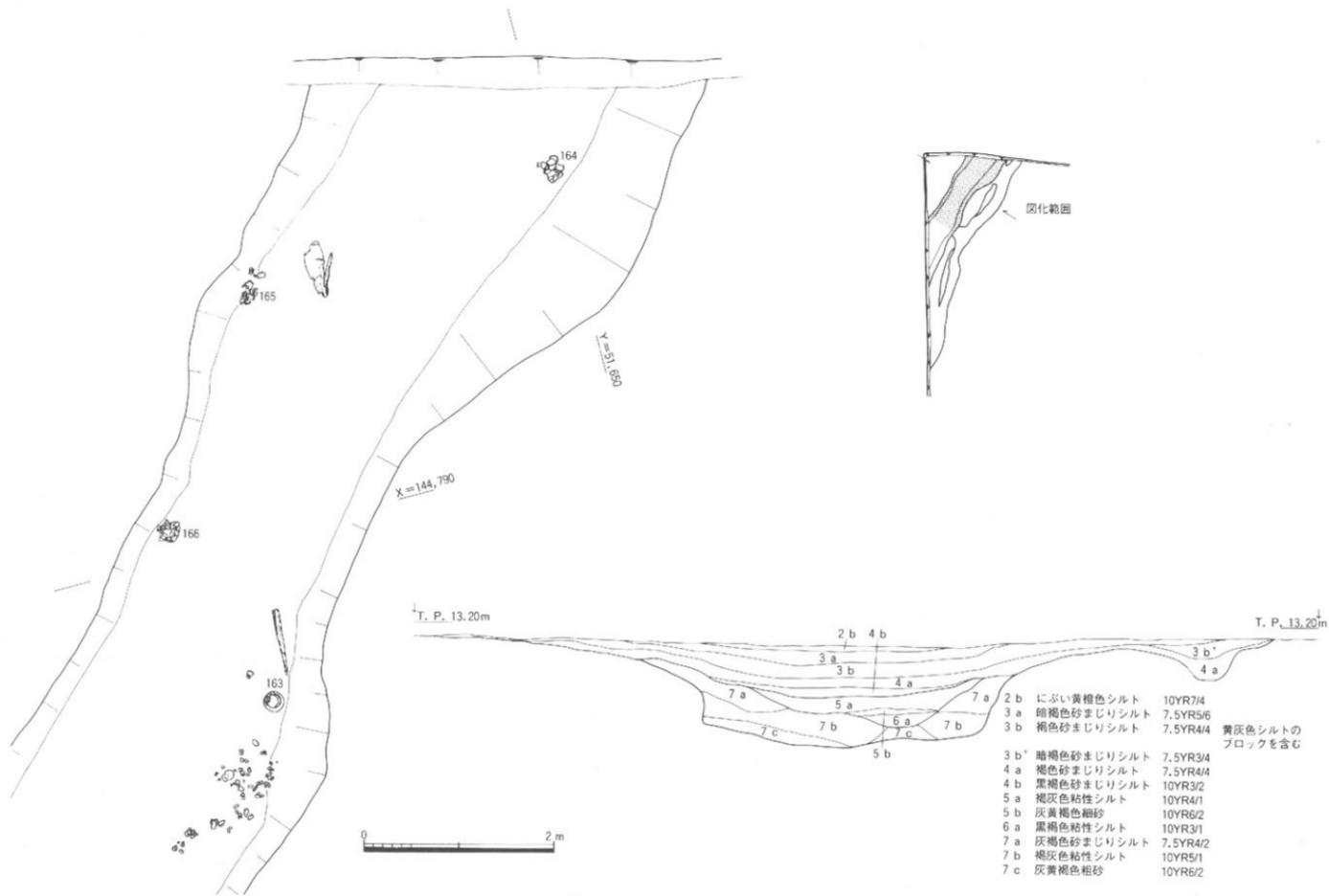
5 SD 45 (第61～64図)

4区南東隅から5区北西隅において確認した溝であり、肩口に小規模な溝を付随する。溝の方位は南西から北東を向き、SD 41～44を切る。溝の規模は上面で幅7.00mであるが、実際は幅4.00m程度の部分から急に深くなる。深さは1.00mを測る。また、東側肩口の溝の規模は、幅0.70m、深さ0.30mの規模を測る。土層埋土は大きく5層にわかれ、3層以下がSD 45の埋土である。

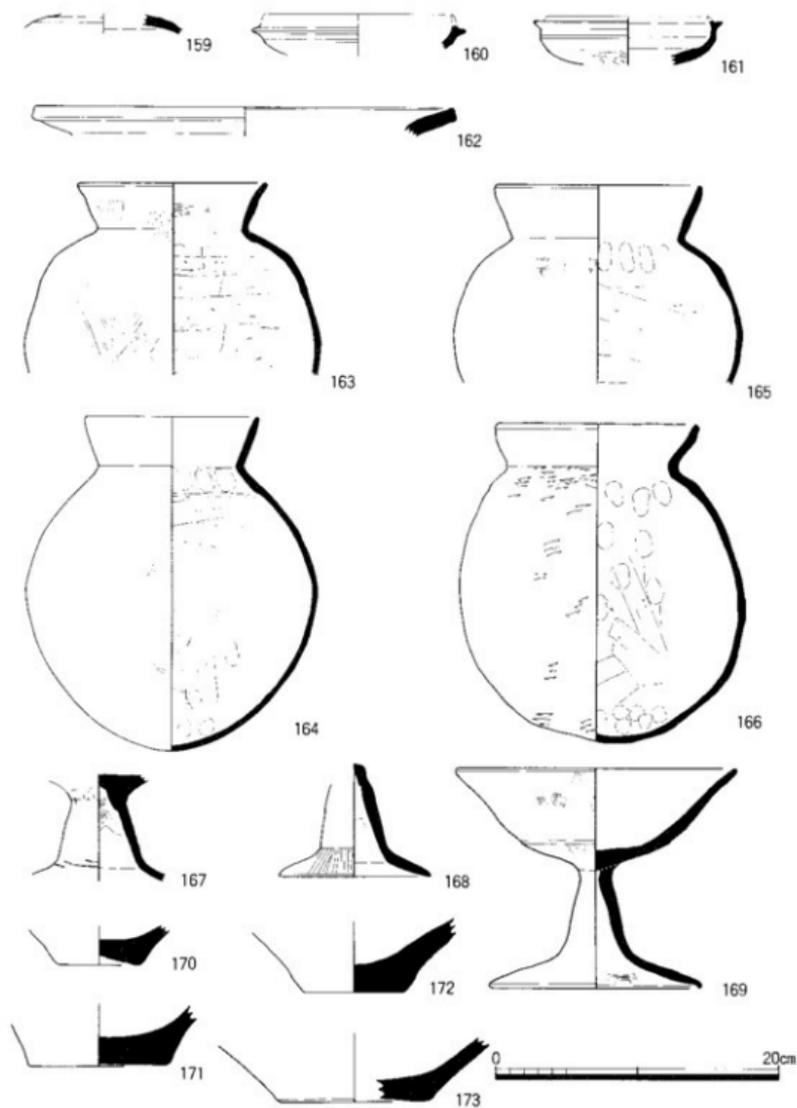
3層 a b層存在する。a b層で25cmの厚さをもつ。a層 明褐色砂まじりシルト(7.5YR5/6)、b層 褐色砂まじりシルト(7.5YR4/4) 黄灰色シルトのブロックを含む。東側肩口の溝の上層ではb層に酷似する暗褐色砂まじりシルト(7.5YR3/4)が堆積する。

4層 a b層存在する。a b層で20cmの厚さをもつ。a層褐色砂まじりシルト(7.5YR4/4)、b層黒褐色砂まじりシルト(10YR3/2)であり、a層は東側肩口の溝にも堆積する。

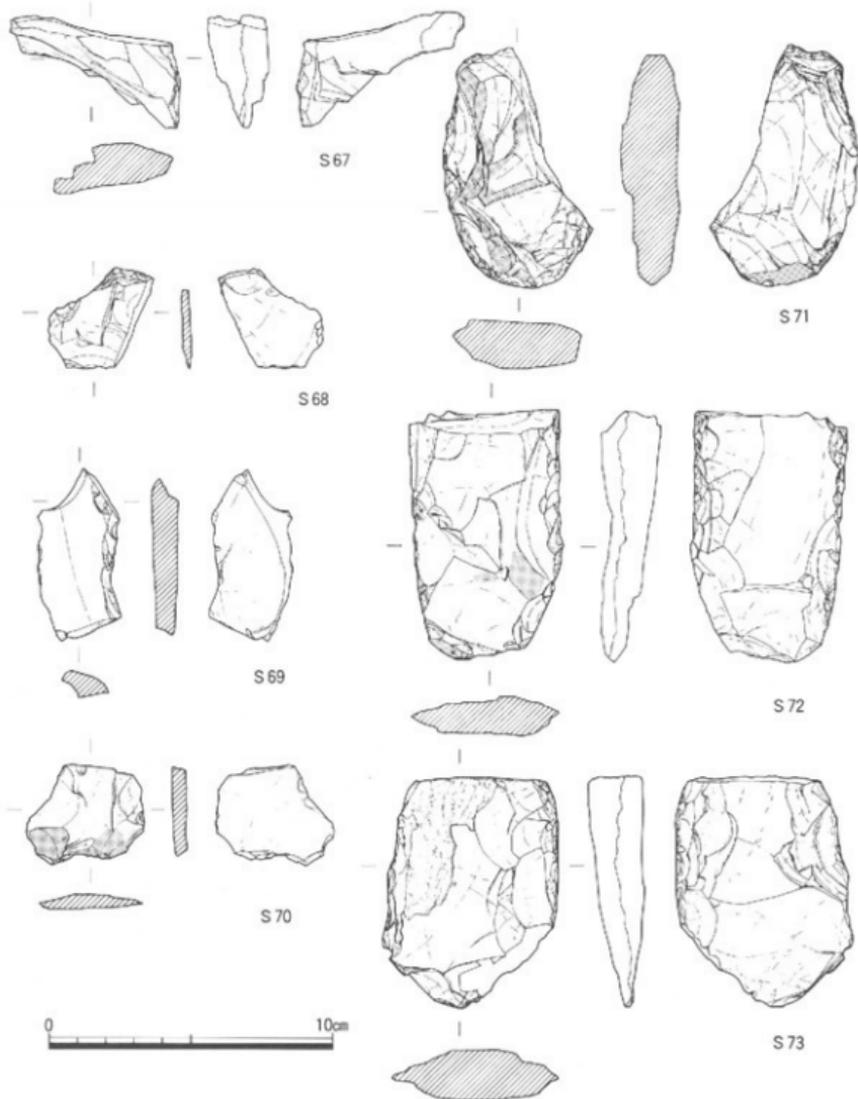
5層 a b層存在する。a b層で20cmの厚さをもち、溝中央部の低地に堆積する。a層



第61図 S D 45 3 層遺物出土状況図



第62図 S D45出土遺物実測図(1)



第63图 S D45出土遗物实测图(2)

褐灰色粘性シルト（10 YR 4 / 1），b層 灰黄褐色細砂（10 YR 6 / 2）である。

6層 a層のみ存在する。溝の中央部低地の一部に堆積する。a層 黒褐色粘性シルト（10 YR 3 / 1）である。

7層 a b c層存在する。溝の最下層に堆積する。中央部は上層の影響を受けて薄く堆積しているが、両岸では厚く堆積し30～50cmの堆積がある。a層 灰褐色砂まじりシルト（7.5 YR 4 / 2），b層 褐灰色粘性シルト（10 YR 5 / 1），c層 灰黄褐色粗砂（10 YR 6 / 2）である。調査の段階では、3層を1層とし、4層を2層、5～6層を3層、7層を4層の4分層して、遺物の取り上げを行った。古墳時代前期の遺物を多く検出した3層では遺物出土状況図も作成した。

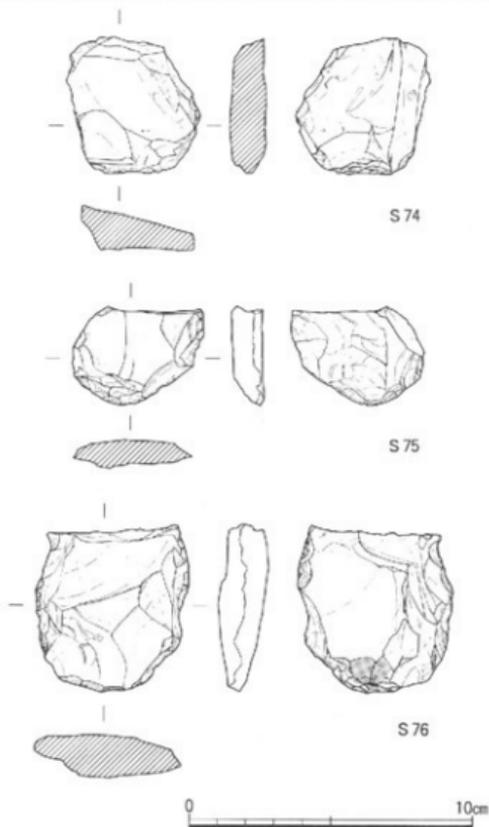
出土遺物

第2層出土遺物

159は須恵器坏蓋の天井部である。160、161は須恵器坏身である。161はやや角張った器形を呈し、底部は平坦に近い。底部外面には手持ちヘラケズリが認められる。162は甕の口縁部である。口縁端部は上方に若干つまみ上げる。

第3層出土遺物

163～166は土師器の甕である。丸い底部から球形に近い体部をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。調整は163～165は外面ハケ、166はタタキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ、底部ナデを施すが、166のようにヘラケズリが上部まであがらないものもみられる。いずれも作りは粗い。167～169は高坏である。坏部から口縁部への屈曲はゆるく、端部に向かって外反する。脚部は柱状部はあまり開かず、屈曲して脚端部へ大き



第64図 S D 45出土遺物実測図(3)

く開く。端部はそのまま終わるものと、屈曲するものがみられる。調整は外面ハケ、内面ナデを基本とするが、167のように脚部内面にヘラケズリ、外面にタタキを施すものもみられる。前述の壺に比べ、つくりは丁寧である。胎土、色調の違いから168、169は搬入品である可能性が考えられる。

第4層出土遺物

170～173は弥生土器の壺の底部である。調整は磨滅のため不明である。

6 SR01 (第65～80図)

SR01の基本層序は1区の基本層序の3層～13層があたる。

3層 a b層存在する上にa層に類似するa'層が存在する。a層は黒褐色粘性シルト(2.5Y3/1)で調査区中央部の低地部に存在し、最も厚いところで層厚40cmの厚さをもつ。a層は黒褐色シルト質粘土(10YR2/3)でSR01全域で認められ、中央部では40～50cmの厚さをもつ。a'層は黒褐色シルト質粘土(10YR2/3)でSR01全域で認められ、中央部では40～50cmの厚さをもつ。b層は黒褐色まじり粘土(10YR1.7/1)でSR01東岸近くの低地部に認められ30cmの厚さをもつ。c層は灰黄色粗砂(2.5Y7/2)でSR01中央部で認められ、10～20cmの厚さをもつ。

4層 a層のみ存在する。a層は黒色草本質泥炭(10YR1.7/1)で、SR01全域に広がり、3～4層で15～20cmの厚さをもつ。

5層 a層のみ存在する。a層は黒褐色泥炭(7.5YR3/1)で、SR01中央部低地に一部堆積する。層厚は20cm程度である。

6層 a b層存在する。a層は黒褐色草本質泥炭(10YR2/2)で、SR01のはほぼ全域に堆積する。最も厚い部分で60cm堆積する。b層は灰褐色泥炭(7.5YR4/2)で東岸の一部に20cm程度堆積する。

7層 b層のみ存在する。b層は黒褐色泥炭(7.5YR3/2)でSR01東岸の一部に、50～70cm程度堆積する。

8層以下は南壁では確認できず、調査区中央部より北側東寄りでのみ確認されている。

8層 a b層とも存在する。a層は黒褐色シルト(7.5YR3/1)でSR01東側付近に層厚10cm程度堆積している。b層は黒褐色粘性シルト(10YR2/3)でa層同様SR01東側付近に層厚10cm程度堆積している。

9層 b層のみ存在する。b層は黒褐色泥炭(10YR3/2)でSR01中央部付近に30cm程度堆積する。

10層 b層のみ存在する。b層は褐色粗砂(10YR4/1)でSR01中央部付近に30～40

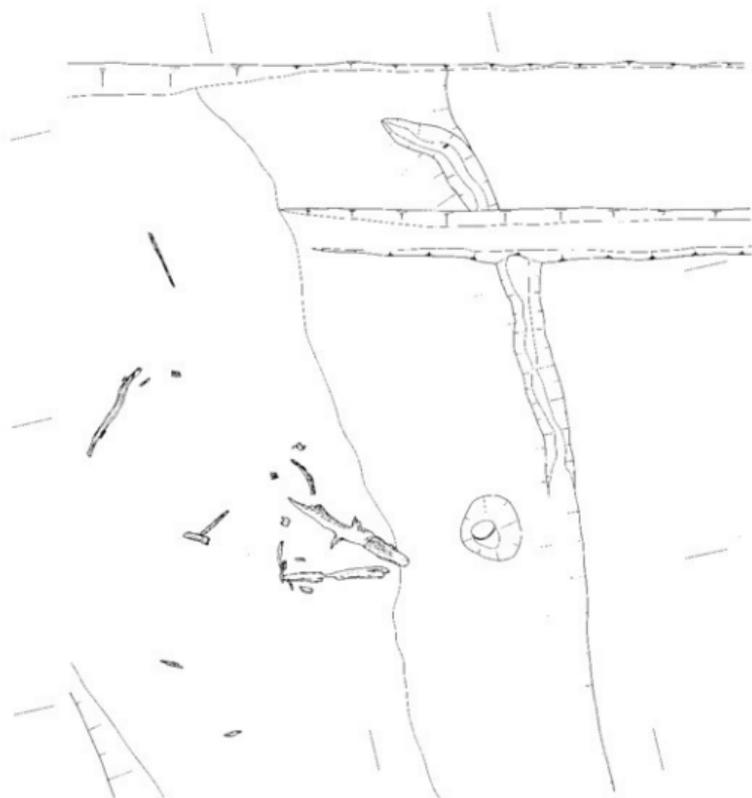
cm程度堆積する。

11層 b層のみ存在する。b層は黒褐色泥炭（10 Y R 3 / 1）砂質でSR01東岸寄りで10～20cm程度堆積する。

12層 a層のみ存在する。a層は黒褐色泥炭（10 Y R 3 / 1）粘質でSR01東岸寄りの一部に20cm程度堆積する。

13層 c層のみ存在する。c層は褐灰色粗砂（10 Y R 6 / 1）でSR01東岸寄りに30～50cm程度堆積する。層中からは加工木を含む木材，植物遺体を多量に含む。

これらの層の所属時期は出土遺物から3～4層が古代～中世，5～7層古墳時代前期，13

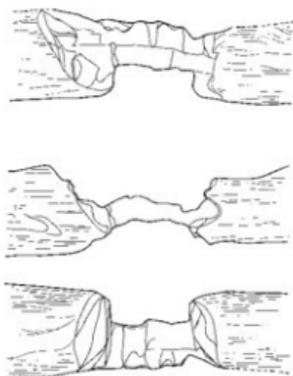


第65図 SR01最下層加工木材出土状況

層は縄文時代晩期頃の時期が与えられる。

S R 01 13層（最下層）出土加工木

1区 中央部において検出した、南東から北西に流路もつ自然河川である。規模は、幅23m前後、最も深いところで深さ1.5mを測る。1区中央部分が最も深く、最深部では東岸寄りで、自然木を数本確認した（第65図）。その内の1本には、中央部に切断しようとした加工痕が残存していた。切断は最後まで終わっていないが、かろうじてつながった状態で確認した。周辺からは、植物遺体、木質遺体が多量に確認され、褐色灰色粗砂（10 Y R 6 / 1）により充填されていた。堆積状況がS R 02の最深部と同様であることより、縄文時代晩期の時期が考えられる。



第66図 S R 01 最下層加工材加工部詳細図

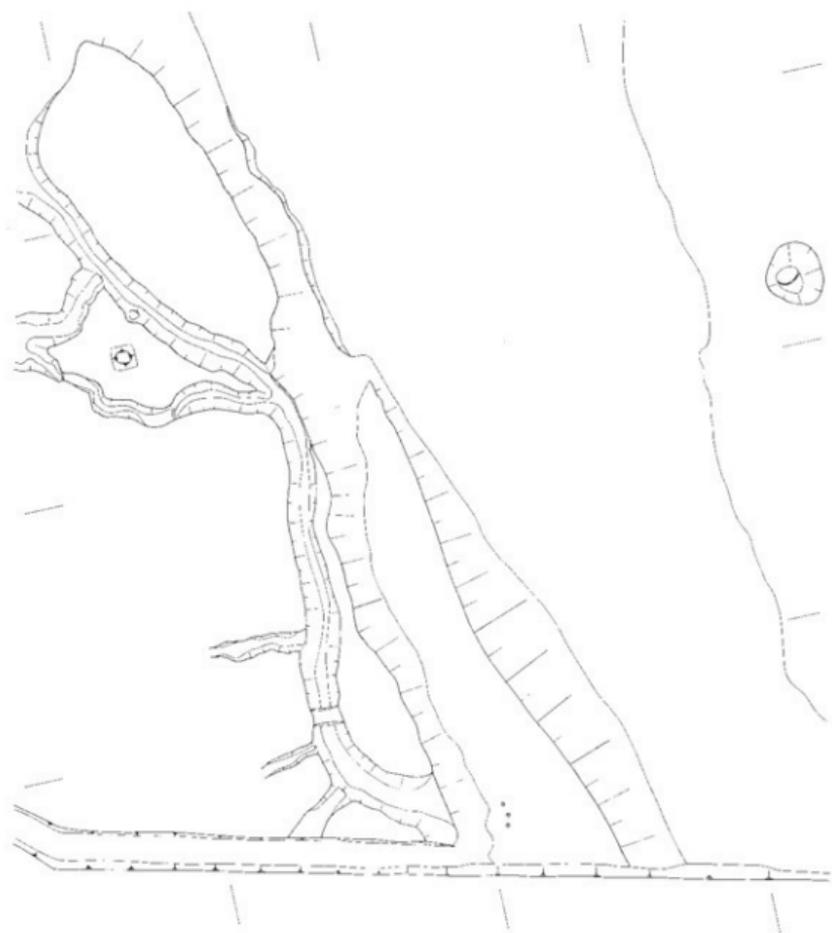
S R 01内S X 01（第67、68図）

S R 01の東岸、最深部からややあがった平坦部のS R 01の取水口近くの川底から仿製鏡3面を確認した。鏡は当初、最終遺構面と考えられていた灰色砂礫層中から出土したものである。仿製鏡3面は北から大、中、小と40cmの間隔に鏡面を裏にした状態で出土したが、レベルは一定しておらず、北寄りの最も大きな鏡が最も高く、南側の最も小さな鏡が最も低い位置から出土し、その差は13cmである。鏡の出土状況からすれば箱状のものに埋納されていた状況ではなく、そのままの状態で置かれたものか、埋納されたものと考えられる。出土位置がS R 01の取水口であることから、水の安定供給を願った祭祀跡とも考えられる。これらの鏡との供伴遺物はないが、この鏡より上層で出土した土器より古墳時代前期（布留の古段階併行）の時期が考えられる。

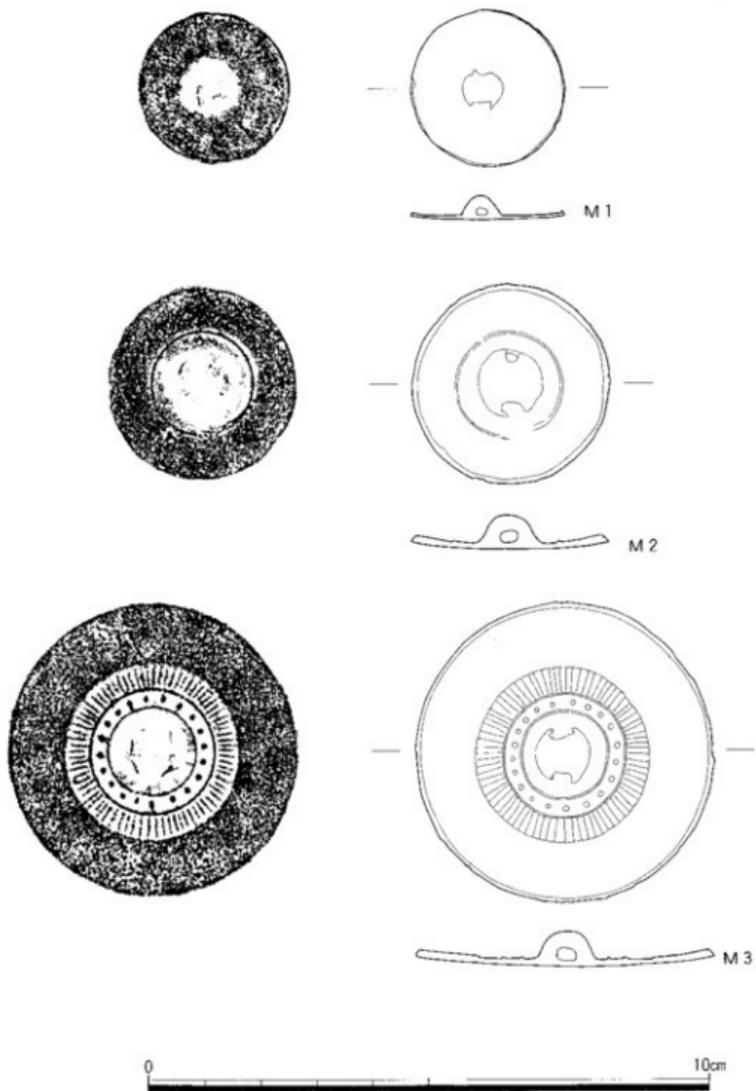
小型仿製鏡（第68図）

S R 01西岸の最下層において検出した鏡である。3面出土しており、法量に違いが存在する。法量の大きなものからM1（珠文鏡）、M2（重圈文鏡）、M3（素文鏡）とした。鏡の詳細な観察については付章第1節で述べられているためここではふれない。ここでは法量のみを記す。なお、鏡の呼称については西南学院大学教授高倉洋彰先生のご教示を得た。

M1（珠文鏡）鏡の直径は5.35cm、鈕の高さ0.6cm、重量23.0gである。



第67圖 S R01仿製錢出土位置圖



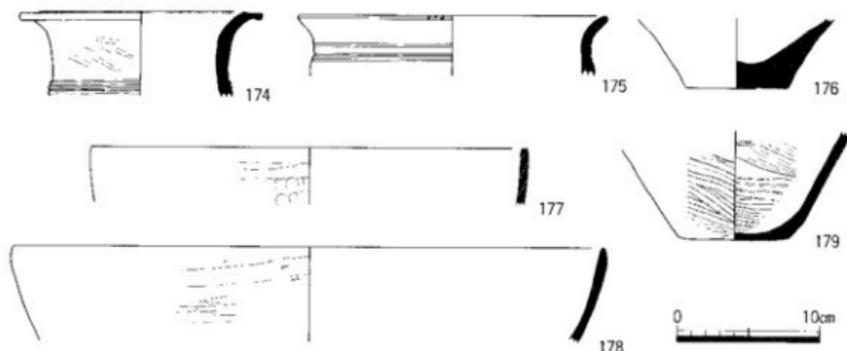
第68図 S R01出土仿製鏡実測図

M2 (垂文文鏡) 鏡の直径は3.55cm, 鈕の高さ0.6cm, 重量11.2gである。

M3 (葉文鏡) 鏡の直径は2.75cm, 鈕の高さ0.45cm, 重量3.9gである。

6～7層出土遺物

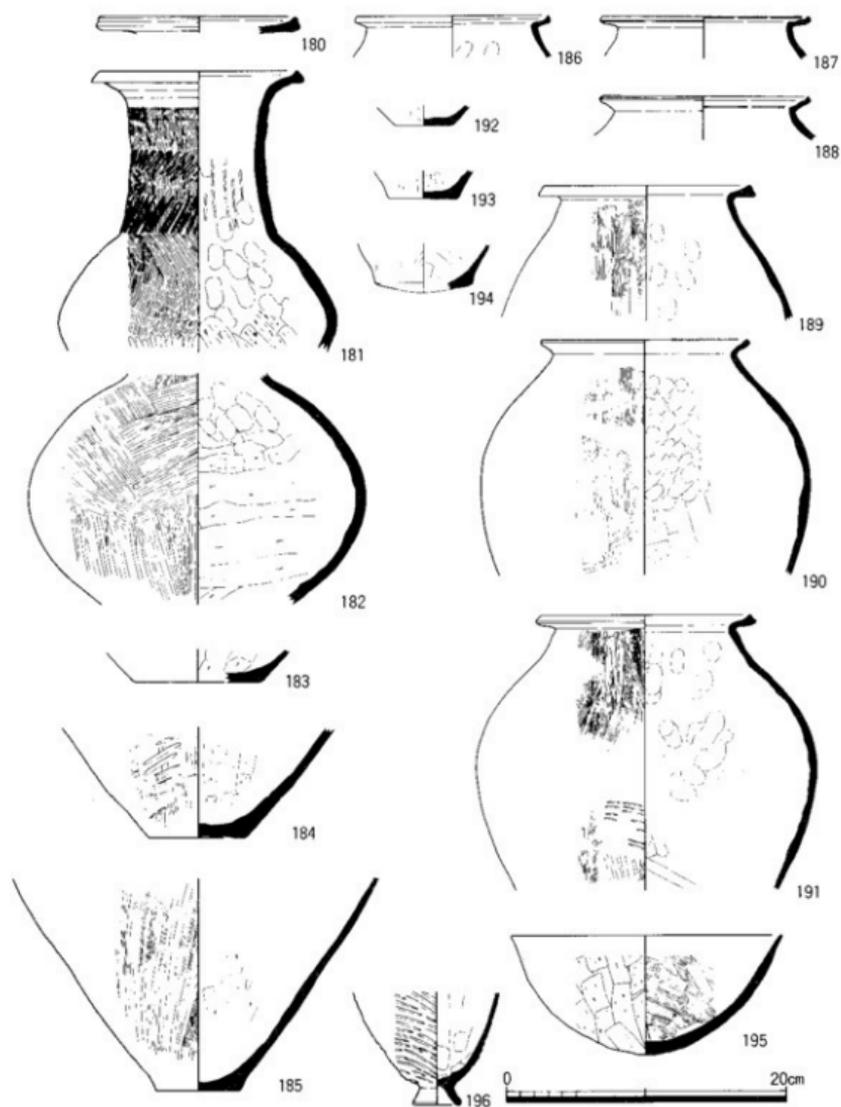
6～7層では縄文時代晩期から古墳時代前期の遺物が出土しているが、古墳時代前期の土器を除けばいずれも破片である。174～179は縄文時代晩期から弥生時代前期の土器である。174は長い頸部をもつ広口壺である。直立気味に立ち上がる頸部から屈曲して外側に広がる。口縁端部は上下に拡張する。頸部と体部の屈曲付近に削出突帯を作り、その上に沈線を3条巡らす。175は甕である。やや膨らんだ体部から外反する如意状口縁をもつ。口縁部から体部の屈曲付近にヘラ溝沈線文を3条巡らせる。176は甕の底部である。177, 178は縄文土器の深



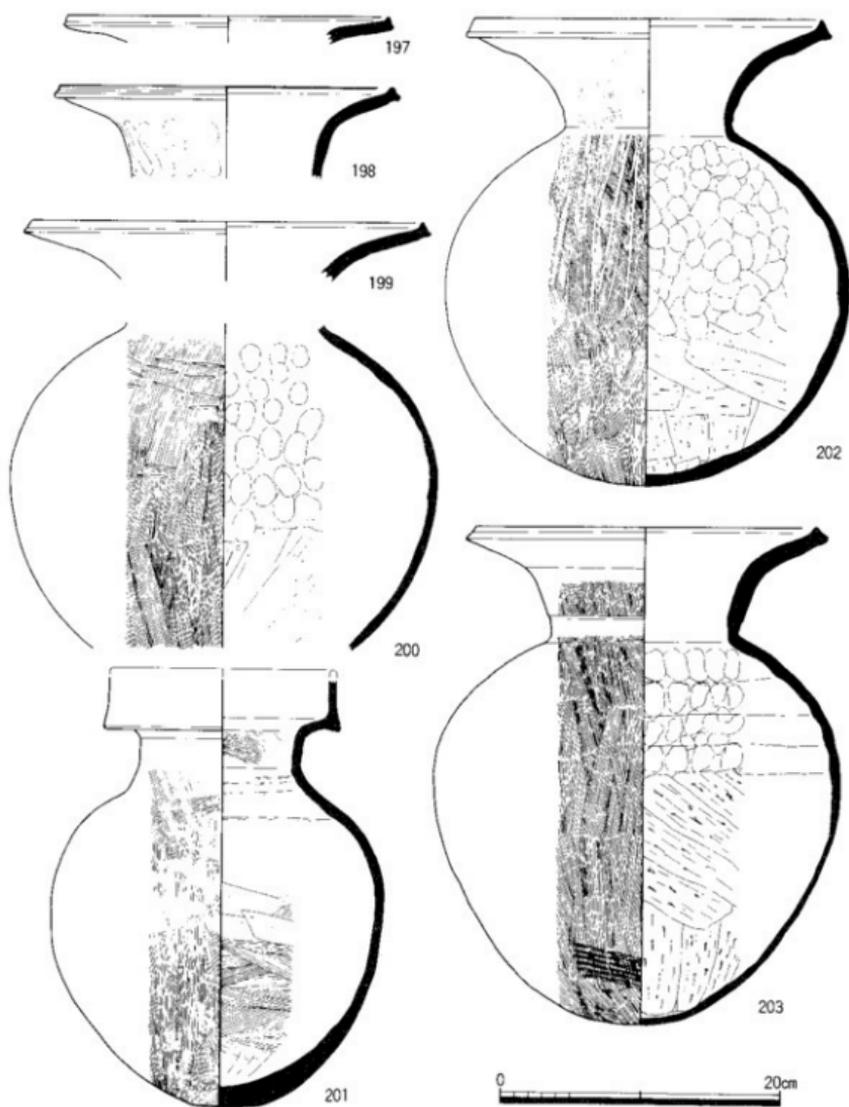
第69図 SR01 6～7層出土遺物実測図(1)

鉢である。いずれも接合痕が顕著に残る。179は深鉢の底部である。平底の底部をもち、バケツ状を呈する。内外面とも二枚貝条痕が顕著である。

180～195は弥生時代後期末の土器である。180～182は長頸壺である。体部は中位に最大径をもつもので、頸部は筒状に直立し、口縁は屈曲して外側に広がる。口縁端部は上方につまみ上げる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ハケ、内面ナデ、181は体部外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ、182は外面ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリを施す。181の頸部外面にはハケ状工具による列点文が二段に分かれて巡る。183～185は壺の底部である。いずれも平底であり、調整は内面ヘラケズリを基本とし、外面は184タタキ後ハケ、185ハケ後粗いヘラミガキを施す。186～194は甕である。なで肩の体部から「く」の字状に鋭く屈曲する口頸部をもち、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁端部の



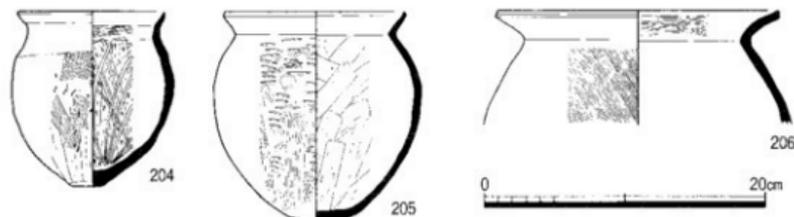
第70图 S R 01 6~7层出土遗物实测图(2)



第71图 S R01 6~7层出土遗物实测图(3)

つまみ上げの弱いものは、口縁部内面に擬凹線を巡らすものもみられる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリを施す。191の体部外面下半にタタキが残存している。192～194は底部である。192、193は平底、194は丸底に近い。いずれも外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を施す。195は鉢である。ボール状を呈し、口縁端部は丸く終わる。底部は丸底である。調整は外面ヘラケズリ、内面ハケを施す。196は製塩土器である。「ハ」の字状に開く小さな脚部をもち、体部はあまり広がらずに立ち上がる。調整は体部外面タタキ、内面ナデを施す。

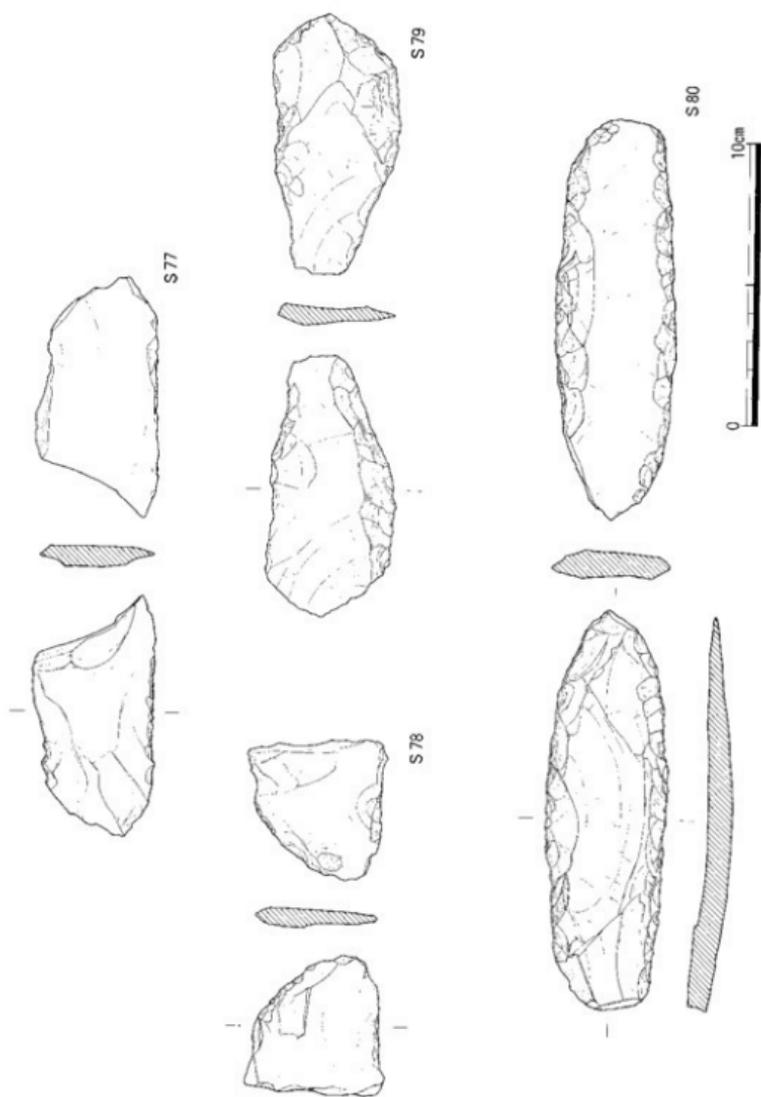
197～206は古墳時代前期の土器である。201を除く壺は広口壺である。丸底の底部から球形に近い体部をもち、屈曲して頸部は大きく外反する。口縁端部は上下に拡張し、口縁端部端面に強いナデを施す。調整は口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ、内面ヨコナデ、体部から底部外面タタキ後丁寧なハケ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリを施す。202のように体部外面上半に装飾性のあるヘラミガキを施すものもみられる。201複合口縁壺である。丸底に近い底部から立ち上がり、丸みを帯びた体部をもつ。体部から頸部への屈曲はゆるく、頸部は直立気味に立ち上がり、端部は丸く終わる。調整は体部から底部外面ハケ、内面上半ナデ、下半ハケ後一部ヘラケズリを施す。204～206は甕である。204は丸底に近い底部をもち、体部はあまり張らない。頸部の屈曲はゆるく、口縁端部を上方につまみ上げる。体部外面下半ヘラケズリ、上半ハケ、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁から頸部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ下半ハケを施す。205も丸底に近い底部をもち、体部も丸みをもつ。頸部は「く」の字状に鋭く屈曲し、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ後粗いハケ、内面ヘラケズリを施す。206は「く」の字状に屈曲する頸部をもち、口縁部は大きく外反する。調整は口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ、体部外面ハケ、内面ナデを施す。



第72図 S R 01 6～7層出土遺物実測図(4)

6～7層出土土器

S 77、79はスクレイパーである。明瞭な加工痕をもつものは下縁部のみである。S 78、80は石磨である。S 78は約半分を欠損する。S 80は平面形状が、石楯状を呈するものである



第73図 S R01 6~7層出土遺物実測図(5)



第74図 SR01 3～4層遺物出土状況図

が背部と考えられる上縁部に敲打による背潰しを確認し、逆に刃部と考えられる下縁部には敲打痕は認められないため、石庖丁とした。

SR01 3～4層

1区①、②を区分する用水路部分および、1区①の北側の仮設道部分において平面の確認ができた（遺物の広がり状況）層である。この層からは、古代から中世にかけての少量の土器の他、大形の木製品を多く確認した。木製品の出土状況はSR01西岸付近に西からW21、W23、W22の順に確認した。SR01中央部では北壁に入り込む形でW24が確認され、東岸近くで大型品の周辺でW9～15を確認した。これらの木製品のうち大形木製品については、SR01仮設道部分全域に広がっていることから、投棄された木製品が上流から流れてきてこの付近にとどまったものと考えられる。同様に祭祀遺物と考えられる小型の木製品についても同様の状況が考えられる。

SR01 3～4層出土土器

207は須恵器坏壺である。口縁部から天井部への屈曲は不明

瞭である。天井部はヘラケズリ後ヨコナデ、口縁部はヨコナデを施す。208、209も須恵器坏蓋である。天井部は低く、つまみがつくものと考えられる。210は坏の底部であろうか、底部はヘラ切りが認められる。211は和泉型の瓦器碗である。底部は外側に踏ん張る高台をもつ。口縁部は強いナデにより、外側に段をもつ。調整はミガキが内外面にみられる他、外面下部にナデによる指頭圧痕が顕著に残る。

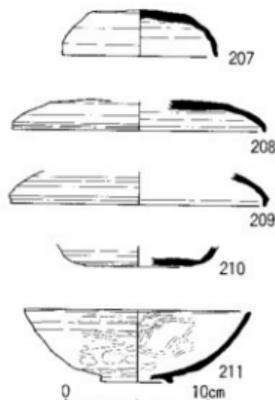
SR01 3～4層出土木製品

W9は下部に切り込みの入る板材である。一側面のみが残存であるため、全体の状況は不明であるが、欠損する側面にも同様の切り込みが入るものと考えられる。全長31.2cm、幅8.3cm、厚さ1.2cmである。片面に焼けた痕跡が残る。大形の人形の可能性が考えられる。

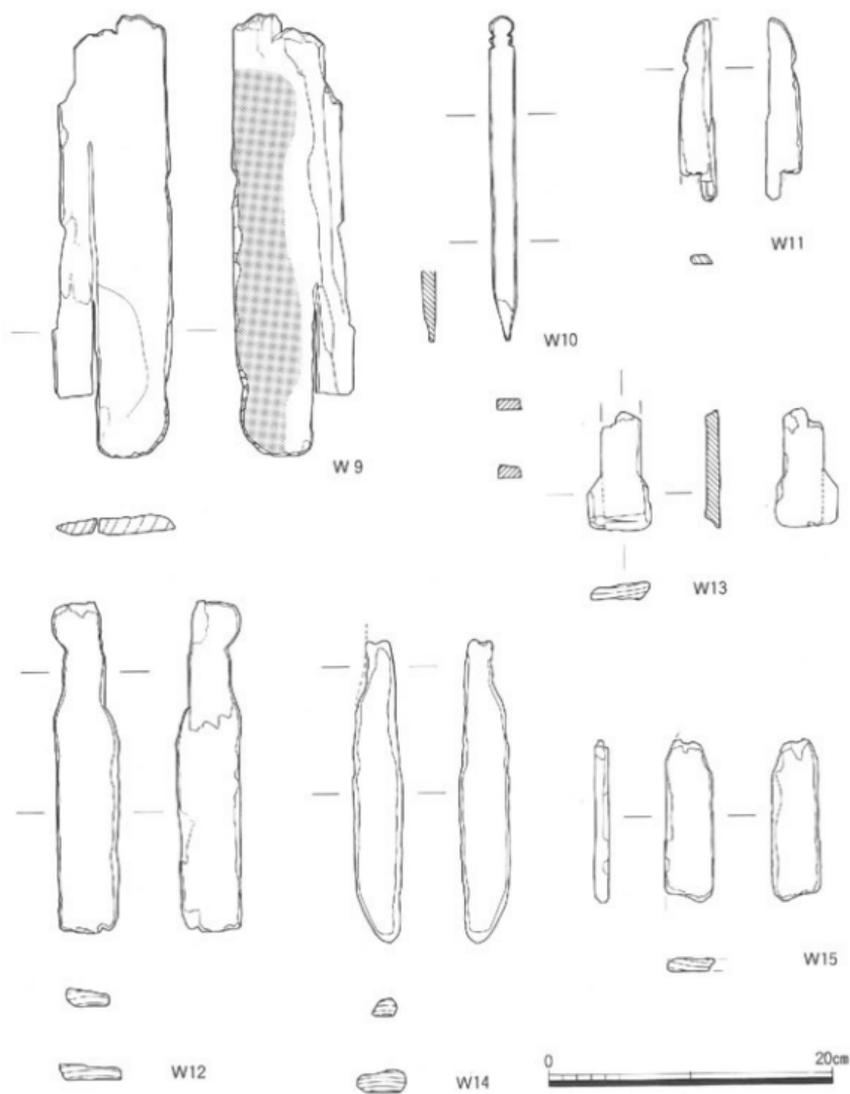
W10は斎串と考えられるもので、厚い板材を使用する。上端部を圭頭状にし、側縁に切り掛けを左右同位置に2ヶ所施す。下端部は剣先状に先を尖らせている。下端は側面以外に片面のみ削る。全長23.0cm、幅1.7cm、厚さ0.9cmである。形状から斎串と考えられるが、他の斎串に比べ板材が厚く、切り掛け等の形状も異なる。『木器集成図録 近畿古代編』に斎串CⅥ形式として分類された4803～4806に類似する。

W11は人形状の木製品である。対になる側縁部を欠損するが、側縁に切り掛けを一ヶ所施す。下部は欠損して不明である。全長12.8cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmである。上部側面に切り掛けを行い下部と区別していること、頭部状に上端部を丸く仕上げられていることから人形状とした。

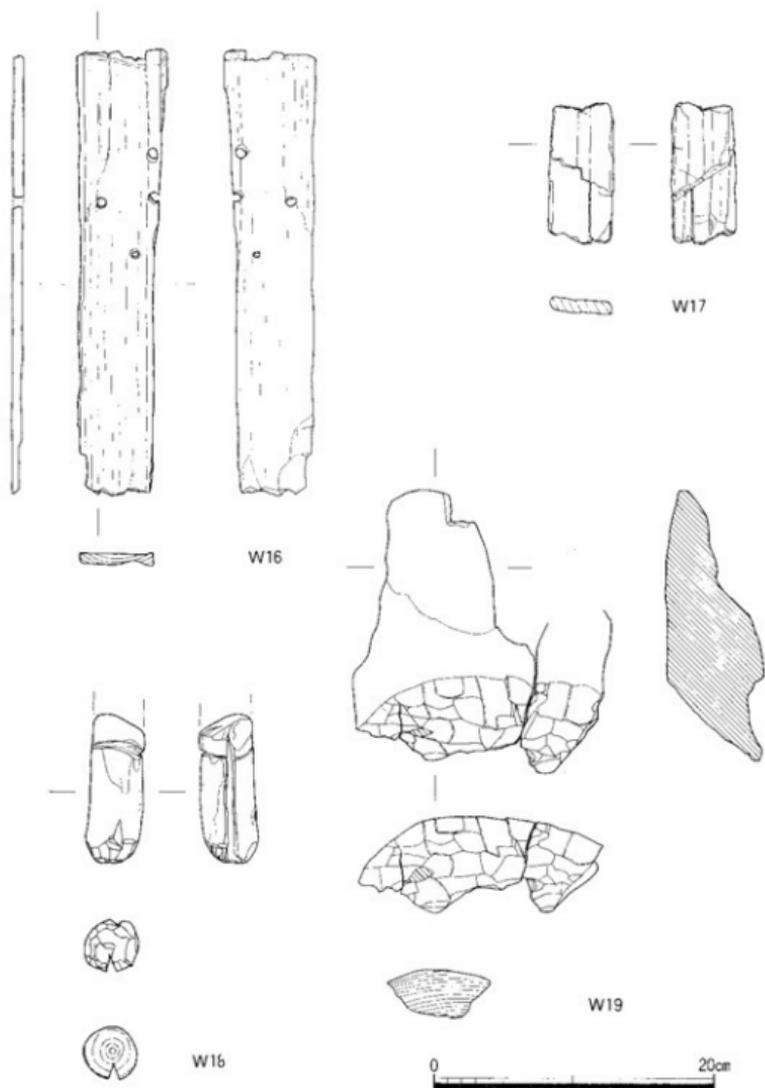
W12、13は同一個体の可能性が考えられるものであるが、器種は不明である。W12は両側面に上部および下部から斜めに切り込みをいれ、上端部を区別する。全長23.4cm、上端部幅3.5cm、切り込み部幅3.0cm、中央部幅4.5cm、厚さ1.1～1.3cmである。一方、W13はW12同様、切り込みを入れ下端部を区別する。全長8.4cm、下端部幅4.5cm、切り込み部幅2.8cm、厚さ1.0～1.2cmであり、法量に差がない。また、W15についても切り込み部が残存すること、厚さも1.0cmと同様であることからW15も同一の個体の可能性がある。W12、13、15が同一個体であるならば、全長42cmを越えることから、大型品と考えられる。前述の木器集成図録では3812、3813に固定用の枠の可能性のあるものに類似することから同様の可能性を考えた



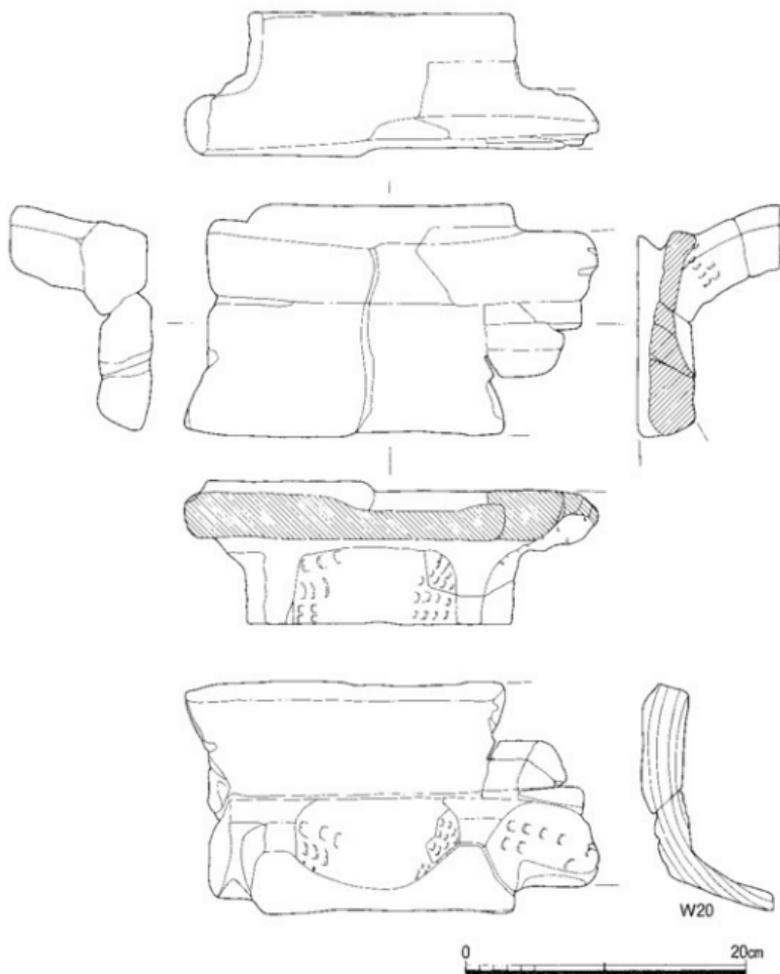
第75図 SR01 3～4層出土遺物実測図(1)



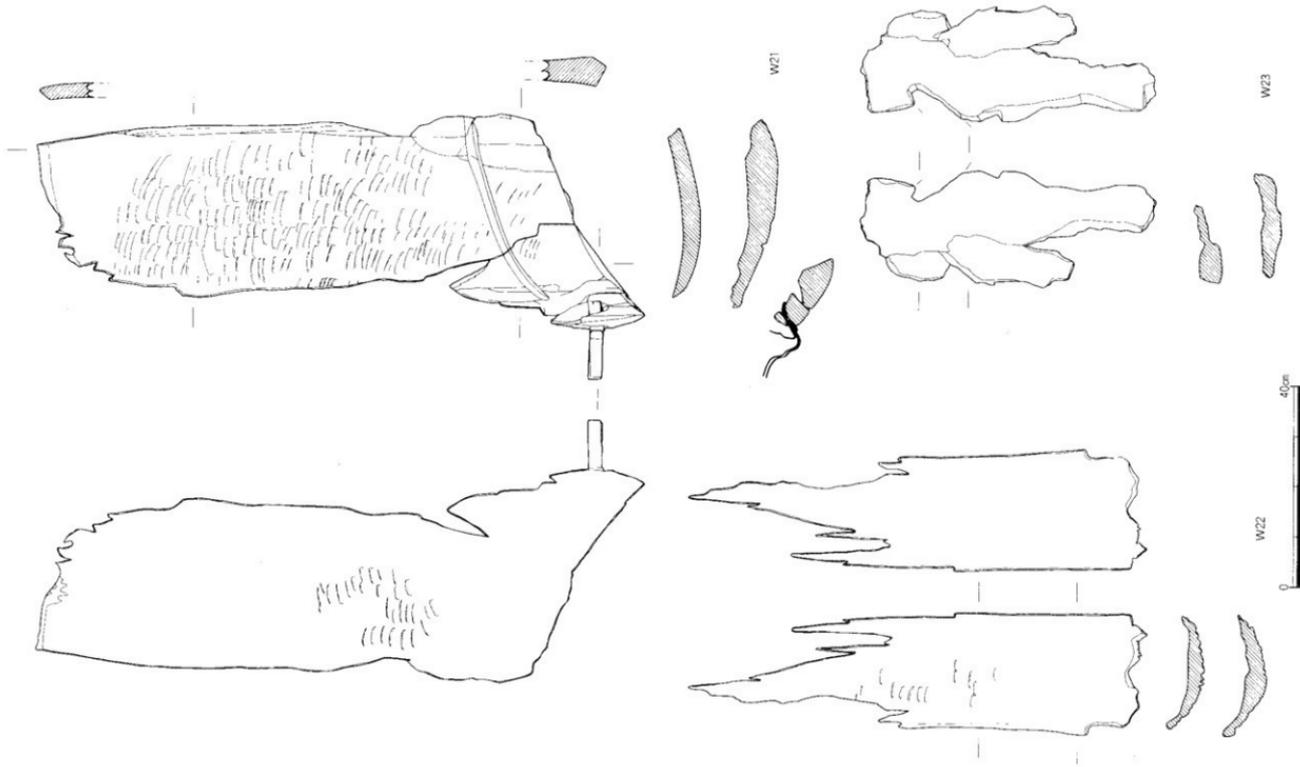
第76図 S R 01 3~4層出土遺物実測図(2)



第77図 S R01 3~4層出土遺物実測図(3)



第78図 SR01 3~4層出土遺物実測図(4)



横井河原 S R 01 3 ~ 4層出土陶器(断面5)



第80図 S R01 3~4 層出土遺物実測図(6)

い。

W14は残存状況が悪いが、又鋸の刃と考えられるもので先端部が尖る。上部は基部にいくにしたがい狭くなる。残存長21.3cm, 基部幅1.8cm, 中央部幅3.5cm, 厚さ1.6cmである。

W16は有孔板である。全長31.5cm, 幅5.2~6.5cmである。平面に8mm程度の孔を4ヶ所貫通させる。

W17は板材である。全長10.0cm, 幅4.3cm, 厚さ1.0cmである。破片であるため全容は不明である。

W18は忠持ちの先端加工木である。先端は尖らせずに面をもつ。全長10.5cm, 直径3.7cmである。加工痕は顕著である。

W19は先端加工材の破片である。先端部は加工痕が顕著であるが、破片であるため全容は不明である。残存長19.0cm, 残存幅18.0cmを測る。

W20は一木作りの椅子と考えられるものであり、一対をなす脚部および右半分を欠損する。形態は外側に踏ん張る脚部を持ち、脚部中央付近に空間を作るようである。天井部(受部)は中央部がやや凹み、両端にいくにしたがい徐々にあがる。脚部内側は、半円状に大きく削り抜く部分と厚く残すものが存在し、安定感と強度を考え製作されているようである。脚部内側には製作時における工具痕が顕著に残る。現存長30.0cm, 幅16.5cm, 高さ10.0cm, 天井部の厚さ3.5cm, 脚端部器壁厚4.5cmであるが、製作当初は全長60cm, 幅30cmの規模をもつ椅子であると想定される。

W21は削り抜き材である。内面には、はめ込み用のほぞが切り込まれている上、側面端部には、桜の皮が3枚巻き付いた状態で出土している。上端部は内面から斜めにカットされており、下端は両面からカットされている。内外面とも加工痕が残るが、特に内面は顕著に残る。全長120cm, 幅42cm, 厚さ4~6cm, 下端部にいくにしたがい厚くなる。樹種から船材の可能性が高いとのご教示を得た。

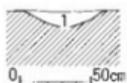
W22は湾曲の削り抜き材で、全長93cm, 幅24cm, 厚さ1.5~4.0cmを測る。ほぞ穴は多くを欠損するが、幅4.0cm, 長さ12.0cm以上の横長の穴があげられている。出土した当初、破片は大きなものであったが、残存状況が悪く固化したのはこの破片のみである。

W24は大形の削り抜き材である。全長175cm, 幅68.0cm, 厚さ3.0~6.0cmで中央部が厚く、縁辺部が薄くなる。樹種から船材の可能性が高い。

第6節 古代から中世の遺構と遺物

古代から中世の遺構としたものは、出土した遺物の内、実測可能な遺物が1点のみの遺構ばかりで、本来の遺構の時期を示しているかどうか不安な遺構が多い。ただ、これらの遺構はSR 01, 02に挟まれた第2微高地上の遺構が大半を占めることより、一括してこの時期の遺構とした。ただし、周辺の遺構と同様、古くなる可能性は考えられる。

T. P.
12.70m



1. 灰黄褐色シルト
(10YR4/2)

第81図 SD 12土層図

1 SD 12 (第81図)

第2区のSD 23から分岐したSD 26から再度分岐する中央部から北西の方向を向く溝である。溝の規模は、幅0.55m、深さ0.10mを測る。土層埋土は灰黄褐色シルト(10YR4/2)である。出土遺物はない。

T. P.
12.70m



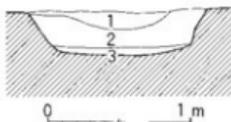
1. 灰黄褐色シルト
(10YR4/2)

第82図 SD 13土層図

2 SD 13 (第82図)

SD 12同様、SD 26から分岐する溝である。溝の規模は、幅0.50m、深さ0.10mを測る。土層埋土はSD 12同様、灰黄褐色シルト(10YR4/2)である。出土遺物はない。

T. P. 12.70m



1. 黒褐色シルト
(10YR3/1)
2. 灰黄褐色砂質シルト
(10YR4/2)
3. 褐灰色砂質シルト
(10YR5/1)

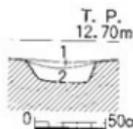
第83図 SD 16土層図

3 SD 16 (第83図)

第2区②北東隅において確認したSD 20から分岐する溝である。溝の規模は、幅1.25m、深さ0.30mを測る。土層埋土は、1 黒褐色シルト(10YR3/1)、2 灰黄褐色砂質シルト(10YR4/2)、3 褐灰色砂質シルト(10YR5/1)の3層に分層できる。出土遺物はない。

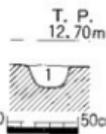
4 SD 17, 18 (第84, 85図)

第2区②の西半, 南東から北西方向を向く溝である。北側も南側も途中で消滅する。溝の規模は, SD 17が幅0.50m, 深さ0.15m, SD 18が, 幅0.30m, 深さ0.15mを測る。土層埋土はSD 17が, 1 灰黄褐色砂質シルト(10YR 5/2), 2 黒褐色礫まじりシルト(10YR 3/2), SD 18が黒褐色礫まじりシルト(10YR 3/2)の単一層である。出土遺物はない。



1. 灰黄褐色砂質シルト(10YR5/2)
2. 黒褐色礫まじりシルト(10YR3/2)

第84図 SD 17土層図

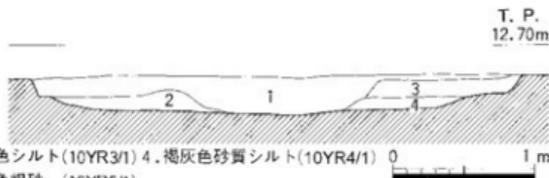


1. 黒褐色礫まじりシルト(10YR3/2)

第85図 SD 18土層図

5 SD 20 (第86図)

第2区②の中央部から北東を向く溝である。北端ではSD 14, 15, 16に分岐する。溝の規模からすれば, SD 16がSD 20の続きになるもの



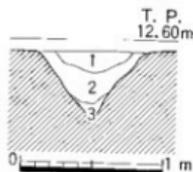
1. 黒褐色シルト(10YR3/1)
2. 褐灰色粗砂(10YR5/1)
3. 黒褐色シルト(10YR3/2)
4. 褐灰色砂質シルト(10YR4/1)

第86図 SD 20土層図

と考えられる。溝の規模は, 幅3.45m, 深さ0.30mを測る。土層埋土は4層に分かれ, 1 黒褐色シルト(10YR 3/1), 2 褐灰色粗砂(10YR 5/1), 3 黒褐色シルト(10YR 3/2), 4. 褐灰色砂質シルト(10YR 4/1)である。出土遺物は須恵器皿の底部が出土している。

6 SD 21 (第87図)

調査区中央部, SD 20から分岐し, SR 02に合流する東西溝である。この時期の溝の多くが南西から北東もしくは南東から北西の方向を向くの一般的であるのに対して異例である。溝の規模は, 幅0.80m, 深さ0.90mを測るV字溝である。土層埋土は1 灰黄褐色シルト(10YR 4/2), 2 黒褐色シルト(10YR 2/2), 3 黒褐色砂質シルト(5YR 2/1)の3層に分層できる。出土遺物は須恵器の坏蓋が1点出土している。



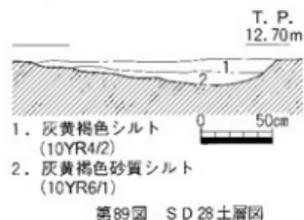
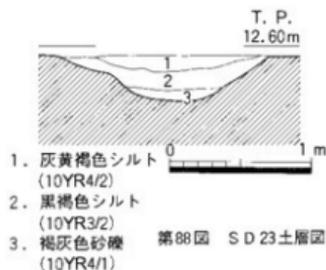
1. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
2. 黒褐色シルト(10YR2/2)
3. 黒褐色砂質シルト(5YR2/1)

第87図 SD 21土層図

7 SD 23 (第88図)

2区①の西部を蛇行しながら南から北に流路をもつ南北溝である。溝の規模は, 幅1.50m,

深さ0.40mを測る。土層埋土は3層に分層でき、1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)、2 黒褐色シルト(10YR3/2)、3 褐灰色砂礫(10YR4/1)である。出土遺物は須恵器坏身が1点と楔形石器が1点出土している。

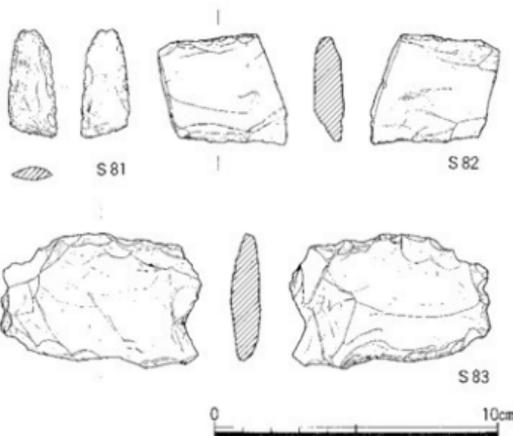
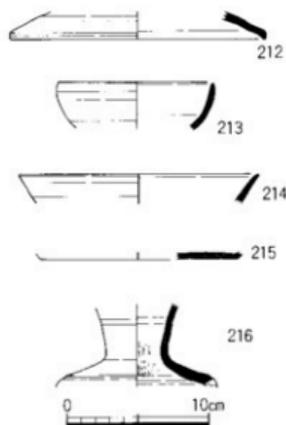


8 S D 27

第2区①の中央部に南から北に流路をもつ溝である。溝の規模は、幅0.75m、深さ0.17mを測る。土層埋土は灰褐色シルト(7.5YR4/2)の単一層である。出土遺物は須恵器の頸部から体部片が1点出土している。

9 S D 28 (第89図)

第2区①の中央部、南から北に流路をもち、途中からS D 27から分岐し、東へそれる溝である。溝の規模は幅1.70m、深さ0.20mを測る。断面形状は、東の立ち上がりは急であるが、西側は緩やかである。土層埋土は2層に分層でき1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)、2 灰黄褐色砂質シルト(10YR6/1)である。出土遺物は須恵器坏蓋が1点と石鏃が1点出土している。



第90図 2区S D出土遺物実測図

10 SD36

第3区SR02東岸において確認したSR02から分岐する溝である。溝の方位は南西から北東方向を向くが途中で消滅する。溝の規模は、幅2.00m前後、深さ0.15mを測る。土層埋土は2層に分層でき、1 黒褐色砂質シルト(10YR4/2)、2 黒褐色砂質シルト(10YR2/3)と黄灰色細砂(2.5Y6/1)のラミナ状堆積をする。出土遺物はないが、後述するSD37と同様の堆積状況であることより、同じ時期が考えられよう。

11 SD37 (第91図)

第3区SR02東岸において確認した溝である。SR02と同様な方向を向き、SD36と同様途中で消滅する。溝の規模は幅3.00m、深さ0.30mを測る。土層埋土は2層に分層され、1 黒褐色砂質シルト(10YR4/2)、2 黒褐色砂質シルト(10YR2/3)と黄灰色細砂(2.5Y6/1)のラミナ状堆積をする。出土遺物は黒色土器の椀が1点出土している。

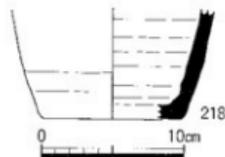


第91図 SD37出土遺物実測図

217は黒色土器B類の椀底部である。高台部分を欠損するが、基部の状況からシャープな高台がつくものと考えられる。内面見込みにはミガキによる暗文がみられる。時期は11世紀中頃のものと考えられる。

11 SD39 (第92図)

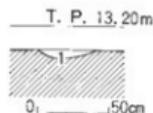
第4区において確認した南西から北東方向を向く溝であり、SR03を切る。溝の規模は、幅2.60m、深さ0.25mを測る。出土遺物は須恵器の壺底部が出土している。



第92図 SD39出土遺物実測図

12 SD48 (第93図)

第5区中央部において確認した南から北の方向を向く南北溝である。溝の規模は、幅0.40m、深さ0.05mを測る。土層埋土は褐灰色シルト(7.5YR5/1)の単一層である。出土遺物はない。

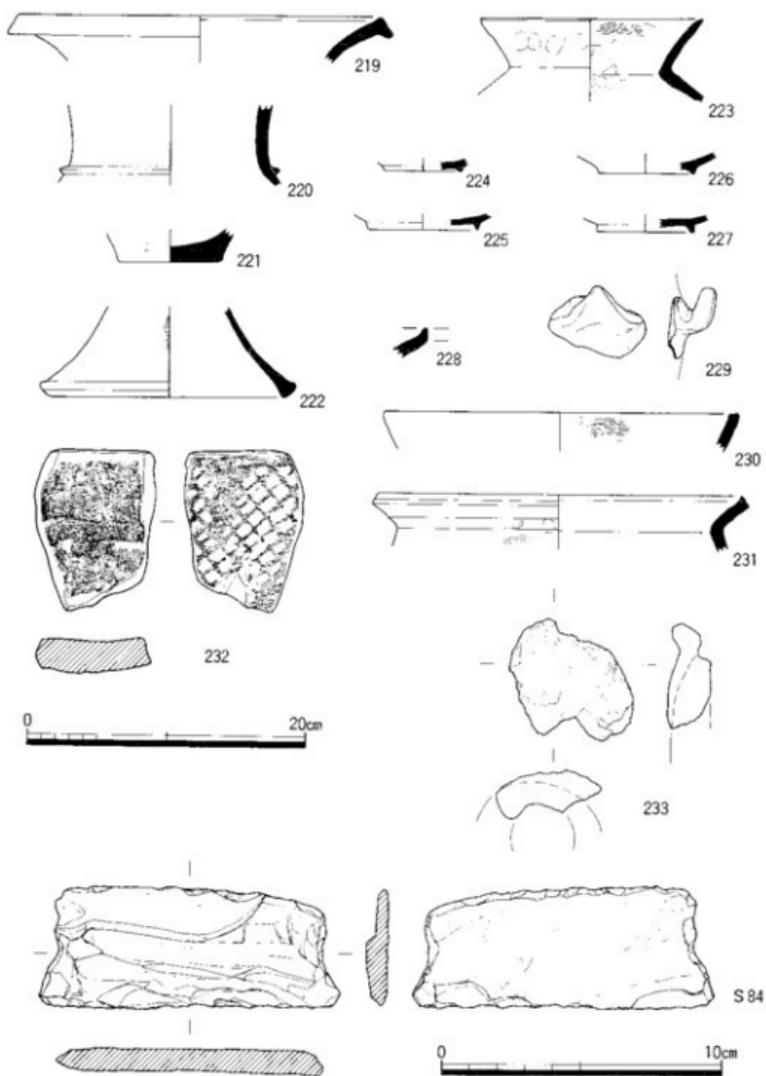


1. 褐灰色シルト(7.5YR5/1)

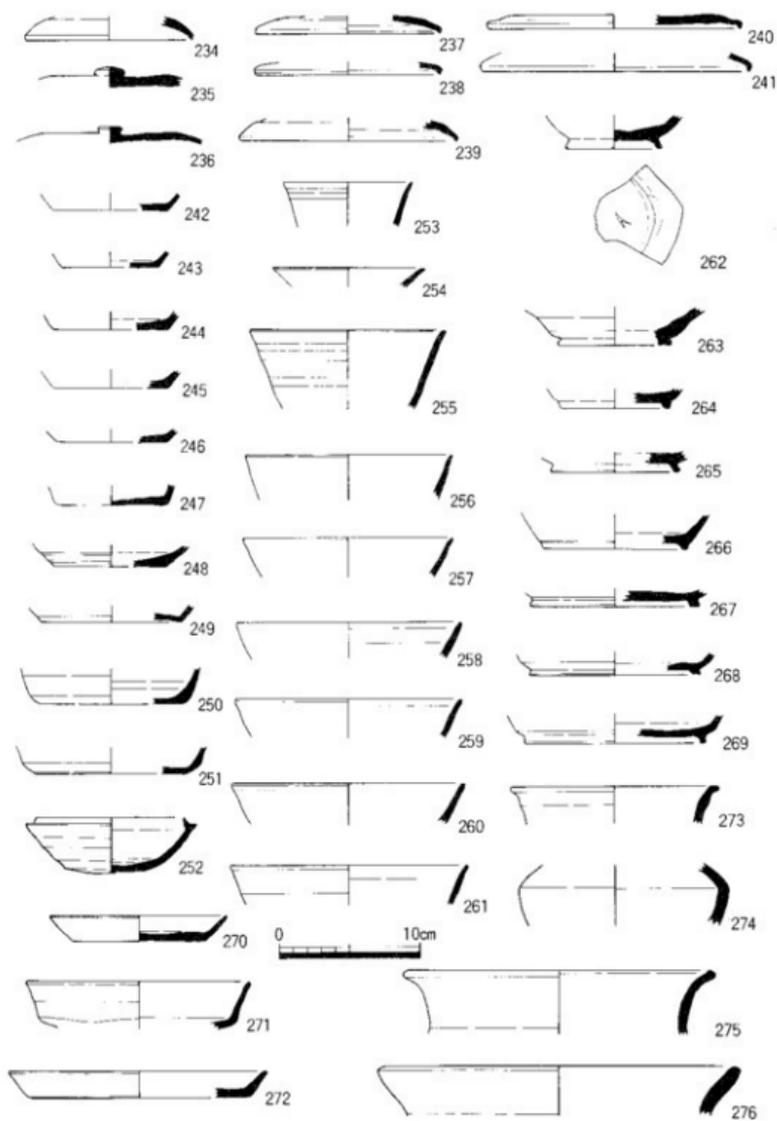
第93図 SD48土層図

13 S R 02 2層出土遺物 (第94, 95図)

S R 02 2層からは弥生時代から中世までの遺物が出土しているが、遺物の多くは古代から中世の遺物である。219～222は弥生土器である。219, 220は壺, 221は底部, 222は高坏の脚部である。いずれも磨滅のため調整等は不明である。223は古墳時代前期の甕の口縁部である。直線的に外反する口縁をもち、頸部の屈曲はきつい。口縁部内面にハケ、体部内面にヘラケズリが認められる。224～227は黒色土器の椀底部である。高台は逆三角形を呈しシャープである。228～231は甕である。228は口縁部片, 229は把手である。230, 231も甕の口縁部である。230は口縁部端に面をもち, 231は端部をつまみ上げる。232は平瓦である。上面は布目が、裏面は格子タタキが認められる。233は籬の羽口である。先端部は溶変しガラス状を呈する。S 82は結晶片岩製の石庖丁である。両側縁部に抉りをいれ、上端部下端部ともに調整を行う。233～276は須恵器である。234～241までは坏蓋である。つまみが残存する235, 236以外は天井部の状況は不明である。口縁部は内側に折り返すのが普通であり、天井部は平均的に低い。242～251は高台をもたない坏である。底径は10cm前後であり、底部はヘラ切りを行う。252は古墳時代後期の坏身である。口径は小さく口縁部の立ち上りは直線的で短い。底部外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデを施す。253～261は坏の口縁部である。口径の小さな252, 器高の深い255はあるが、全体では口径17～18cm程度のもが多い。263は壺の底部であろうか。高台および器壁が厚い。264～269は高台付きの底部である。外側に踏ん張る高台をもつものが多く、体部は直線的である。270～273は皿である。273, 274は壺である。273は口縁端部が外側に広がり面をもつ。275, 276は甕の口縁部である。275は口縁端部をつまみ上げるが、276は丸く終わる。



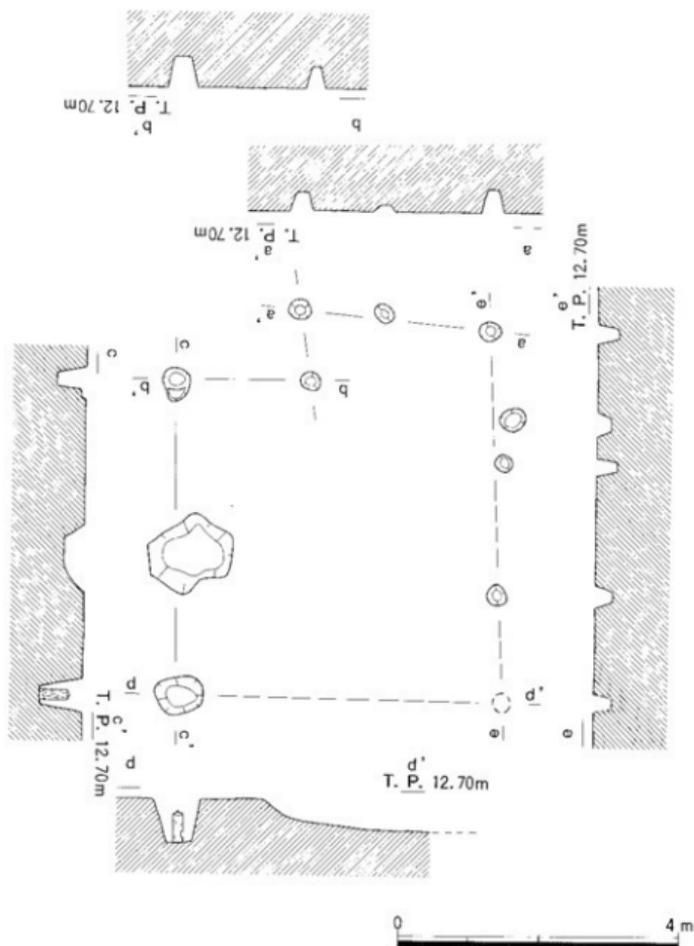
第94図 S R 022層出土遺物実測図(1)



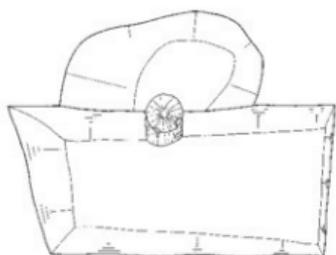
第95图 S R 02 2 层出土遺物実測图(2)

第7節 近世の遺構と遺物

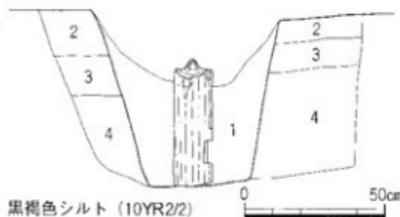
1 SB 01 (第96図)



第96図 SB 01実測図

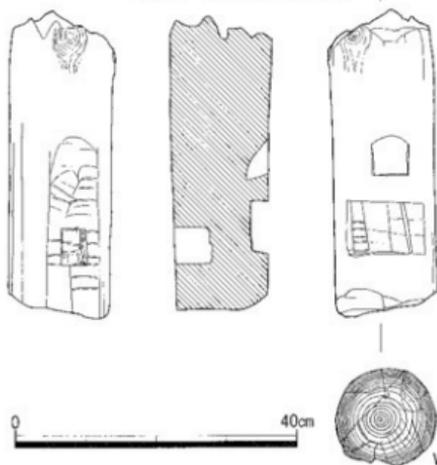


T. P. 12.70m



1. 黒褐色シルト (10YR2/2)
2. 灰黄色砂礫 (2.5YR6/2)
3. 明黄褐色砂礫 (2.5YR6/8)
4. 灰色粗砂礫 (5 Y6/1)

第97図 S B 01 柱材検出状況



第2区㊸の中央部で確認した掘立柱建物である。当遺跡で確認した掘立柱建物は一棟のみである。南北3間、東西4間に、北側に北へ1間、東西2間分北側に張り出す。柱の間隔および柱穴の規模は一定ではなく統一されていない。柱穴の一つからは柱材が検出されている（第97図）。この柱材は直径15cmの規模をもち、長さ45cm残存していた。柱材にはほぞ穴が切られており、地中に埋まる部分にはほぞ穴は必要ないことから転用材であると考えられる。柱材の残存状況および柱穴の配置状況からすれば、近世頃の小屋としての用途が考えられる。

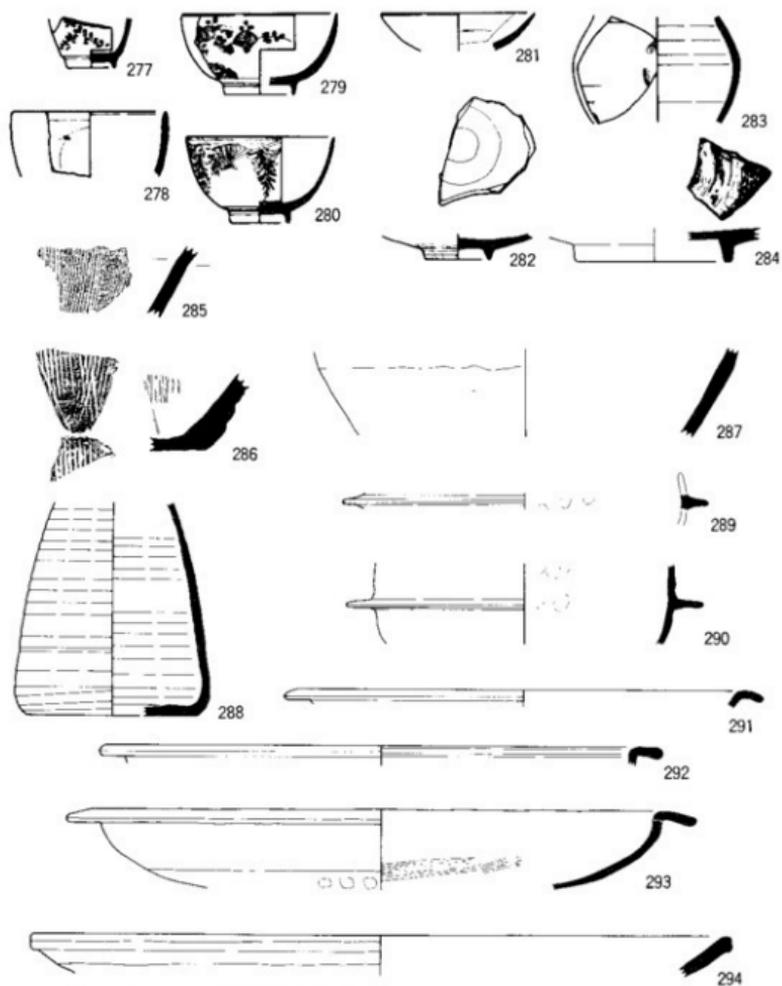
2 SK 02～39 (第99図)

第2区を中心に合計38基の土坑を確認した。少ない出土遺物からすれば、いずれも近世期に属すると考えられるものであり、土坑の規模も様々である。ここでは、これらの土坑を一括して一覧表にまとめてみた。いずれの土坑も植物、器物の廃棄土坑としての用途が考えられる。

第98図 S B 01 柱材実測図

第3表 近世土坑一覧表

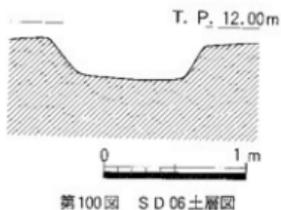
遺構番号	平面形態	規 模	共存遺物	備 考
SK02	隅丸方形	南北1.20m、東西1.20m、深さ0.21m		
03	円形	直径1.00m、深さ0.33m		
04	楕円形	南北1.65m、東西1.05m、深さ0.30m	肥前系磁器	
05	楕円形	南北1.85m、東西1.40m、深さ0.10m		
06	不整形	南北1.20m、東西2.25m、深さ0.05m		
07	円形	南北1.10m、東西1.10m、深さ0.26m		
08	隅丸方形	南北1.10m、東西1.05m、深さ0.27m		
09	楕円形	南北2.86m、東西2.00m以上、深さ0.24m	肥前系磁器、焙烙	
10	不整形	南北1.20m、東西1.20m、深さ0.17m		SK11に切られる
11	不整形	南北1.60m、東西1.20m、深さ0.35m		SK10を切る
12	楕円形	南北1.85m、東西1.25m、深さ0.31m		SK11に切られる
13	不整形	南北0.90m、東西1.60m、深さ0.35m		
14	円形	南北1.25m、東西1.15m、深さ0.56m	肥前系陶器、瓦質羽釜	
15	隅丸方形	南北1.60m、東西1.50m、深さ0.35m		SD13を切る
16	不整形	南北1.80m、東西1.95m、深さ0.71m		
17	不整形	南北1.78m、東西2.10m、深さ0.57m		SK18を切る
18	長方形	南北1.65m、東西1.50m以上、深さ0.47m	肥前系磁器、備前権鉢	SK17に切られる
19	円形	南北1.20m、東西1.20m、深さ0.53m		
20	不整形	南北0.95m、東西0.85m、深さ0.20m		SD14を切る
21	楕円形	南北3.33m、東西2.40m、深さ0.72m		SD08に切られる
22	不整形	南北1.15m、東西1.30m、深さ0.25m		SD12を切る
23	楕円形	南北1.30m、東西1.80m、深さ0.55m		SD12を切る
24	円形	南北1.15m、東西1.10m、深さ0.43m		SD20を切る
25	不明	東西 深さ	肥前系磁器、陶器類、瓦質焙烙	2区②南壁において確認
26	円形	南北0.80m、東西0.95m、深さ0.20m		
27	長方形	南北0.70m、東西0.90m、深さ0.25m		
28	長方形	南北1.05m、東西1.75m、深さ0.28m		SK29を切る
29	円形	南北1.90m、東西1.40m以上、深さ0.12m		SK28に切られる
30	円形	南北2.70m、東西2.80m、深さ0.53m	肥前系磁器壺	SD08に切られる。 SD22が合流
31	楕円形	南北2.60m以上、東西1.15m以上、深さ0.46m		SD32に切られる。西半部は用水路下へ
32	楕円形	南北1.90m、東西1.85m、深さ0.54m	明石or備前鉢、瓦質羽釜	SK31を切る
33	円形	直径1.90m、深さ0.54m	瓦質焙烙	SK34を切る
34	楕円形	南北1.90m、東西2.40m以上、深さ0.58m		SK33に切られる
35	楕円形	南北1.50m、東西1.80m、深さ0.50m	土師器焙烙	SD27を切る
36	楕円形	南北1.00m以上、東西2.00m、深さ0.44m		北半分は調査区外へ
37	円形	南北0.80m以上、東西1.50m、深さ0.51m		北半分は調査区外へ
38	不整形	南北2.20m、東西2.00m、深さ0.27m		SD28を切る
39	楕円形	南北2.00m、東西2.30m、深さ0.45m	肥前系磁器皿	
41	長方形?	南北1.40m以上、東西1.90m、深さ0.36m		
42	長方形?	南北1.55m、東西1.00m以上、深さ0.45m		東半分は用水路下へ



- S K 04—278, 279, S K 32—286, 288,
 S K 09—277, 291, S K 33—292,
 S K 14—283, 289, S K 35—293,
 S K 18—281, 284, 285 S K 39—280
 S K 25—276, 287, 290,
 S K 30—282,

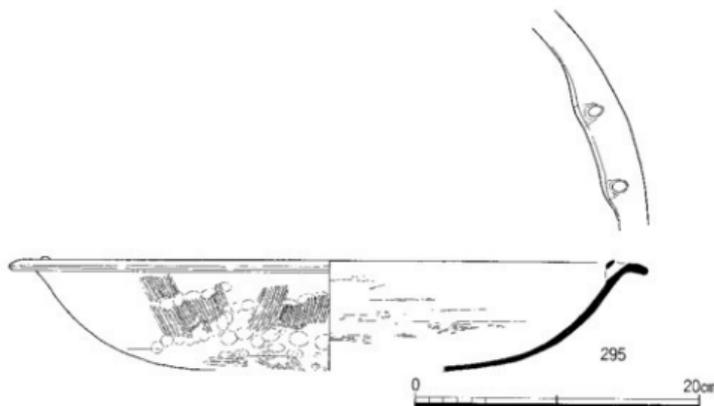
第99图 近世土坑出土遗物实测图

3 SD06 (第100, 101図)



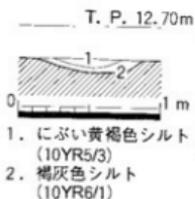
第100図 SD06土層図

第1区と2区境の北端で確認した南北溝である。南端は調査区内で完結するが、北側は調査区外ににげる為全容は不明である。溝の規模は、幅1.10m、深さ0.25mを測る。出土遺物は瓦質の焙烙が1点出土しているのみである。SD06と後述する07の位置関係からすれば、これらの溝は、屋敷等を囲むような区画溝である可能性が考えられる。



第101図 SD06出土遺物実測図

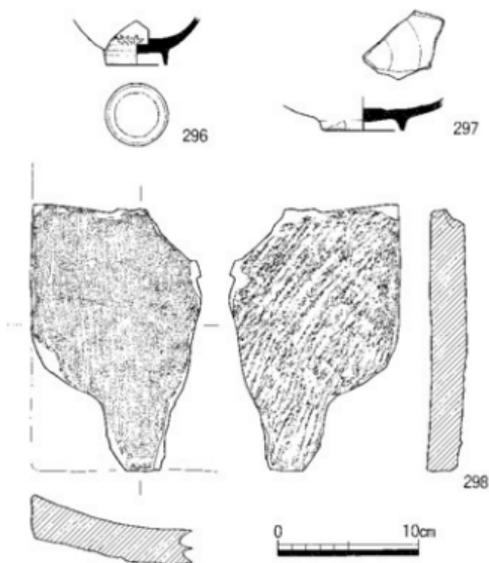
4 SD07 (第102, 103図)



1. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3)
2. 褐灰色シルト (10YR6/1)

第102図 SD07土層図

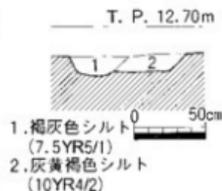
第2区②の北端で確認した東西溝である。東端、西端ともに調査区内で完結する。溝の規模は、幅0.70m、深さ0.10mを測る。土層埋土は2層に分層でき、1 にぶい黄褐色シルト (10YR5/3)、2 褐灰色シルト (10YR6/1) である。出土遺物は、肥前系磁器および平瓦が出土している。溝の位置関係からSD06との関係が考えられる。



第103図 SD 07出土遺物実測図

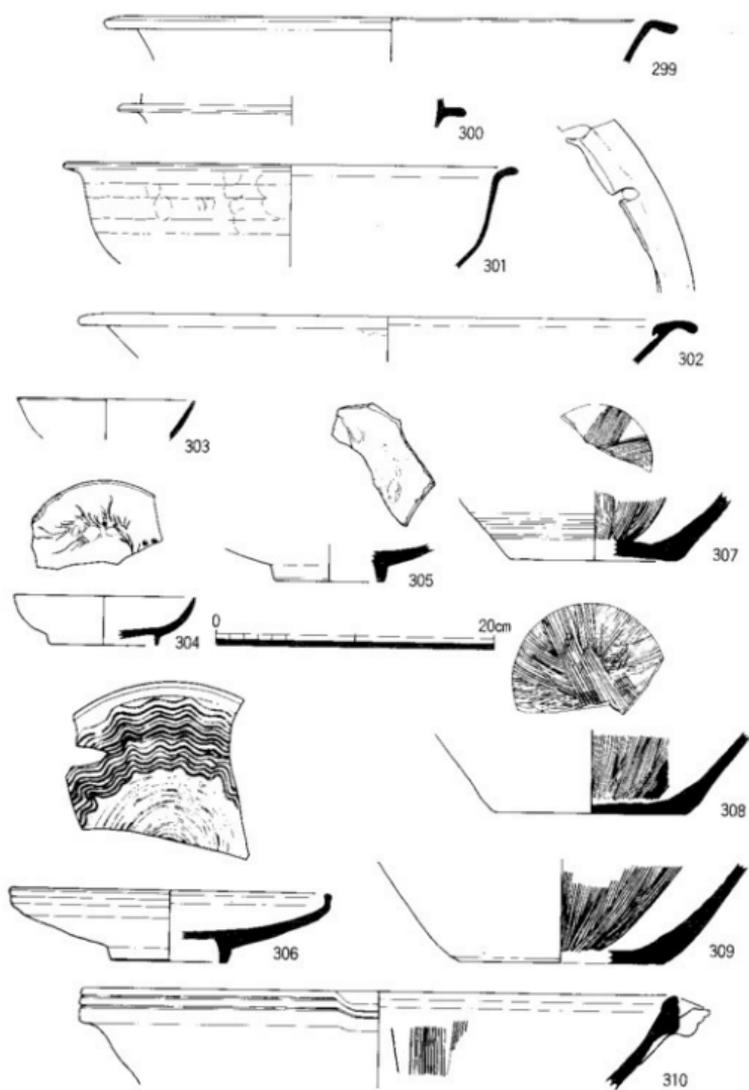
5 SD 08 (第104, 105図)

第2区②, SD 07の南側で確認した東西溝である。西側は途中で消滅し, 東側は用水路下ににげるが, ①には延びないことより, 用水路下で完結しているものと考えられる。溝の規模は, 幅0.80m, 深さ0.15mを測る。土層埋土は2層に分層でき, 1 褐灰色シルト (7.5 YR 5/1), 2 灰黄褐色シルト (10 YR 4/2) である。出土遺物は溝の規模の割に多く出土した。出土した遺物は瓦質焙烙, 肥前系磁器, 陶器播鉢等がみられる。



1. 褐灰色シルト (7.5 YR 5/1)
2. 灰黄褐色シルト (10 YR 4/2)

第104図 SD 08土層図



第105图 S D08出土遺物実測図

6 SD09

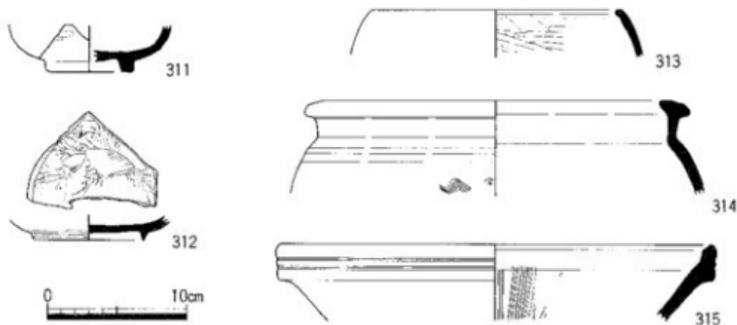
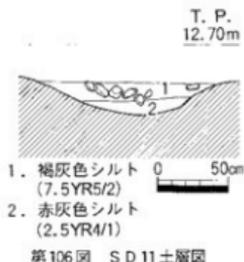
第2区②SD08の南側において確認した東西溝である。残存状況が悪く西側は途中で消滅し、東側は用水路下になげろ。溝の規模は、幅0.65m、深さ0.11mを測る。出土遺物はない。

7 SD10

第2区②SD09の南側において確認した東西溝である。SD09同様残存状況は悪い。西側はSD19を切るあたりで消滅し、東側は用水路下になげろ。溝の規模は、幅0.60m、深さ0.03mを測る。出土遺物はない。

8 SD11 (第106, 107図)

第2区②の西端、SD07の南側において確認した東西溝である。東西とも調査区内で完結する。溝の規模は、幅1.25m、深さ0.20mを測る。土層埋土は2層に分層でき、1 灰褐色シルト(7.5YR5/2)、2 赤灰色シルト(2.5YR4/1)である。出土遺物は、肥前系磁器、陶器甕、陶器挿鉢等が出土している。



9 SD12

第2区②西端において確認した南北溝である。溝の残存状況は悪い。溝の規模は、幅1.40m、深さ0.09mを測る。出土遺物はない。

第 4 章

調査のまとめ

第1節 遺構について

居石遺跡の今回の調査地区は3本の旧河道と4つの微高地からなる地形を呈する。個々の遺構の詳細については第3章第2節から第7節で述べた。ここではこれらの遺構の時代毎の変遷をみていきたい。

縄文時代

いずれも晩期の遺構である。少量の出土遺物からSR01, SR02はこの時期以前より機能していたものと考えられる。SR03も同様の時期から機能していたものと考えられるが、SR03については、この時期にほとんど埋没したのと考えられ河道底から晩期前半の良好な土器の一括資料を確認したほか、打製石斧が出土量の大半を占める石器、斧末製品を含む加工木等を確認した（このうち晩期前半の土器については第2節で詳しく述べる）。これらの遺物を包含する層からは稲のプラント・オパールが確認されており、縄文時代晩期前半の終わり頃には既に高松平野において稲作農耕が行われていた状況が確認された。（付編第4節外山氏報文参照）一方、微高地ではSR01と02に挟まれた第2微高地上においてSX02を確認したほか、SR03東岸の第4微高地上においてSK40を確認したにとどまる。他の遺構の遺物量に比べ、SR03の遺物が多いことを考えれば、同時期の遺構の中心は調査区の東南に広がっているものと考えられる。

弥生時代

最も古い時期のものは、前期と考えられる土器および石器がSD45第4層から出土しているほか、SR01から他の時期の遺物に混じって少量出土しているが、遺構数が増加するのは後期以降である。第4微高地のSD51が後期中葉とやや古相を呈する以外は、いずれの遺構も後期末の遺物を出土している。これらの遺構のうちSR03が埋没し、ほぼ平坦化した微高地を、概ね北西方向を向く同規模の溝SD40～42が存在する。検出した範囲は狭いが、微高地を走る用水路的な機能が考えられる。同時期の遺物はSR01から比較的まとまって出土しているが、SR02からは出土していないことから、この時期の遺構は第1微高地の南西および第4微高地の南東に広がっているものと考えられる。

古墳時代

前期と考えられるものに、SR01から分岐するSD01の取水口で小形 製鏡3面を確認したSX01がある。出土状況からして水の安定供給を願う祭りの跡と考えられるが、埴製鏡と相伴する土器はないが、鏡より上層で出土した広口壺等より、概ね布留式の古段階に平行するものと考えられる。鏡の詳細については、附編第1節高倉先生の報文に詳しいが、当遺跡出土の鏡とほとんど同様なものに明石市藤江別所遺跡出土例がある。藤江別所遺跡例については井

戸からの出上で、井戸内からは弥生時代から江戸時代にわたる時代のものまで出土しており、銅鏡9面の他、車輪石、勾玉等祭祀遺物が出土していることから、調査担当者は水に関わる祭祀跡であると考えている⁽¹⁾。

同時期と考えられる遺構は調査区内では確認しておらず、一時期において第4微高地上にSD45が認められる。この遺構は最下層である第4層に弥生時代前期の純粋層が存在し、第3層がこの時期に該当する。SD45東層の溝は調査区内ではほぼ併走するが、SD45から水を分岐する溝であると考えられる。SD45は3層からの出上遺物より、概ね布留式の中段階もしくは、やや新しい時期に併行するものと考えられる。

古代～中世

古代～中世にかけての遺構は第2、3、4微高地から多くの溝が確認されているが、いずれの遺構も出土遺物が1点程度しかなく、出土遺物が果たしてその遺構の時期を示すのかどうか不安である。古墳時代前期に川の半分程度が埋没したSR01からは少量の土器とともに船材と考えられる大形加工木、斎串と考えられる祭祀遺物も出土しており、水に関する祭祀が行われていた可能性が考えられる。この状況からSR01がこの時期においても、ある程度の供給があったものと考えられる。

このことはSR02において土層観察により2時期の流路が確認され、新しい時期の流路は出土遺物より11世紀中頃の時期が与えられることに共通し、古代末から中世初頭段階においても香東川の氾濫による水の供給があったことを立証する資料として重要である⁽²⁾。

時代は前後するがSR03が埋没した微凹地において土壌層が存在する。出土した遺物から古代頃にも水田として機能していたものと考えられる。

近世

この時期には居石遺跡周辺はほぼ平坦化し、水田、畠等として利用されていたものと考えられる。この時期の遺構は第2微高地北側に土坑・溝が密集する。溝の残存状況が良くないことを考えれば、例えば畠の畝間の溝であるのかもしれない。土坑は41基確認したが出土遺物が少ない点、土坑のいくつかからは種子も出ていることから割れ物等の廃棄土坑ではなく生ゴミ用のごみ穴であった可能性が考えられる。掘立柱建物柱も1棟確認したが、規模が小さく柱の間隔も均等ではないことから、住居用ではなく作業用の物置小屋としての機能が考えられる。

(1) 稲原昭嘉『発掘された明石の歴史展—藤江別所遺跡—』明石市立文化博物館 1994
なお、藤江別所遺跡出土の鏡について明石市立文化博物館 稲原昭嘉氏の御厚意により
実見する機会を得た。

(2) 高松市教育委員会が行った居石遺跡の東方に位置する浴・松ノ木遺跡から浴・長池遺跡

において確認した流路は弥生時代から埋没が始まり古代～中世頃にはほぼ平坦になり、それ以降土砂の堆積があまりみられない。これは香東川の氾濫の影響を受けなくなった証拠である。一方、西方の居石遺跡では古代末から中世初頭段階においても氾濫等による土砂の供給が認められる。これは、この時期居石遺跡周辺が香東川の氾濫源の中に位置していることを意味する。しかし、これ以降は氾濫等による土砂の供給がなくなることを考えれば、香東川の東岸に段丘崖が形成され、平野中央部にまで氾濫がおこらなくなるのが古代末以降であるとする高橋氏の見解とも食い違いはない。

高橋 学 「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書』高松市教育委員会 1992

第2節 出土土器について

(1) S R 01 6～7層出土土器について

S R 01 6～7層からは弥生時代後期末から古墳時代前期初頭段階の土器が出土している。これらの土器が出土した層の下からは古墳時代前期初頭と考えられる小形埴製鏡が3面出土しているが、前章でも述べているとおり伴出する遺物がないため時期を特定できていない。ただ、埴製鏡より上層の6～7層では、比較的土器を出土していることから埴製鏡が川の中におかれた時期はある程度特定できよう。6～7層出土の土器の最も新しい時期のものは古墳時代前期初頭のものであることからこれらの土器の特徴を観察し、他遺跡出土の土器を検討することにより、6～7層出土土器の時期の下限を考えてみたい。

6～7層出土土器のうち確実に古墳時代前期初頭と考えられる土器は197～206である。このうち、周辺地域において類例の出土が認められる197～203を中心に検討してみたい。

これらの土器の形状は、口縁部が大きく開く広口壺である。同様の形状の壺は、古墳、墳墓では丸井古墳、稲荷山古墳、姫塚古墳、石舟塚古墳、六ツ目山古墳、空港跡地遺跡S T 05等から出土し、これらの各古墳の出土遺物について大久保氏⁽¹⁾、次山淳氏⁽²⁾が考察を行っている。

丸井古墳、空港跡地遺跡S T 05⁽³⁾以外の資料はいづれも口頸部のみの破片であり、体部の変化の状況が不明であるが、これらの土器の古いものから新しいものへの変化は大きく、口縁端部の上下への拡張から上方のみの拡張に変化する。居石遺跡出土の全容のわかる土器は202、203であり、口縁端部の形態は、体部が球形化し、縦方向のヘラミガキを持つ202の方が拡張が大きく、やや古相を呈する203の方が拡張が鈍い。底部は202が丸底、203ほとんど丸底であるが、かろうじて平底の痕跡をとどめる。居石遺跡の全容のわかる土器202、203を他の類例と比べてみると、口縁部の形態では空港跡地遺跡S T 05及び稲荷山古墳に形態が似る。また、体部については図示されている類例が口縁部のみであるため不明であるが、図示されていない空港跡地遺跡S T 05出土の壺の体部には、新しい様相を呈する縦方向のヘラミガキは認められないようである⁽⁴⁾。一方、空港跡地遺跡S T 05より後出する国分寺六ツ目古墳出土例や大阪府久宝寺遺跡3号墓周溝出土例には胴部の球形化、口縁端部下方拡張の簡素化、頸部ハケ目のナゲ消し、胴部外面に間隔をおいた縦方向のヘラミガキが認められるという⁽⁵⁾。これらのことから古相を呈する203は空港跡地遺跡S T 05もしくは、稲荷山古墳出土の広口壺に併行するものと考えられ、新相を呈する202は、国分寺六ツ目古墳出土例や大阪府久宝寺南遺跡3号墓周溝出土例に併行するものと考えられる。このことから6～7層出土の古墳時代前期初頭の土器には時期幅が考えられるが、居石遺跡出土のこれらの土器が所属する時期は概ね

布留式の前段階に併行するものと考えられよう。このことは、これらの土器より下層で出土した 裂鏡の時代感とも合致する。

以上、居石遺跡出土の広口壺を他遺跡出土の広口壺と比較検討したが、類例の土器が1点のみの出土であったり、数点の出土であっても口縁部だけの出土であったりと、比較検討する資料が少ない。口縁部の変化による時期差が大きな流れとしては有効であろうが、細かな部分での検討（体部及び底部の形状、調整等）となるとやはり、今後の類例の増加を待って検討していかねばいけないであろう。

- (1) 大久保徹也「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1993
- (2) 花谷浩輔『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会 1991
- (3) 真下拓也、山下平重、佐藤竜馬他『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成3年度』香川県教育委員会（財）香川県埋蔵文化財調査センター 1992
- (4) 註(3)と同じ
- (5) 註(3)と同じ

(2) SR03 5～7層出土土器について

5～7層出土の個々の縄文土器の詳細については第3章第3節で述べたが、ここではこれらの土器を再度検討した上で、比較的縄文時代晩期の編年資料が揃っている対岸の岡山県の資料をもとに居石遺跡出土の縄文土器の編年的位置づけを考えてみたい。

居石遺跡出土土器の特徴

居石遺跡出土の縄文土器には深鉢形土器と浅鉢形土器を確認している。出土している縄文土器の多くが破片になっているため、やや正確さにかけるが、量的には深鉢形土器の方が多いが、その割合は総数108個体に対し、深鉢形土器68個体(63%)、浅鉢形土器40個体(37%)であり、おおよそ6:1である。次に各器種について述べてみたい。

深鉢形土器 深鉢形土器の器形は大きく3種類に分かれ、施文方法によりさらに細分した。

AⅠとしたものは低い山形の口縁もしくは突起をもち、頸部は緩やかにくびれ頸部と胴部の境界下で口縁部径と同じかそれよりも下回る程度に膨らませ、胴部下半に向かってすぼまる形態をする。文様は口縁端部に刻目文、低い山形及び突起から垂下する爪形文あるいは押引文が認められる。また頸部と胴部境に爪形文あるいは押引文が認められる。

AⅡは器形的にはAⅠに似るが、口縁部の山形あるいは突起がみられないのが普通で、文様は口縁端部の刻目文以外認められない。

B I はやや外傾もしくは内傾する口縁部をもち、口縁部から徐々にすぼまる胴部をもつ。いわゆるバケツ状を呈するものである。

3形態の深鉢の割合はA I - 41個体 (60.3%)、A II - 19個体 (27.9%)、B I - 8個体 (11.8%) であり、主体を占めるのはA I である。これらの深鉢の調整方法は頸部及び頸部から胴部に文様をもつA I の口頸部の調整方法は、ナデもしくは最終的な調整方法がナデになるものは28個体 (75.7%)、二枚貝条痕であるものは7個体 (18.9%)、ケズリであるものは2個体 (5.4%) であり、口縁部の調整の主体を占めるのはナデである。

次に胴部外面の調整については、残存している個体数が少ないため傾向に偏りがあると思われるが、二枚貝条痕のものが6個体、ケズリのものが4個体である。口縁部に刻目文を施す以外に文様をもたないA II についての口頸部の調整方法はナデもしくは最終的な調整方法がナデになるものは9個体 (42.9%)、二枚貝条痕であるものも9個体 (42.9%)、ケズリ3個体 (14.2%) であり、調整方法は二枚貝条痕とナデが同数である。胴部外面の調整方法はA I と同様残存している個体が少ないため傾向に偏りがあると思われるが、二枚貝条痕であるもの5個体、ケズリ3個体である。B I についてはケズリ後ナデのものが3個体、二枚貝条痕であるものが2個体である。

浅鉢形土器 形態及び調整方法の違いにより、大きく3種類に分類した。

浅鉢形土器A 古相を呈する粗製の浅鉢である。波状口縁をもつ器形、胴部から口頸部が屈曲しない皿状を呈する器形、胴部から頸部が屈曲する器形の大きく3種類に分類できる。調整は二枚貝条痕、ケズリを中心とする。

浅鉢形土器B 底部からあまり外反せずに上方に立ち上がる胴部及び口縁部をもつもので、碗形及び長胴を呈する器形である。

浅鉢形土器C I 胴部から一旦内側に短く屈曲するが、口頸部の外反が短く口径と胴径の差が少ない器形である。口縁部の違いにより、口縁端部に突起をもつC I a、口縁部を上方につまみ上げ端部外面に凹線を一条巡らせる器形C I b、口縁端部は外反したままでおわる器形C I c、口縁端部内面を蒲鉾形に肥厚させる器形C I dの4種類に細分できる。

浅鉢形土器C II 小さな胴部から一旦内側に短く屈曲し、さらに口頸部が直線的に強く外反した大きな口径を有し、口縁端部内面を蒲鉾形に肥厚させるものを中心とする器形C II a、口縁部内面が肥厚しない器形C II bがある。

これらの浅鉢形土器の割合は総数40個体に対し古相を呈する粗製のもの7個体 (17.5%)、精製のもの33個体 (82.5%) であり、8割強のものが精製土器であることがわかる。

各形態毎の割合は浅鉢形土器A - 7個体 (17.5%)、浅鉢形土器B - 5個体 (12.5%)、

浅鉢形土器 C I - 12 個体 (30.0%)、C II - 16 個体 (40.0%) であり、浅鉢形土器 C で 7 割を占め、そのなかでも C II a としたものが多くみられる。

以上のことから居石遺跡の縄文土器をまとめると以下の特徴が見いだせる。

- (1) 深鉢形土器には A I とした口頸部及び頸部と胴部の境界に爪形文、押引文等の文様を施す特徴的な器種が主体を占める。ただ主体を占める A I 以外にも A II、B I としたものが一定量存在する。
- (2) 深鉢形土器の口頸部の調整方法は A I はナデを行うものが 7 割を越え、二枚貝条痕をもつものは 2 割弱しかない。一方、口縁部以外に文様をもたない A II については、ナデと二枚貝条痕がそれぞれ 4 割強を占める。
- (3) 深鉢形土器の底部はいずれもあげ底もしくは平底を呈し、丸底のものはみられない。
- (4) 浅鉢形土器には古相を呈すると考えられる粗製の浅鉢が 2 割弱存在する。
- (5) 浅鉢形土器の主体を占めるのは浅鉢形土器 C I、C II であり、その中でも C II a とした口縁部内面を蒲筈形に肥厚したものが多くみられるが、その割合は 10 個体 (25.0%) と主体をなすには至らない。

居石遺跡出土縄文土器の編年的位置づけ

居石遺跡出土の縄文土器を検討した結果、以上のような 5 つの特徴が認められた。これらの特徴をもとに対岸の岡山県の編年資料との併行関係を考えてみたい。岡山県の縄文時代晩期の土器の研究は、古くは山内清男氏、鎌木義昌氏らによって編年が行われていたが、近年の大規模開発に伴う発掘資料をもとに岡田博⁽¹⁾、平井勝⁽²⁾、岩見和泰⁽³⁾、山本悦世⁽⁴⁾、亀山行雄⁽⁵⁾、平井泰男⁽⁶⁾の各氏らによって縄文時代晩期の土器の検討が行われている。その中でも精力的に縄文時代晩期の土器編年を行っているのが平井勝氏であり、平井氏は近年の増加した資料をもとに編年案を提示している⁽⁷⁾。対岸の岡山県の資料の編年案としては最も整っていると考えられるため、この編年案に照らし合わせて検討したい。

特徴の (1) である A I にみられる口頸部及び頸部と胴部の境界に施される爪形文等は谷尻式に多くみられる。一方、居石遺跡で一定量みられるバケツ状を呈する B I はその一段階古い時期の舟津原式の新しい時期までしか存在していない。(2) の特徴である調整方法については、口縁部外面では A I としたのものにはナデが多く、A II としたのものには二枚貝条痕が多くみられる。また胴部外面の調整方法では削りよりも二枚貝条痕の方が多くみられるが、爪形文等が多用される谷尻式には削りが大半を占め、当遺跡でみられるような二枚貝条痕を施すものは前段階の舟津原式の新段階でおわっている。(3) の特徴である凹底、平底についても平底は前段階の舟津原式の新段階にしか認められず、谷尻式では新たに丸底が加わるが、当遺跡例には認められない。(4) の特徴である居石遺跡で一定量認められる粗製の浅鉢も谷尻式では認め

られず、一段階古い舟津原式の新段階までしか認められない。(5)の特徴であるCⅡaについては谷尻式に多くみられるが、古相を呈するCⅠなどはどちらかといえば、一段階古い舟津原式の新段階に多くの類例が認められる。

以上、粗い検討から導き出せる結果から居石遺跡出土の縄文土器は突帯文出現直前の谷尻式に多くの共通性を見だせるが、一方では一段階古い要素をもつ舟津原式の新段階の特徴も多く持っている。これを二時期とみなすのか、一時期とみるのかは現在の段階では香川県内に比較検討する良好な一括資料がないため明確にできない。ただ、谷尻式にみられる新しい要素である丸底は居石遺跡例にはみられないことより、谷尻式より若干古いのかもかもしれない。結局のところ明確な併行関係が追えなかったが、居石遺跡の縄文土器は突帯文の出現する以前の晩期前半のおわり頃には比定できることは間違いないようである。勉強不足もあり、うまく検討することができなかった。県内における資料が増加した段階で再度検討してみたい。

- (1) 岡田博他「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 1985
- (2) 平井勝「縄文時代」『岡山県の考古学』1987
「岡山県における縄文時代晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集 1988
「縄文晩期における中・四国の地域性」『考古学研究』142 1989
- (3) 岩見和泰「刻目突帯文土器の成立と展開」『古代吉備』第14集 1992
- (4) 山本悦世「縄文時代晩期の土器群について」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第5冊 1992
- (5) 亀山行雄「第2節 縄文時代の土器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 1993
- (6) 平井泰男「第3節 縄文時代晩期中葉の土器について」「第4節 縄文時代晩期後葉の土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 1995
- (7) 平井勝「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『第6回 中四国縄文研究会 縄文時代晩期の土器編年の諸問題－突帯文の発生と展開を中心として－』資料 1995

第5章

おわりに



一般国道11号高松東道路のうち太田第二土地区画整理事業施工区域内延長1.7km、面積72,000㎡の埋蔵文化財保護行政を高松市教育委員会が担当することになったのは、昭和62年12月15日のことである。

一般に埋蔵文化財保護行政は国の事業に関する調査は県教育委員会が担当するが、事業に関していえば市施工区画整理区域に包含されるとして市教育委員会が担当するいきさつとなった。従って調査実施に先立って問題が山積していた。

まずは調査員の決定的不足である。続いて事務的にもまた技術的にも経験不足である。何から何まで手探りで開始されたといつていいだろう。その為に委託を受けた建設省四国地方建設局および香川工事事務所には大変ご迷惑をおかけすることとなった。改めてお詫びするとともに厚く謝したい。

調査事業は山積する問題を一つ一つ処理しながら発掘調査を実施することとなった。

調査は浴・長池遺跡から開始することとなった。平成元年のことである。それから平成2年度には浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡と井手東Ⅱ遺跡、平成3年度には井手東Ⅰ遺跡と居石遺跡、発掘調査の最終年度である平成4年度には蛙股遺跡の調査を実施した。これらの調査全体が終了したのが平成4年9月30日である。調査が開始されて約4年1ヶ月間の長期にわたる調査であり、総調査面積は42,670㎡である。

一方、整理作業は平成2年度から開始された。発掘調査に従い浴・長池遺跡から開始され、本報告の居石遺跡で完了した。ちなみに平成4年度浴・長池遺跡、平成5年度浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、平成6年度井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、平成7年度蛙股遺跡、居石遺跡の各報告書を発刊することとした。

これらの発掘作業、整理作業と一連の調査の成果について簡単にまとめてみたい。

浴・長池遺跡は香東川の旧河道を含むその堆積土層中より多くの弥生土器が検出された。土器は前期末から中期初頭の土器を最も含み、一部後期に下るまでのものが見られる。この遺跡の発掘調査前まで、まとまった弥生時代中期の土器群は確認されていなかった。そうした意味では極めて重要な発掘調査事例であった。

また調査区の西側の完全埋没旧河道底から縄文時代晩期に属するとされた本市林・坊城遺跡出土のスプーン状木製品と同様なものが出土した。弥生時代初頭までの遺物を含んでいるが、林・坊城遺跡の事例がそれに限らないことを証明した。

浴・松ノ木遺跡は浴・長池遺跡の東側に位置し大きな香東川旧河道の東側部分を含む。この旧河道は弥生時代から埋没が進んだらしく、現時点ではまだ完全に埋没していない。この旧河道には古代から中世に至るまで幾段階にもわたる水田が確認された。発掘調査を試みた3枚の水田面はいずれも不定形小区画水田である。旧河道埋没過程における土地利用が明確となった。

浴・長池Ⅱ遺跡で特筆すべきなのは弥生時代前期末に属すると考えられる、不定形小区画水田である。不定形としたが、等高線に沿っていずれも長方形区画をしており、極めて規則性のある水田と評える。検出面積は2,000㎡に及び、かつ浴・長池遺跡や北方の弘福寺領讃岐国山田郡山田比定地遺跡でも同様の水田が検出されており、弥生時代前期末にはかなり広範囲に置いて相当高度な水田耕作が行われていたことが明らかとなった。

井手東Ⅱ遺跡からは縄文末・弥生初頭の旧河道が検出され、石棒等の遺物が少量であるが検出できた。

井手東Ⅰ遺跡でも大きな成果があがった。まずアカホヤ火山灰が発掘調査において地表下約1mにおいて高松平野で初めて検出されたことである。この検出によってアカホヤ火山灰噴出後から現在まで少なくともここ井手東Ⅰ遺跡では大きな地形の変動はなかったものと解釈できよう。

弥生時代中期中葉の遺物も多量に検出できた。ここで特に注目したいのは各種の木器である。琴、杵等の各種木器は様々であり、高松平野の木器研究の基本的資料となることが期待できる。

蛙股遺跡では畑を確認することができた。幾条もの畝が平行に走っており、かつ近接する条里に平行する道路状遺構との関係から古代のものと考えている。少なくとも、遺構面から高松平野での畑作を確認した初例である。

居石遺跡内には香東川に起因する旧河道が存在する。遺跡の西方において鏡三面が出土した。古墳時代初頭の埴製鏡である。水路取りつけ部分より集中的に出土していることから水に係る祭祀と考えている。この居石遺跡の東端からは縄文時代晩期中頃の土器が出土している。凸帯文以前の土器で高松平野でまとまって出土した初めての事例である。

これらの遺跡を複合的にみれば、さらなる成果があげることができる。例えば旧河道の埋没についても浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡内の旧河道が居石遺跡内の旧河道の埋没より早いことがわかる等である。条里制に沿う溝等も多く検出されている。これらのことは、いずれ多の遺跡も含めて検討された場合、もっと多くの、そして大きな成果が得られることだろう。

さてこの調査全体のまとめの稿の最終段階に入って、本調査区の近くで実施された我が国最古の田園弘福寺領讃岐国山田郡山田比定地を対象にした調査をあげなければならない。文化庁の国庫補助事業で実施された事業で、昭和63年度からの開始である。この調査にあたって、弘福寺領讃岐国山田郡山田調査委員会を組織した(委員長木原博幸香川大学教授)。この調査委員会は弘福寺の調査指導の一方で、近隣で実施される本調査においても各種の助言、指導をいただいた。それにより調査の幅は大きく広がったように考えている。例えば遺物もなく畦畔以外の顕著な遺構のない水田調査は委員会の先生方に指導をいただく中で多くの水田面を確認することができた。

自然科学的分析では、プラント・オパール、花粉分析等の手法も導入した。これにより居石遺跡では縄文時代晩期中頃の旧河道埋土中よりプラント・オパールを検出している。

その他報告書作成にあたっては写真撮影を委託する等、調査員にかかる作業の軽減化を測った。このようにして、一般国道11号高松東道路の調査は、大きな成果をあげ無事終了することができた。ここに委託先である建設省四国地方建設局・香川工事事務所に改めて感謝の意を表するとともに、成果を報告したい。

また、各分野の諸先生方には、いろいろのご教示を賜った。改めて各報告書に対するご批判等をいただきたい。

悪条件の中、実際の現場で発掘作業、整理作業をお手伝いいただいた方々には、書面上ではあるが厚く感謝申し上げたい。

最後になるが、教育委員会文化振興課をはじめ太田第2土地区画整理事務所他関係諸機関にも感謝申し上げる。

付 編

出土遺物分析・自然科学的分析

第1節 弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について

高倉洋彰（西南学院大学）

I 居石遺跡出土の仿製鏡

香川県高松市居石遺跡から出土した遺物のなかでことに興味もたれる資料に、調査区西側を流れる幅25m、深さ2mの規模をもつ自然河川の西岸川底から検出された、3面の銅鏡がある。3面は北から大（珠文鏡）・中（重圏文鏡）・小（素文鏡）の順に50cmほどの間隔をもって検出された。河川と水田とを結ぶ灌漑水路の取排水口に当たる出土の位置と、廃棄というよりも意識的に置かれたことを考えさせる出土の状況からみて、水にまつわる祭祀に用いられたとみられるからである。

近年、祭祀に用いられたと考えられる極小形の銅鏡の例が増えている。そこでその好例である居石遺跡出土の銅鏡の特徴を述べ、各地の類例を点検して、改めて性格を考察してみることとする。

まず大きさの順に3面の銅鏡の特徴をみておこう。

珠文鏡 最も大きい鏡で、面径5.35cmをはかる。鈕部での厚さ0.6cm。鏡背の文様は面径のわりには1cmと幅広につくられた平縁が特徴的で、これも特徴的な太めの鈕に向かって直行櫛歯文帯・珠文帯をめぐらせている。鈕には鈕座や周囲を欠き、頂部を擦ったようにして仕上げている。一部に銅錆がみられるものの、残存状況はきわめて良い。

重圏文鏡 面径3.55cmで珠文鏡よりもかなり小さいが、厚さは変わらず、鈕の大きさが目立つ鏡である。周縁端から鈕に向かってほぼ平坦につくられているが、端部をやや厚くして縁部を意識させている。背文は鈕をめぐる1圏のみで、これによって内外2区に分けている。1圏のみだが重圏文の省略形として重圏文鏡に分類しておく。鈕の頂部はやはりわずかに擦られている。圏線の内側に赤錆が付着しているが、鏡そのものの残りは良い。

素文鏡 3面中最も小さな例で、面径2.75cmの小鏡である。厚さも0.45cmと薄くなっている。鏡背には円板に鈕が付くのみで、縁部の表現を含めて一切の文様を欠く、素文鏡である。鏡の残りは良いが、鏡背に銅錆が付着している。

以上のように、3面の銅鏡は5.35～2.75cmの小鏡であり、鏡背の文様構成や銅質などからみて、筆者が弥生時代小形仿製鏡として分類する鏡のうち櫛歯文鏡・重圏文鏡・無文（素文）鏡の一群に属する（高倉 1972・85）。弥生時代小形仿製鏡には珠文を主文にする例はないが、たとえば鳥取県長瀬高浜遺跡の櫛歯文鏡のように櫛歯文の内側に珠文をめぐらすことがあり、それが珠文帯として完成している居石遺跡の珠文鏡は櫛歯文鏡の亜種としてとらえられる。

このような鏡そのものの特徴からすれば、居石遺跡出土鏡は弥生時代小形仿製鏡の最終段階にあり、実際の製造開始は古墳時代にはいつてからのものであるとみられる。

II 祭祀遺跡と仿製鏡

近年弥生時代小形仿製鏡の出土はますます数を増し、弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」(白石・設楽 1994)には約200面が収録されている。これらのなかには内行花文を主文にせず、祭祀の可能性の強い遺構や祭祀の結果とみられる出土状態を示す例があり、これらの鏡はおしなべて面径がきわめて小さい。そこから弥生時代小形仿製鏡はやがて古墳時代に儀鏡として終焉していくと見通している(高倉 1985)。このような視点から、先のデータのうちの祭祀遺跡および集落や包含層など明らかに古墳・墳墓ではない遺跡・遺構から出土した銅鏡で、面径6cm未満の例を表1にまとめてみた(遺漏分を追加している)。同様の条件で出土する面径6cm以上の銅鏡の数は少なく、小形であることにこの種の鏡の特徴がある。もちろん和歌山市大谷古墳の内部主体である家形石棺に副葬された14面の銅鏡(2.6~3.4cmの素文鏡9面と2.8~6.0cmの四鈴素文鏡5面)がいずれも素文の小鏡だった(樋口・小野山・西谷 1959)ように、古墳に副葬されることもある。だがこれは例外的で、多くの場合、やはり古墳や墳墓でない遺跡や遺構から出土している。したがって、祭祀遺跡もしくは集落や包含層などから面径が6cmに満たない小鏡が出土するには、それを必然とする背景を考慮できよう。以下、表1をもとに若干の検討を加えることにする。

出土の遺構は、住居跡の20例がもっとも多く、祭祀遺構19例が次いでいる。祭祀遺構に居石遺跡や滋賀県坂田郡近江町高溝遺跡の溝における祭祀と報告されている例を含んでいるように、単に溝や河川からの出土と報告されている例は祭祀に関係した可能性がある。さらには住居跡出土例には、広島市真亀C遺跡で指摘された(金井 1977)ように、本来祭祀に係る可能性があるから、実際には祭祀関係が過半を占めているとみてよい。だが、祭祀の形態はさまざまである。

筆者がこの種の小鏡の出土状態に関心を抱くようになった契機は鳥取県東伯郡羽合町の長瀬高浜遺跡の例にある。長瀬高浜からはこれまで14面の小鏡が検出されているが、このうち古墳出土の1面と面径不明の例などを除いた9面が対象になる。ことに15Ⅰ区の土坑SP01からは銅鏡3面をはじめ京中の要素をもつと判断された先端が「ハ」の字形につくられた剣先形鉄製品約80点などが出土し、祭祀の場そのものなのか、不用になった祭祀具の廃棄の場であったのかは不明であるものの、祭祀に係る遺構と考えられている。出土の銅鏡は3面とも素文鏡で、面径は2.4cm~2.7cmと居石遺跡の素文鏡よりも小さい。なお、この報告にともなって、古墳出土の素文鏡を集成した近藤滋氏が小形の素文鏡は祭祀遺跡から出土する傾向をもつ

と指摘したこと（鳥取県 1980）が、この種の鏡の研究の嚆矢となっている。

これとは別に、櫛齒文鏡が竪穴住居SB40を前方後方形に取り囲む溝の肩部から検出されている。SB40は長浜高瀬集落の核となる基物と考えられていて、周囲から多種多様な祭祀具が出土している（鳥取県 1983）。素文鏡も祭祀具のひとつとされているが、SB40の周辺から銅鏡とともに素文鏡が多く出土したと述べられていて、表1中の長瀬高浜出土例の多くがそれに相当すると思われる。

兵庫県明石市藤江別所遺跡からは直径5mほどのほぼ円形のプランをもつ祭祀土壇が検出されている（明石博 1994、稲原 1994）。摺り鉢状に掘られた土壇の中央部から直径3mの正円形の穴が垂直に掘り下げられていて、このような形状や、段丘崖下の湧水点に位置することもあって、井戸と考えられている。だがこの井戸が単なる水汲み用のものでなかったことを出土遺物が物語る。

井戸の埋上からはさまざまな遺物が出土している。井戸本体部の下層には弥生時代後期の完形の甕・壺が数個あり、上層から土壇底部にかけてからは土師器の甕・壺、須恵器の壺・罍などととも車輪石・滑石製勾玉・銅鏡・銅鏃などが出土している。遺物からみて古墳時代前期～中期のころのものであろう。さらにその上層からは、「南家」などの黒書のある古代の土器、五輪塔をかたどった笹塔婆や転読札などの経木類などの中世の遺物、さらには江戸時代初期の遺物もある。

井戸を取り囲むようにして周囲から弥生時代後期の土器がまとまって検出されていることや、下層に後期の土器が納められていたことから、井戸の開削が弥生時代後期に行なわれたことは疑いない。以来、この井戸は徐々に埋まりながら、江戸時代の初めまで連続して使われ続けていたことになる。弥生時代の井戸に祭祀土器を納めることは福岡市板付遺跡をはじめ例がある。車輪石・滑石製勾玉・銅鏡・銅鏃は古墳副葬品に通じるが、滑石製勾玉は祭祀遺物でもあり、またこれらの組合せは福岡県沖ノ島祭祀遺跡にある。中世遺物はまさに祭祀遺物である。このようにみると、この井戸が徐々に埋まりながら、つまり井戸としての本来の機能を喪失しつつも、連続して祭祀遺物を納められ続けたのは、ここが信仰の対象であったからにほかなるまい。湧水点に位置することからみても、水神に関する井戸祭祀の遺構と判断できるのである。

井戸の上層から出土した銅鏡は9面ある。素文鏡2面（2.59～3.96cm）、重圈文鏡2面（2.96・3.34）、櫛齒文鏡3面（3.87～4.15cm）、珠文鏡2面（5.10・6.47cm）で、いずれも残りがよく、明瞭に顔を写すことのできる例もある。相対的に珠文鏡が大きく、素文鏡および鈕のまわりに1圈をめぐるみの重圈文鏡が小さい。

出土遺跡のなかには福島県西白河郡建鉾山遺跡や静岡県熱海市宮脇遺跡・奈良県桜井市山ノ神遺跡などのように明確な遺構をとともなう祭祀遺跡が含まれているが、その典型として福岡県

宗像郡の沖ノ鳥遺跡がよく知られている。沖ノ鳥の祭祀は巨岩上に磐座をつくる岩上祭祀から巨岩そのものを依代とする岩陰祭祀、そして半岩陰半露天祭祀、露天祭祀と変遷する。最古の遺構はI号巨岩の上で祭祀が営まれた18号遺跡だが、次いでI号巨岩とそれを支える巨岩の間に奉獻品を並べるようになる。16号遺跡はこの例で、巨岩の間隔に三角縁神獸鏡や石釧、鉄刀・鉄剣・鉄斧などの鉄製品、ヒスイ製や滑石製の勾玉をはじめとする装身具など古墳副葬品と同じ種類の遺物が納められている。そのなかに面径3.0cmの素文鏡がある（鏡山ほか1958）。18号遺跡からも小形素文鏡の出土が伝えられている。

沖ノ鳥遺跡においては、岩上祭祀段階の奉獻品はわずかながら金属製品に雛形品があらわれている程度で古墳副葬品に通じているが、岩陰祭祀段階以降には金属製雛形品や滑石製模造品が増大していく。鏡についていえば、三角縁神獸鏡をはじめとする古墳副葬鏡と同じ種類の銅鏡は小形素文の鉄製雛形鏡へと変化していく。したがって青銅製の小形素文鏡は両者の過渡を示すことになる。

以上に紹介した諸例の出土状況は、素文鏡をはじめとする小鏡のもつ祭祀具的性格をうかがわせ、弥生・古墳時代銅鏡が祭祀用に変化していく儀鏡化の過程を示しているといえる。

Ⅲ 儀鏡化の段階

表1に収めた78面の銅鏡のうち、典型的な弥生時代小形仿製鏡11面と1面のみの鋸歯文鏡、銅製儀鏡とあって鏡背文様を確かめ得なかった2面を除いた64面は、素文鏡40・重圏文鏡9・珠文鏡8・櫛歯文鏡7に細分できる。これは先に重圏文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類の退化過程を示すと指摘した鏡類（高倉 1985）にほかならない。第Ⅲ型b類は幅広の平縁の内側に直行櫛歯文帯・円圏・文様帯（珠文と「+」字状に変化した擬銘帯）を配し、中央に鈕を置くことを特徴とする。それが幅広の平縁+直行櫛歯文帯+重圏文帯（2～4重の円圏）+鈕の順に変化したものを重圏文鏡としてまとめ、円圏が1重のみのものを櫛歯文鏡とした。文様の簡化がさらにすすめば素文鏡にいたるし、当時は資料がなかったが、文様帯の珠文が強調されれば珠文鏡を生むことになる。そしてこのことを64面の銅鏡が示す次の数値が証明してくれる。

	面数	面径～3.0	3.1～4.0	4.1～5.0	5.1～6.0 (cm)
素文鏡	40	20	15	3	2
櫛歯文鏡	7	0	4	3	0
重圏文鏡	9	0	4	2	3
珠文鏡	8	0	1	3	4
(参考) 弥生時代小形仿製鏡	11	0	2	4	5

素文鏡は長瀬高浜遺跡SI-60付近出土鏡の1.9cmを最小に、過半の20面が3cm以内、15面が3.1~4.0cmであり、出土数の87.5%が4cmを下回る面径を極小鏡ということがわかる。次いで3.7~4.4cmの範囲にある櫛歯文鏡が小さく、重圏文鏡、珠文鏡、弥生時代小形仿製鏡の順に面径が増えている。このように面径の縮小と鏡背文様の変化とは明らかに対応しているのである。したがって弥生時代小形仿製鏡、ことに重圏文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類が素文鏡を生み出すにいたる段階は、以下のように整理できる。

第1段階（重圏文鏡段階）弥生時代後期末にあらわれる、幅広の平縁+直行櫛歯文帯+円圏+文様帯（珠文と「+」字状に変化した擬銘帯）+鈕からなる重圏文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類が、面径の縮小にともない文様帯部分を2~4重の円圏のみとする重圏文鏡を創り出し、一方で小粒の珠文を強調した珠文鏡を生む。洗練された意匠の珠文鏡は主として古墳副葬鏡として使用され、儀鏡からは外れていくが、重圏文鏡は双方の道を歩んでいく。

第2段階（櫛歯文鏡段階）さらなる面径の縮小は鏡背から文様帯のスペースを奪う。それは重圏文鏡からの重圏文帯の喪失であり、結果として重圏文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類から文様帯を取り去った、平縁と櫛歯文帯、その内側をめぐる1重の円圏、そして鈕という簡素な文様となる。

第3段階（素文鏡段階）面径の極小化は鏡背から文様帯そのもののスペースを奪い、鏡背はキャンパスとしての役割を放棄する。鏡背に鈕を造り鏡であることを主張するが、素文鏡の多くは平縁すら欠いている。つまり鈕付きの円板と化している。この段階にいたると、和歌山市大谷古墳のような古墳副葬例もあるが、儀鏡としての性格が確立する。

IV 儀鏡化の時期

表1で祭祀遺跡・遺構出土とされている諸例を時期的にみると、次のようになる。

	古墳前期	前期～中期	中期	中期～後期	後期
珠文鏡	1 (1)	2 (2)	1 (2)	0	0
重圏文鏡	2 (6)	1 (2)	0	0	0
櫛歯文鏡	0	3 (3)	0	0	1 (2)
素文鏡	6 (12)	4 (4)	6 (9)	1 (1)	1 (3)
儀鏡	0	0	0	0	2

前期の祭祀遺跡出土例は滋賀県坂田郡高溝（重圏文鏡・素文鏡各1面）、鳥取県東伯郡長瀬高浜（素文鏡3面）、香川県高松市居石（珠文鏡・重圏文鏡・素文鏡各1面）、福岡県宗像郡沖ノ島（素文鏡1面）の各遺跡にあるが、櫛歯文鏡を除いてすでに各鏡式が揃っている。なかで

も第3段階の出現とした素文鏡は前期から出土数が多く分布域も広がりをもっている。素文鏡のもつこの傾向は括弧内に記したその他の遺構出土例を含めても変わらず、中期まで続く。これに対し重圈文鏡は前期に多くみられる。櫛歯文鏡はやや遅れてみられるが明石市藤江別所遺跡の例だけであり、珠文鏡とともにおおむね前期から中期にかけて使用されたであろうと推測している。後期になると諸鏡ともに激減し、福岡県沖ノ島遺跡の鉄製儀鏡に象徴されるように、完全な儀鏡と化していくことになる。

以上のような変遷は、前述した儀鏡化の3段階と鏡式の変化が、かならずしも一致しないということでもある。大阪以東に分布する弥生時代小形仿製鏡は、多くは包含層もしくは住居跡からの出土と報告されていて、墳墓に副葬されないという共通項をもっている。重圈文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類もそうで、弥生時代後期後半の大阪府東大阪市亀井遺跡のように、高松市居石遺跡に通じる河川跡から出土した例もある。こうした事例を考慮すれば、4cmを下回るような小鏡の儀鏡的性格は弥生時代の段階で準備され、古墳時代にはいるとともに古墳副葬鏡とは別の祭祀具としての性格をもつ鏡として定着したとみることができよう。この場合、先の3段階はあくまでも重圈文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類から素文鏡にいたる意匠の変化過程で、時間的には弥生末古墳初の短期の間に準備されたとみておきたい。

本稿では儀鏡化の過程を素描するに止まってしまったが、居石遺跡や藤江別所遺跡の好例を得て分析の深化が可能になったこの種の鏡は類例の増加が予測されるので、今後に期したい。

引用文献

- 明石市立博物館 1994『発掘された明石の歴史展—藤江別所遺跡—』
稲原 昭嘉 1994「兵庫県明石市藤江別所遺跡」（『祭祀考古』2）
鏡山猛・原田大六・坂本経堯・渡辺正気ほか 1958『沖ノ島』宗像神社復興期成会
金井克龟編 1977『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』
白石太一郎・設楽博己編 1994『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』（国立歴史民俗博物館研究報告56）
高倉 洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」（『考古学雑誌』58-3）
1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」（『考古学雑誌』70-3）
鳥取県教育文化財団編 1980『長瀬高浜遺跡Ⅲ』（鳥取県教育文化財団調査報告書4）
1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』（鳥取県教育文化財団報告書12）
樋口隆康・小野山節・西谷真治 1959『大谷古墳』和歌山市教育委員会

表① 墳墓副葬鏡以外の小形仿製鏡出土一覧

鏡No	鏡式名	遺存度・直径	遺跡・遺構名	所在地	遺跡	遺構	遺構の年代
1	珠文鏡	完形 4.6 cm	連鉾山祭祀遺跡遺物包含層	福島県西白河郡表郷村大字三森字高野峯山	祭祀	遺物包含層	古墳中期
2	素文鏡	完形 3.2 cm	釜付遺跡墳丘東側	茨城県那珂郡東海村釜付	祭祀	祭祀場	古墳中期
3	銅製儀鏡	完形 4.8 cm	久保遺跡	群馬県富岡市大字曾木字久保827	祭祀	祭祀遺構	古墳中期
4	銅製儀鏡	完形 2.5 cm					
5	重圈文鏡	完形 約4.0 cm	新田東部遺跡群	群馬県新田郡新田町大字小金井	集落	遺物包含層	古墳前期
6	弥生小形仿製鏡	完形 3.7 cm	明花向遺跡B区II-13-23グリッド遺物包含層	埼玉県浦和市大字谷口字向	集落	遺物包含層	弥生Ⅱ期
7	素文鏡	完形 2.95 cm	草刈六之台遺跡823号住居	千葉県市原市草刈六之台1289ほか	集落	竪穴住居	古墳後期
8	重圈文系鏡	完形 5.4 cm	草刈遺跡K区039号竪穴住居	千葉県市原市草刈大宮台	集落	竪穴住居	古墳前期
9	重圈文鏡	欠損 5.0 cm	伊興遺跡谷下地区(表向採集)	東京都足立区東伊興町	集落・祭祀		古墳前～中期
10	珠文鏡	欠損 5.5 cm	伊興遺跡狭間地区Aトレンチ第1層下部	東京都足立区伊興町狭間	集落・祭祀		古墳前～中期
11	素文鏡	完形 5.9 cm	宇津木向原遺跡4区5号住居跡	東京都八王子市宇津木町向原	集落	竪穴住居	弥生庄内式併行期

伴出遺物	出土年	所蔵・保管者	文献	備考
武器(鉄矛1・鉄剣残欠3・鉄刀残欠4)、石製模造品(鏡27・銅1・斧26・鎌11・刀子29・劍形品569・有孔円板518・勾玉24・白玉278)、土器(土師器64)	1958年発掘	国学院大学 日本文化研究所	6	
武器(直刀)、石製模造品(劍形197・有孔円板126・勾玉4・白玉2)、土器(手捏土器42)、その他(鉄器残片)	1985～1986年 発掘	東海村教育 委員会	15・16	
装身具(鉄耳環1・水晶切子玉10・泥岩管玉1・硬玉平玉2・ガラス小玉2)、生産用具(鋤1・刀子1・鎌1)、武器(矛1・劍5)、石製模造品(円盤1302・勾玉318・劍560・刀子61・鎌13・盾27・鎌7・斧59)、土器(須恵器杯・高杯・甕・提瓶・煎茶壺・大甕、土師器手捏・壺・増・高杯・杯・椀・甕・甌)	1982年発掘	富岡市教育 委員会	2	
土器(土師器)	1989年発掘	新田町教育 委員会		周辺に古墳前期の堅穴住居群がある。
	1982年発掘	財団法人埼玉 埋蔵文化財調査事 業団	55	穿孔あり。全体はやや歪んでいるが、鏡面は滑らかで、わずかに凸面となっている。紐は幅3.5mm程の帯状で、その位置は円の中心をやや外れている。頂部は欠失するが、断面は半円を呈すると思われる。縁の断面はわずかに三角形状となり、その一端には径2mm程の小孔が穿たれている。文様は紐の周囲に環状形をした4個の突起、縁部には7個の帯状突起がそれぞれ鑄出されている(根文より)。
	1980年発掘	(財)千葉県 文化財センタ ・千葉調 査事務所	37・48	鏡は古墳時代後期の堅穴住居跡覆土から出土した。混入品と考えられる。
石製品(グリーンタフ管玉1・蛇紋岩管玉1)、土器(鉢・高杯・甕・甍)	1992年発掘	(財)千葉県 文化財センタ ・千葉調 査事務所	66	穿孔あり。内区に縦銘帯をもつ須品がある。
	昭和以降	足立区立郷 土博物館	9・11・14	西垣隆雄採集品。
	1957年発掘	足立区立郷 土博物館	11・14	
土器(高杯)	1964年発掘	八王子市郷 土資料館	13	穿孔あり。紐は当初から環状を呈していなかったためか、縁に2孔を穿っている。

鏡 No.	鏡式名	遺存度・直径	遺跡・遺構名	所在地	遺跡	遺構	遺構の年代
12	重圈文鏡	欠損 5.6 cm	碓山遺跡第Ⅱトレンチ	神奈川県横浜市鶴見区上末古	集落	表土層	不明
13	内行花文鏡	欠損 5.7 cm	大塚第二地区遺跡群No.2地区YT-10住居跡	神奈川県横浜市緑区大塚町962-2ほか	集落	竪穴住居	弥生V期
14	素文鏡	完形 3.3 cm	万田熊ノ台遺跡方形周溝墓南溝	神奈川県平塚市万田下万田441	墳墓(方形周溝墓)	溝	古墳前期
15	素文鏡(重圈文?)	完形 3.9 cm	小深田遺跡第7地点D-23号住居跡	静岡県焼津市小川大字小深田	集落	竪穴住居	古墳前期
16	柳歯文鏡	完形 4.4 cm	元宮川神明原遺跡	静岡県静岡市高松, 宮川, 水上	祭祀	不明	古墳後期
17	素文鏡	完形 5.2 cm	宮脇遺跡(多賀神社)	静岡県熱海市上多賀	祭祀	磐座・神木	古墳中期
18	素文鏡	完形 3.5 cm					
19	素文鏡	欠損 4.3 cm	洗田遺跡遺物包含層	静岡県下田市吉佐美大字洗田	祭祀	遺物包含層	古墳時代
20	素文鏡	完形 3.3 cm	土山遺跡	三重県名張市大字青蓮寺字上山	祭祀	不明	不明
21	柳歯文鏡	完形 3.9 cm	袋谷遺跡遺物包含層	滋賀県大津市石山寺辺町	貝塚	遺物包含層	不明
22	素文	完形 3.2 cm	松原内湖遺跡遺物包含層	滋賀県彦根市松原町	集落	遺物包含層	古墳時代
23	素文鏡	完形 2.6 cm	下長遺跡溝SD-5	滋賀県守山市古高町	集落・祭祀	溝	古墳中期
24	素文鏡	完形 3.7 cm	下長遺跡土坑SK-1	滋賀県守山市古高町	集落・祭祀	土坑	古墳中期
25	珠文鏡	完形 5.4 cm	金森西遺跡	滋賀県守山市金森町	集落	不明	古墳時代
26	重圈文鏡	完形 3.5 ~ 3.65 cm	高溝遺跡	滋賀県坂田郡近江町大字高溝	集落・祭祀	人溝	古墳前期
27	素文鏡	完形 3.3 cm					
28	珠文鏡	完形 4.5 cm	千手寺山遺跡(第2次)遺物包含層	大阪府東大阪市東石切町	集落	遺物包含層	不明
29	珠文鏡	完形 4.5 cm					
30	素文鏡	完形 2.5 cm	西ノ辻遺跡	大阪府東大阪市西石切町1丁目	集落	水利施設	古墳後期
31	重圈文日光鏡系	完形 5.4 cm	亀井遺跡	大阪府八尾市亀井町	集落	河川内	弥生V期

伴出遺物	出土年	所蔵・保管者	文 献	備 考
	1975年発掘	神奈川県立博物館	1	
土器(高杯・壺・甕)	1991年発掘	日本商業史研究所	なし	穿孔あり・破面研磨。
装身具(首玉2)、武器(鉄鎌1)、土器(溝内より出土)	1979年発掘	平塚市博物館	13	
	1981年発掘	焼津市歴史民俗資料館	30	縄は1)-23号住居跡覆土中から出土。
	1985年発掘	静岡県権蔵文化財調査研究所	24	
生産用具(鉄製鋤先)、石製模造品(有孔円板)、土器(手捏土器)、その他(土丸玉)	1958年発掘	加藤学園考古学研究所	2・43	甕に3面ある。完形だが、面径不明。
石製模造品(滑石勾玉・滑石白玉・滑石菅玉・滑石有孔円板・滑石剣形)、土器(手捏土器・土師器・須恵器・甕)	発掘	國学院大学または下田市教育委員会	2・43	
不明	1977年発掘	名張市教育委員会	1・38	
	1982年発掘	滋賀県教育委員会	65	
	1987年発掘	滋賀県教育委員会		
土器(須恵器・土師器)、その他(木器)	1983年発掘	守山市教育委員会	13	
	1983年発掘	守山市教育委員会	13	
	不明	西村吾一		
	1987年発掘	近江町教育委員会	69	
	1988年発掘	(財)東大阪市文化財協会	114・116	阿型縄 包含層から2面出土(同范)。
	1985年発掘	(財)東大阪市文化財協会	92・116	
	1982年発掘	(財)大阪文化財センター	85・86・108	

鏡 No.	鏡式名	遺存度・面径	遺跡・遺構名	所在地	遺跡	遺構	遺構の年代
32	素文鏡	完形 2.4 ~ 2.5 cm	久宝寺遺跡住居跡 4 (第9次調査)	大阪府八尾市北亀井町 3 丁目	集落	竪穴住居	古墳前期
33	素文鏡	完形 2.85 cm	古田南遺跡	兵庫県神戸市西区玉津町大字枝吉	集落	溝	
34	重圓文鏡	欠損 3.8 cm	下坂部遺跡	兵庫県尼崎市下坂部 3 丁目	集落	遺物包含層	古墳前期
35	素文鏡	3.5 cm	長越遺跡	兵庫県姫路市	集落		
36	素文鏡	完形 2.59 cm	藤江別所遺跡	兵庫県明石市藤江字別所	集落	祭祀井戸	古墳前～中期
37	重圓文鏡	完形 2.96 cm					
38	重圓文鏡	完形 3.34 cm					
39	栴檀文鏡	完形 3.87 cm					
40	素文鏡	完形 3.96 cm					
41	栴檀文鏡	完形 4.10 cm					
42	栴檀文鏡	完形 4.15 cm					
43	珠文鏡	完形 5.10 cm					
44	素文鏡	完形 3.0 cm	山ノ神遺跡	奈良県桜井市馬場山神	祭祀	磐原	古墳中期
45	栴檀文帯鏡	完形 3.5 cm	大福遺跡 J 44 地区遺物包含層	奈良県桜井市大福	集落	遺物包含層	古墳時代
46	素文鏡	4.5 cm	安捨寺跡	奈良県桜井市阿部	寺跡	遺物包含層	古墳時代
47	栴檀文鏡	3.7 ~ 3.8 cm	多遺跡	奈良県磯城郡田原本町多	採集		
48	重圓文鏡	欠損 4.5 cm	北田井遺跡	和歌山県和歌山市宇北	集落	竪穴住居	弥生 V ~ 注内式併行期
49	素文鏡	完形 2.7 cm	長瀬高浜遺跡 15 I - SP01	鳥取県東伯郡羽合町大字長瀬字高浜	集落	祭祀遺構	古墳前期
50	素文鏡	完形 2.6 cm					
51	素文鏡	完形 2.4 cm					

伴出遺物	出土年	所蔵・保管者	文献	備考
	1991年発掘	(財)八尾市文化財調査研究会	164・165・167	
	1977年発掘	神戸市教育委員会・神戸市埋蔵文化財センター		庄内期の溝で、布留埋没の溝下層出土。1977年調査。
	1956年発掘	尼崎市教育委員会	13	
	1971年	瀬戸内考古学研究所	なし	
車輪石、滑石製勾玉、銅鏡、土師器壺・甕、須恵器壺・甕など	1993～94年発掘	明石市立文化博物館		明石市立文化博物館榎原昭嘉氏のご教示による。
装身具(勾玉・白玉)、石製模造品(有孔円板・勾玉)、土器(手捏土器壺・高杯ほか)	1918年発掘	東京国立博物館	3・94	後藤鏡No.88-2。「日本における古鏡」44-1。
	1974年発掘	榎原考古学研究所	18	「日本における古鏡」55-1。
	1965年発掘	榎原考古学研究所	39	「日本における古鏡」51-1。
	1981年採集	榎原考古学研究所		
土器(弥生土器・古式土師器)	1970年発掘	和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	4	
装身具(ガラス小玉2)、その他(銅先形鉄製品・銅形鉄製品)	1979年発掘	羽合町教育委員会	49	

鏡 No	鏡式名	遺存度・直径	遺跡・遺構名	所在地	遺跡	遺構	遺構の年代
52	素文鏡	完形 3.0 cm	長瀬高浜遺跡 16 I - SK01	鳥取県東伯郡羽合町大字長瀬字高浜	集落	土坑	古墳中期
53	素文鏡	完形 3.2 cm	長瀬高浜遺跡 S I -138	鳥取県東伯郡羽合町大字長瀬字高浜	集落	竪穴住居	古墳中期
54	素文鏡	完形 2.6 cm	長瀬高浜遺跡 S I -100	鳥取県東伯郡羽合町大字長瀬字高浜	集落	竪穴住居	古墳中期
55	素文鏡	完形 1.9 cm	長瀬高浜遺跡 S I -60 付近 (13 E - II -d 地区)	鳥取県東伯郡羽合町大字長瀬字高浜	集落	不明	古墳時代
56	素文鏡	完形 2.2 cm	長瀬高浜遺跡 10- I	鳥取県東伯郡羽合町大字長瀬字高浜	集落	不明	古墳時代
57	柳南文鏡	完形 3.7 cm	長瀬高浜遺跡 SD-02	鳥取県東伯郡羽合町大字長瀬字高浜	集落	溝	古墳後期以降
58	朝鮮製小形仿製鏡	完形 4.4 cm	足守川加茂 B 遺跡	岡山県岡山市大字加茂	集落	竪穴住居	弥生庄内式併行期
59	弥生小形仿製鏡 (唐鏡文鏡)	完形 5.9 cm	津寺遺跡	岡山県岡山市大字津寺字中原	集落	竪穴住居	古墳前期
60	素文鏡	完形 2.97 cm	百間川沢田遺跡竪穴住居-21	岡山県岡山市沢田字高樺手	集落	竪穴住居	古墳前期
61	素文鏡	完形 3.0 cm	百間川沢田遺跡	岡山県岡山市沢田	集落	土坑	古墳前期
62	素文鏡	完形 3.0 cm	谷風遺跡 17 号住居跡	岡山県上房郡北房町大字赤茂	集落	竪穴住居	古墳前期
63	珠文鏡	完形 3.6 cm	斎宮遺跡	岡山県赤磐郡山陽町大字斎宮	集落	竪穴住居	古墳中期
64	珠文鏡	完形 5.35 cm	屈石遺跡	香川県高松市伏石町	祭祀	河川跡	古墳前期
65	重圓文鏡	完形 3.55 cm					
66	素文鏡	完形 2.75 cm					
67	弥生小形仿製内行花文鏡	完形 3.7 cm	下川津遺跡	香川県坂出市川津町大字下川津	集落	竪穴住居	弥生時代 (庄内式併行期)

伴出遺物	出土年	所蔵・保管者	文献	備考
武器（鉄剣）、土器（土師器壺・高杯・小形丸底壺）	1980年発掘	羽合町教育委員会	50	鏡出土遺構は型穴住居跡の可能性あり。
生産用具（鉈・刀子？）、武器（鉄鏃）、土器（土師器壺・壺・高杯・低脚杯・器台）、その他（土玉・板状鉄製品・針状鉄製品）	1982年発掘	羽合町教育委員会	51	
装身具（勾玉・碧玉管玉・ガラス小玉）、生産用具（釣針）、武器（鉄鏃）、石製品（砥石・磨石・敷石）、土器（土師器壺・壺・高杯・器台）、その他（板状鉄製品・棒状鉄製品・舌状鉄製品・軽石・線刻石）	1980年発掘	羽合町教育委員会	50	
	1979年発掘	羽合町教育委員会	49	
	1981年発掘	羽合町教育委員会	52	昭和56年度の調査区で出土しているが、報告なし。ただし「SB-40の周辺から銅鏃、素文鏡が多く出土してある」とあるから、それらの内の一つであろう。
	1981年発掘	羽合町教育委員会	51	
	1984年発掘	岡山県古代吉備文化財センター	34	
	1990年発掘	岡山県古代吉備文化財センター	36	
石製模造品（滑石白玉）、土器（小型埴・壺・高杯）	1980年発掘	岡山県古代吉備文化財センター	53	
土器（土師器）	1986年発掘	岡山県古代吉備文化財センター		
土器（壺・壺・高杯）	1983年	北房町教育委員会	90	
土器（土師器）、その他（陶質土器片）	1992年発掘	岡山県古代吉備文化財センター		1992年度の発掘調査で出土。
土器（弥生土器・土師器）	1991年発掘	高松市教育委員会	59	自然河川と、これから分岐する溝などが検出された。3面の鏡は溝の分岐点にあたる自然河川の底で並んで出土した。
土器（壺・鉢・壺・高杯・製埴土器）	1985年発掘	香川県埋蔵文化財センター	31	紐が欠失。

鏡 No.	鏡式名	遺存度 ・ 面径	遺跡・遺構名	所 在 地	遺 跡	遺 構	遺構の 年 代
68	素文鏡	約4.0cm	船越遺跡	香川県三豊郡能開町大字船越	祭祀・生産	不明	古墳後期?
69	素文鏡	欠損 3.9cm	若草遺跡	愛媛県松山市若草町	集落	遺物包含層	弥生V期
70	重圈文鏡	欠損 5.3cm	火内遺跡	愛媛県越智郡吉海町椋名	集落		古墳前～ 中期
71	弥生小形 仿製鏡	完形 4.4cm	御笠地区遺跡C地区SX-32	福岡県筑紫野市大字阿志岐字上島	集落	竪穴住居	弥生庄内 式併行期
72	素文鏡	完形 3.0cm	沖ノ島16号遺跡	福岡県宗像郡大島村沖ノ島	祭祀	巨石周障	古墳中～ 後期
73	素文鏡	3.5～ 3.9cm	伝 沖ノ島18号遺跡	福岡県宗像郡大島村沖ノ島	祭祀	岩上	古墳前期
74	重圈文鏡	完形 4.3cm	谷遺跡15号住居跡	福岡県京都郡苅田町大字谷	集落	竪穴住居跡	古墳前期
75	素文鏡	完形 4.2cm	薬尾橋下流遺跡	佐賀県佐賀市蓮池町大字古賀字四本松	集落	不明	不明
76	弥生小形 仿製鏡(S 字文鏡)	完形 4.9cm	木瀬遺跡4号住居跡	熊本県菊池郡合志町上庄子木瀬	集落	竪穴住居	弥生V期
77	弥生小形 仿製鏡	破片 5.45cm	石井入口遺跡24号住居跡	大分県竹田市大字菅生字向原	集落	竪穴住居	弥生V期
78	鹿手伏満 文鏡	完形 5.5cm	石井入口遺跡82号住居跡	大分県竹田市大字菅生字向原	集落	竪穴住居	弥生V期

伴 出 遺 物	出土年	所蔵・保管者	文 献	備 考
			51	現物なし。製塩土器、手捏土器などが採集されている。
	1989年発掘	松山市立埋蔵文化財センター	50	
石製模造品（滑石勾玉）、土器（土師器・小型模造土器・製塩土器）	1992年発掘	愛媛県埋蔵文化財調査センター	58	
出土遺物の有無不明	1981・1982年発掘	筑紫野市教育委員会	63・64	
装身具（銅釦・鉄釦・石釦・ガラス小玉・稜玉勾玉・碧玉管玉・閃緑岩管玉・滑石勾玉・滑石管玉・滑石葉玉・滑石小玉・滑石白玉）、生産用具（鉄刀子・鉄斧・鹿手刀子）、武器（鉄剣・鉄刀・鉄矛・鉄槍・鉄鏃）、馬具（雲珠）、その他（鉄）	1954年発掘	宗像大社	110	岡崎98-2。
装身具（葉玉1・碧玉管玉5・閃緑岩管玉・ガラス小玉103・滑石白玉20）、石製輪飾類（石釦1）、伝出土：装身具（勾玉61・管玉201・白玉1）、石製腕飾類（車輪石1・石釦）、生産用具（鹿手刀子4片）	1960年	個人	112	岡崎102-3。
土器（高杯8・甕5・鉢2・器台1・ミニチュア土器3）	1988年発掘	刈田町教育委員会	234	
	昭和以降発掘	佐賀県立博物館	45	
	1968年発掘	熊本大学文学部	38・39・138	
土器	1980～81年発掘	竹田市教育委員会	43	
	1980～81年発掘	竹田市教育委員会	43	同館論が佐賀県二塚山遺跡・韓岡漁船洞遺跡にある。

文献については国立歴史民俗博物館研究報告第56集を参照。

第2節 高松市居石遺跡出土木材の樹種

鈴木 三男 (金沢大学教養部生物学)

能城 修一 (農林水産省森林総合研究所)

香川県高松市の居石遺跡から出土した木製品45点の樹種を調査した。木製品は縄文時代晩期の加工材と弥生末以降古代を中心とした時期の様々な製品である。これらの資料から剃刀刃を用い、徒手で横断、接線、放射の3断面の切片を作り、ガムクロラルで封入してプレパラートとし、光学顕微鏡で観察、同定した。

以下に同定された樹種の同定の根拠を示し、その顕微鏡写真を写真1—10に、また同定結果の一覧を表1に示した。これら観察に用いたプレパラートは東北大学理学部植物分類学講座に保管されている。

同定された樹種

1. ツガ属 *Tsuga* マツ科 写真1 a-c.

年輪の明瞭な針葉樹で仮道管と放射組織から成る。早材部から晩材部への移行は急で、晩材部では厚壁で放射径の小さい仮道管が厚い層を成している。放射組織は単列で放射柔組織と放射仮道管をもつ。放射柔細胞の垂直、水平壁は厚く、多数の単壁孔を持つ。これらの形質からツガ属の材と同定した。

2. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb) Sieb. et Zucc. スギ科 写真2 a-c.

仮道管と放射組織から成る針葉樹材。早材から晩材への移行はなだらかである。晩材部は幅狭く、厚壁で扁平な仮道管がある。樹脂細胞はない。分野壁孔は大型の窓状である。これらの形質からコウヤマキの材と同定した。

3. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 写真3 a-c.

淡色で仮道管、樹脂細胞、放射組織から成る針葉樹材。早材から晩材への移行は急で晩材部はたいへん薄い。樹脂細胞は年輪の後半部分に散在する。樹脂細胞の水平壁は厚く単壁孔を持つ。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は1分野当たり2個あり、スギよりやや小型で、開孔部は狭くヒノキ型、通常斜めに開孔部が向いている。これらの形質からヒノキの材と同定した。

4. ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gymnothyrus* カバノキ科 写真4 a-c.

やや角張った楕円形の小道管が均一に分布する散孔材で、道管は単独あるいは放射方向に2~4個複合している。道管の穿孔は20本くらいの横棒からなる階段状、道管相互の壁孔

は微小孔紋で交互状に密にある。放射組織は単列同性と集合放射組織で、後者が横断面で明瞭な放射状の筋となる。これらの形質からハンノキ属ハンノキ節の材と同定した。

5. アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真5 a-c.

中型で楕円形の単独道管がルーズに放射方向につながる放射孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性と複合状がある。これらの形質からアカガシ亜属の材と同定した。

6. クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 写真6 a-c

大道管が年輪の始めに1層並び、そこから急激に径を減じて晩材部では中型で丸い道管が単独で放射方向にルーズに配列する環孔材。道管の穿孔は単一、道管の周囲には周囲状仮道管がある。木部柔組織は1~3細胞からなる接線状で目立つ。放射組織は複合放射組織と単列同性からなり、前者はきわめて大きく、多数の結晶細胞を持ち、後者は背はあまり高くない。これらの形質からコナラ属のうち、落葉性のクスギ、アベマキなどの材と同定した。

7. コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真7 a-c.

クスギ節に良く似た環孔材で、晩材部の道管が薄壁多角形で火炎状に配列する点で明瞭に区別される。大道管が年輪の始めに1(ないし2, 3)層並び、そこから急激に径を減じて晩材部では薄壁で多角形の小道管が多数集まって火炎状あるいは放射状を呈する道管の穿孔は単一、道管の周囲には周囲状仮道管がある。木部柔組織は1~3細胞からなる接線状で目立つ。放射組織は複合放射組織と単列同性からなり、後者は背はあまり高くない。これらの形質からコナラ属のうち、落葉性のミズナラ、コナラなどの材と同定した。

8. クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) Presl クスノキ科 写真8 a-c.

大型の楕円形の道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材。道管の穿孔は単一あるいは横棒の少ない階段状。木部柔組織は周囲状に良く発達し、しばしば大きな油細胞を持つ。放射組織はスマートな紡錘形で2~3細胞幅、異性で大きな油細胞を持つ。これらの形質からクスノキの材と同定した。

9. ニガキ *Picrasma quassioides* (D. Don) Benn. ニガキ科 写真9 a-c.

大型の丸い道管が年輪始めに1~3層配列し、晩材部では丸みを帯びてやや厚壁の小道管がいくつか集まった塊が波状の紋をなして分布する環孔材。道管の穿孔は単一、道管隔壁の壁は微細な孔紋で交互状、放射組織は大きな紡錘形になりほぼ同性である。これらの形質からニガキの材と同定した。

10. イボタノキ属 *Ligustrum* モクセイ科 写真10 a-c

微細な道管が単一で均一に分布する散孔材で、年輪始めにあるものはやや大きめである。道管の穿孔は単一、放射組織はほぼ2列で、2列部は平伏細胞のみから、単列部は直立細胞のみからなり、単列部と2列部の幅はあまり変わらない。これらの形質からイボタノキ属の

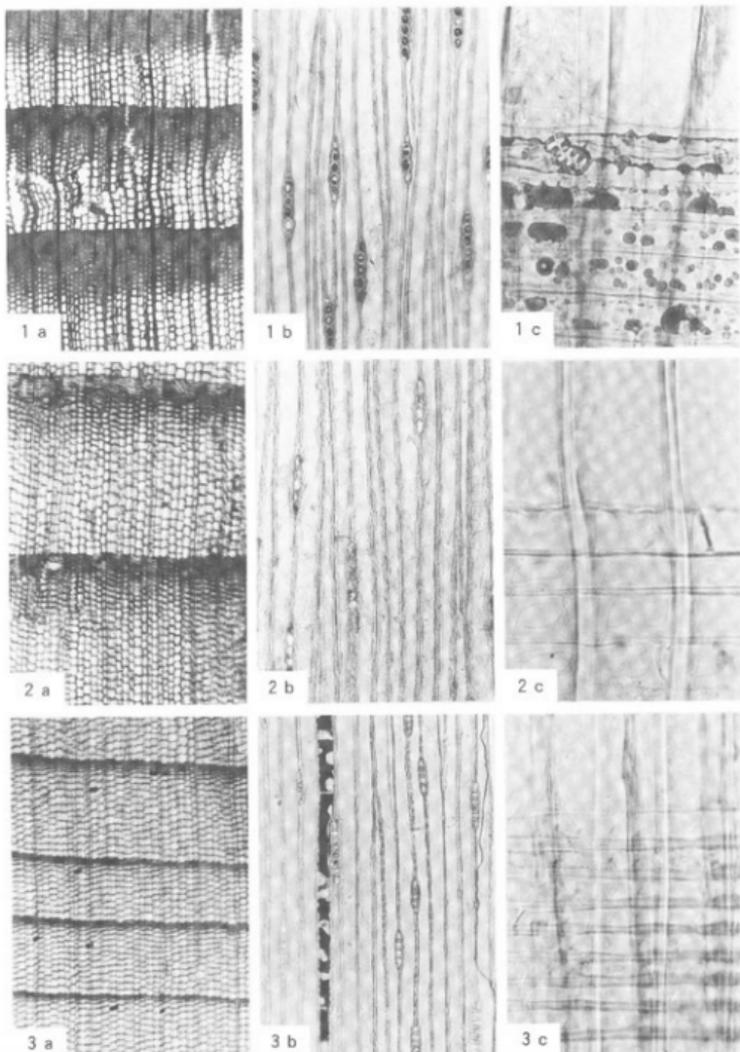
材と同定した。

居石遺跡における木材利用樹種

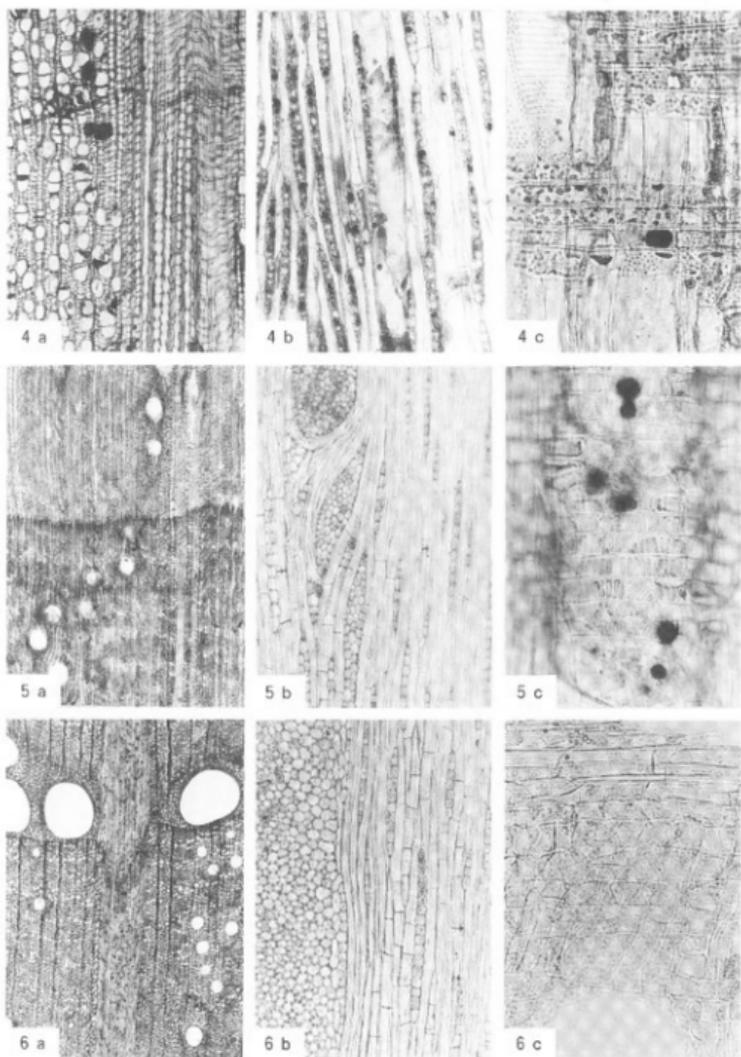
表2は同定結果から、縄文時代晩期と弥生時代末期移行に分けて樹種構成を集計したものである。これで見るとこの2つの時期で木材利用が明瞭に違うことが分かる。縄文晩期の出土材はそのほとんどが利用目的等はほとんど分からない加工痕のみが認められる、いわゆる加工材である。そのほとんどはコナラ節（16点）であり、そしてハンノキ節（5点）、クスギ節（4点）があり、あとはアカガシ亜属、イボタノキ属、ニガキが1点ずつあるだけである。縄文時代で最もポピュラーな樹種であるクリがないのは奇異であるが、その点を除けばコナラ節、クスギ節を杭材や堅穴住居の木材、燃料材に使うのはごく一般的なことで、そこに低湿地に普遍的に生えるハンノキ節も使われたと考えることができる。ただここで注目すべきは、照葉樹林の代表樹種であるアカガシ亜属は1点あるものの、それ以外はいずれも落葉広葉樹林の要素であることである。

一方、弥生末以降、古代の樹種を見ると曲げ物や祭祀具などに近畿地方で最もよく使われるヒノキ材が多用され、やはり同じ目的に使われるコウヤマキも出土していることから、畿内文化圏と深いつながりがあることがいえる。一方、船材の一部と見られる大材は、縄文時代以降西日本でよく刳り船に使われるクスノキであり、地域性を反映したものと見える。

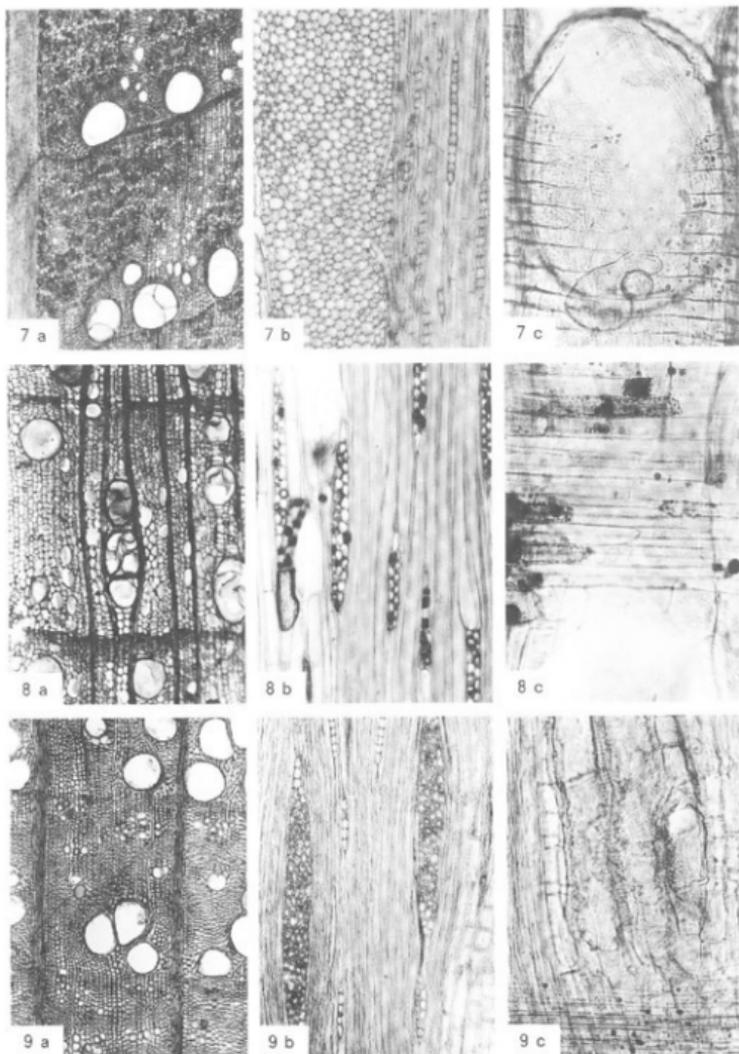
このように当遺跡で調べることができた木材の数は少ないが、縄文時代晩期と古代を中心とした時代では木材利用が歴然と違うことが明らかとなった。



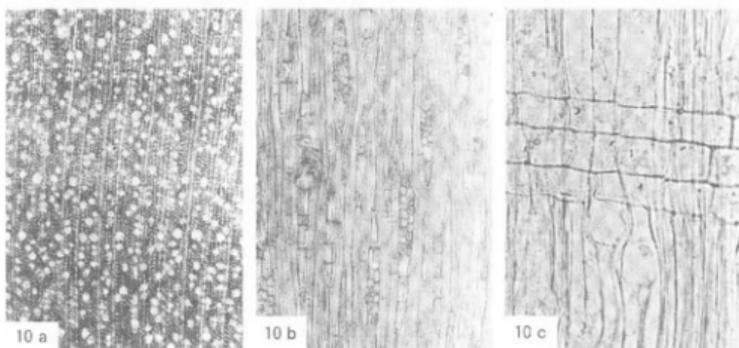
1. ツガ属 KTA-304. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面400X
 2. コウヤマキ KTA-293. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面400X
 3. ヒノキ KTA-296. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面400X



4. ハノノキ筋 KTA-284. a: 横断面40X ; b: 接線面100X ; c: 放射面200X
 5. アカガシヤ属 KTA-268. a: 横断面40X ; b: 接線面100X ; c: 放射面200X
 6. クヌギ筋 KTA-263. a: 横断面40X ; b: 接線面100X ; c: 放射面200X



7. コナラ節 KTA-283. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 8. クスノキ KTA-306. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 9. ニガキ KTA-267. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X



10. イボタノキ属 KTA-280. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X

第3節 居石遺跡の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

一般国道11号高松東道路建設工事にともない、建設予定地に沿って平成元年より発掘調査が行われ、旧河道や水田跡などが検出されている。今回花粉分析を行った居石遺跡（高松市伏石町）の東側に所在する谷・松ノ木遺跡～谷・長池遺跡で検出された旧河道の河床部からは弥生時代の大量の土器群が出土し、また、弥生時代前期から13世紀にかけて4面の水田層も確認されている¹⁾。他の遺跡からも弥生時代や古墳時代の旧河道や水田層が検出され、同時期の集落跡も出土している。このように、少なくともこれら遺跡周辺においては、縄文時代晩期あるいは弥生時代以降、水田稲作など人間活動が活発となり、それにより周辺の植生は大きな影響をうけたことが予想される。

居石遺跡においてもこの国道建設工事の一環で行われた発掘調査で、旧河道や、その川底より布留式土器などが検出され、また、すぐ東側の支流の川底からは縄文時代晩期前半の原下層式土器が出土している²⁾。こうした出土遺物から居石遺跡で観察される各土層については時代設定がなされており、これらの土層より採取した試料について花粉分析を行い、各時代の古植生について考察し、居石遺跡周辺における縄文時代晩期以降の植生変遷について検討した。

1. 試料

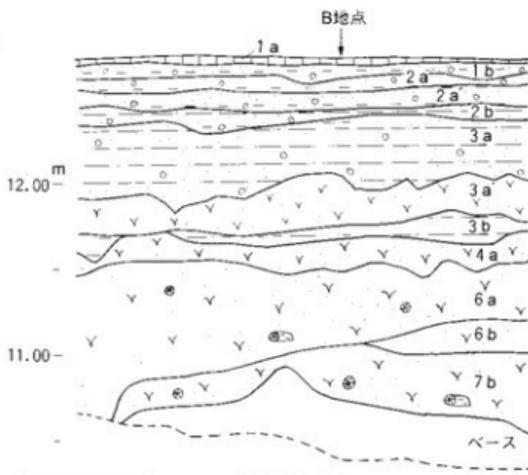
図1に試料を採取したBおよびG地点付近の土層断面を示したが、花粉分析はこれら2地点より柱状で採取されたものより分割した80試料（B地点が54試料、G地点が26試料）について行った。以下に各土層について簡単な記載を示すが、詳しい土層記載および2地点の遺跡内における位置については概要と層序の章を参照されたい。

1) B地点

1b層（試料B-1）は灰褐色の砂質シルトで、小レキヤ赤褐色の酸化鉄の集積が認められる。この1b層の上位は現耕作土層（1a層）となっている。2a層（B-2）は灰褐色の砂質粘土質シルト、2a'層（B-3）は黒褐色の砂質シルト、2b層（B-4）は黒褐色の砂質シルト～粘土で、これらにも小レキヤ赤褐色の酸化鉄の集積が認められる。3a層は黒～黒褐色の砂質粘土であるが、細かくみると、試料B-5～8はシルト質の、B-9～15は有機質の、B-16は泥炭質の砂質粘土である。3a'層（B-17～24）は砂質の黒褐色未分解質草本質泥炭、4a層（B-25～30）は褐色を帯びた黒色の未分解～弱分解質の砂質草本質泥炭である。この2層に挟まれた3b層は黒色の砂混じり粘土である。6a層（B-31～44）

は砂質の黒褐色未分解～弱分解質泥炭で、材片が点在している。7 b層 (B-45～-54) は褐色を帯びた黒色の未分解～弱分解質砂質泥炭で、下部は分解質となり、また、材片が点在しているのが認められる。

時代については、出土遺物などから2 a層から2 b層が中世～近世、3 a層から4 a層は古墳時代後期～古代、6 a層から7 b層は縄文時代晩期から古墳時代前期頃と考えられている。



2) G地点

4 a層 (試料G-1, -2) は褐灰色のレキ混じり砂質シルトで、赤褐色の酸化鉄の集積が全体にみられる。なお、1 a層の上位はシルト質の砂層 (3 b層) である。4 b層 (G-3～-5) は黒褐色のやや粘土質の砂質シルトである。5 a層 (G-6～-9) はやや泥炭質の黒褐色砂質粘土、5 b層 (G-10～-13) はやや泥炭質の褐灰色砂混じり粘土である。6 a層 (G-14, -15) はやや泥炭質の黒色粘土、6 b層 (G-16～-20) はやや泥炭質の黒褐色粘土で、粘性が非常に高くなっている。7 a層 (G-21～-25) は黒褐色の砂質泥炭で、下部ほど材片などの植物遺体が多く未分解となっている。この7 a層の下位 (G-26) は、やや泥炭質の黒褐色砂質粘土である。

時代については、出土遺物などから4 a層および4 b層が古代、5 a層から7 a層は縄文時代晩期と考えられている。

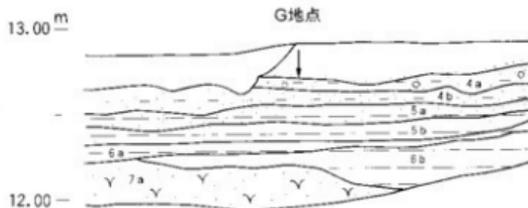


図1 試料採取地点付近の土層断面図

2. 分析方法

上記した80試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約2~5g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、重液分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランニンにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、B地点が樹木花粉52、草本花粉44、形態分類を含むシダ植物胞子4、藻類2の計102、G地点が樹木花粉39、草本花粉39、形態分類を含むシダ植物胞子5の計83である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表1(B地点)、表2(G地点)に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図2(B地点)、図3(G地点)に示した。なお、G地点の試料G-11、-12では樹木花粉の検出数が少なく分布図として示すことができず、少ないながら示したG-9、-10については参考程度にみていただきたい。これらの分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また花粉化石の単体標本(花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート)を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、樹木花粉の産出傾向から、B地点では4つ(下位よりI~IV)の、G地点では3つ(I~III)の花粉化石群集帯を設定した。

1) B地点

花粉帯I(B-31~54):ハンノキ属の優占で特徴づけられ、本帯中央部で50%を超えるなどピークを作っている。コナラ属アカガシ亜属も20%前後と比較的安定した高い出現率を示している。コナラ属コナラ亜属は最下部で40%近い出現率を示すなど、下部では多く検出されているが、上部に向かい次第に減少している。シノキ属-マテバシイ属は出現率はそれほど高くはないが、上部に向かい増加する傾向が認められる。同様の傾向がスギやイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科にも認められる。草本類は全体に検出数が少なく、そのなかで、イネ科、

カヤツリグサ科，ヨモギ属などが上部でやや増加する傾向が認められる。また，水生植物（浮葉植物）のコウホネ属が3試料より検出されている。

花粉帯Ⅱ（B-17～30）：ハンノキ属の減少とアカガシ亜属の最優占で特徴づけられ，シノキ属-マテバシイ属も10%前後に増加している。コナラ亜属はⅡ帯中央部で緩やかなピークをつくるように増加・減少している。スギはⅠ帯に比べ若干増加しており，ツガ属やマツ属複雑管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）にも同様の傾向が認められ，イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科も上部において出現率を上げている。草本類は，イネ科が20%前後に増加し，カヤツリグサ科も下部では10%ほどであるが，上部では20%を超える出現率を示すなど多く得られている。その他では，ヨモギ属が全試料1%を越えて検出されるなど増加傾向が認められる。また，水生植物（抽水植物）のオモダカ属が連続して観察され，サジオモダカ属，スプタ属-ミズオオバコ属，ミズアオイ属などもわずかではあるが得られている。

花粉帯Ⅲ（B-4～16）：本帯は針葉樹類の増加で特徴づけられる。すなわち，ツガ属は10%前後に，ニヨウマツ類は15%前後に，スギは20%前後に出現率を上げ，イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科はⅡ帯同様20%前後検出されている。Ⅱ帯において最優占していたアカガシ亜属は緩やかではあるが上部に向かい減少する傾向がみられ，シノキ属-マテバシイ属も半減している。コナラ亜属も多少減少しているが，クマシデ属-アサダ属はわずかではあるが出現率を高めている。その他，ヤマモモ属やニレ属-ケヤキ属などが連続して検出されている。草本類では，イネ科がさらに増加し，上部では50%に達している。カヤツリグサ科は下部では20%前後の出現率を示しているが，上部に向かい減少する傾向が認められる。水生植物のオモダカ属はⅡ帯に続き連続して検出され，その他，サジオモダカ属，スプタ属-ミズオオバコ属，イボクサ属，ミズアオイ属などが多くの試料において観察される。また，コウホネ属がB-8より1点得られている。その他では，ソバ属やアリノトウグサ属，また，シダ類のアカウキクサ属が本帯より検出されはじめています。

Ⅳ帯（B-1～3）：ニヨウマツ類の優占で特徴づけられ，出現率は変動はあるが30%以上と高く，最上部では70%近くに達している。スギやイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は急減し，アカガシ亜属も同様である。また，クマシデ属-アサダ属やコナラ亜属はやや増加するが最上部では出現率を下げている。草本類は，イネ科がさらに増加しており，60%前後の出現率を示している。また，アブラナ科は試料B-1，-2において比較的多く検出されている。Ⅲ帯において減少傾向がみられたカヤツリグサ科はさらに減少している。オモダカ属やミズアオイ属などの水生植物群やソバ属はⅢ帯に引続き認められるが，水生植物群は最上部では検出されていない。

2) G地点

花粉帯Ⅰ (G-17~26) : ハンノキ属, コナラ亜属, アカガシ亜属の優占で特徴づけられる。このうちハンノキ属が最も多く, 30%前後の出現率を示している。コナラ亜属も下部では高い出現率(30%弱)を示すが, 上部に向かい減少しており, 反対にアカガシ亜属は上部に向かいわずかではあるが増加する傾向が認められる。モミ属やツガ属などの針葉樹類は5%前後と安定した出現率を示している。草本類は, カヤツリグサ科が10%を越えている以外はいずれも低率である。その中で, 水生植物のコウホネ属がG-17および-25より得られている。

花粉帯Ⅱ (G-9~16) : 針葉樹類の増加とハンノキ属の急激な減少で特徴づけられる。そのうち, ツガ属は上部に向かい増加し, モミ属やコウヤマキ属もわずかながら増加傾向を示し, これらは本帯において最も高い出現率を示している。反対にⅠ帯において最も多く得られていたハンノキ属は急減し, コナラ亜属も10%弱と半減している。このⅡ帯で最も高い出現率を示しているのは30%弱のアカガシ亜属で, 同じ照葉樹林要素のシノキ属-マテバシイ属はⅠ帯同様5%前後得られている。草本類ではイネ科やヨモギ属が増加し, ヨモギ属は最上部において出現率は20%に達している。反対に, Ⅰ帯において多く検出されていたカヤツリグサ科は5%ほどに減少している。その他では, セリ科がほぼ連続して得られ, また水生植物のオモダカ属がわずかではあるが検出されている。

花粉帯Ⅲ (G-1~8) : ニヨウマツ類とスキの増加で特徴づけられ, ともに10~20%の出現率を示している。一方, Ⅱ帯で増加傾向がみられたモミ属, ツガ属, コウヤマキ属は半減しているが, ツガ属については10%前後と比較的高い出現率をなおも示している。アカガシ亜属はⅡ帯に引続き30%弱と最も高い出現率を示しているが, 上部においては減少する傾向がみられる。シノキ属-マテバシイ属やコナラ亜属は10%前後と安定して検出されている。草本類では, イネ科の急激な増加が特徴的であり, カヤツリグサ科もⅡ帯に比べ増加している。反対に, ヨモギ属は急減している。その他では, 水生植物のオモダカ属やミズアオイ属がほぼ連続して得られ, サジオモダカ属やスプタ属-ミズオオバコ属, イボクサ属なども検出されている。

4. 居石遺跡周辺の植生変遷

1) B, G両地点の対比

以上がB, G両地点の花粉分析結果であるが, それらの傾向をみてもみると, 花粉帯Ⅰにおいては両地点ともハンノキ属, およびコナラ亜属, アカガシ亜属の優勢で特徴づけられている。また, Ⅱ帯はハンノキ属の急減とアカガシ亜属の最優占が, Ⅲ帯はニヨウマツ類, スキの増加が認められるなど, おおまかな傾向としてはほぼ同様の变化パターンを示している考えられる。

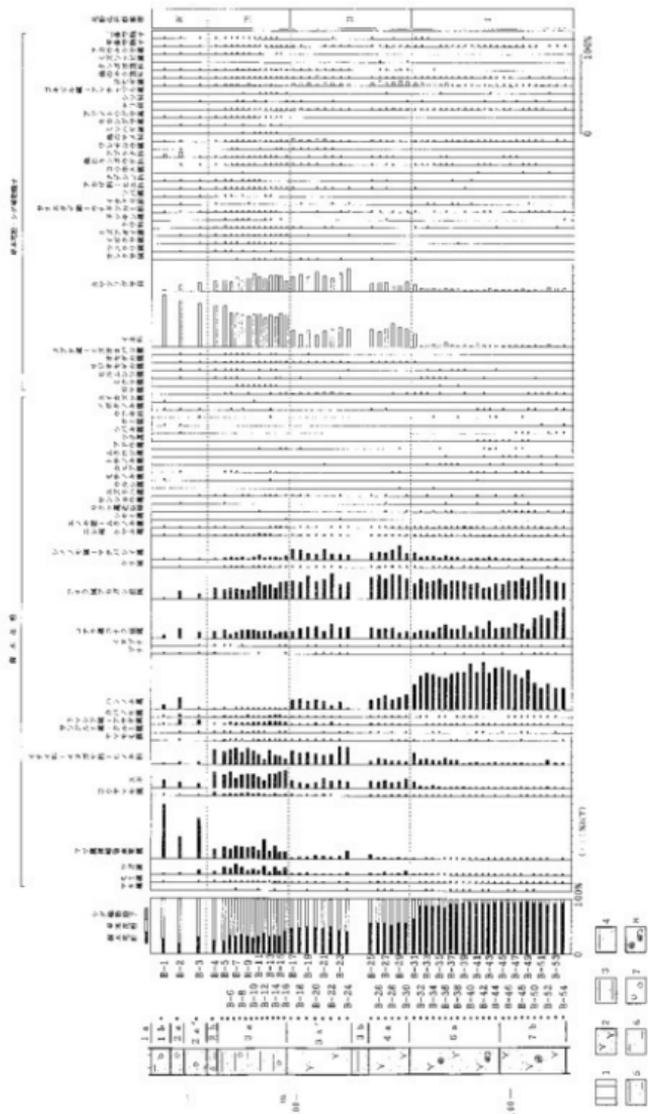


図2 B地点の主要花粉化石分布図
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉は花粉・孢子総数を基として百分率で算出した)
 1: 珪輪作土 2: 砂質泥炭 3: 砂質シルト 4: 砂質粘土
 5: 砂質粘土〜シルト 6: 砂質シルト 7: レキ 8: 材片

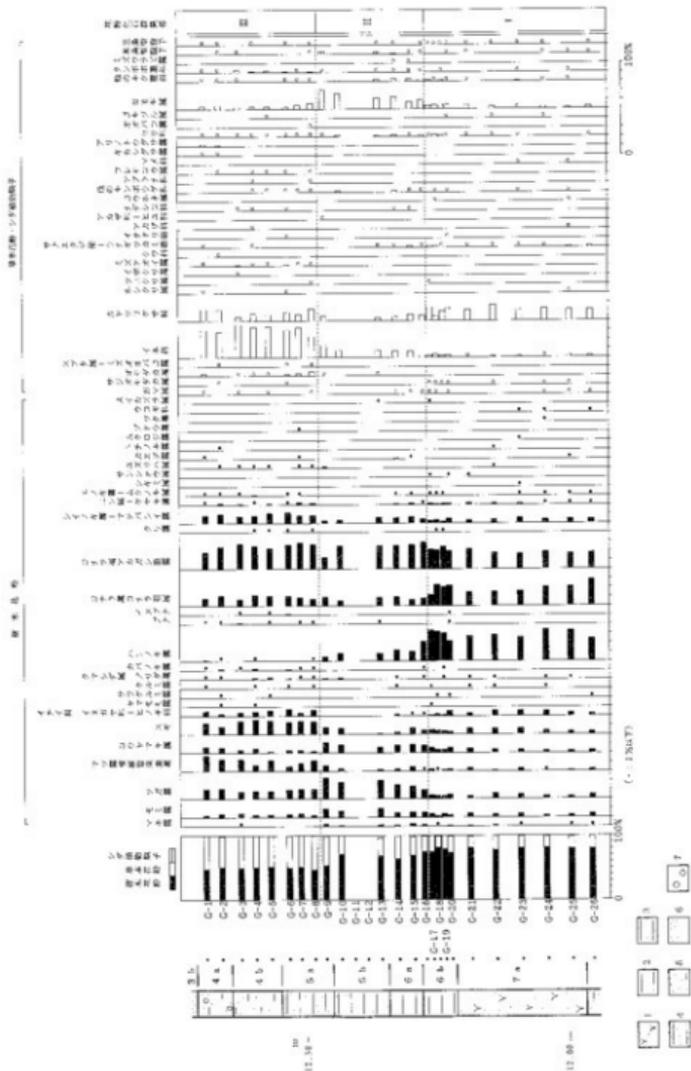


図3 G地点の主要花粉化石分布図
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉は花粉・孢子総数を基として百分率で算出した)
 1: 砂質泥炭 2: 粘土 3: 砂混じり粘土 4: 砂質粘土
 5: 砂質シルト 6: 砂 7: レキ

2) 居石遺跡周辺の植生変遷

上記のことから、ここでは花粉帯を基に遺跡周辺の植生変遷について述べる。

ハンノキ属・アカガシ亜属優占期：花粉帯Ⅰにあたる。この時期はB、G両地点ともハンノキ属が優勢であり、旧河道内などの遺跡周辺低地部はハンノキ属湿地林が形成されていた。また、水生植物（浮葉植物）のコウホネ属が生育する水域や、G地点付近ではカヤツリグサ科の群落の存在も予想される。周辺丘陵部や微高地ではアカガシ亜属を主体にシイノキ属-マテバシイ属などの照葉樹林が成立していた。コナラ亜属も多く検出されており、丘陵斜面部や低地との境界部付近に主に多く生育していたとみられる。針葉樹類も少ないながら連続して検出されており、スギやイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、モミ属、ツガ属などの温帯性針葉樹類もみられたであろう。このように、遺跡周辺では照葉樹林を主体に、落葉広葉樹類や温帯性針葉樹類が混じる混交林が成立していた。時代は、B地点が縄文時代晩期から古墳時代前期、G地点が縄文時代晩期と考えられている。

なお、B地点においては先にも記したが、I帯下部においてコナラ亜属がアカガシ亜属より高い出現率を示して最優占しており、その上位で出現率の逆転がみられる。高松平野におけるコナラ亜属からアカガシ亜属への移行期について外山は、瀬戸内北岸や大阪湾岸地域などで推測された年代、およそ7,000～6,000年前と大きくずれることはないであろうと考えている³⁾。しかしながら、B地点の時代は縄文時代晩期から古墳時代前期と考えられており、先の年代と大きく異なっている。こうしたことから、B地点でみられたコナラ亜属が多い現象は、縄文時代晩期から古墳時代における一時的なもの、あるいは地域的なものといった限られた現象ではないかと思われる。

アカガシ亜属優占期第Ⅰ期：花粉帯Ⅱにあたる。遺跡周辺丘陵部や微高地では、依然としてアカガシ亜属やシイノキ属-マテバシイ属などの照葉樹林が優勢であった。しかしながら、コナラ亜属は多少分布域を狭め、反対にスギやイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、モミ属、ツガ属などの温帯性針葉樹類が目立つようになった。低地部においてはハンノキ属湿地林は縮小し、代わってイネ科やカヤツリグサ科が多く生育するようになり、オモダカ属やミズアオイ属などの水生植物（抽水植物）もみられるようになった。このオモダカ属やミズアオイ属は現在の水田において普通にみられる、オモダカやコナギといったいわゆる水田雑草を含む分類群である。こうしたことから、この頃より水田稲作が行われ始めたことも考えられ、B地点にみられるイネ科花粉の増加も稲作の開始を示しているのではないかと思われる。また、ハンノキ属の減少も、水田稲作にともなう低地部の開発による湿地林の破壊を予想させる。千葉県村田川流域においてもハンノキ属の急減と少し遅れてイネ科花粉の急増が認められ、稲作開始による湿地林の破壊が考えられている⁴⁾。こうしたことから、試料B-30を用いて予察的にプラント・オ

パール分析を試みた結果、イネのプラント・オパールが観察され、以上のことを総合して、B地点については花粉帯Ⅱの初期の頃より稲作が行われ始めたかと推測される。先にも記したが当遺跡の東側に所在する谷・松ノ木遺跡～谷・長池遺跡では弥生時代前期から水田層が検出されており⁵³、居石遺跡においてはこの水田化が古墳時代後期から古代の頃より始まったのであろう。G地点でも試料G-15について予察的にプラント・オパール分析を行ったがイネは検出されず、G地点周辺では少なくとも花粉帯Ⅱの下部の時期には稲作は行われていなかったと思われる。では、G地点におけるハンノキ属の減少は如何なる要因によりものであろうか。このⅡ帯においては花粉化石の検出数が全体に少なく（表2）、保存状態もよくない花粉が多く観察された。そのなかでヨモギ属が多く検出されており、これらのことから、この時期G地点周辺では乾燥化など土地条件の悪化が予想され、このことがハンノキ属の減少の一因ではないかと思われる。なお、花粉分析とあわせてプラント・オパール分析も行われており、それにより居石遺跡周辺における稲作の開始時期など、稲作について明確にされるであろう。時代は、B地点が古墳時代後期～古代、G地点が縄文時代晩期と考えられている。

アカガシ亜属優占期第Ⅱ期：花粉帯Ⅲにあたる。遺跡周辺丘陵部では依然としてアカガシ亜属やシノキ属－マテバシイ属を主体とした照葉樹林が優勢であったが、時代が進むにつれて多少分布域を狭めたようである。花粉帯Ⅱで増加傾向がみられたモミ属、ツガ属、コウヤマキ属に代わり、ニヨウマツ類やスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が目立つようになった。一方、低地部ではハンノキ属湿地林はさらに縮小し、G地点周辺でも行われるようになるなど、水田稲作地はさらに拡大したと推測される。とともに水田雑草群も、上記したオモダカ属やミズアオイ属の他に、サジオモダカ属、スプタ属－ミズオオバコ属、キカシグサ属など種類数も豊富になったようである。また、B地点においてはソバ属花粉もほぼ連続的に検出されており、ソバも栽培されていた可能性が高い。時代は、B地点が古墳時代後期～古代、G地点が縄文時代晩期（花粉帯Ⅲ下部）および古代（花粉帯Ⅲ上部）と考えられている。

ニヨウマツ類優占期：花粉帯Ⅳにあたり、時代は中世～近世である。この頃の遺跡周辺丘陵部は、ニヨウマツ類が優占していた。中世あるいは近世においては人間活動もさらに活発となり、遺跡周辺の照葉樹林や、スギやヒノキ類などの針葉樹は人間の木材利用などで破壊され、その生育地を急速に狭めた。一方、ニヨウマツ類はそうした跡地に侵入し、二次林を形成した。岡山県や広島県では、14～15世紀ごろから製塩業が、つづいて製鉄業がさかんとなり、その燃料としてさかんに周辺の森林を伐採してしまった結果、アカマツ林となってしまったところも少なくなく⁶¹、こうした現象は日本の各地においてみられるのである。

以上のようにニヨウマツ類の二次林化が進むなか、居石遺跡周辺低地部では水田稲作が行われており、ソバの栽培も行われていたであろう。さらに、アブラナ科花粉が多く得られており、

アブラナ類も栽培されていた可能性が考えられる。そのうち、アブラナは日本では搾油用に栽培されており、九州や近畿などで始まった搾油は慶長（1596～1615年）、元和（1615～1624年）にはきわめて盛んになった⁷⁾。

5. まとめ

時代観については多少問題点もあるように思われるが、厩石遺跡における縄文時代晩期以降の植生変遷は以下のものであった。

縄文時代晩期から古墳時代前期の頃、遺跡周辺丘陵部や微高地では照葉樹林や落葉広葉樹林が優勢であり、旧河内などの低地部はハンノキ属湿地林が形成されていた。

その後、B地点では水田稲作により、また、G地点では土地条件の悪化により、低地部のハンノキ属湿地林は縮小した。周辺丘陵部の森林植生は照葉樹林が優勢であり、ツガ属やモミ属などの針葉樹類も増加した。時代としてはB地点が古墳時代後期から古代、G地点が縄文時代晩期と考えられている。

B地点では同じく古墳時代後期から古代の頃、G地点が縄文時代晩期から古代と考えられている頃になると、水田稲作がさらに盛んに行われるようになり、ハンノキ属はわずかにみられるだけとなった。周辺の森林植生は、照葉樹林が次第に縮小し、代わってニヨウマツ類やスギ、ヒノキ類などの針葉樹類が分布を拡大した。

中世から近世では、引き続き水田稲作が行われ、ソバやアブラナ類の栽培も予想される。また、周辺の森林は大きく破壊され、みられるのはニヨウマツ類だけといっても過言ではない状況となっていた。

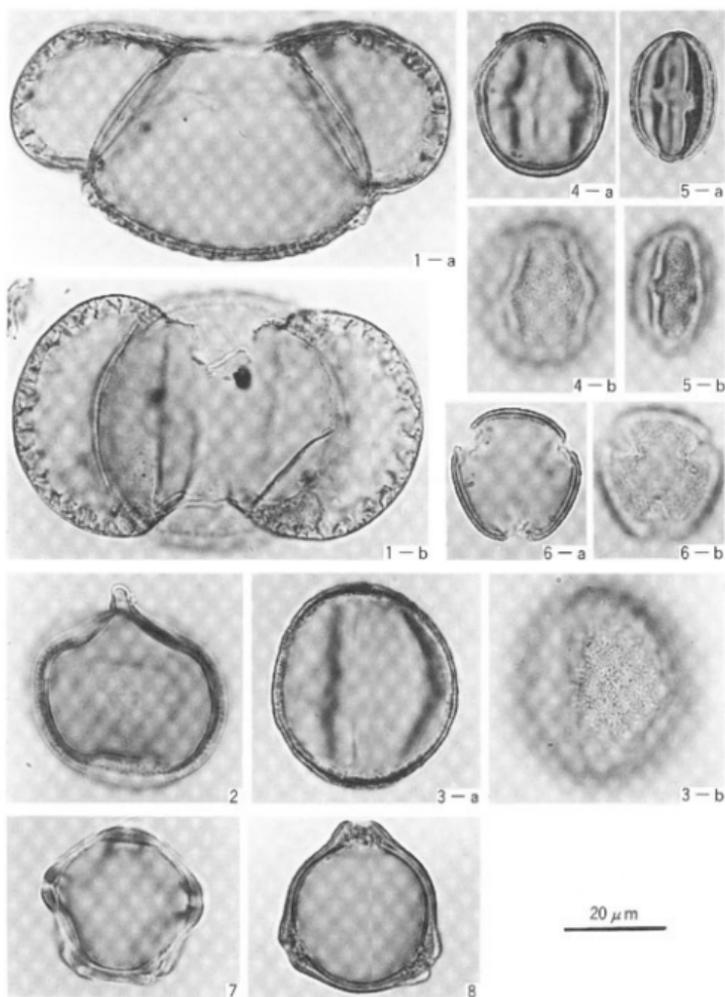
引用文献

- 1) 高松市教育委員会・建設省四国地方建設局（1994）一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡、高松市埋蔵文化財調査報告 第24集、126p.
- 2) 前掲1)。
- 3) 外山秀一（1988）高松平野における花粉分析ならびにプラント・オパール分析 その1—太田地区周辺試掘調査第13地点—、弘福寺領讃岐国山田郡田園邑定地域発掘調査概報 I 弘福寺 領山田郡田園関係遺跡発掘調査事業に伴う調査概要、高松市教育委員会、p.85-97.
- 4) 辻 誠一郎・南木睦彦・小池裕子（1983）縄文時代以降の植生変化と農耕—村田川流域を例として—、第四紀研究、22、p.251-266.

5) 前掲 1)

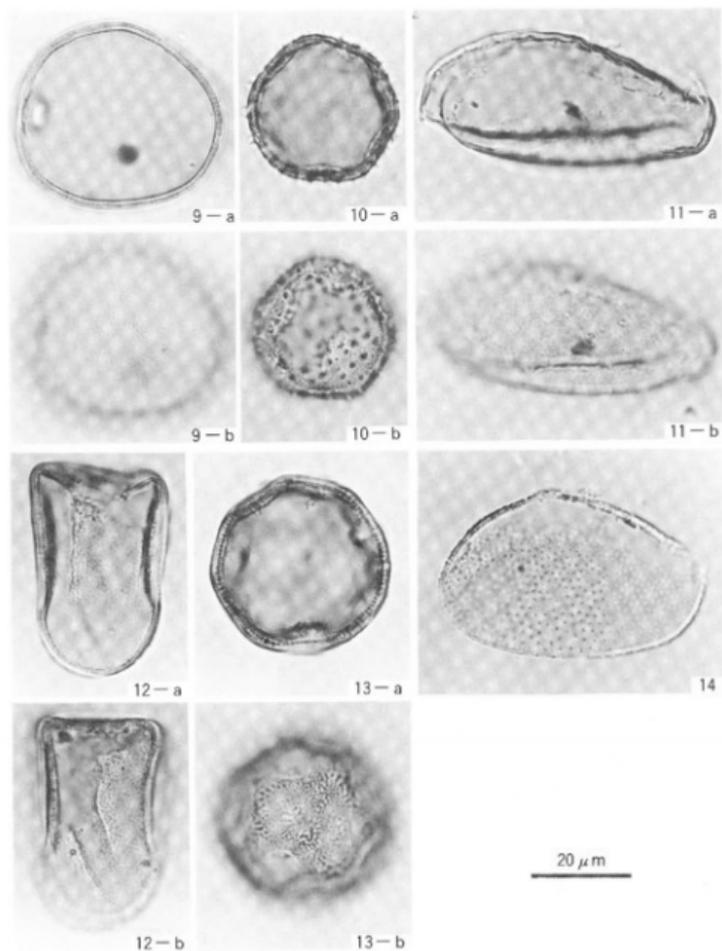
6) 宮脇 昭 (1977) 日本の植生. 宮脇昭 編, 学習研究社, 535p.

7) 深津 正 (1977) アブラナ. 世界の植物, 朝日新聞社, p. 1418.



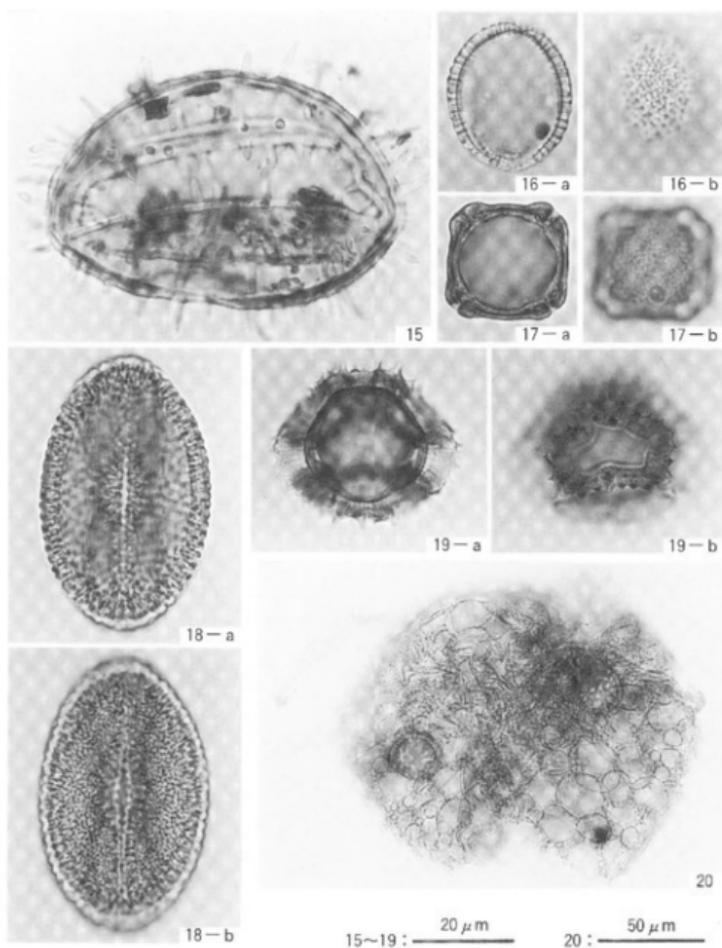
図版1 居石遺跡の花粉化石

- 1 : マツ属複維管束蓮属 PLC.SS 1579 B-5 5 : シイノキ属-マテバシイ属 PLC.SS 1588 B-9
 2 : スギ属 PLC.SS 1583 B-5 6 : ユズリハ属 PLC.SS 1586 B-9
 3 : コナラ属コナラ蓮属 PLC.SS 1591 B-52 7 : ハンノキ属 PLC.SS 1593 B-52
 4 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 1592 B-52 8 : ヤマモモ属 PLC.SS 1587 B-9



図版2 居石遺跡の花粉化石

- 9 : イネ科 PLC.SS 1584 B-9
 10 : オモダカ属 PLC.SS 1582 B-5
 11 : ミズアオイ属 PLC.SS 1585 B-9
 12 : カヤツリグサ科 PLC.SS 1596 B-2
 13 : サジオモダカ属 PLC.SS 1581 B-5
 14 : イボクサ属 PLC.SS 1589 B-9



図版3 居石遺跡の花粉化石

15: コウホネ属 PLC.SS 1594 B-52

16: アブラナ科 PLC.SS 1595 B-2

17: アリノトウグサ属 PLC.SS 1590 B-9

18: ソバ属 PLC.SS 1580 B-5

19: タンポポ亜科 PLC.SS 1598 B-5

20: アカウキクサ属 PLC.SS 1597 B-5

第4節 居石遺跡におけるプラント・オパール分析

外山 秀一

1. はじめに

高松平野の沖積低地の地形は、概ね海岸線沿いの三角州帯と旧香東川をつくる扇状地帯とからなる。この扇状地帯を東西にきって、国道11号高松東道路の建設に伴う発掘調査が浴・長池、浴・松ノ木、井手東、居石、蛙股等の各遺跡で進められている。居石遺跡においては、東西280mにわたる調査の結果、縄文時代から江戸時代までの複合遺跡となっている¹⁾(第1図)。こうした扇状地帯では、自然堤防状・中州状の微高地や旧河道など現地表面で確認される微地形に加えて、埋没した微高地や旧河道の存在が発掘調査等によって明らかにされている。

当遺跡の調査区内の埋没微地形の分布状況は、基本的には東西方向にならび、なかでも調査区の東側と西側では、南東から北西方向に旧河道が発達する。なお、東側の旧河道の河床からは縄文時代晩期中頃の原下層式に平行するとみられる土器が検出されており²⁾、高松平野の扇状地帯の河道の形成時期を探るうえで注目される。

当遺跡では、発掘調査に際し水田層の認定と土地条件の変化や土地利用の検討を目的として、プラント・オパール分析を実施した。ここでは、分析の結果や埋没微地形の分布、地層の堆積状況などを踏まえて、当遺跡の立地とその環境の変化について報告する。



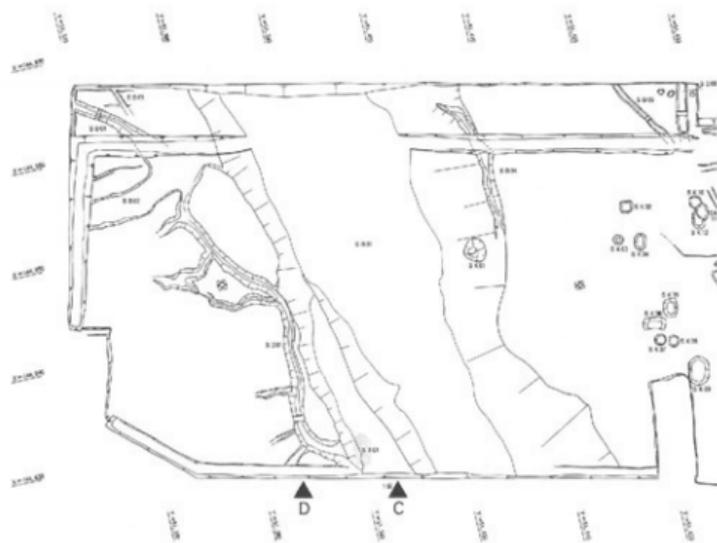
第1図 遺跡の分布(第2図に加筆)

2. 地層の堆積状況と試料の採取

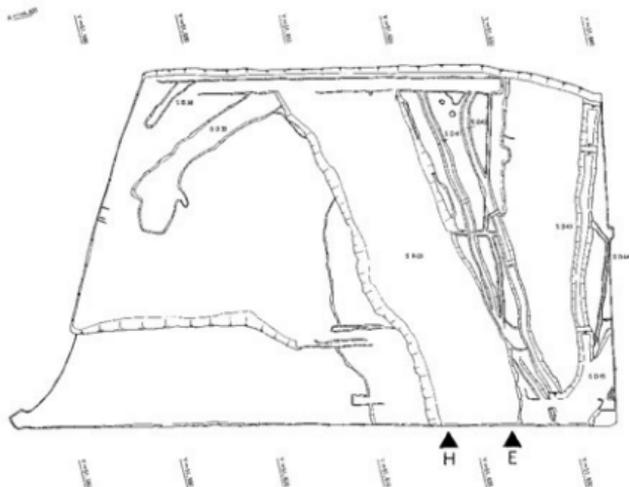
分析用の試料は、調査区東側と西側の計4ヵ所において採取した(第2図・第3図)。西側では埋没旧河道内のC地点と埋没微高地にあたるD地点、東側では埋没旧河道内の溝状遺構にあたるE地点と同旧河道内のH地点である。各地点の地層の堆積状況を、第4図・第5図と第1表のa~c, 第2表のdに示す。

C地点では、草本質泥炭と木本質泥炭層とからなる4a層より下位の層準とシルト層を主体とする3層より上位の層準とに分かれ、こうした細粒物質が旧河道を埋積している。C地点の3層上位と同様の堆積状況を示すのがD地点で、その堆積時期も同じと考えられる。E地点とH地点は同じ埋没旧河道内の堆積物であるが、E地点では河道内に弥生時代後期末及びそれ以前の溝状遺構がみられる。両地点では、7a層上部の草本質泥炭が堆積した後にシルト層を主体とする細粒物質が旧河道を埋積している。

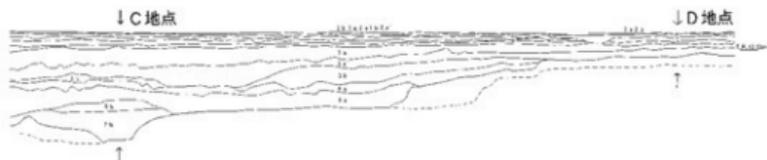
プラント・オパール分析用の試料は、C地点で21試料、D地点で7試料、E地点で8試料、H地点で9試料の計45試料を採取した。



第2図 試料採取地点 C・D地点(付図1に加筆)



第3図 試料採取地点 E・H地点 (付図2に加筆)



第4図 試料採取地点の地層の堆積状況 C・D地点 (第7、8図に加筆)



第5図 試料採取地点の地層の堆積状況 E・H地点 (第13図に加筆)

3. 分析の方法

定量分析法による試料の処理は、絶対乾燥—重量測定—仮比重測定—ガラス・ビーズの混入—ホモジナイザーによる分散—ストークス法による細粒物質の除去—乾燥の順序でおこない、オキセット液によりプレバレートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズ(300個)とプラント・オパールとの比率から、試料1gあたりの各プラント・オパールの個数ならびに総数を求めた。さらに、イネ、ヨシ属、ウシクサ族ならびにタケ亜科の機動細胞プラント・オパールについては、地上部全ての重さ(乾物重)を層厚1cm・面積10aあたりの検出量で示した。

なお、火山の噴火によって降灰した火山ガラスを、地表で生成されたプラント・オパールと直接比較することはできないが、地層中の火山ガラスの含有状況ならびに出現傾向を検討するために、ここではプラント・オパールと同一基準で示した。また、動物珪酸体についても同様である。

4. 結果

主に機動細胞プラント・オパールの層位的な検出状況に基づき、また土地条件や土地利用の変化を踏まえて、プラント・オパール群集帯を区分した。各地点のプラント・オパールの出現傾向は、第6図～第9図と第1表、第2表のとおりである。

C地点とE地点、H地点では縄文時代晩期以降古代もしくは中世まで、他方D地点では古代から中世までの環境の変化を示している。ここでは、発掘調査の成果やプラント・オパール分析の結果、ならびに微地形や土地条件の変化、土地の利用状況などを踏まえながら、各地点の環境の変化をみることにしたい。

1) C地点

プラント・オパール群集帯は下位よりa帯～i帯に区分され、さらにa帯はa₁帯とa₂帯に、f帯はf₁帯とf₂帯に細分される。各帯の特徴は以下のとおりである。

7b層下部のa₁帯層準は木本質泥炭からなる。旧河道内に生育した樹木類によって河道底は埋積されており、そのため草本類のプラント・オパールの検出総数と量はともに少ない。6b層と7b層上部のa₂帯になるとネザサ節型をはじめとするタケ亜科が増え、検出数が増加するが、これは周辺地域の微高地からの影響とみられ、河道内は比較的低温であったと考えられる。その後河道内は6a層によってさらに充填され、同層準のb帯では検出総数が減少し、やや不安定な土地条件となる。この6a層によって河道内はほぼ平坦化し、古代以降には後背

低地に変わってゆく。そして、4 a層のc帯層準の草本質泥炭層ではイネが検出され、後背低地の比較的低湿で安定した土地条件のもとで稲が栽培されるようになる。その後、3 b層のd帯において検出総数が急減し一時的に不安定になるが、3 a'層下部のe帯では検出総数と量が急増し土地条件は安定する。その後f₁帯から3 a層のf₂帯にかけては徐々に安定し、3 a層上部の試料6ではイネが増加する。古代～中世の遺物包含層である2層より上位の層準になると、g帯の2 b層で検出総数が減少し一時的に不安定になるが、h帯の2 a層と2 a'層ではヨシ属やタケ亜科にみられるように検出数と量が増加する。また、i帯の1 b層で検出総数と量の減少はみられるものの、h帯に引き続き安定した土地条件となる。

このように、旧河道内の地層の堆積状況やプラント・オパール分析の結果を踏まえると、C地点の環境は下位の6 a～7 b層層準と上位の1 b～4 a層層準とに分けられる。縄文時代晩期～古墳時代前期までの旧河道底は、材化石により埋積を受ける比較的低湿な状況であった。その後古代以降になると、旧河道内は埋積され後背低地に変わる。各層堆積後は一般的には安定した土地条件となり、そこでは稲が栽培されるようになる。

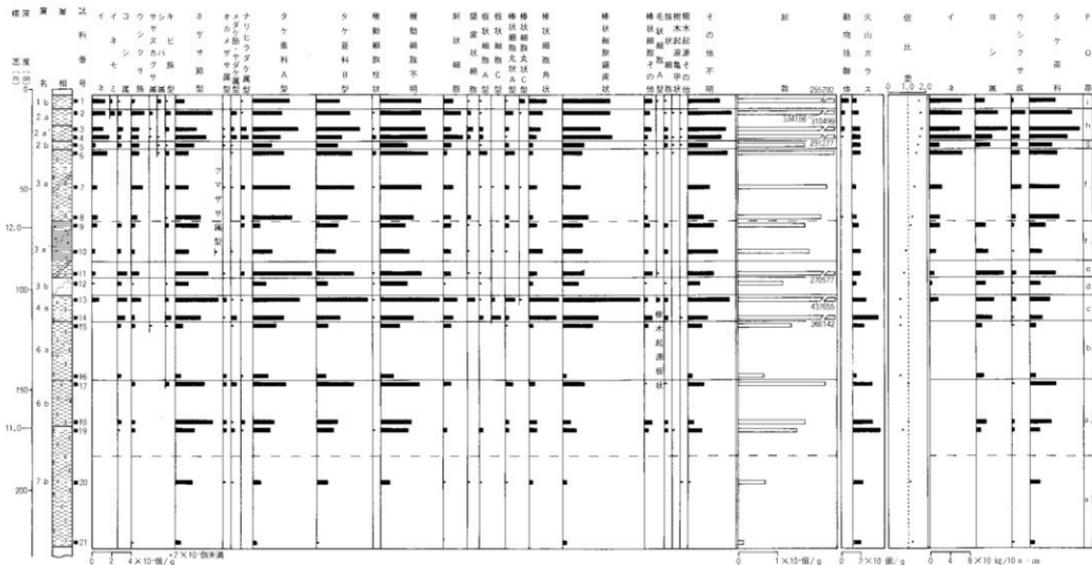
2) D地点

D地点は、本来微高地であったところがその後周辺地域の微凹地の埋積により相対的に低くなり後背低地に変わったところで、こうした安定した土地条件のもとで稲が栽培されている。また一方では、ススキやチガヤに代表されるようなウシクサ族やタケ亜科の検出量が多く、周辺の微高地上の植生の影響が分析の結果にも現われている。

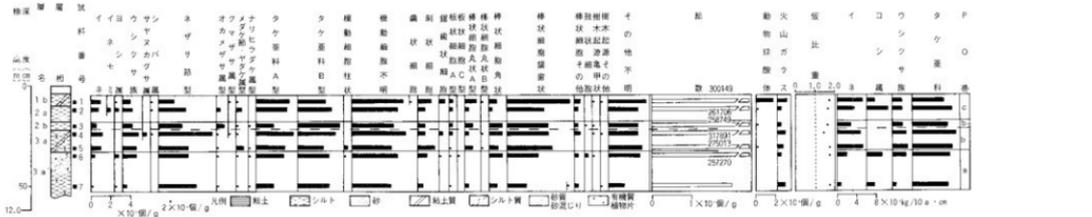
近接するC地点とは3 a'層の層相に違いはみられるものの、プラント・オパールはほぼ同様の出現傾向を示しており、D地点で区分されたプラント・オパール群集帯のa帯、b₁帯、b₂帯、c帯は、C地点のe・f帯、f帯、g帯、h・i帯にそれぞれ対応する。また、土地条件や土地利用もC地点と同様の状況を示している。

3) E地点

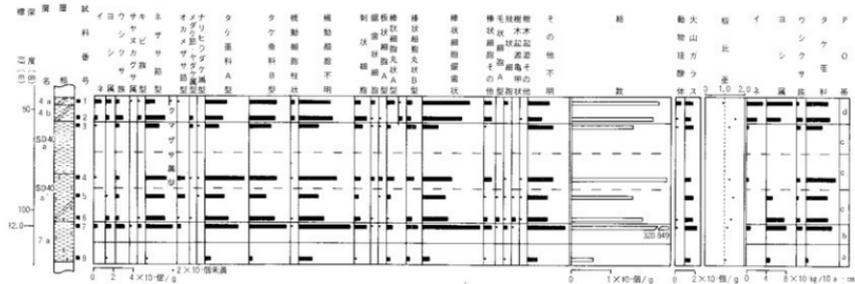
プラント・オパール群集帯はa帯～d帯に区分され、さらにc帯はc₁帯～c₃帯の3亜帯に細分される。下部の本木質泥炭と上部の草本質泥炭からなる7 a層は、旧河道の埋積層で縄文時代晩期中頃の土器の包含層である。同層はa帯とb帯とに分かれ、a帯ではプラント・オパールの検出数と量は少ないが、b帯になると急増ししかも僅かではあるがイネが検出される。その後、旧河道内において弥生時代後期末及びそれ以前に溝状遺構が形成され、それはc帯層準のSD 40 a層と同a'層によって埋積される。古代以降になると、地形環境は後背低地に変わり、4層のd帯層準に示されるように、ヨシ属をはじめとして検出総数が増加するとともに、そこでは再び稲が栽培される。



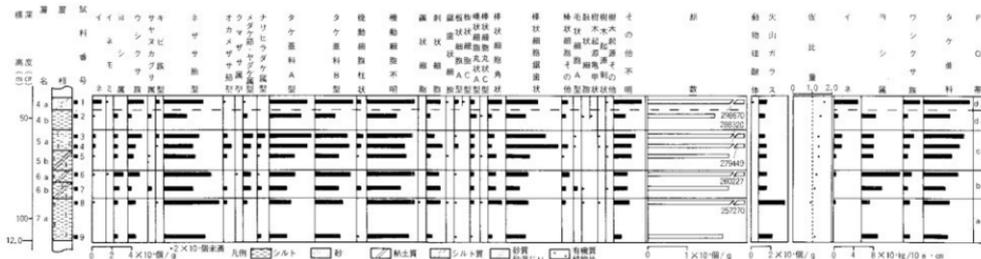
第6図 プラント・オバール分析結果C地点



第7図 プラント・オバール分析結果D地点



第8図 プラント・オパール分析結果E地点



第9図 プラント・オパール分析結果H地点

試料番号	層名	層相 (含有)	地層	時代	PO層	プラント・オバールの出現傾向	土地条件・土地利用	地形環境		
12.0	6	1 b	褐色色砂質シルト	①	中世 / 古代	i	安定	後部		
	12	2 a	黄褐色シルト	②		検出総数・葉の減少				
	18	2 a'	黒褐色砂質シルト	③		h			検出総数・葉の増加	
	24			④		g			検出総数・イネの減少	
	26	2 b	暗褐色シルト	⑤	古代 / 古 / 吉 / 代	f	不安定	地盤の高低		
	28	3 a	黒褐色粘土質シルト (植物片)	⑥		f			イネの増加 検出総数の増増	
	30			⑦		f			検出総数の減少	
	32	3 a'	黒褐色シルト質粘土 (植物片)	⑧		e			検出総数・葉の増加	
	49			⑨		d			検出総数の急減	
	64	3 b	黄灰色シルト質細砂～中砂	⑩		c			イネの検出、ヨシ属の増加 検出総数の急増	
	66			⑪		b			検出総数の減少	
	68	4 a	黒色有機質シルト～草本質泥炭 (細砂混じり)	⑫		a			ネギザ節節・タケ茎料の増加 検出数の増加	
	81			⑬		a			検出総数・葉減少	
	92	6 a	黒褐色有機質シルト ～草本質・木本質泥炭 (細砂混じり)	⑭		古墳前期 / 古			b	やや不安定
94	⑮									
97	6 b	黄灰色有機質シルト～木本質泥炭 (細砂混じり)	⑯	古		a			やや不安定	旧河道の高低
103			⑰							
105	7 b	黒褐色有機質シルト (細砂混じり)	⑱	代		a			安定	旧河道の高低
114			⑲							
116	7 b	黒褐色有機質シルト～木本質泥炭 (細砂混じり)	⑳	代	a	安定	旧河道の高低			
118			㉑							
143	7 b	黒褐色有機質シルト (細砂混じり)	㉒	代	a	安定	旧河道の高低			
145			㉓							
147	7 b	黒褐色有機質シルト (細砂混じり)	㉔	代	a	安定	旧河道の高低			
166			㉕							
168	7 b	黒褐色有機質シルト (細砂混じり)	㉖	代	a	安定	旧河道の高低			
170			㉗							
196	7 b	黒褐色有機質シルト～木本質泥炭 (細砂混じり)	㉘	代	a	安定	旧河道の高低			
226			㉙							

a. C地点

試料番号	層名	層相 (含有)	地層	時代	PO層	プラント・オバールの出現傾向	土地条件・土地利用	地形環境				
12.5	8	1 b	褐色色砂質シルト	①	中世 / 古代	c	不安定	後部				
	10	2 a	黄褐色シルト	②					イネの増加、ヨシ属の増加 検出総数の増加			
	12	2 b	暗褐色シルト	③					b ₂	検出総数の僅かな減少		
	18			④					b ₂	イネの増量 検出総数・葉の増加 ヨシ属の減少		
	20	3 a	黒褐色粘土質シルト (植物片)	⑤					古	b ₂	安定	旧河道の高低
	22			⑥								
	24	3 a'	黄灰色シルト質細砂 (植物片)	⑦					代	a	安定	旧河道の高低
31	⑧											
33	3 a'	暗褐色シルト質細砂 (植物片)	⑨	代	a	安定	旧河道の高低					
35			⑩									
50	3 a'	暗褐色シルト質細砂 (植物片)	⑪	代	a	安定	旧河道の高低					
50			⑫									

b. D地点

試料番号	層名	層相 (含有)	地層	時代	PO層	プラント・オバールの出現傾向	土地条件・土地利用	地形環境				
12.0	46	4 a	黄褐色粘土質シルト	①	古代	d	安定	後部				
	48	4 b	黒褐色粘土質シルト	②					ヨシ属の増加 検出総数の増加			
	54	SD40 a	黒褐色細砂混じりシルト	③					c	検出総数の減少		
	56			④					c	イネの増量 検出総数の増加		
	58	SD40 a'	黒褐色シルト (植物片)	⑤					後期	c	安定	旧河道の高低
	62			⑥								
	64	SD40 a'	黒褐色粘土質シルト (植物片)	⑦					末	c	安定	旧河道の高低
	68			⑧								
	70	7 a	黒褐色有機質シルト (細砂混じり) 一下層木本質泥炭	⑨					縄文晩期中頃	b	安定	旧河道の高低
	72			⑩								
104	7 a	黒褐色有機質シルト (細砂混じり) 一下層木本質泥炭	⑪	縄文晩期中頃	a	安定	旧河道の高低					
106			⑫									
108	7 a	黒褐色有機質シルト (細砂混じり) 一下層木本質泥炭	⑬	縄文晩期中頃	a	安定	旧河道の高低					
124			⑭									

c. E地点

PO プラント・オバール調査簿

第1表 試料採取地点の環境の変化 C・D・E地点

試料	層名	層	相(含有)	時期	PO層	プラント・オバールの出現傾向	土地条件・土地利用	地形環境	
12-5	4 a	茶灰色シルト質細砂		①	d	イネ・タケ類科、総数の増加	後背低地・田河 定	後背低地 田 河 道 の 境 線	
	4 b	黄灰色シルト		②	d	検出総数の減少			
	5 a	黒褐色細砂質シルト(植物片)		③	層				
	5 a	暗灰色シルト(植物片)		④	文	c			検出総数の安定した出現
	5 b	黄灰色粘土質シルト(植物片)		⑤	晩				ヨシ属の減少
	6 a	暗灰色粘土質シルト(植物片)		⑥	層				ヨシ属の増加
	6 b	黄灰色粘土質シルト(植物片)		⑦	末	b			検出総数・量の安定した出現
	7 a	—上部草本質泥炭 黒褐色有機質シルト (細砂混じり) —下部木本質泥炭		⑧	縄文 晩期 中頃	a			ネザザ属型の増加、イネの検出 検出総数の安定した出現

d, H地点

PO プラント・オパール群集層

第2表 資料採取地点の環境の変化 H地点

4) H地点

H地点の試料は、E地点と同じ調査区東側の旧河道を充填する地層で、この旧河道は縄文時代晩期末までに埋積されている。7 a層のa帯層準は、E地点と同様に上部の草本質泥炭と下部の木本質泥炭とからなる。木本質泥炭層のプラント・オバールは多数検出されるが、上部の試料8と同様の出現傾向を示すことから、7 a層上部の影響が下部の木本質泥炭層に及んでるとみられる。河道底でみられるこうした安定した土地条件は、その後も継続する。5層と6層は植物片を多量に混入する縄文時代晩期末の土器包含層³⁾であるが、ヨシ属の出現傾向の違いによりb帯とc帯とに分けられる。a帯～c帯を通してプラント・オバールの安定した出現傾向がみられ、旧河道が徐々に埋積されていったことがわかる。なお、晩期の土器包含層中からは、試料3～6と8においてイネの検出をみる。4層のd帯層準になると、E地点と同様に地形環境は後背低地に変わる。4 a層のd₂帯ではイネをはじめとして検出総数と量が増加することから、後背低地の安定した土地条件のもとで稲作が営まれたとみられる。

5. 考察

当遺跡のプラント・オパール分析の結果で注目されるのは、E地点とH地点の縄文時代晩期の土器包含層から検出されたイネであり、またE地点の弥生時代後期末頃とC地点の古代～中世の一時期に生じたとみられる不安定ならびにやや不安定な土地条件である。そこで、ここでは高松平野における稲作の開始期の問題と、土地条件の一時的な不安定期とその原因について検討することにした。

1) 高松平野の稲作の始まり

E地点では、縄文時代晩期中頃の土器包含層である7 a層のb帯層準でイネが検出される。

時代期	水田址	初知瓦・土器 *1	プラント・オパール (土器粘土)	炭化米・稲殻・稲穂 *2 (土器包含物)	炭素化石 *3 (土器包含物)	プラント・オパール (土器包含物) *4
縄文中葉 中葉			岡山-新野原			
縄文後葉 中葉			岡山-直橋千 津島岡大			
縄文後葉 後葉		岡山-直橋千、碓日貝塚				
縄文晩葉 前半		大分-大石 大分-濃良夢史型		大分-直島原、大石?		
縄文晩葉 後半又は 弥生早期 -先ノ島	岡山-津島江道 大分-中札?	愛媛-大洲 広島-香取焼古基 岡山-岡大橋内 兵庫-一戸、今谷丁田、口西件 大分-西ツ池、鬼塚		兵庫-口西件、玉津田中	愛媛-大洲	香川-居石、藤・孫城 兵庫-大塚 大分-山貫↓
弥生前期 前期	岡山-津島	兵庫-大洲 大分-長坂、丸笠寺北 豊の宮、安碕		兵庫-大洲		香川-下川津
弥生前期 中葉	兵庫-玉津田中			山口-辻		兵庫-成町
弥生前期 後葉	香川-弘新寺五、川津下塚、若-光池 若-島穂川、若-松ノ木 山口-熊行集型 岡山-津島江道、百間川田? 百間川尻尾島?、岡大津島地区 兵庫-本庄町、成町、長乃科、雨宮 大分-山貫、若江北、友津泉、美穂 徳島-龍万寺	岡山-門田 山口-鏡塚本塚 兵庫-上ノ島		徳島-一庄 山口-無日、下東、宮原 豊の宮、鏡塚本塚 兵庫-本庄町、上ノ島 大分-狐塚		大分-若江北↓

*1 時期の区別については不明であるが、縄文晩葉と弥生前期の器類土器が併出した遺跡として、以下のものがあげられる。

縄文晩葉 大分-大洲町 大分-小坂

弥生前期 香川-三井 山口-百田 広島-亀山、西山、大宮、横路 兵庫-上ノ島、吉田、玉津田中 大分-西ツ池

*2 時期の区別は不明であるが、縄文晩葉と弥生前期の土器包含物や炭化米・稲殻、稲穂が併出した遺跡その数として、以下のものがあげられる。

縄文晩葉 大分-新町、長谷

弥生前期 香川-石末 広島-宮脇 岡山-津島 兵庫-吉田、玉津田中 大分-瓜生堂

*3 イネ花粉その他のイネ科花粉との比率で30%を超える遺跡についてのみ記載した。また、イネの花粉が確認して検出されるものについては↓で示し、その上層のみを示した。

*4 イネのプラント・オパールが確認して検出されるものについては↓で示し、その上層のみを示した。

なお、詳細な時期や出土状況の不明なものについては記載であるが、弥生前期の土器包含物からイネのプラント・オパールが検出された遺跡として、以下のものがあげられる。

弥生前期 香川-弘新寺五、一の谷

第3表 イネ資料と水田址の出土状況一瀬戸内沿岸～大阪湾岸地域一(外山 1993に加筆・修正)

またそれは、上位のSD 40a'層のc₁帯層準では未検出である。したがって、b帯でみられるイネは上位層準からの落ち込みではなく、7a層層準において稲が栽培されたことを示している。また、H地点の7a層のa帯層準の上部すなわち縄文時代晩期中頃の土器包含層中においても同様にイネが検出され、またそれは同晩期末の土器包含層である5層と6層の各上部層準において増加する傾向にある。

このことは、縄文時代晩期の中頃から末にかけての時期に、旧河道が埋積される過程で、稲作が営まれたことを示している。

ところで、初期のイネ資料の多くは高松市域の他の遺跡と同様に、扇状地を開析する旧河道において検出されており、こうした微凹地が稲作開始当初の重要な生産の場であったことが伺える。また、わが国の水稲作が最初に始められた場所について、筆者はかねてよりこうした扇状地の旧河道をはじめとする微凹地の存在を指摘するとともに、水稲作の発展段階についても言及してきた⁴⁾。

すなわち、各地の初期水田の発掘状況を見ると、当初河道や浅谷であったところがその後機能を失い、微凹地となって湿地が形成され、そこに生成された有機質の地層を利用して稲が栽培されている。しかもそこでは、ヨシなどの雑草が草畦として利用されていたり、あるいは土畦などの遺構を伴わない場合もある。こうしたことから、各地の稲作開始当初というのは水田を拓いたというよりも、稲の栽培に適した微凹地などを選んで栽培するといった方法、換言すれば天水や地下水を利用した水田址を伴わない稲作のあり方も存在したと思われる。

こうした点を踏まえると、初期の水稲作の段階を二つに分けて考える必要がある。すなわち、稲作農耕文化を構成する各要素が徐々に波及してゆく第Ⅰ段階と、それらの要素がほぼ集まり稲作農耕文化として完成する第Ⅱ段階である。なお、第Ⅰ段階の初源的な水稲農耕は地域によっては、(1)旧河道や浅谷などの微凹地に天水や地下水を利用した直播き栽培あるいは移植栽培、雑草などを草畦として利用する段階と、(2)土畦などの水田施設を伴う段階とに分けられる。また、第Ⅱ段階は、土畦ならびに杭や矢板で補強した畦畔、水路や井堰などの水利施設や農具などを伴い、完成された形で稲作が営まれる本格的な水田造営の段階である。その時期は、これまでのところ、北部九州では縄文時代晩期後半、西日本では弥生時代前期、東日本では同中期後半と考えられる。

ところで、縄文時代晩期～弥生時代前期の瀬戸内沿岸～大阪湾岸地域のイネに関する資料や水田址の出土状況を検討すると、これまでに80を超える遺跡で確認されている(第3表)⁵⁾。

縄文時代晩期前半において九州北西部を中心にみられたイネ資料は、同後半(弥生時代早期・先Ⅰ期)になると著しく増加し、地域的にも中国・四国地方から近畿地方西部にかけての西日本に拡大する。それらの多くは、これまでのところ瀬戸内沿岸から大阪湾岸一帯に集中する

傾向を示している。また、特筆されるのは、岡山県の津島江道遺跡の水田址⁶⁾にみられるように、水稻栽培を確実にする資料が得られていることである。従って、かかる時期は西日本の各地で水稻農耕が開始されてゆく時期と考えられる。

弥生時代前期前葉になるとイネ資料は大阪湾岸地域を中心に増加し、同後葉になると急増して西日本のほぼ全域で確認される⁷⁾。

以上のように、縄文時代晩期後半にはすでに稲とともに稲作技術が瀬戸内沿岸地域に波及していた。また、高松平野のイネ資料その他が示すように、当地域の稲作も他の瀬戸内沿岸地域と時期をほぼ同じくして開始されたとみられる⁸⁾。

なお、岡山県では縄文時代晩期を遡るイネ資料の発見が相次いでいる。南溝手遺跡⁹⁾と福田貝塚¹⁰⁾では縄文時代後期後葉の杵穀圧痕土器が出土している。また南溝手遺跡¹¹⁾と津島岡大遺跡¹²⁾では後期中葉の土器から、さらに姪苴原遺跡¹³⁾では中期中葉の土器からイネのプラント・オパールが検出されている。これまでのところ岡山県のみという地域的偏在性があるが、これらの資料はわが国の稲作の開始期と農耕様式を探る上で注目され、今後検討してゆかねばならない。

2) 土地条件

E地点のc₃帯では、弥生時代後期末の一時期に土地条件がやや不安定になっている。地層の断面観察では、SD40 a層はその堆積後に安定した土地条件となり土壌化が進んだ地層とみなされた。しかしながら、同層のプラント・オパールの検出総数は下位のSD40a'層のc₂帯に較べて減少している。また、C地点のg帯においても同様に土地条件の不安定な状況がみられ¹⁴⁾、これは古代～中世にかけての一時期にあたる。

こうした現象は、旧河道や溝状遺構などの微凹地に上流域からの洪水層が一時的に堆積して平坦化作用が生じた結果と解される。同様の現象は、高松平野のその他の遺跡において確認されるとともに、これまでのところ主に西日本の各地においてもみられる¹⁵⁾。

すなわち、旧河道や溝状遺構などの微凹地は、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に洪水層によって埋積を受ける。また、古代になるとさらに微凹地が埋積され、後背低地が広がってゆく。こうした土地条件の安定化と土地の平坦化が、条里の施工と密接に関わっている。

さらに、古代の10世紀前後になると比較的安定した土地条件が続いたとみられ、こうした状況が、その一方では各地の条里の施工時期の決定を困難にする原因ともなっている¹⁶⁾。

そしてその後、古代末～中世初頭に地形の変化が生じ、完新世段丘Ⅱ面とよばれる地形の形成されたことが瀬戸内沿岸の各地で知られている¹⁷⁾。こうした地形面の扇状地帯では、段丘化に伴って土砂の供給が断たれる。かかる地形の形成が、扇状地帯でのその後の土地条件の安定化の要因の一つにあげられる。また、同地形面の自然堤防帯では、それまで不安定な時期が何

度かみられるが、段丘Ⅱ面の形成に伴って河道が固定されるとともに地下水位の低下が生じ、段丘面上は全般的には比較的高燥で安定した土地条件となる。これに対して、氾濫原面では段丘形成時に侵食された土砂が限られた範囲に集中して流出するためしばしば洪水と氾濫を引き起こし、安定した状況と不安定なそれとが短い周期で繰り返される¹⁸⁾。このように、弥生時代後期～古墳時代前期と古代末～中世初頭の不安定な時期に共通性が認められる¹⁹⁾。

ところで、C地点とD地点の2層を境に、地層の堆積に違いが認められる。すなわち、土砂の供給はそれまで旧香東川の影響を強く受けていたが、その後扇状地上への地層の堆積は少なく、しかも植物片を含まない黄褐色～黒褐色のシルト層を主体とする。このことは、かかる時期を境に、土砂の供給が現香東川流域に集中するようになったことを示しており、前述した古代末における段丘化とも密接に関わるとみられる。

6. おわりに

プラント・オパール分析その他の成果を踏まえて、地形環境や土地条件の変化、土地利用など、当遺跡の立地と環境について検討した結果、高松平野の稲作の開始期の問題や土地条件の不安定期とその原因、さらにはこれらと地形の変化との関係などが明らかになった。

なお、当遺跡の各地点の地層中からイネのプラント・オパールが検出される一方で、各層の上面での畦畔状遺構の出土はみられない。地層の堆積状況すなわち酸化鉄やマンガンの集積、土壌化の状況などを踏まえると、当遺跡では長期にわたり同一地表面上で耕作が繰り返されていることが考えられる。したがって、イネが検出されているにもかかわらず、各時期の稲作遺構はその後の耕作による攪乱を受けたために確認が困難であったとみられる。

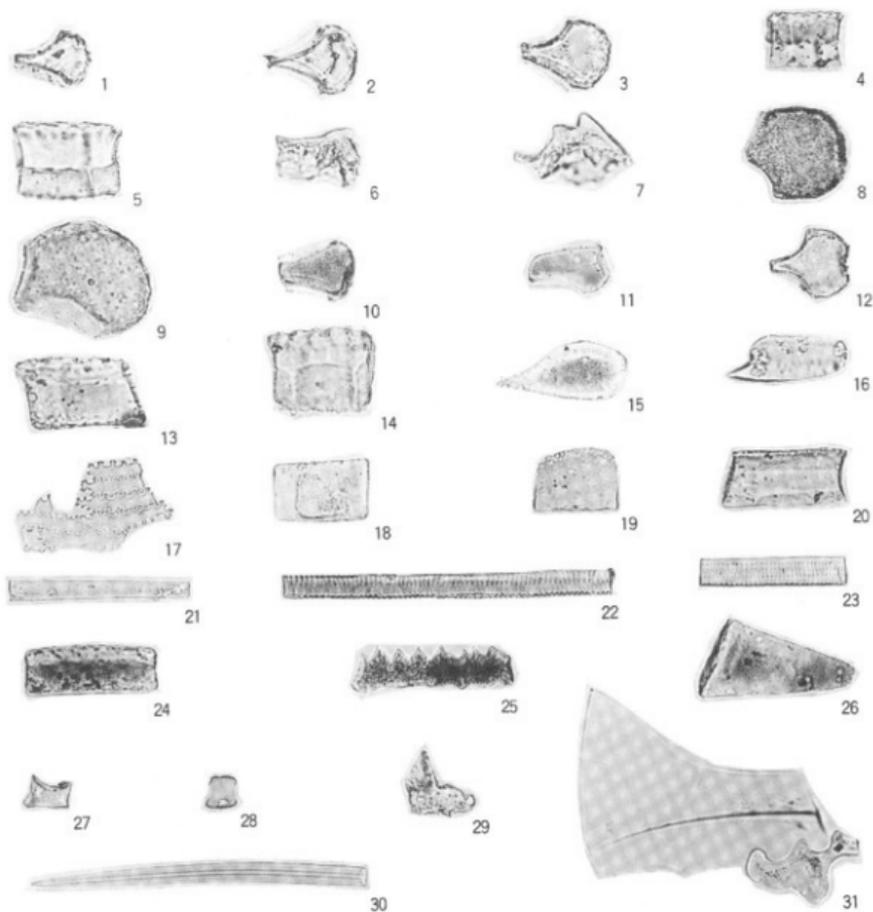
註

- 1) 山元敏裕(1992)「居石遺跡」高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査』
- 2) 前掲1)
- 3) 高松市教育委員会山元敏裕氏のご教示による。
- 4) 外山秀一(1994)「プラント・オパールからみた稲作農耕の開始と土地条件の変化」
第四紀研究 第33巻 第5号
- 5) 外山秀一(1993)「丸亀平野における遺跡の立地と環境—その1 植物化石による環境の復原—」香川県埋蔵文化財研究会『郡家一里屋遺跡』
- 6) 柳瀬昭彦(1988)「中国・四国地方における稲作農耕の開始と展開」日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
- 7) a 外山秀一・中山誠二(1990)「中部日本における稲作農耕の起源とその波及(序論)

—プラント・オパール土器胎土分析法による試み— 帝京大学山梨文化財研究所研究報告
第3集

- b 中山誠二・外山秀一（1991）「稲と稲作の波及」『季刊考古学』第37号 雄山閣
- c 外山秀一・中山誠二（1992）「日本における稲作の開始と波及」植生史研究 第9号
- d 外山秀一（1992）「地理学におけるプラント・オパール分析の応用」立命館地理学
e 前掲4）4号

- 8) 外山秀一（1992）「弘福寺領山田郡田岡比定地周辺の遺跡の立地環境」前掲1）
- 9) 平井泰男（1995）「縄文時代後期の稲作について」, 渡部忠世（1995）「土器片附着の
圧痕について」岡山県文化財保護協会「南溝手遺跡1」
- 10) 高橋 護（1992）「縄文時代の棚痕土器」考古学ジャーナル 335号
- 11) 藤原宏志（1995）「南溝手遺跡出土土器胎土のプラント・オパール分析結果について」
前掲9）
- 12) 藤原宏志（1994）「津島岡大遺跡出土土器に関するプラント・オパール胎土分析」
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「津島岡大遺跡4」
- 13) a 高橋 護（1994）「縄文稲作を考える」帝塚山考古学研究所「古代の水田を考える」
b 高橋 護（1994）「縄文農耕と稲作」東アジアの古代文化 81号
- 14) なお、D地点の同じく2b層のb₂帯においても同様のことが考えられるが、同地点は埋
没微高地上の安定した土地条件下にあり、そのため上位層や周辺地域の影響が分析の結果に
反映されているとみられる。
- 15) a 前掲8）
b 外山秀一（1990）「プラント・オパール分析からみた歴史時代の土地条件—香川・林
町遺跡（仮称）、山梨・宮ノ前遺跡、滋賀・光相寺遺跡・吉地薬師堂遺跡を例に—」
条里制研究 第6号
c 前掲7）d
d 前掲4）
- 16) 前掲7）d
- 17) 高橋 学（1990）「地形環境分析からみた条里遺構年代決定の問題点」前掲15）b
- 18) 前掲7）d
- 19) 前掲4）



- | | | | | | |
|---------|----------|---------|---------------|------|----------|
| 1 ~ 5 | イネ | 6. 7 | イネモミ | 8. 9 | ヨシ属 |
| 10 - 11 | ウシクサ族 | 12 | シバ属 | 13 | キビ族型 |
| 14 | ネザサ節型 | 15 - 16 | 刺状細胞 | 17 | 鋸歯状細胞 |
| 18 - 19 | 板状細胞A型 | 20 | 板状細胞C型 | 21 | 棒状細胞丸状A型 |
| 22 - 23 | 棒状細胞丸状B型 | 24 | 棒状細胞角状 | 25 | 棒状細胞鋸歯状 |
| 26 | 毛状細胞A型 | 27 - 28 | 鼓状細胞 | 29 | 不明 |
| 30 | 動物珪酸体 | 31 | 火山ガラス・樹木起源その他 | | (X100) |

写真1 プラント・オパール その他

遺物觀察表

出土土器観察表

SK40

押印番号	図版番号	器種	法量 (cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
1		縄文土器 深鉢	残存高 17.2	頸部下端	押引文				外10YR 6/2 灰黄褐 外10YR 6/1 黄灰	良好	外面 接合痕
2		縄文土器 底部	底径 3.0 残存高 1.5					1~2mm長石 石英を含む	外5YR 5/8 明赤褐 内10YR 5/3 にぶい黄褐	良	

SX02

押印番号	図版番号	器種	法量 (cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
3		縄文土器 深鉢(底部)	底径 5.0 残存高 1.7			底部内外面 底部外面	ヨコナデ 指頭圧痕	1mm以下の 石英を多量 に含む	外5Y 3/ オリーブ黒 内5Y 2/ 黒	良	

SR02 9層

押印番号	図版番号	器種	法量 (cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
4		縄文土器 深鉢	口径 21.5 残存高 11.7	口縁端部	刻目文	体部内 +外面	炎痕後ナデ ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を多量 に含む	外2.5Y 5/1 黄灰 内2.5Y 6/1 黄灰	良	接合痕

SR03 5~7層

押印番号	図版番号	器種	法量 (cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
5		縄文土器 深鉢	残存高 4.7	口縁端部 口縁~頸部	刻目文 爪形文 (タナ方向)	口縁部内面 + 外面	ナデ 二枚貝炭痕		外10YR 5/3, 10YR 2/2 にぶい黄褐、黒 内2.5Y 4/2 暗灰黄	良	低い山形 口縁
6		*	残存高 10.5	口縁端部 頸部	刻目文 爪形文 (タナ方向)	口縁部内面 + 外面	ナデ 二枚貝炭痕	1~2mm以下 の長石、 石英を含む	外2.5Y 2/1 黒 内2.5Y 3/1 黒褐	*	*
7		*	口径 36.8 残存高 18.9	口縁端部 頸部外面	刻目文 爪形文 (タナ方向)	口縁部内外面 体部内面 + 外面	ナデ ヘラケズリ 後ナデ ヘラケズリ	1mm以下の 砂粒を多量 に含む	外10YR 1.7/1 黒 内10YR 2/1 黒褐	良好	低い山形 口縁部内 面 接合痕顕著

8	縄文土器 深鉢	口径 残存高	39.8 11.5	口縁部 頸部外面	刻口文 押引文 (タテ方向)	体部内面 * 外面	ナデ 頸部 内裏 二枚貝条痕	1mm以下の 石英、長石 雲母を含む	外2.5Y8/2 灰白 内2.5Y2/1 黒	良好	低い山形 口縁
9	*	残存高	13.4	口縁部 -頸部	爪形文 (タテ方向)	口縁部内外面 体部外面	ヨコナゲ 二枚貝条痕	1-2mmの 石英、長石 を含む	外10YR 6/2 灰黄褐 内10YR 2/1 黒	良	口縁部欠 損
10	*	口径 残存高	31.2 17.0	口縁-頸部 頸部下端	爪形文 (タテ方向) * (ヨコ方向)	口縁部内外面 体部外面	ナデ 二枚貝条痕	1-3mmの 砂粒を含む	外10YR 2/1 黒 内10YR 3/3 暗褐	*	口縁部低 い突起
11	*	口径 残存高	37.2 5.6	口縁部 頸部外面	刻口文 (タテ方向) 爪形文	口縁部外面 * 内面	二枚貝条痕 後ナデ ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外内10YR 4/ 2 灰黄褐	*	* 煤付着
12	*	口径 残存高	41.6 6.5	口縁部外 面	爪形文	口縁部内外面 外面	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ	1-2mmの 下の石英、 雲母を多量 に含む	外7.5Y2/1 黒 内10YR 4/3 にぶい黄褐	*	低い山形 口縁 内面接合 痕跡著 煤付着
13	*	残存高	4.8	頸部下端外 面	押引文	体部内面 * 外面	二枚貝条痕 後ナデ ハラケズリ	3mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外2.5Y7/2 灰黄 内2.5YR 3/1 黒褐	良好	
14	*	残存高	13.3	頸部 * 下端	押引文 (タテ方向) * (ヨコ方向)	頸部内面 * 外面 体部内面 * 外面	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ * ハラケズリ	1-2mmの 長石、雲母 を含む	外5Y3/1 オリーブ黒 内2.5Y2/1 黒	良	頸部外面 炭化物付 着
15	*	残存高	3.5	外面	爪形文 刺突文 (タテ方向)	内外面	ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 4/3 にぶい黄褐 内10YR 2/2 黒褐	*	*
16	*	残存高	2.7	外面	爪形文 (タテ、ヨ コ方向)	内外面	ナデ	*	外10YR 5/3 にぶい黄褐 内10YR 4/2 灰黄褐	*	*
17	*	残存高	2.4	外面	爪形文 (タテ方向)	内面 外面	ナデ 二枚貝条痕 後	1-2mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR 1.7/1 黒 内10YR 2/1 黒	*	
18	*	残存高	2.4	外面文	押引 (タテ方向)	内面 外面	ナデ ハラケズ リ?	4mm以下の 長石、石英 を含む	外2.5Y4/1 灰灰 内2.5Y3/1 黒褐	*	
19	*	残存高	2.8	外面	爪形文	内外面	ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外2.5Y6/3、 2.5Y2/1 にぶい黄 黒 内2.5Y6/3 にぶい黄	*	

20	縄文土器 深鉢	残存高 4.5	外面	爪形文 (タテ、ヨ コ方向)	内外面	一枚貝条痕 後ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 2/1 黒 内10YR 3/1 黒褐	真	*
21	*	残存高 5.9	外面	爪形文 (タテ方向)	内面 外面	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ	*	外10YR 2/1 黒 内10YR 3/2 黒褐	*	
22	*	残存高 5.9	外面	爪形文 (タテ、ヨ コ方向)	内面 外面	* ナデ	*	外10YR 1.7/1 黒 内10YR 3/1 黒褐	*	
23	*	残存高 4.5	外面	爪形文 (タテ方向)	内面 外面	ナデ 二枚貝条痕 後	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外10YR 1.7/1 黒 内10YR 3/1 黒褐	*	
24	*	残存高 3.9	外面 刺突 文 (タテ方 向)		内外面 ナデ		2mm以下の 石英、長石 雲母を含む	外10YR 5/2 灰黄褐 内10YR 4/1 褐灰	*	
25	*	残存高 3.5	外面	押引文 (タテ、ヨ コ方向)	内面 外面 * 下端	ナデ ヘラケズリ 条痕	1mm以下の 石英、長石、 雲母を含む	外10YR 4/2 灰黄褐 内10YR 3/1 黒褐	*	
26	*	残存高 3.2	外面	爪形文 (タテ方向)	内外面	二枚貝条痕	1mm以下の 石英、長石、 雲母を含む	外10YR 2/1 黒 内10YR 3/1 黒褐	*	
27	*	残存高 3.5	外面	爪形文 (タテ方向)	内外面	ナデ	1mm以下の 石英、長石、 雲母を含む	外2.5 Y 6/3 にぶい黄 内10YR 5/2 灰黄褐	*	
28	*	残存高 1.9	外面	爪形文 (タテ、ヨ コ方向)	内外面	ナデ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外10YR 1.7/1 黒 内10YR 3/1 黒褐	*	
29	*	残存高 3.1	外面 押引 文 (ヨコ方 向)		磨滅の為調査 不明		1mm以下の 長石、石英 を含む	外10YR 5/3 にぶい黄褐 内10YR 4/2 灰黄褐	*	
30	*	残存高 3.9	外面	押引文 (ヨコ方向)	内面 頸部外面 体部 *	ナデ 二枚貝条痕 ヘラケズリ ?	1mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外10YR 4/2 灰黄褐 内10YR 3/1 黒褐	*	
31	*	残存高 3.2	口縁端部 頸部外面	爪形文 爪形文 (タテ方向)	内外面 ナデ		*	外内2.5 Y 3/ 2 黒褐	*	

32	縄文土器 深鉢	残存高	3.0	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内外面	ナデ	1mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外10YR 2/2 黒黒 内10YR 4/3 にぶい黄褐	良	
33	*	残存高	3.0	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内外面	ナデ	*	外10YR 4/2 灰黄褐 内10YR 2/2 黒褐	*	
34	*	残存高	2.3	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内外面	ナデ	*	外10YR 1.7/1 黒 内10YR 3/1 黒褐	*	
35	*	残存高	2.5	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内面 外面	ナデ 一枚具条痕 後ナデ	1~2mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR 5/2 灰黄褐 内10YR 4/3 にぶい黄褐	*	
36	*	残存高	2.1	外面	刺突文 (タテ方向)	内面	二枚具条痕 後ナデ	*	外10YR 5/2 灰黄褐 内10YR 4/1 褐灰	*	
37	*	残存高	3.3	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内面 外面	ナデ 二枚具条痕 後ナデ	*	外10YR 2/2 黒黒 内10YR 2/1 黒	*	
38	*	残存高	4.8	外面	押引文 (ヨコ方向)	内面 頸部外面 体部 *	ナデ * 二枚具条痕	*	外内 2.5 Y 4/ 2 暗灰黄	*	
39	*	残存高	4.4	外面	爪形文 (ヨコ方向)	外面 内面	ヘラケズリ ナデ	*	外10YR 3/1 黒褐 内10YR 2/2 黒褐	*	
40	*	残存高	5.0	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内面 頸部外面 体部外面	ナデ ナデ 二枚具条痕	*	外10YR 5/3, 10YR 2/1 にぶい黄褐 黒 内10YR 4/3 にぶい黄褐	*	体部外面 煤付着
41	*	残存高	5.1	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内面 頸部外面 体部 *	ナデ * ヘラケズリ?	1mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外10YR 2/1 黒 内10YR 4/3 にぶい黄褐	*	体部外面 に炭化物 付着
42	*	残存高	5.5	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内面 外面	一枚具条痕 後ナデ 二枚具条痕 を含む	1~2mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR 3/4, 10YR 2/1 暗褐 黒 内10YR 2/2 黒褐	*	43と同 一群体
43	*	残存高	5.7	外面	爪形文 (ヨコ方向)	内面 外面	二枚具条痕 後ナデ 二枚具条痕 後	*	外10YR 4/2 灰黄褐 内10YR 2/2 黒褐	*	42と同 一群体

44	縄文土器 深鉢	残存高 6.0	外面	爪形文 (目コ方向) ヘラ掻文	内面 外面	二枚貝条痕 後ナデ ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 3 / 1 黒褐 内10YR 2 / 3 黒褐	良好	外面に炭 化物付着
45	◦	残存高 12.4	外面	爪形文 (目コ方向)	内面 頸部外面 体部 ◦	二枚貝条痕 後ナデ ◦ ケズリ	*	外2.5 Y 2 / 1 黒 内2.5 Y 5 / 2 暗灰黄	*	
46	◦	口径 残存高 21.4 7.6	口縁端部	刻目文	口縁部～頸部 内外面	二枚貝条痕 後粗いナデ	2mm以下の 砂粒を含む ◦	外7.5YR 3 / 1 黒褐 内7.5YR 2 / 1 黒	*	
47	◦	残存高 7.8			内面 頸部外面 体部 ◦	二枚貝条痕 二枚貝条痕 後ナデ 二枚貝条痕	1mmの石英 長石を含む	外内5 Y R 2 / 1 黒	良好	内面炭化 物付着
48	◦	残存高 5.4			内面 二枚貝 条痕後ナデ 外面 二枚貝 条痕		1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 4 / 1 褐灰 内10YR 6 / 2 灰黄褐	良好	
49	◦	残存高 6.2			内面 外面	二枚貝条痕 後ナデ 二枚貝条痕	1～3mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR 6 / 2 灰黄褐 内10YR 7 / 2、 10YR 3 / 1 にぶい黄橙 黒 褐	*	
50	◦	口径 残存高 34.0 7.8	口縁端部	刻目文	内面 外面	ナデ ◦	1～2mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR 1.7 / 1 黒 内10YR 3 / 3 暗褐	*	外面 炭 化物付着 内面 炭 化痕
51	◦	残存高 5.0			内面 頸部外面 体部 ◦	二枚貝条痕 後ナデ ナデ 二枚貝条痕	0.2mm以下 の長石を含 む	外内10YR 7 / 1 黒	良好	
52	◦	残存高 4.5			内面 頸部外面 体部 ◦	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ ケズリ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外2.5 Y 6 / 3 にぶい黄 内2.5 Y 6 / 2 灰黄	良好	
53	◦	口径 残存高 40.6 8.2	口縁端部	刻目文	内面 頸部外面	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 2 / 1 黒 内10YR 3 / 3 暗褐	*	低い山形 口縁外面 に炭化物 付着
54	◦	口径 残存高 40.0 8.8	口縁端部	刻目文	内面 外面	ナデ 二枚貝条痕	1～4mmの 長石、石英 雲母を含む	外10YR 2 / 1 黒 内10YR 2 / 2 黒褐	*	外面に炭 化物付着

55	縄文土器 深鉢	残存高 4.7	頸部	ヘラ横沈線 文	内面 外面	ナデ 二枚貝条痕	3mm以下の 長石を含む	外2.5Y5/2 明灰黄 内2.5Y3/1 黒褐	良好
56	○	口径 28.0 残存高 4.2	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ	1～2mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外内10YR4/2 灰黄褐	良
57	○	口径 26.2 残存高 3.5	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ナデ ケズリ	○	外2.5Y5/2 暗灰黄 内2.5Y3/1 黒褐	○
58	○	口径 31.6 残存高 3.1	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ナデ ケズリ	1～3mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外内2.5Y2/1 黒	○
59	○	口径 32.0 残存高 3.2	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ケズリ後ナ デ ケズリ	1mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外内10YR1.7/ 1 黒	○
60	○	口径 33.0 残存高 2.8	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	二枚貝条痕 二枚貝条痕 後ナデ	○	外10YR5/3、 10YR2/1 にぶい黄褐 黒 内10YR5/3 にぶい黄褐	○
61	○	口径 34.0 残存高 2.6	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ナデ 二枚貝条痕	○	外2.5Y3/1 黒褐 内2.5Y2/1 黒	○ 外面に炭 化物付着
62	○	口径 36.0 残存高 5.3	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ナデ ヘラケズリ	○	外10YR2/2 黒褐 内10YR1.7/1 黒	○
63	○	口径 36.8 残存高 3.2	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ	2mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外5YR2/1 黒褐 内5YR1.7/1 黒	○
64	○	口径 38.8 残存高 5.2	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	ナデ 二枚貝条痕	1～3mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR1.7/1 黒 内10YR2/1 黒	○
65	○	口径 39.8 残存高 4.6	口縁端部	刻目文	口縁部内面 ○ 外面	二枚貝条痕 後ナデ ヘラケズ リ?	1～2mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR3/2 黒褐 内10YR2/1 黒	○ 接合痕
66	○	口径 40.5 残存高 3.4	口縁端部	刻目文	口縁部内面	ナデ	○	外7.5YR2/1 黒 内7.5YR3/1 黒褐	○

67	縄文土器 深鉢	口径 残存高	42.0 4.5	口縁端部	刻目文	口縁部内面 * 外面	ナデ ヘラケズリ 後ナデ	2mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 4 / 2 灰黄緑 内10YR 3 / 1 黒褐	良
68	*	口径 残存高	22.0 3.2	口縁端部	刻目文	口縁部内面 * 外面	ナデ 炭化物付着 の為不明	1~4mmの 長石、石英 雲母を含む	外内10YR 1.7 / 1 黒 内10YR 4 / 2 灰黄緑	* 外面に炭 化物付着
69	*	口径 残存高	22.0 5.7	口縁端部	刻目文	口縁部内面 * 外面	ナデ 二枚貝殻痕	1mm以下の 長石、石英 を含む	外10YR 2 / 3 黒褐 内10YR 2 / 1 黒	* *
70	*	口径 残存高	22.8 4.7			口縁部内外面	二枚貝殻痕 後ナデ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外内10YR 1.7 / 1 黒	*
71	*	口径 残存高	26.0 3.4	口縁端部	刻目文	口縁部内面 * 外面	ナデ 細いヘラミ ガキ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 3 / 2 黒褐 内10YR 2 / 1 黒	*
72	*	口径 残存高	26.4 13.3			口縁部内面 口縁部体部外 面	ナデ ナデ	*	外10YR 2 / 1 黒 内10YR 2 / 2 黒褐	* 内外面炭 化物付着 内外面接 合痕顕著
73	*	口径 残存高	30.0 3.5	口縁端部	刻目文	口縁部外面 * 内面	ヘラケズリ？ ナデ	1mm以下の 長石、石英 を含む	外7.5Y R1.7 / 1 黒 内7.5YR 4 / 1 褐灰	* 外面に炭 化物付着
74	*	口径 残存高	34.2 14.6			体部内面 * 外面	二枚貝殻痕 ナデ	1~2mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外10YR 4 / 2 灰黄緑 内10YR 3 / 1 黒褐	* 外面接合 痕顕著
75	*	口径 残存高	33.0 9.5	口縁端部	刻目文	口縁部外面 * 内面	二枚貝殻痕 ナデ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外2.5Y 3 / 1 黒褐 内2.5Y 2 / 1 黒	* 外面に炭 化物付着
76	縄文土器 底部	底径 残存高	5.0 2.0			底部内面 * 外面	二枚貝殻痕 ケズリ	1~2mm以 下の石英を 含む	外5Y 6 / 2 灰オリーブ 内5Y 6 / 1 灰	不良
77	*	底径 残存高	7.6 1.2			底部内外面	ナデ	*	外2.5Y 6 / 3 に灰 内7.5YR 3 / 1 黒褐	*
78	*	底径 残存高	7.0 2.0			底部内面 * 外面	ナデ ケズリ後ナ デ	1~2mm以 下の石英、 雲母を含む	外2.5Y 6 / 3 に灰 内2.5Y 4 / 1 灰黄	良

79	縄文土器 深鉢	底径 残存高	8.2 1.4		底部内面 ◦ 外面	二枚貝条痕 後ナデ 二枚貝条痕 後	1~2mm以 下の石英を 含む◦	外2.5Y 5/2 暗灰黄 内2.5Y 5/1	不良
80	◦	底径 残存高	6.8 1.3		底部内面 ◦ 外面	二枚貝条痕 後ナデ 調整不明	1~3mm以 下の長石、 石英、雲母 を含む	外2.5Y 6/4 にぶい黄 内2.5Y 5/2 暗灰黄	◦
81	◦	底径 残存高	5.6 1.4		底部内外面	ナデ	1~2mm以 下の石英、 長石を含む	外5YR 5/6 赤褐 内10YR 3/1 黒褐	◦
82	◦	底径 残存高	5.9 1.9		底部内面 ◦ 外面	二枚貝条痕 ヘラケズリ?	◦	外5YR 7/3 にぶい黄褐 内10YR 4/1 褐灰	良
83	◦ 浅鉢底部	底径 残存高	5.8 1.7		底部内外面	ケズリ	1mm前後の 砂粒を多く 含む	外内7.5YR 6/ 4 にぶい橙	◦
84	◦ 浅鉢底部	底径 残存高	6.4 2.1		底部内面 ◦ 外面	ケズリ? ナデ	石英、雲母 を多量に含 む	外2.5Y 7/2 灰黄 内2.5Y 4/1	不良
85	◦ 浅鉢底部	底径 残存高	7.0 2.2		底部内面 ◦ 外面	ナデ ケズリ	1~2mm以 下の石英、 雲母を含む	外2.5Y 6/1 灰 内2.5Y 7/2 灰黄	◦ 86
86	縄文土器 底部	底径 残存高	6.0 2.7		底部内面 ◦ 外面	ナデ 磨滅の為、 調整不明	1~2mm以 下の石英、 雲母を含む	外5YR 4/8 赤褐 内2.5Y 5/2 暗灰黄	◦
87	深鉢底部	底径 残存高	7.4 2.5		底部外面 ◦ 内面	磨滅の為、 調整不明 二枚貝条痕	1~2mm以 下の長石、 石英を含む	外10YR 5/2 灰黄褐	良
88	◦	底径 残存高	5.5 4.0		底部内面 ◦ 外面	二枚貝条痕 二枚貝条痕 後ナデ	◦	外10YR 5/3 にぶい黄褐 内10YR 2/2 黒褐	◦ 内面に炭 化物付着
89	◦	底径 残存高	5.8 2.4		底部内面 ◦ 外面	ヘラミガ キ? ヘラケズリ	◦	外10YR 6/3 にぶい黄橙 内10YR 1.7/1 黒	◦
90	◦	底径 残存高	3.6 3.1		底部内面 ◦ 外面	ナデ 二枚貝条痕	1~3mm以 下の長石、 石英を含む	外内10YR 5/ 2 灰黄褐	◦

91		深鉢底部	底径 6.2 残存高 2.0			底部内面 ◦ 外面	ナデ ◦	1～2mm以下の石英、 長石を含む	外2.5Y4/1 黄灰 内10YR3/1 黒褐	不良	内外面炭 化物付着
92	◦	底径 残存高	5.8 4.4			底部内外面	二枚貝条痕	2mm以下の 砂粒を含む	外10YR6/2 灰黄褐 内10YR3/1 黒褐	良	内面に炭 化物付着
93	◦	底径 残存高	7.1 2.5			底部内外面	磨滅の跡、 調整不明	2mm以下の 長石、石英 を含む	外10YR5/1 褐灰 内5Y3/1 オリーブ黒	◦	
94	◦	底径 残存高	8.0 2.5			底部内面 ◦ 外面	ナデ 二枚貝条痕 後ナデ?	1mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外10YR6/3 にぶい黄橙 内10YR4/1 褐灰	◦	
95	◦	底径 残存高	5.2 4.1			底部内面 ◦ 外面	ナデ ケズリ	1～2mm以 下の石英、 長石を含む	外2.5Y6/2 灰黄 内2.5Y5/2 暗灰黄	◦	
96	◦	底径 残存高	6.4 2.9			底部内面 ◦ 外面	二枚貝条痕 ケズリ	1mm内外の 砂粒を多く 含む	外2.5Y4/1 黄灰 内2.5Y5/2 暗灰黄	◦	
97	◦	底径 残存高	6.8 3.4			底部内面 ◦ 外面	ナデ ケズリ	1～2mmの 砂粒を含む	外7.5YR5/3 にぶい褐 内7.5YR2/1 黒	◦	
98	縄文土器 深鉢底部	底径 残存高	6.2 6.2			底部内面 ◦ 外面	ナデ ナデ	3mm以下の 砂粒を含む	外10YR4/2 灰黄褐 内10YR2/3 黒褐	◦	内面炭化 物付着
99	縄文土器 深鉢	底径 残存高	5.5 10.5			底部～体部内 面 ◦ 外面	二枚貝条痕 ◦	2mm以下の 長石、石英 を含む	外10YR4/2 灰黄褐 内10YR3/2 黒褐	◦	内面煤付 着
100	◦	底径 残存高	6.0 21.0			底部～体部内 面 ◦ 外面	二枚貝条痕 ◦	1～2mmの 石英、長石 を多く含む	外2.5Y4/2 暗灰黄 内10YR3/1 黒褐	◦	
101	縄文土器 浅鉢	底径 残存高	18.6 10.2	口縁端部	刻目文	口縁～体部	二枚貝条痕	1mm以下の 長石、石英 を含む	外内10YR7/2 にぶい黄橙	◦	山形口縁
102	◦	口径 残存高	25.2 7.5	口縁端部 体部外面	刻目文 へう掻沈線 突起	口縁部内面	ナデ	1～3mm以 下の石英、 長石、雲母 を含む	外10YR5/2 灰黄褐 内10YR4/2 灰黄褐	不良	

103	縄文土器 浅鉢	口径 残存高	24.0 2.9	口縁端部	刻目文	口縁部内外面	ナデ	1mm以下の 長石を含む	外内 10YR 2 / 1 黒	良	内面美化 物付着 接合痕顕 著
104	*	口径 残存高	28.3 2.0	口縁端部	刻目文	口縁部内面 上半 * 下半 * 外面	ナデ ケズリ ケズリ	1～2mm以 下の長石、 雲母を含む	外内 2.5 Y 2 / 1 黒	*	外面美化 物付着
105	*	口径 残存高	34.0 2.6	口縁端部	刻目文	口縁部内面 * 外面	ナデ ケズリ	2mm以下の 石英、雲母 を含む	外内 10YR 3 / 2 黒褐	*	
106	*	口径 残存高	33.1 3.5	口縁端部	刻目文	口縁部内面 * 外面	ナデ 二枚貝糸痕 後ナデ	石英、雲母 を多量に含 む	外 10YR 5 / 2 灰黄褐 内 10YR 6 / 2 灰黄褐	*	
107	*	残存高	4.5			頸部内面 * 外面 体部内面 * 外面	ケズリ ナデ 二枚貝糸痕 後ナデ ケズリ?	1～2mmの 石英、長石 を含む	外 5 Y 2 / 1 黒 内 5 Y 3 / 1 オリブ黒	良好	体部外面 美化物付 着
108	*	口径 残存高	16.0 4.0			口縁部内外面	ヨコナデ	1mm内外の 砂粒を含む	外 10YR 3 / 1 黒褐 内 10YR 1.7 / 1	良	
109	*	口径 残存高	15.2 8.7			口縁部体部内 外面	ハラミガキ	石英、雲母 を含む	外 2.5 Y 3 / 1 黒褐 内 5 Y 2 / 1 黒	*	
110	*	残存高	5.7			口縁部内外面	ナデ、ミガ キ	2mm以下の 砂粒を含む	外 10YR 2 / 1 黒 内 10YR 3 / 2 黒褐	*	
111	*	残存高	11.6			口縁部内面 * 外面	ナデ ミガキ	1～2mm以 下の石英、 雲母を含む	外 10YR 2 / 1 黒 内 10YR 4 / 2 灰黄褐	*	
112	*	口径 残存高	20.7 5.8			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外内 10YR 2 / 1 黒	*	口縁部ゆ るい山形
113	*	口径 残存高	19.8 7.3			内外面	ミガキ	石英、雲母 を含む	外内 10YR 3 / 1 黒褐	*	頸部から 体部屈曲 部に突起
114	*	口径 残存高	30.0 3.6	口縁端部外 面	門紋文 1 条	口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外 5 Y 2 / 2 オリブ黒 内 10YR 5 / 1 褐灰	*	

115	縄文土器 浅鉢	残存高 4.2			頸部～体部内 外面	ミガキ	少量に砂粒 を含む	外10YR 4 / 1 黒灰 内10YR 3 / 1 黒褐	良	
116	〃	口径 28.6 残存高 2.8			口縁部内外面	ミガキ	石英、雲母 を含む	外7.5 Y 3 / 1 黒褐 内7.5 Y 1.7 / 1 黒	〃	
117	〃	口径 31.0 残存高 3.3	口縁端部	凹線文1条	口縁部内外面	ミガキ	砂粒、雲母 を含む	外7.5 Y 1.7 / 1 黒 内10YR 3 / 1 黒褐	〃	
118	〃	口径 33.0 残存高 2.8	口縁端部	凹線文1条	口縁部内外面	ミガキ	〃	外内10YR 2 / 1 黒	〃	
119	〃	口径 34.0 残存高 4.5	口縁端部内 面	凹線文1条	内外面	ミガキ	少量の砂粒 を含む	外2.5 Y 2 / 1 黒 内2.5 Y 3 / 1 黒褐	〃	
120	〃	口径 36.4 残存高 4.7			口縁部内面 〃 外面	ミガキ ヨコナデ	石英、雲母 を含む	外内7.5YR 2 / 1 黒	〃	口縁部突 起
121	〃	口径 35.0 残存高 6.4			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 石英、長石 雲母を含む	外内2.5 Y 3 / 1 黒褐	〃	
122	〃	残存高 6.0			頸部～体部内 外面	ミガキ	〃	外2.5 Y 4 / 1 黄灰 内10YR 6 / 2 灰黄褐	〃	
123	〃	残存高 2.3			体部内外面	ミガキ	1mm以下の 長石、石英 を含む	外2.5 Y 3 / 1 黒褐 内2.5 Y 4 / 1 黄灰	〃	
124	〃	口径 42.5 残存高 5.0			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外10YR内 3 / 1 黒褐 内10YR 2 / 1 黒	〃	口縁部突 起
125	〃	口径 36.2 残存高 4.8			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外2.5 Y 3 / 1 黒褐 内2.5 Y 2 / 1 黒	〃	
126	〃	口径 34.4 残存高 3.8			口縁部内外面	ミガキ	石英、雲母 を含む	外内10YR 3 / 1 黒褐	〃	

127	縄文土器 残跡	口径 35.8 残存高 6.6			内外面	ミガキ	1mm以下の 長石、雲母 を含む	外10YR内3 / 1 黒褐 内10YR 2 / 1 黒	良	
128	＊	口径 36.4 残存高 3.5	口縁部	穿孔 (焼成後)	口縁部内外面	ナデ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外5 YR 2 / 1 黒褐 内5 YR 1.7 / 1 黒	＊	
129	＊	残存高 10.2			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 長石、雲母 を含む	外2.5 Y 3 / 2 黒褐 内2.5 Y 3 / 1 黒褐	＊	
130	＊	口径 36.2 残存高 14.0			口縁部内外面 体部内外面	ミガキ ミガキ	1mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外10YR 2 / 1 黒 内10YR 3 / 1 黒褐	良好	内面 赤 色顔料塗 付
131	＊	口径 37.6 残存高 6.0			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外2.5 Y 4 / 1 黄灰 内5 Y 3 / 1 オリーブ黒	良	
132	＊	口径 36.0 残存高 2.8			表跡の為調整 不明		1mm以下の 砂粒 雲母 を含む	外内10YR 4 / 1 褐灰	不良	
133	＊	口径 46.0 残存高 3.7			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 長石、雲母 を含む	外5 Y 3 / 1 オリーブ黒 内5 Y 2 / 1 黒	良	
134	＊	口径 24.8 残存高 1.9			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 長石、雲母 を含む	外内5 Y 2 / 1 黒	＊	
135	＊	口径 25.9 残存高 4.0			口縁部内面 ＊ 外面	ミガキ ナデ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外5 Y 4 / 1 灰 内10YR 4 / 1 褐灰	＊	
136	＊	口径 33.8 残存高 3.6			口縁部内面	ミガキ	1mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外10YR 4 / 2 灰黄褐 内10YR 3 / 1 黒褐	＊	
137	＊	残存高 3.0	口縁部内面	沈線1条	口縁部外面	ミガキ	1mm以下の 長石、石英、 雲母を含む	外10YR 3 / 1 黒褐 内10YR 6 / 2 灰黄褐	＊	
138	＊	口径 36.0 残存高 1.6			口縁部内面 ＊ 外面	ナデ ミガキ	1mm以下の 石英、雲母 を含む	外内10YR 4 / 2 灰黄褐	＊	

139	縄文土器 浅鉢	口径 38.0 残存高 2.9			口縁部内外面	ミガキ	1mm以下の 長石、石英 雲母を含む	外10YR 3 / 1 黒褐 内10YR 2 / 1 黒	良	
140	○	口径 48.6 残存高 3.5	口縁部内面	比線1条	口縁部内外面 ミガキ		1mm以下の 長石、雲母 を含む	外5 Y 3 / 1 オリブ黒 内5 Y 2 / 1 黒	○	
141	縄文土器 浅鉢底部	残存高 4.2			底部内外面	ミガキ	1mm以下の 長石、雲母 を含む	外2.5 Y 3 / 1 黒褐 内2.5 Y 4 / 2 暗灰黄	○	
142	○	残存高 5.1			底部内外面	ミガキ		外2.5 Y 2 / 1 黒 内2.5 Y 3 / 1 黒褐	○	
143	須恵器 杯蓋の口縁	口径 11.8 残存高 1.7					密	外内5 Y 6 / 1 灰	良好	磨滅 反転復元
144	須恵器 皿	口径 12.8 残存高 2.6					○	外内N 7 / 灰白	○	○
145	須恵器 底部	底径 7.6 残存高 0.5			底部外面	ヘラ切り	○	外内N 6 / 灰	○	○
146	○	底径 9.8 残存高 1.1					○	外5 PB 7 / 1 明青灰 内5 PB 5 / 1 青灰	○	○
147	須恵器 雲の胴上部	残存高 2.2					○	外N-6 灰 内N-8 灰白	○	○
148	把手						石英、角閃 石を含む	外5 Y 8 / 3 淡黄 内7.5 Y 8 / 1 灰白	良	
149	土師器 把手				外面	指痕圧痕	石英、角閃 石を含む	外2.5 Y 8 / 2 灰白 内10YR 7 / 2 にぶい黄橙	○	

150	弥生土器 甕	底径 6.0 残存高 13.0		体部内面 (上部) * (下部) 体部外面	指頭圧痕 ヘラケズリ ハケメ ハラミガキ	1mm以下の 石英、長石、 角閃石を含む	外10YR 5/4 にぶい黄褐色 内10YR 3/1 黒褐色	良	
151	弥生土器 壺	口径 11.9 残存高 3.0		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 長石、石英 を含む	外内7.5YR 4/ 3 褐色	良好	
152	*	口径 15.4 残存高 8.3		口縁部内外面 体部内面 頸部外面	ヨコナデ 指頭圧痕 ハケメ	1mm以下の 長石、石英、 角閃石を含む	外内10YR 5/ 3 にぶい黄褐色	*	
153	弥生土器 燃底部	底径 3.0 残存高 4.8		底部内面	ハケメ タキ	タキ	外内5 Y 5 / 1 灰	*	黒褐色
154	*	底径 7.4 残存高 3.7		口縁部内外面 口縁部外面	ナデ 磨滅の為調 整不明	1mm以下の 長石、石英 を含む	外5 Y 4 / 1 灰 内2.5 Y 7 / 2 灰黄	*	
155	*	底径 6.6 残存高 5.5		口縁部内外面	ハラミガキ		外内5 Y 8 / 2 灰白	*	黒褐色
156	*	底径 8.0 残存高 9.2		口縁部内面 口縁部外面	磨滅の為調 整不明 ハラミガキ	1mm以下の 長石、石英 を含む	外2.5 Y 7 / 2 灰黄 内2.5 Y 8 / 2 灰白	*	黒褐色
157	弥生高杯 口縁部	残存高 2.0		口縁部内外面	ヨコナデ		外内2.5 Y 5 / 2 暗灰黄	良	
158	弥生土器 壺	口径 18.0 残存高 35.0		口縁部内外面 頸部内面 * 外面 体部内面 * 外面	ヨコナデ 指頭圧痕 ハケメ ヘラケズリ ハラミガキ	石英、角閃 石を多量に 含む	外10YR 6 / 4 にぶい黄褐色 内7.5YR 6 / 6 橙	*	外面 黒 褐色
159	須恵器 杯蓋	残存高 1.3				1mm以下の 長石を含む	外内N - 8 灰白	良好	反転微元 堅緻
160	須恵器 杯身	残存高 1.3				密	外内N - 6 灰	*	*

161		須恵器 杯蓋	残存高	3.0		口縁部内外面	ナデ	密	外N-6 灰 内N-7 灰白	良好	軽微な 藍染
162		弥生土器 甕	口径 残存高	30 2.0		口縁部内面	ヨコナデ	1mm以下の 長石、石英、 角閃石を含む	外7.5Y 6/4 にぶい黄橙 内2.5Y 7/2 灰黄	良	
163		甕	口径 残存高	13.4 13.4		口縁部外面 頸部内面 体部内面 ＊ 外面	ヨコナデ ハケ ハラケズリ ハケ	石英、角閃 石を含む	外7.5YR 8/2 灰白 内10YR 8/1 灰白	不良	
164		弥生土器 甕	口径 残存高	12.4 23.6		口縁部内外面 体部内面 ＊ 外面	ヨコナデ 折頸片痕、 ハラケズリ ハケ	2mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外内10YR 6/ 2 灰黄褐	良	口縁から 体部外面 上部に黒 斑
165		弥生土器 甕	口径 残存高	14.6 14.0		口縁部内外面 体部内面 ＊ 外面	ヨコナデ 折頸片痕、 ハラケズリ ハケ	石英、角閃 石を含む	外10YR 8/2 灰白 内10YR 7/3 にぶい黄橙	不良	全体に藍 付着
166		甕	口径 残存高	14.4 22.4		体部内面 ＊ 外面	折頸片痕、 ハラケズリ クタクキ	2mm以下の 長石を含む	外内10YR 7/ 3 にぶい黄橙	良	
167		弥生土器 高杯脚部	残存高	7.5		体部内面 ＊ 外面	ハラケズリ シボリ目 クタクキ	2mm以下の 長石、石英 を多量に含 む	外10YR 7/3 にぶい黄橙 内7.5YR 6/4 にぶい藍	良好	
168		土師器 高杯脚部	底径 残存高	10.8 8.0		体部内面 ＊ 外面	ナデ、ハラ ケズリ ハケ	1mm以下の 長石、石英 を含む	外内2.5Y 8/ 2 灰白	＊	
169		弥生土器 高杯	底径 口径 器高	15.0 20.0 15.5		脚部内面 杯部外面	ハケ ハケ	1mm以下の 石英、長石 を含む	外内2.5Y 8/ 1 灰白	＊	
170		縄文土器 深鉢底部	底径 残存高	6.0 2.8		底部内外面	ナデ	1mm以下の 石英、長石 を含む	外2.5Y 6/3 にぶい黄 内5Y 6/2 灰オリーブ	良	
171		弥生土器 浅鉢底部	底径 残存高	10.0 3.3		底部内外面	磨滅の為調 整不明	2mm以下の 長石、石英 を多量に含 む	外内2.5Y 8/ 2 灰白	良好	
172		＊	底径 残存高	7.0 4.2		底部内外面	磨滅の為調 整不明	2～3mm以 上の長石、 石英を多量 に含む	外内2.5Y 8/ 1 灰白	良	

173	弥生土器 壺底部	口径 残存高	10.4 4.0			底部内外面	ヨコナデ	2mm以下の 長石、石英 を多量に含 む	外2.5Y7/3 浅黄 内2.5Y4/1 黄灰	良好	
174	弥生土器 壺のIT	口径 残存高	17.2 6.0	頸部外面	凹線文3条	口縁部内面 頸部外面	ヨコナデ ヘラミガキ	2mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外2.5Y5/2 暗灰黄 内2.5Y6/2 灰黄	良	
175	*	口径 残存高	22.0 4.3	L1縁部 頸部外面	割目文 沈線文3本			1mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外10YR7/2 にぶい黄緑 内10YR6/2 灰黄褐	*	
176	弥生土器 底部	口径 残存高	7.3 5.0			底部内外面	ヨコナデ	2mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外内10YR7/ 2 にぶい黄緑	*	底部外面 黒灰
177	縄文土器 鉢	口径 残存高	31.0 4.0			口縁部内面 * 外面	ハラケズリ 後ナデ 指頭圧痕 ナデ	3mm以下の 長石、石英 を含む	外内10YR5/ 3 にぶい黄緑	良好	接合痕
178	*	口径 残存高	42.0 6.7			口縁部内面 * 外面	ナデ ハラケズリ ヘラミガキ	1mm以下の 長石を含む	外内10YR6/ 2 灰黄褐	*	*
179	縄文土器 深鉢底部	口径 残存高	8.0 7.7			底部内外面	ハラケズリ (只較条痕)	多量の砂粒 及び3- 10mmの小 礫を含む	外内2.5Y3/ 2 黒褐	良	
180	弥生土器 壺の口	口径 残存高	14.4 1.2			L1縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 を含む	外内10YR5/ 2 にぶい黄緑	*	
181	弥生土器 壺	口径 残存高	14.2 20.3	頸部外面	ハケ原体に よる押圧文	体部内面 * 外面	指頭圧痕 ハラケズリ ハケ、ヘラ ミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	外内10YR5/ 4 にぶい黄緑	良好	底部縁付 着
182	*	残存高	15.5			体部内外面 * 内面 * 外面	ハラケズリ ハラケズリ ハケ	長石、石英 角閃石を含 む	外10YR6/3 にぶい黄緑 内10YR6/1 褐灰	良	体部内外 面 黒斑
183	弥生土器 底部	口径 残存高	9.2 2.1			底部内面 * 外面	ハラケズリ ヨコナデ	1mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外内10YR5/ 3 にぶい黄緑	*	底部外面 黒斑
184	*	口径 残存高	7.0 7.8			底部内面 * 外面	ナデ ハ ケズリ ハラケメ タキ	2mm以下の 石英と長石 を多量に含 む 丸1灰と 雲母を含む	外7.5YR4/2 内10YR5/2 灰黄褐	*	底部内面 縁付着

185	弥生土器 壺 底部	底径 6.0 残存高 15.0		底部内面 * 外面	ヘラケズリ ハケメ、ヘ ラミガキ	1mm以下の 石英を多量 に含む角閃 石も含む	外内 2.5 Y 5 / 3 黄褐	良	底部内外 面 煤付着
186	弥生土器 壺	口径 14.0 残存高 2.8		口縁部内外面 * 内面	ヨコナデ 指頭圧痕	1mm以下の 石英を多量 に含む	外 7.5YR 5 / 4 にぶい褐 内 10YR 5 / 2 灰黄褐	○	
187	○	口径 15.0 残存高 2.8				1mm以下の 長石、石英 角閃石を含 む	外内 10YR 5 / 3 にぶい黄褐	良好	
188	○	口径 15.0 残存高 2.8		口縁部内外面	ナデ	1mm以下の 長石、石英 角閃石を含 む	外内 10YR 5 / 3 にぶい黄褐	○	
189		口径 15.6 残存高 9.6		口縁部内外面 胴部内面 * 外面	ヨコナデ 指頭圧痕 ハケメ	1mm以下の 石英、長石 角閃石を含 む	外内 10YR 5 / 3 にぶい黄褐	良	
190	○	口径 15.0 残存高 16.6		口縁部内外面 体部内面 (上部) (下部) 体部外面 (上部)	ヨコナデ 指頭圧痕 ハケメ ヘラケズリ ハケメ ヘラミガキ	2mm以下の 石英、長石 角閃石を多 量に含む	外 7.5YR 7 / 4 にぶい橙 内 7.5YR 5 / 1 黄灰	○	外面上部 煤付着
191	○	口径 15.9 残存高 19.4		口縁部外面 体部内面 (上部) * 外面 (上部) * * (下部)	ヨコナデ ナデ 指頭 圧痕 ハケ ヘラミガキ タタキ	1mm以下の 長石、石英 角閃石を含 む	外内 10YR 5 / 3 にぶい黄褐	○	
192	弥生土器 壺 底部	底径 3.7 残存高 1.3		底部内面 * 外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外 10YR 1.7 / 1 黒 内 10YR 3 / 1 黒褐	○	
193	○	底径 5.0 残存高 1.9		底部内面 * 外面 (上部) (下部)	ヘラケズリ ヘラミガキ ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む雲母 も含む	外内 10YR 5 / 3 にぶい黄褐	良好	
194	弥生土器 壺 底部	底径 7.0 残存高 3.3		底部内面 * 外面	ヘラケズリ ヘラミガキ 後ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石も含む	外内 5 Y 2 / 1 黒	良好	黒斑
195	鉢	口径 19.5 器高 8.4		口縁部内外面 体部内面 外面	ヨコナデ ハケメ ヘラケズリ	1mm以下の 長石、石英 角閃石を多 量に含む	外内 10YR 6 / 3 にぶい黄橙	良	黒斑

196	製塩土器	底径 3.4 残存高 8.0			口縁部内外面 体部内面 * 外面	ヨコナデ 指ナデ タタキ	2mm以下の 石英、長石、 角閃石を多 量に含む	外内 2.5 Y 6 / 3 にふい黄	良
197	壺の口縁	口径 23.0 残存高 1.9					1~2mm以 下の長石、 石英を多量 に含む	外内 10YR 7 / 2 にふい黄緑	良好
198		口径 24.8 残存高 6.5	口縁肩部	口縁文 1条	口縁部内外面 頸部外面	ヨコナデ 指頭任痕	石英、角閃 石、長石を 含む	外 7.5YR 内 10YR 6 / 3 にふい黄緑	不良
199 200	土師器 壺	口径 28.0			口縁部内外面 体部内面 * 外面	ヨコナデ 指頭任痕 ヘラケズリ タタキ後ハ ケメ	1mm以下の 石英、長石、 角閃石を含 む	外内 2.5 Y 5 / 3 黄緑	良
201	弥生土器 壺	底径 4.6 残存高 30.5			口縁部内外面 頸部内外面 * 外面 体部内外面 * 内面 底部内面	ヨコナデ ハケメ 指頭任痕 ハケメ ヘラケズリ ナデ	3mm以下の 石英、長石、 角閃石を含 む	外 2.5 Y 7 / 2 灰黄 内 2.5 Y 3 / 1 黒褐	* 底部外面 黒褐
202	弥生土器 壺	口径 26.0 器高 33.2			口縁部内面 頸部外面 体部内面 * 外面	ヨコナデ ハケメの後 ヨコナデ 指頭任痕 ヘラケズリ ハケメの後 上層ヘラミ ガキ	1mm以下の 石英、長石 を含む	外内 10YR 5 / 2 灰黄褐	良好
203	*	口径 24.0 器高 36.3			口縁部内外面 体部内面 (上部) (下部) 頸部外面 体部外面 (上部~下部) * (下部)	ヨコナデ ナデ 指頭 任痕 ヘラケズリ ハケメ ハケ タタキ	1mm大の砂 粒を含む 長石、石英、 角閃石を多 く含む	外 5 YR 5 / 6 明赤褐 内 10YR 3 / 3 暗褐	*
204	甕	口径 10.8 底径 2.3 器高 12.35			口縁部内外面 頸部内面 体部内面 * 外面	ヨコナデ ハケメ ヘラミガキ 後ミガキ 板ナデ後ハ ケメ	1mm以下の 微砂粒を多 く含む	外内 7.5YR 8 / 2 灰白	* 底部外面 黒褐
205	*	口径 13.0 底径 3.5 器高 14.7			口縁部内外面 体部内面 外面	ヨコナデ ヘラケズリ タタキ後ハ ケメ	1mm以下の 石英、長石、 角閃石を多 量に含む	外 2.5 Y 5 / 2 暗灰黄 内 2.5 Y 6 / 2 灰黄	良
206	*	口径 20.3 残存高 8.0			口縁部内外面 * 内面 体部外面	ヨコナデ ハケメ ハケメ	1mm以下の 石英、長石、 角閃石を含 む	外内 2.5 Y 5 / 3 黄緑	*

207	須恵器 杯蓋	口径 11.0 器高 3.3		口縁部内外面 天井部外面	ヨコナデ ヘラケズリ	密	外N5 / 灰 内N7 / 灰白	良好	堅緻
208	◇	口径 17.9 残存高 2.2		口縁部内面 口縁部外面 天井部外面	ナデ ヨコナデ ヘラケズリ 後ナデ	1~2mm以 下の長石、 石英を含む	外N5 / 灰 内N6 / 灰	◇	反転復元 堅緻
209	杯	口径 18.0 残存高 2.3		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外N5 / 内N6 / 灰	良	◇
210	須恵器 皿	底径 7.0 残存高 1.5		底部内面 ◇ 外面	ヨコナデ ヘラ切り後 ナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外内10Y8 / 1 灰白	◇	◇
211	瓦器 碗	口径 16.0 底径 5.2 器高 5.1		口縁部内外面 体部内外面	ヨコナデ 縮文	1mm以下の 砂粒を含む	外内N3 / 1 縮灰	◇	
212	須恵器 蓋	口径 18.1 残存高 1.9		口縁部内面 天井部外面	ヨコナデ ヘラケズリ	密	外5Y7 / 1 灰白 内N7 / 灰白	◇	反転復元 堅緻
213	須恵器 杯	口径 11.2 残存高 3.4		底部外面	ヘラケズリ	◇	外内N7 灰白	良好	◇
214	◇	口径 17.0 残存高 3.0				◇	外N7 灰白 内N5 灰	◇	
215	須恵器 杯の底部	底径 14.6 残存高 0.3				◇	外内N-6 灰	◇	◇ 内外面火 押
216	須恵器 鉢	残存高 5.6		頸部内面~体 部内面	シボリ口	◇	外内N7 灰白	◇	反転復元 堅緻
217	黒色土器 碗	残存高 1.3	内面	縮文		◇	外内N3 / 縮灰	◇	
218	須恵器 皿部	底径 9.6 残存高 7.6		底部外面	ヘラ切り	多量の砂粒 を含む	外N5 / 灰 内N7 / 灰白	良	

219	弥生土器 壺	口径 残存高	27.6 3.3			口縁部内外面	ヨコナテ	3mm以下の 石英を多量 に含む	外5 YR 5 / 6 明赤褐 内10YR 6 / 1 褐灰		不良
220	*	残存高	5.7	体部外面	凸帯文1条	体部内外面	ヨコナテ	2mm以下の 石英を多量 に含む	外内2.5 Y 7 / 1 灰白		良
221	弥生土器 底部	底径 残存高	7.4 2.0			底部外面	ハラミガキ	2mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外10YR 5 / 3 にふい黄橙 内2.5 Y 4 / 1 黄灰	*	外面 黒斑
222	弥生土器 高杯脚部	口径 残存高	16.6 6.4			脚部内外面 * 外面	ヨコナテ ハケメ	3mm以下の 石英1mm以 下の角閃石 を含む	外10YR 6 / 3 にふい黄橙 内7.5YR 5 / 4 にふい褐		不良
223	弥生土器 壺	口径 残存高	16.0 5.8			口縁部内面 * 外面 体部内面	ハケメ 指頭圧痕 指頭圧痕 ハラケズリ	長石、石英 を多量に含 む	外内10YR 6 / 2 灰黄褐	良	外面 黒付者
224	褐色土器 椀	底径 残存高	5.4 0.9					1mm以下の 石英、角閃 石を含む	外10YR 7 / 2 にふい黄橙 内10YR 5 / 2 灰黄褐		良好
225	*	底径 残存高	8.0 1.2			底部内外面	ヨコナテ	1mm以下の 石英を含む	外内5 Y 7 / 2 灰白		良
226	褐色土器 A類椀	底径 残存高	7.0 1.2			底部内外面	ヨコナテ	密	外7.5YR 8 / 2 灰白 内N 3 / 0 暗灰		良好
227	褐色土器 杯(高台)	底径 残存高	7.0 0.9			底部内面 * 外面	ハラミガキ ナテ	*	外2.5 Y 7 / 2 灰黄 内N 3 / 暗灰	*	
228	土師器 壺	残存高	2.1			口縁部内外面	ヨコナテ	1mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外内2.5 Y 5 / 3 黄褐		良
229	弥生土器 取手			外面		外面	ハケメ 指 頭圧痕	2mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外内10YR 6 / 3 にふい黄橙	*	
230	弥生土器 壺	口径 残存高	25.6 2.8			口縁部内外面	ヨコナテ	1mm以下の 石英、長石、 角閃石を含 む	外内2.5 Y 8 / 3 灰黄	*	

231	吹土器 壺	口径 27.0 残存高 3.9		口縁部内外面 頸部外面	ヨコナデ ハケ	1mm以下の 石英、長石、 角閃石を含む	外10YR 6/3 にぶい黄緑 内10YR 6/2 灰黄緑	良	
232	瓦			表面 裏面 端面	格子タタキ 布口 ナデ	1mm以下の 長石、石英 を含む	外内5Y 8/1 灰白	○	
233	鑪の羽口								赤変
234	須臾器 壺	口径 12.0 残存高 1.7		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を含む	外内N 8 / 灰白	良好	反転復元
235	○	残存高 1.4				密	外内N 7 / 灰白	○	○
236	○	残存高 1.1				○	外7.5Y 5 / 1 灰 内N 7 / 灰白	○	○
237	○	口径 13.0 残存高 1.3		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を含む	外内N 6 / 灰	○	反転復元 堅微
238	須臾器 杯蓋	口径 13.0 残存高 1.0		口縁部内外面	ナデ	密	外内N 7 / 0 灰白	○	○
239	須臾器 壺	口径 15.6 残存高 1.5				1mm以下の 砂粒を多量 を含む	外内N 6 / 灰	良	反転復元
240	○	口径 18.2 残存高 1.0		口縁部内外面 ○ 外面	ナデ ヘラ削り	密	外内N 7 / 灰白	良好	○
241	○	口径 19.4 残存高 1.5		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英が多量 を含む	外N 4 / 灰 内N 6 / 灰	○	反転復元 堅微
242	須臾器 皿	口径 8.2 残存高 1.3		口縁部内外面	ナデ	密	外5Y 8 / 2 灰白 内7.5Y 7 / 1 灰白	良	○

243	須恵器 杯	底径 残存高	7.0 1.0			底部内外面 底部外面	ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の 石英が少量 あり	外N7/ 灰白 内N7/ 灰白	良	反転復元
244	須恵器 底部	底径 残存高	8.0 1.0			底部内外面 底部外面	ヨコナデ ヘラケズリ	1mm以下の 石英を少量 含む	外内N7/ 灰白	○	○
245	須恵器 皿	底径 残存高	8.4 1.2					密	外内N6/ 灰	良好	反転復元 堅緻 外面火焼
246	須恵器 皿	底径 残存高	8.4 1.0			口縁部内面 上部外面 底部*	ナデ ナデ ヘラ切り	*	外内N7/ 灰白	良	反転復元
247	須恵器 杯	底径 残存高	8.2 1.5			底部内外面	ナデ	*	外内5B4/ 曜青灰	良好	*
248	土器器 杯	底径 残存高	8.0 1.3	底部外面	門隙1条	底部内外面	ヨコナデ	2mm以下の 石英を多量 に含む	外5YR8/4 淡橙 内5YR7/5 橙	良	反転復元
249	須恵器 底部	底径 残存高	10.0 1.0					1mm以下の 石英を少量 含む	外内N5/ 灰	○	反転復元 堅緻
250	須恵器 杯	底径 残存高	10.0 2.6			底部内外面	ナデ	密	外5Y7/1 灰白 内7.5Y8/1 灰白	良好	○
251	須恵器 底部	底径 残存高	11.0 1.7					1mm以下の 石英が多量 に含む	外N6/ 灰 内N7/ 灰	良	○
252	須恵器 杯身	底径 器高	10.7 3.9					精良	外N8/ 灰白 内N7/ 灰白	良好	
253	須恵器 甑or平皿	口径 残存高	9.2 3.2					1mm以下の 石英を多量 に含む	外N7/ 灰白 内7.5Y5/1 灰	良	反転復元 堅緻
254	須恵器 杯	口径 残存高	10.8 1.4			口縁部内外面	ナデ	密	外内N5/0 灰	良好	○

255	須忠器鉢	口径 14.0 残存高 5.7					密	外N6 / 0 灰白 内N7 / 0 灰白	良	反転復元 堅緻
256	須忠器碗	口径 14.8 残存高 3.2		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を少量 含む	外N5 / 灰 内N6 / 灰	○	○	反転復元
257	須忠器杯	口径 15.0 残存高 2.9		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を少量 含む	外N6 / 灰 内N5 / 灰	○	○	
258	須忠器碗	口径 16.1 残存高 2.5		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以上の 石英を多量 に含む	外N7 / 灰白 内N7 / 灰白	○	○	反転復元 堅緻
259	須忠器杯身	口径 16.3 残存高 2.8		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以上の 石英を少量 含む	外N5 / 灰 内N6 / 灰	○	○	
260	須忠器杯身	口径 16.6 残存高 2.9		口縁部内外面	ヨコナデ	密	外内N7 / 灰	○	○	
261	須忠器鉢	口径 17.0 残存高 3.0				1mm以下の 石英が多量 に含む	外2.5CY4 / 1 オリブ灰 内N7 / 灰白	○	○	
262	須忠器燈	口径 7.0 残存高 2.4				密	外内N5 / 灰	良好	○	裏にヘラ 記号
263	須忠器 長ツボの足	口径 8.2 残存高 2.5		底部内外面	ヨコナデ	1～2mm以 下の石英を 多量に含む	外内N5 / 灰	良	○	反転復元 堅緻
264	須忠器杯身	口径 8.0 残存高 1.4		底部内外面	ナデ	密	外内N5 / 灰	良好	○	
265	須忠器 杯高台	口径 9.4 残存高 1.5				1mm以下の 長石を含む	外内N7 / 灰白	○	○	
266	須忠器杯	口径 10.5 残存高 2.5				1mm以下の 石英を多量 に含む	外内N7 / 灰白	良	○	

267	須恵器 皿 底部	底径 残存高	12.2 1.0		底部内面	ヘラケズリ	1mm以下の 石英を少量 含む	外N8 / 灰白 内N7 / 灰白	良好	反転復元 堅緻
268	須恵器 皿	底径 残存高	12.3 1.5				1mm以下の 石英を少量 含む	外内N7 / 灰白	良	○
269	須恵器 杯	底径 残存高	13.0 2.0				○	○	良好	○
270	須恵器 皿	口径 底径 器高	12.8 9.6 1.8				密	○	○	内外面 火燻
271	須恵器 杯	口径 残存高	16.2 3.2		口縁部内外面	ヨコナデ		外内5 Y 6 / 1 灰	良	反転復元 堅緻 外面 黒 斑
272	○	底径 残存高	16.0 1.9		底部内外面	ナデ	1mm以下の 長石を含む	外内N7 / 0 灰白	○	反転復元 堅緻
273	不明	口径 残存高	15.0 2.7		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外内7.5 Y 7 / 1 灰白	○	外面に白 熱粘付着
274	須恵器 壺 体部	残存高	4.6		体部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 角閃石を多 量に含む	外N6 灰 内N7 / 灰白	良好	外面 粘 付着
275	須恵器 壺	口径 残存高	22.4 4.5		胴部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外内7.5 Y 7 / 灰白	良	反転復元 堅緻
276	須恵器 壺の口縁	口径 残存高	26.0 3.5		胴部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 角閃石、石 英を含む	外内N8 / 灰白	良好	反転復元
277	染付 猪口	底径 残存高	3.4 3.5				密	外内7.5GY 8 / 1 明緑灰	良	貫入が著 しい
278	染付 碗	口径 残存高	11.2 4.6				○	外内10YR 6 / 2 灰黄褐色	良好	

279	朱付 碗	口径 11.0 底径 5.0 残存高 5.7					密	外内7.5GY 8 / 1 明緑灰	良好 貫入が著しい
280	。肥前系	口径 10.6 器高 6.1					。	外内 淡青灰色	。
281	陶器 皿	口径 11.0 残存高 2.7		体部外面	ヘラケズリ	。	。	外内 淡明緑灰	。
282	深付青磁 皿	底径 4.6 残存高 1.8					。	外内 5 BG 7 / 1 明青灰	。
283	陶器 壺	残存高 7.5		体部内面 。外面	ヨコナデ ヘラケズリ	。	。	外10 Y 7 / 1 灰白 内7.5 Y 7 / 1 灰白	。
284	唐津系 青緑雜皿	底径 11.2 残存高 2.4					1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	外内7.5YR 5 / 3 にぶい殻	。
285	近世肥前 襷鉢	残存高 5.3	内面 桑溝				。	外7.5YR 4 / 3 殻 内7.5YR 5 / 3 にぶい殻 断面 5 YR 6 / 6 殻	。
286	肥前 襷鉢	残存高 5.4	内面 桑溝	外面	ロクロナデ	。	。	外内 10YR 6 / 8 赤橙 断面 N 7 / 灰白	良好 内面 磨耗が 著しい
287	襷鉢	残存高 6.0	内面 桑溝	内面 外面	ナデ ナデ ヘラ ケズリ	1mm以下の 長石を含む	。	外 5 YR 6 / 8 殻 内 5 YR 6 / 4 にぶい殻 断面 2.5YR 6 / 4 にぶい殻	良好
288	陶器 壺	底径 12.0 残存高 15.0		体部内外面 。外面	ナデ ヘラケズリ	砂粒を含む	。	外 10YR 4 / 2 灰黄褐 内 7.5YR 5 / 1 褐灰	。
289	土師器 土釜	残存高 1.1		口縁部内外面 口縁部内面	ヨコナデ 指頭圧痕	赤褐色の砂 粒 1mm以下 の長石を含 む	。	外 N 7 / 0 灰白 内 7.5YR 7 / 1 明緑灰	。外面 付着

290	瓦質土器 羽釜	残存高 5.7		体部内外面 * 内面	ナデ 指頭正灰	精良	外5 Y 5 / 1 灰 内N 7 / 灰白	良好	
291	焙烙	口径 34.0 残存高 1.0		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	内外10YR 3 / 1 黒褐色	良	煤付着
292	*	口径 40.0 残存高 1.3				1mm以下の 長石、角閃 石を含む	内外N 4 / 0 灰	良好	
293	*	口径 44.8 残存高 5.6		口縁部外面 体部内面 * 外面	ナデ ハケメ 指頭正灰	1mm以下の 長石、石英 を含む	外10YR 3 / 1 黒褐色 内2.5 Y 2 / 1 黒	良	
294	*	口径 49.6 残存高 2.8		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 を含む	外10YR 7 / 3 にぶい黄褐色 内10YR 7 / 2 にぶい黄褐色	*	煤付着
295	瓦質 焙烙	口径 45.0 残存高 7.9		口縁部内外面 体部内面 * 外面	ヨコナデ ハケメ 指頭正灰 タタキ	1mm以下の 長石、石英 を含む	外5 Y 3 / 1 オリーブ黒 内5 Y 4 / 1 灰	良好	外面 煤 付着 * 底部 接合痕
296	染付 皿	底径 4.4 残存高 3.3				密	内外7.5GY 8 / 1 明緑灰	*	
297	染付 皿	底径 5.8 残存高 1.8				*	内外10 G 7 / 1 明緑灰	*	内外面 貫入
298	瓦			側面 表面 裏面	ナデ 布目 タタキ	1mm以下の 長石、石英 を含む	内外N 7 / 灰白	*	
299	土師器 焙烙	口径 41.0 残存高 3.1		口縁部内外面 口縁部外面	ナデ 指頭正灰	1mm以下の 長石、石英 を含む	外10YR 4 / 2 灰黄褐色 内2.5 Y 5 / 2 暗灰黄	*	煤付着
300	瓦質 羽釜	残存高 2.0		口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 長石、角閃 石を含む	内外N 5 / 0 灰	*	煤付着
301	弥生土器 焙烙	口径 32.8 残存高 7.2		口縁部内面 口縁部外面	ヨコナデ ナデ 指頭 正灰 比類 難き貝灰	1mm以下の 長石、角閃 石を含む	外10YR 3 / 1 黒褐色 内2.5 Y 5 / 2 暗灰黄	*	煤付着

302	瓦質 始塔	口径 44.0 残存高 3.2	口縁部内面	相對する内 耳2孔1対	口縁部内外面 * 外面	ヨコナデ 指頭圧痕	1mm以下の 長石、角閃 石を含む	外内N4/0 灰白	良好
303	備前系陶器 碗	口径 12.8 残存高 3.0						外内5Y8/2 灰白	* 良入
304	尖付 皿	底径 8.0 残存高 3.4					密	外内7.5Y7/ 1 灰白	良 良入
305	*	底径 8.0 残存高 2.3					*	外10Y4/2 オリープ灰 内2.5Y4/1 黄灰	*
306	唐津刷目 皿	口径 23.0 残存高 5.0					密	外5Y6/4 オリープ黄 内5YR6/2 灰褐	*
307	摺鉢	底径 12.0 残存高 4.3	内面	条溝	口縁部外面	ナデ	石英、長石 を多量に含 む	外内10R5/2 灰赤	良好
308	備前 摺鉢	底径 14.0 残存高 5.5	内面	条溝	口縁部外面	ヨコナデ	1mm以下の 長石、角閃 石を含む	外10R5/2 灰黄 内10R4/3 赤褐	*
309	摺鉢	底径 14.6 残存高 6.9	内面	条溝	口縁部外面	ヨコナデ	1mm以下の 長石、角閃 石を含む	外内10YR5/ 4 にぶい赤褐	*
310	備前 すり鉢	口径 42.9 残存高 6.8	口縁部外面	凹線2条	口縁部内外面 * 内面	ヨコナデ カキ目	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	外内2.5YR4/ 2 赤灰	*
311	備前系陶器 壺	底径 6.0 残存高 3.3					密	外7.5YR3/4 暗褐 内2.5Y8/2 灰白	良
312	備前系尖付 磁器 皿	底径 8.0 残存高 1.7					*	外内淡灰白色	良好
313	瓦質土器 土釜	口径 18.0 残存高 3.4			口縁部外面	ヘラミガキ	*	外内7.5Y6/ 1 灰	良

314	備前 壺	口径 残存高	27.6 6.6	体部外面	波状文	口縁部内外面 体部外面	ヨコナデ ヘラナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外5 YR 2 / 1 黒褐 内5 YR 4 / 2 灰褐	良好
315	備前 鬮鉢	口径 残存高	31.6 5.4	口縁部外面 体部内面	凹線文2条 条溝	口縁部内面 体部外面	ヨコナデ ナデ	1mm以下の 石英と長石 を含む	外(口縁部) N 6 / 灰 (体部) 10YR 7 / 3 に赤い黄褐色 内2.5 Y 7 / 3 浅黄	良

出土石器観察表

S K 40

挿図 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第17図	S 1	砥 石	32.9	9.2	6.9	2000	安山岩	表裏に使用痕

S X 02

挿図 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第18図	S 2	打製石斧	7.9	6.0	1.1	71.3	サヌカイト	先端部欠損

S R 03

挿図 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第33図	S 3	石 鏃	2.7	2.5	0.4	1.7	サヌカイト	
*	S 4	石 鏃	4.6	1.7	0.4	3.6	サヌカイト	
*	S 5	スクレイパー	6.4	5.2	0.6	31.3	サヌカイト	
*	S 6	石 鏃	4.7	3.1	1.0	15.0	サヌカイト	
*	S 7	スクレイパー	5.2	2.9	1.1	17.1	サヌカイト	
*	S 8	スクレイパー	5.2	3.9	0.8	23.5	サヌカイト	

第33回	S 9	スクレイパー	5.7	3.2	0.6	17.0	サヌカイト	
*	S 10	スクレイパー	6.6	6.0	1.1	51.3	サヌカイト	
*	S 11	スクレイパー	6.0	5.7	0.8	49.4	安山岩	
*	S 12	スクレイパー	7.6	6.4	0.8	68.4	サヌカイト	
*	S 13	打製石斧	11.0	6.3	2.2	191.1	サヌカイト	刃部片面のみ磨減
*	S 14	打製石斧	13.6	6.6	1.9	206.3	サヌカイト	刃部両面磨減
*	S 15	打製石斧	7.7	6.7	2.0	120.3	サヌカイト	刃部片面のみ磨減 基部欠損
*	S 16	打製石斧	11.0	6.3	1.7	129.4	サヌカイト	刃部両面磨減
*	S 17	打製石斧	8.3	6.1	1.5	85.2	サヌカイト	刃部、基部欠損
第36回	S 18	打製石斧	5.3	3.5	1.5	26.6	サヌカイト	刃部両面磨減 基部欠損
*	S 19	打製石斧	5.3	4.7	1.4	47.1	サヌカイト	刃部欠損
*	S 20	打製石斧	3.8	4.3	0.9	15.6	サヌカイト	刃部両面磨減 基部欠損

第36回	S 21	打製石斧	4.1	4.0	1.0	24.1	サヌカイト	基部欠損
*	S 22	打製石斧	7.6	6.4	1.7	86.0	サヌカイト	刃部片面のみ磨減
*	S 23	打製石斧	8.6	4.6	2.0	85.7	サヌカイト	刃部欠損
*	S 24	打製石斧	9.7	5.3	1.6	123.0	サヌカイト	刃部欠損
第37回	S 25	打製石斧	5.7	4.4	0.8	29.8	サヌカイト	基部欠損
*	S 26	打製石斧	4.3	4.7	1.0	23.7	サヌカイト	基部欠損
*	S 27	打製石斧	4.8	2.7	1.7	31.3	サヌカイト	中心付近のみ残存
*	S 28	打製石斧	5.6	5.0	0.8	33.1	サヌカイト	
*	S 29	打製石斧	5.2	5.4	0.9	33.7	サヌカイト	
*	S 30	打製石斧	5.6	5.8	0.8	62.1	サヌカイト	刃部両面磨減 基部欠損
*	S 31	打製石斧	5.5	5.5	1.5	60.1	サヌカイト	刃部両面磨減 基部欠損
*	S 32	打製石斧	6.2	5.5	1.4	57.1	サヌカイト	刃部片面のみ磨減 基部欠損

第38回	S 33	打製石斧	6.7	5.6	1.4	76.8	サヌカイト	
◦	S 34	打製石斧	7.9	4.8	1.1	57.1	サヌカイト	
◦	S 35	打製石斧	6.6	4.4	1.4	59.9	サヌカイト	
◦	S 36	不明	4.3	3.4	1.0	20.0	サヌカイト	
◦	S 37	打製石斧	4.6	5.3	0.8	23.6	サヌカイト	
◦	S 38	打製石斧	7.7	5.2	2.0	92.4	サヌカイト	
◦	S 39	打製石斧	2.8	6.1	1.6	30.6	サヌカイト	基部欠損
◦	S 40	打製石斧	5.6	6.1	2.3	92.8	サヌカイト	
第39回	S 41	不明	3.6	3.3	1.0	13.5	サヌカイト	
◦	S 42	打製石斧	5.6	4.1	1.5	35.8	サヌカイト	
◦	S 43	打製石斧	5.9	4.9	1.5	47.1	サヌカイト	
◦	S 44	スクレイパー	5.7	5.3	1.0	30.7	サヌカイト	

第39回	S 45	打製石斧	4.7	5.7	1.7	65.2	サヌカイト	
*	S 46	スクレイパー	6.1	4.5	1.0	31.5	サヌカイト	
*	S 47	打製石斧	6.7	3.7	1.4	77.9	サヌカイト	
*	S 48	打製石斧	7.4	3.3	2.1	108.7	サヌカイト	片面中央部磨減 基部欠損
第40回	S 49							
*	S 50	打製石斧	4.7	5.4	0.6	16.3	サヌカイト	
*	S 51	打製石斧	6.9	6.0	2.1	104.8	サヌカイト	片面中央部～基部磨減
*	S 52	打製石斧	8.5	5.8	2.2	130.1	サヌカイト	刃部欠損
*	S 53	打製石斧	6.9	6.9	1.7	82.4	サヌカイト	基部欠損
第42回	S 54	打製石斧	4.6	5.2	1.1	46.3	サヌカイト	刃部・基部欠損
第41回	S 55	打製石斧	14.3	6.9	1.3	166.1	結晶片岩	
第42回	S 56	打製石斧	15.4	7.6	1.7	331.3	結晶片岩	

第42回	S 57	敲 石	14.9	10.8	6.9		不 明	側面に敲打痕、上下面磨減
------	------	-----	------	------	-----	--	-----	--------------

S R 03 第 4 層

押印 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第46回	S 58	スクレイパー	5.1	4.0	0.8	25.2	サヌカイト	上縁部敲打による背潰し
◦	S 59	打製石斧	3.9	5.3	1.1	32.0	サヌカイト	下縁部のみ調整
◦	S 60	打製石斧	8.2	5.8	1.2	59.6	サヌカイト	刃部欠損
◦	S 61	スクレイパー	6.0	5.5	0.7	27.7	サヌカイト	刃部欠損
◦	S 62	打製石斧	4.6	5.8	1.5	49.1	サヌカイト	基部欠損
◦	S 63	打製石斧	10.2	5.3	1.9	122.7	サヌカイト	

SD 40

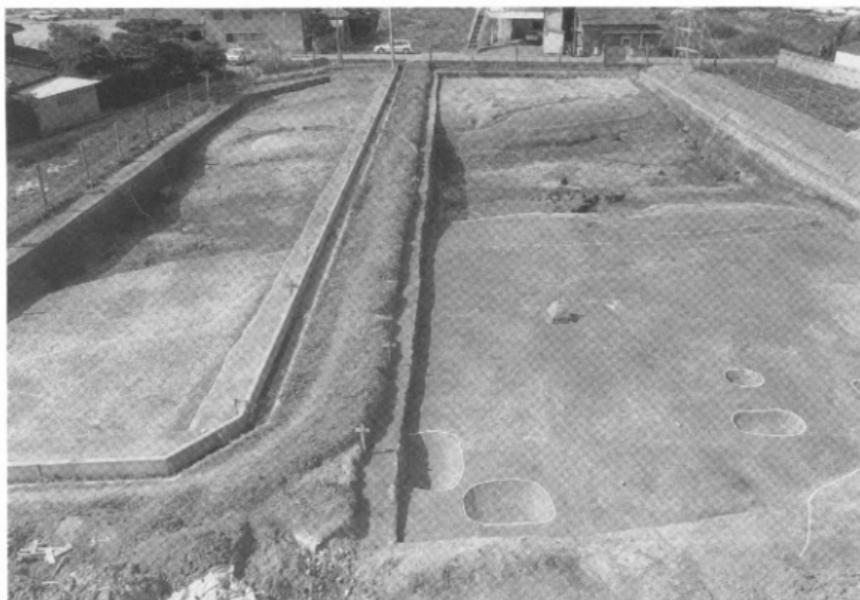
押印 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第50回	S 64	打製石斧	3.1	3.4	1.2	16.2	サヌカイト	

SD 42

押印 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第52回	S 65	石 皿 (?)	12.4	7.3	2.5	333.9	砂 岩?	

第52回	S66	打製石斧	16.7	9.3	1.6	369.5	安山岩	
------	-----	------	------	-----	-----	-------	-----	--

圖 版



1. 1区①, ②完掘状況 (東から)



2. 2区①, ②完掘状況 (西から)



1. 3区完掘状況（北東から）



2. 4区第1進構面完掘状況（西から）



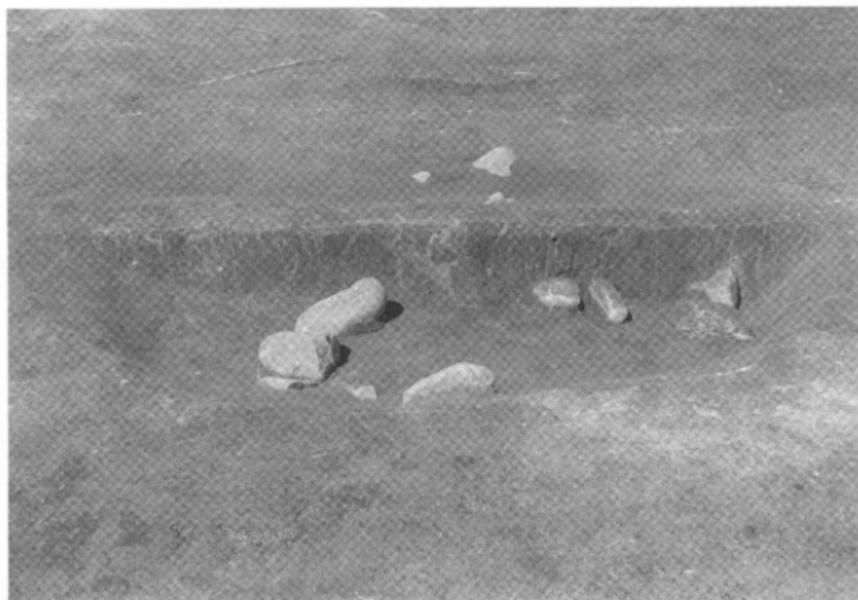
1. 4区第2遺構面完掘状況（西から）



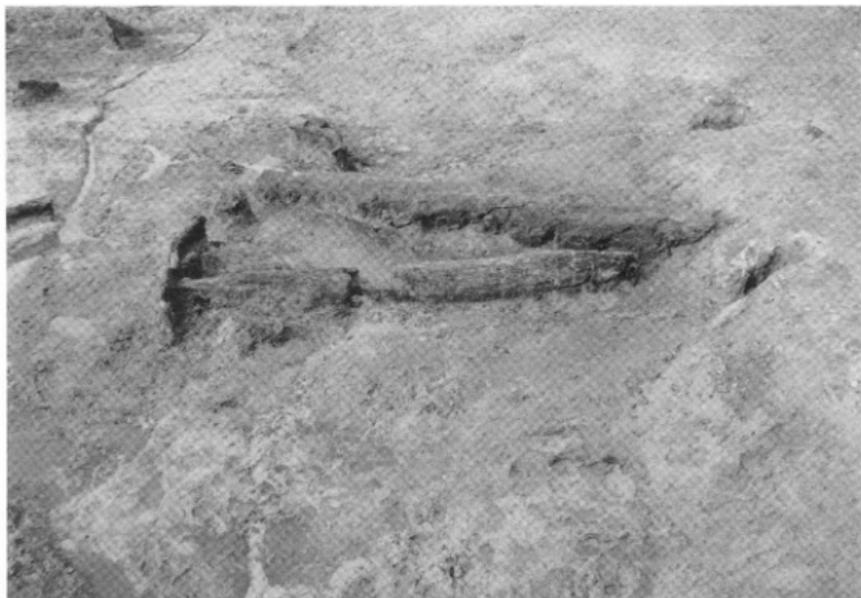
2. 5区完掘状況（北西から）



1. SK40 完掘状況（東から）



2. SK40 土層堆積状況（東から）



1. S R01 13層出土加工木



2. 同 細部状況



1. S R03 中央セクションベルト土層堆積状況



2. S R03 南壁土層堆積状況



1. S R03 完掘状況（北から）



2. S R03 5～7層遺物出土状況



同 細部状況